

## 第Ⅱ章 遺構・遺物

遺構の記録類には、実測図面・遺構カード・調査日誌・写真のほか、図・写真類に記入された文字情報がある。しかし、遺物取り上げラベルの記載事項から、その遺構を特定できたのはわずかである。本報告書では、ラベルを介して遺物と遺構を対応できない場合、ラベルの記載事項を基準として解説することにした。

また1969年10月16日の日誌によって、実相院内に調査区を2ヵ所設けて発掘調査したのは明らかであるが、遺構図面が残されていないため、これについては報告しない。

まず若草伽藍に関連する遺構・土層からできるだけその造営過程にそって報告する。それら以外については、まず井戸・土坑・穴・溝・瓦溜などの遺構を、次いでバラス土層・木炭層・暗褐色土・褐色土といった包含層について述べる。(深澤)

### 1 基本層序

本調査は、特に土層の堆積関係について慎重であった。これは、調査日誌から明らかになる。すなわち日誌によって、第1次調査では、1968年8月31日、第2次調査では、1969年10月15・27・30日に調査員が集まって検討を加えているのである。

第1次・第2次調査区の金堂・塔部分の基本層序は、上から順に、1:表土、2:褐色土・暗褐色土、3:バラス土(含礫暗褐色土)、4:塔基壇版築土・掘込地業版築土、5:第2次整地土(黄褐色整地土)、6:金堂基壇版築土・基壇地下版築土・掘込地業版築土、7:第1次整地土、8:地山土である。

このうち基壇に関わる土層は、第1整地土、金堂基壇版築土、基壇地下版築土、掘込地業版築土、第2整地土、塔掘込地業版築土の6層である。そして金堂基壇構築前におこなった寺地の整地にあたる置き土を「第1整地土」とし、整地土上面を「第1整地面」と呼ぶことにする。また金堂基壇の版築土は、掘込地業版築土・基壇地下版築土・基壇版築土の3層からなる。一般的に「掘込地業」は、地面を掘り下げて地固めをおこなう工法そのものを指す用語であるが(工藤1976)、本報告書では、掘り込み面以下の構造を示すものとして限定的に使用する。基壇地下版築土は、金堂基壇下層にあたり成形時は地上に露出しているが、基壇完成時には整地土で覆われて地表下となる部分である。基壇版築土は、金堂基壇で完成時に地表より上にある部分である。「第2整地土」は、金堂基壇構築後この周囲および周辺におこなった置き土である。調査時に名付けられた黄褐色整地土がこれにあたる。以下では、この整地土を「第2整地土」、上面を「第2整地面」と呼ぶ。「基壇地下版築土」と「第2整地土」それぞれ上面は、論理的には一致する。基壇版築土は、後世に完全に削平された。塔基壇の掘込地業は、第2整地面から掘り込んでいる(Fig.20)。(深澤)

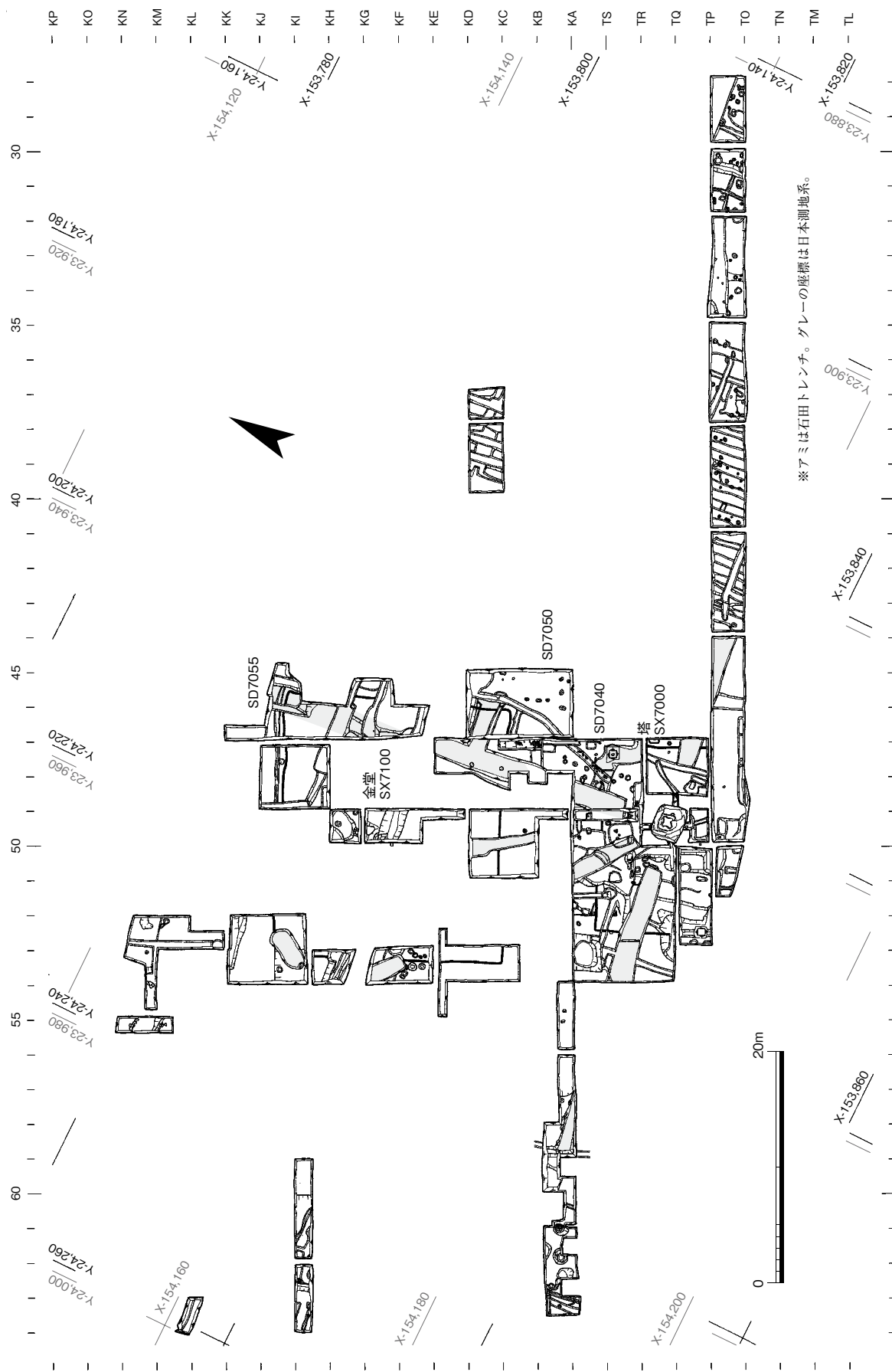


Fig. 15 若草伽藍跡遺構全景図 (1 : 500)

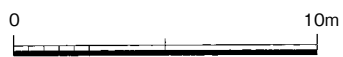
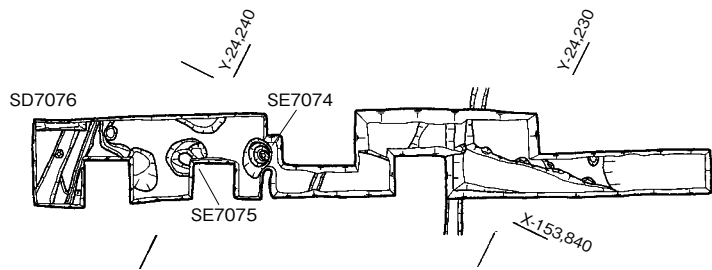
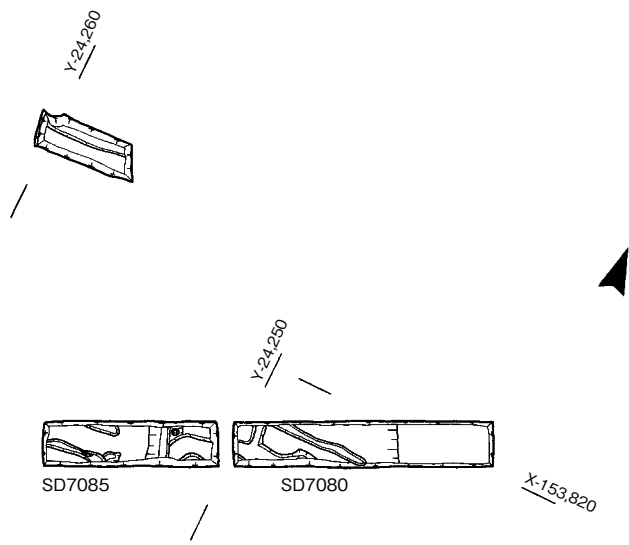


Fig. 16 若草伽藍跡遺構図1 (1 : 250)

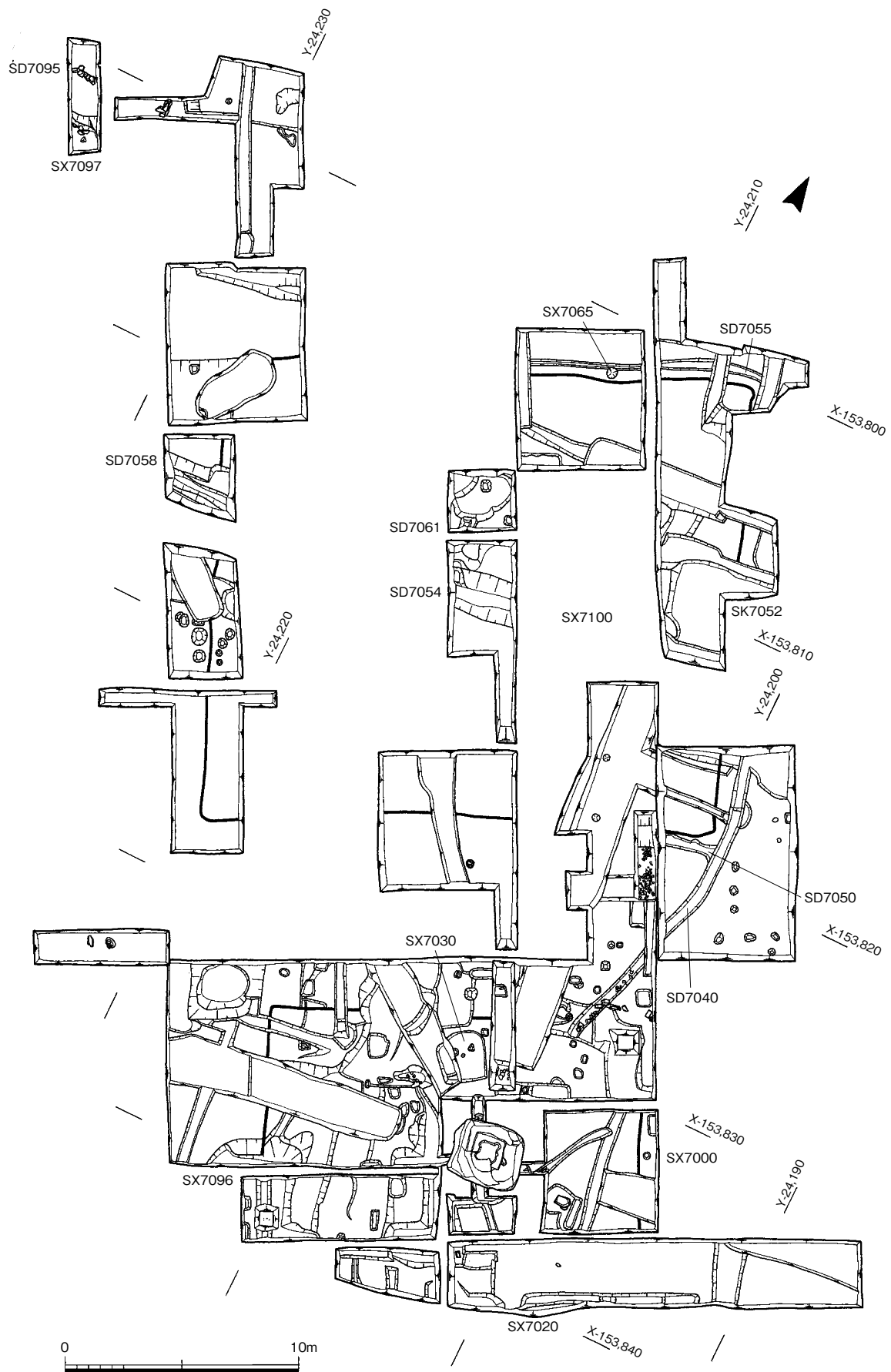


Fig. 17 若草伽藍跡遺構図2 (1: 250)



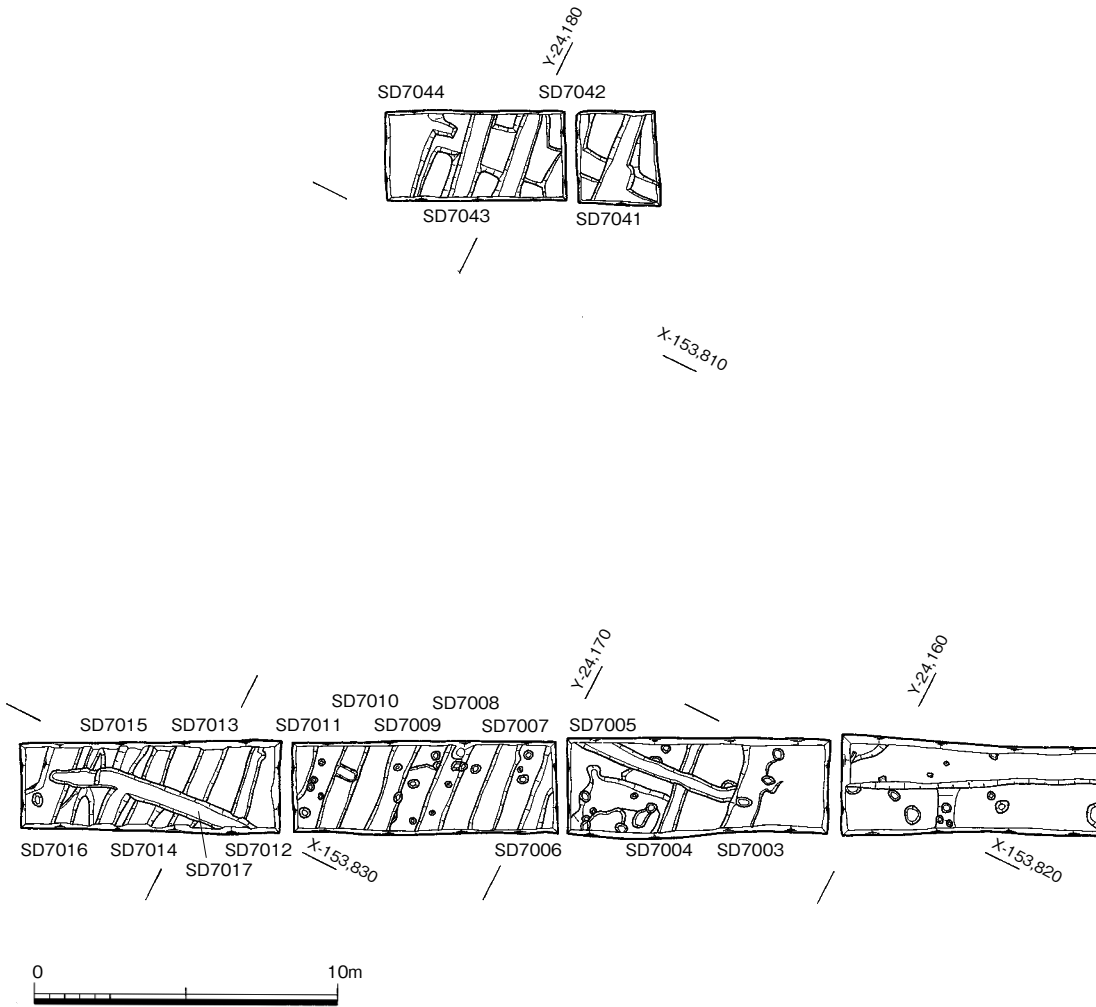


Fig. 18 若草伽藍跡遺構図3 (1:250)

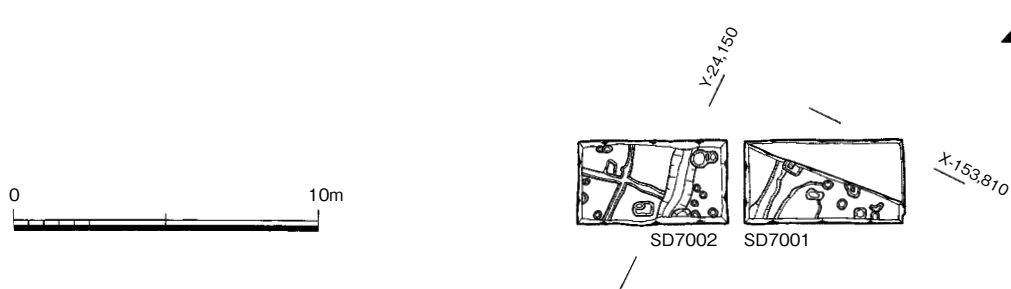


Fig. 19 若草伽藍跡遺構図4 (1:250)

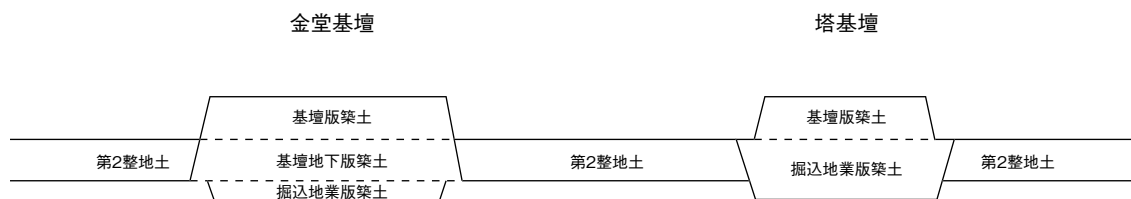


Fig. 20 若草伽藍跡土層模式図

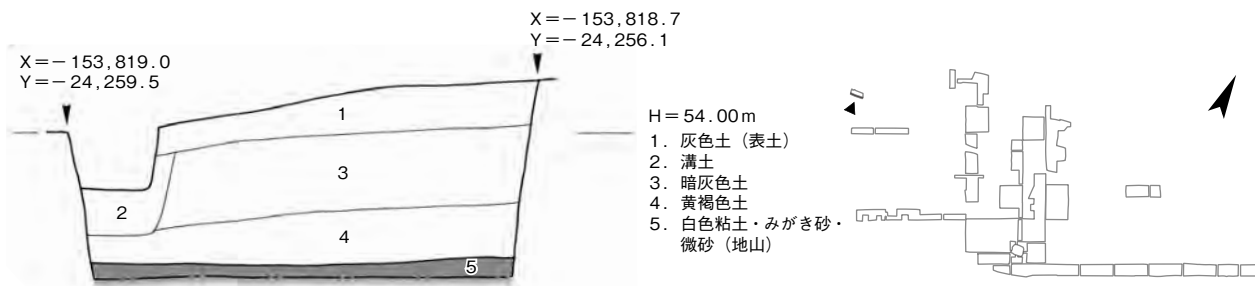


Fig. 21 2-1区南壁面 (1:50)

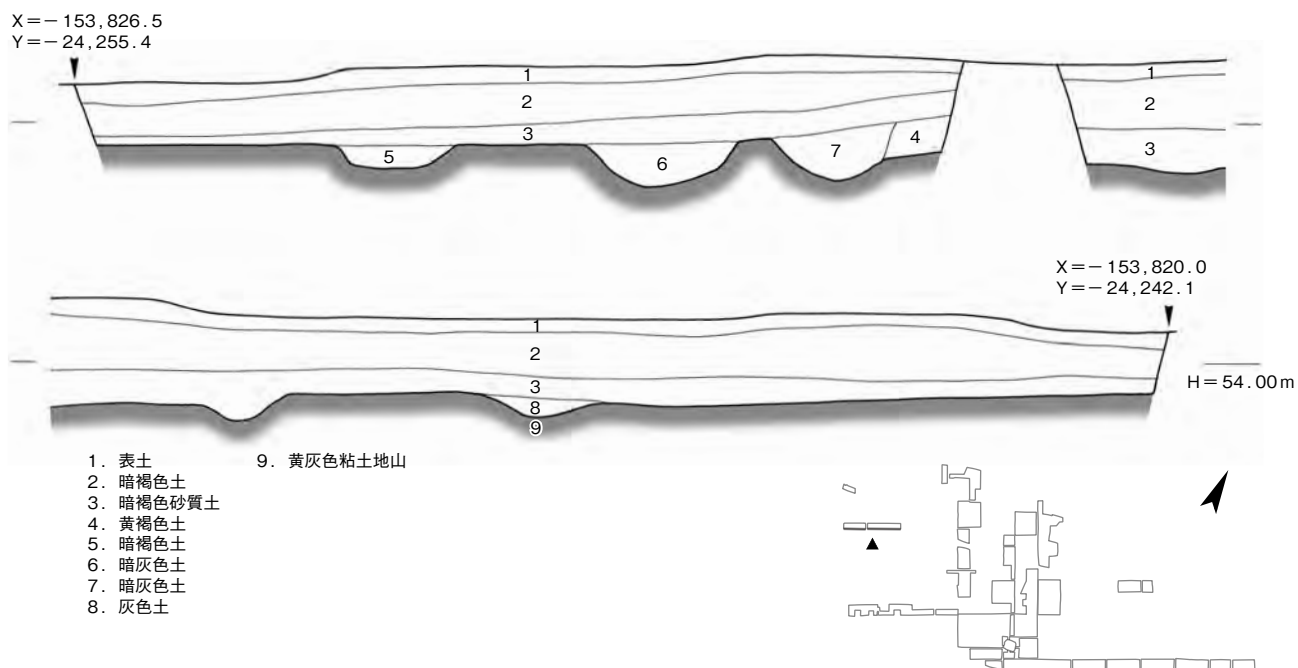


Fig. 22 2-2・3区南壁面 (1:50)

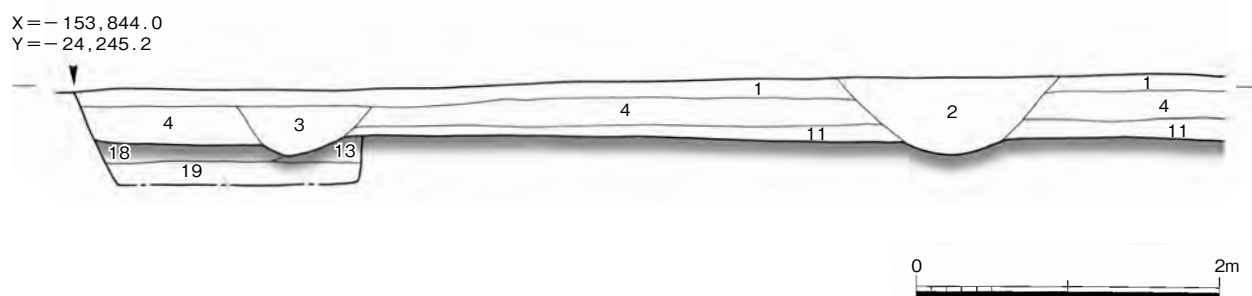


Fig. 23-1 2-4・5区北壁面1 (1:50)

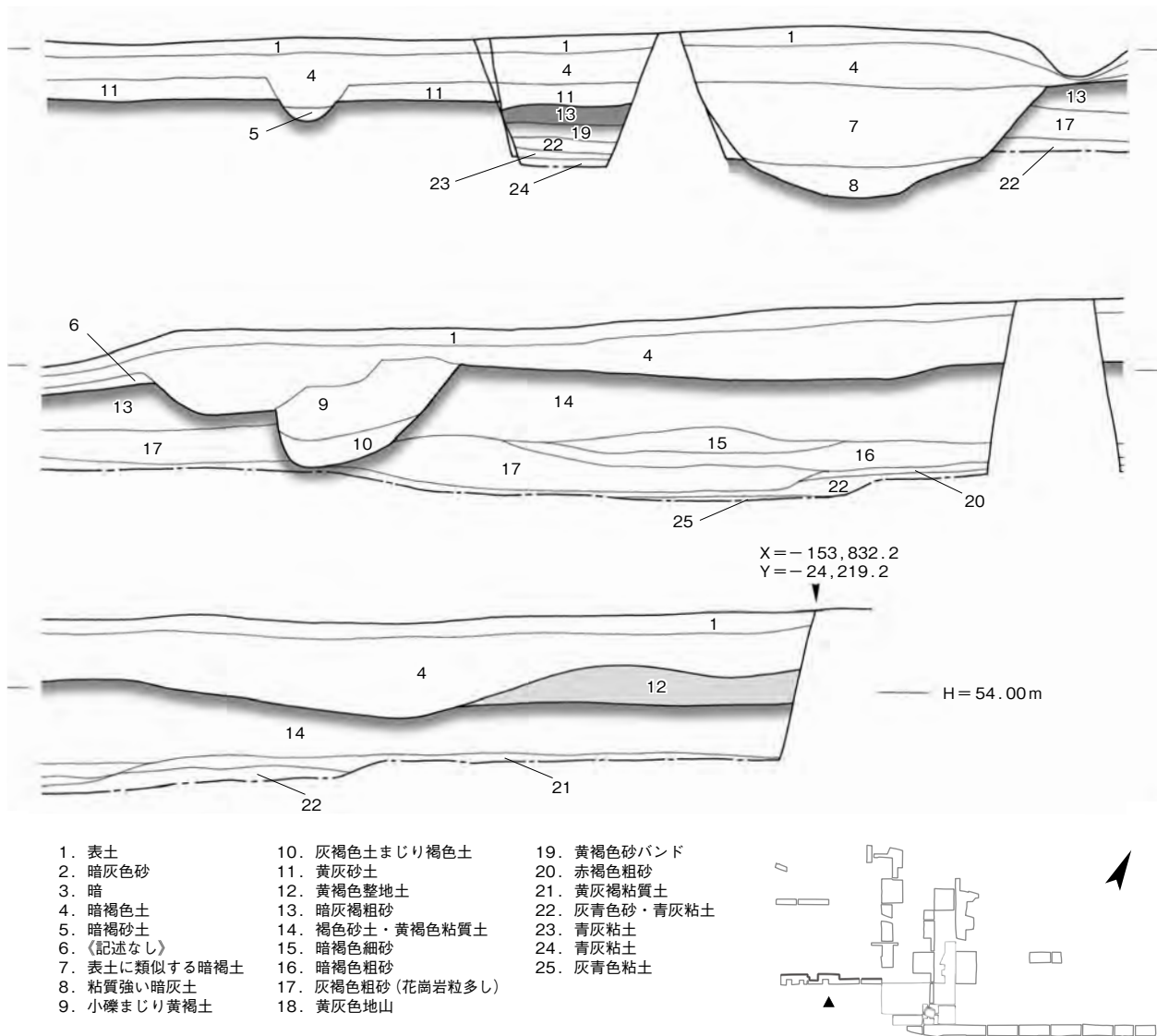


Fig. 23-2 2-4・5区北壁面2 (1:50)

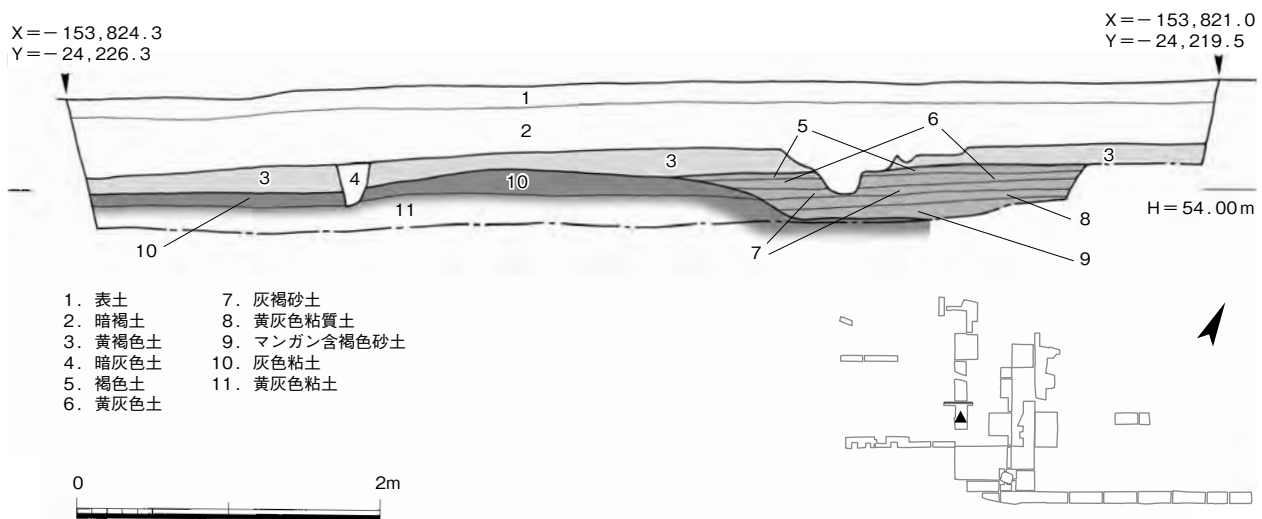


Fig. 24 2-11区北壁面 (1:50)

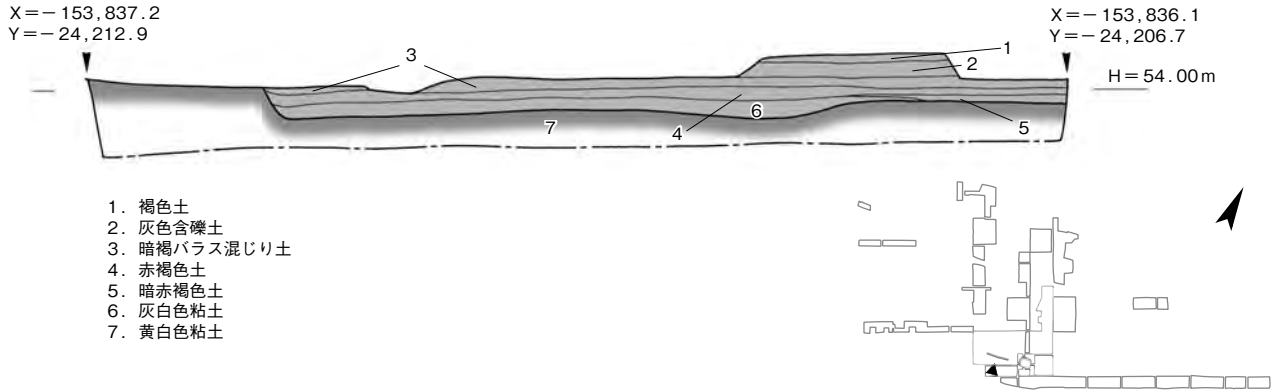


Fig. 25 1-2区1939西溝南壁面(1:50)

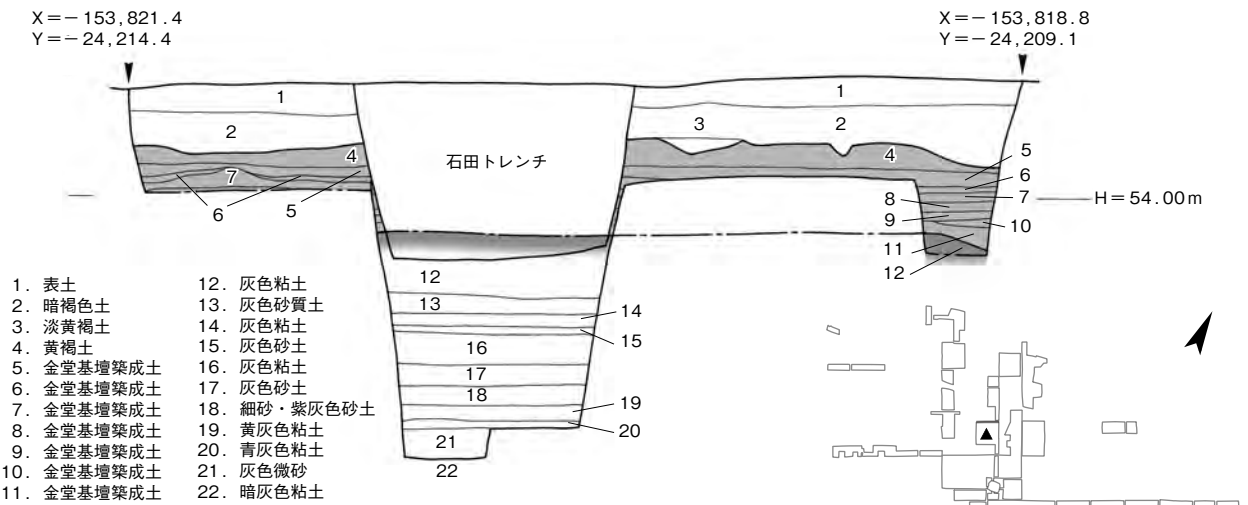


Fig. 26 2-15区北壁面(1:50)

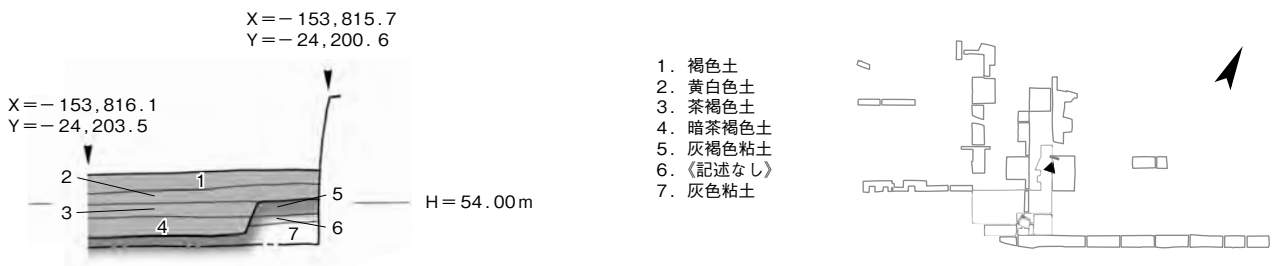


Fig. 27 1-2区1939北溝2東拡張溝北壁面(1:50)

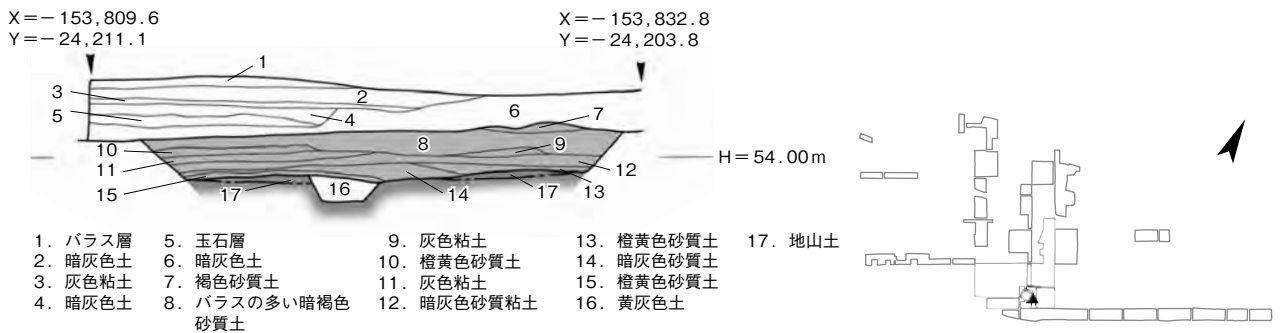


Fig. 28 1-2区塔心礎北側部分南壁面(1:50)

X=-153,842.8  
Y=-24,210.4

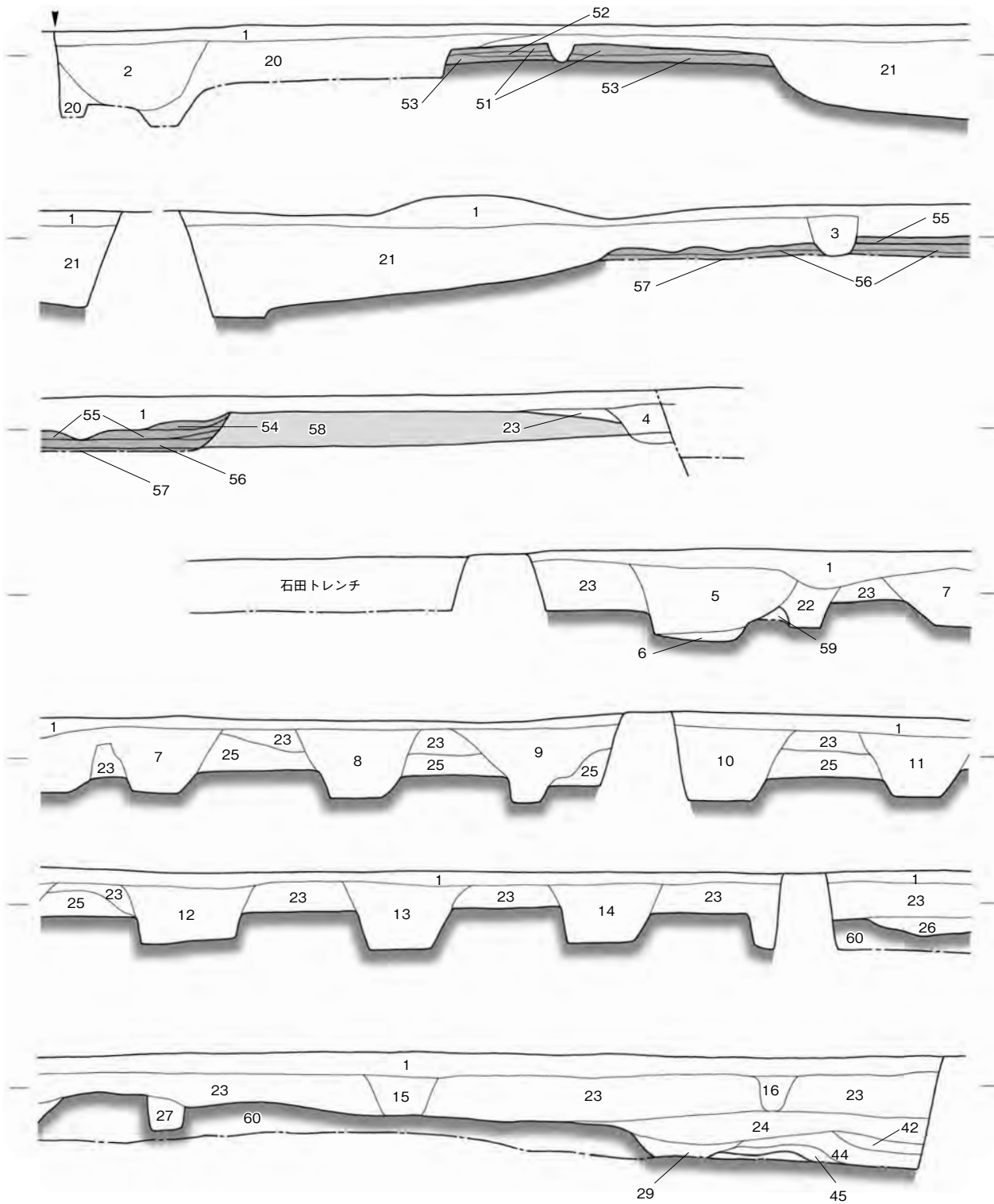
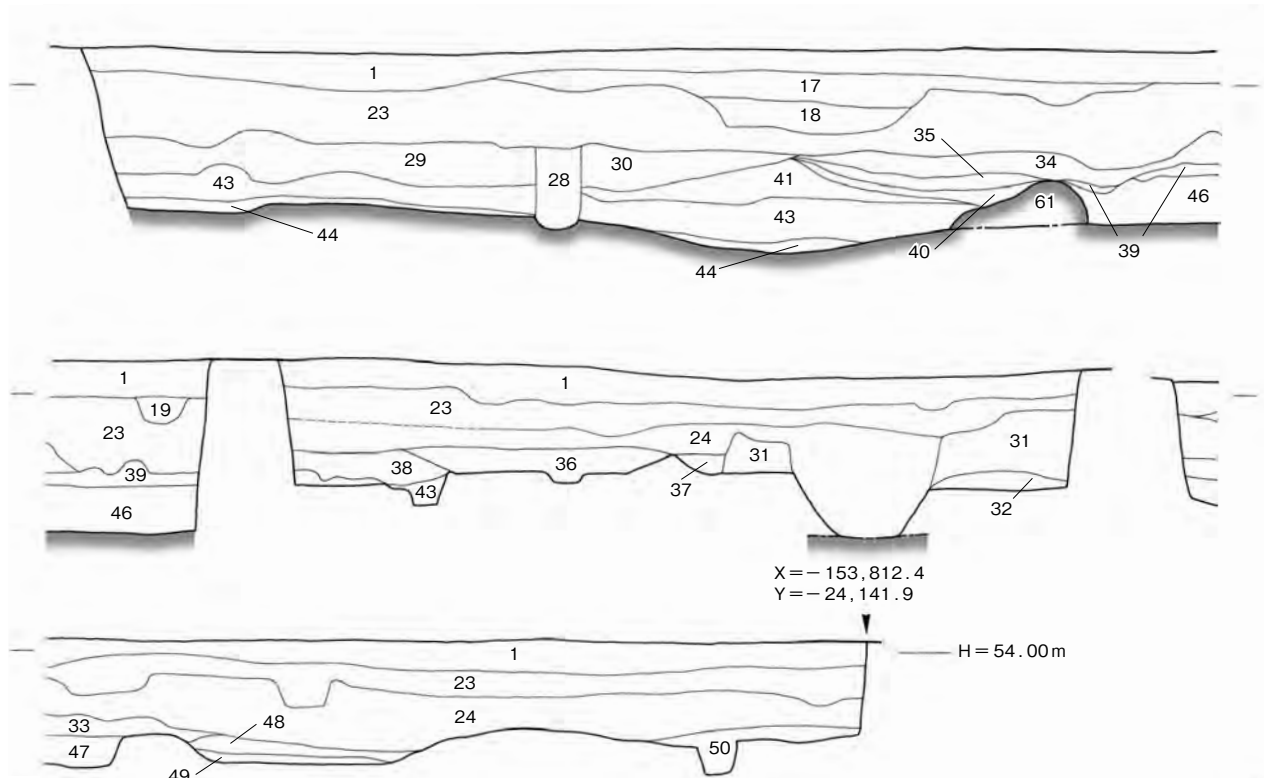


Fig.29-1 1-3・13区南壁面・1-7~12区北壁面1 (1:50)



- |                 |            |             |                     |                     |              |
|-----------------|------------|-------------|---------------------|---------------------|--------------|
| 1. 表土           | 11. 黒褐色砂質土 | 22. 暗褐色土    | 33. 黒褐土             | 43. 黄灰粘質土           | 53. 基壇版築土    |
| 2. 白粘土の斑点が入る褐色土 | 12. 黒褐色砂質土 | 23. 褐色土 (軟) | 34. 暗褐砂質土           | 44. 灰色粘土・黒色土 (炭化物層) | 54. 酸化物の多い砂  |
| 3. 《記述なし》       | 13. 黒褐色砂質土 | 24. 褐色土 (硬) | 35. 淡灰色土            | 45. 黄色砂質土           | 55. パラスまじり粘土 |
| 4. 《記述なし》       | 14. 黒褐色砂質土 | 25. 黄褐色土    | 36. 暗褐色土            | 46. 黄白色粘土           | 56. 含パラス赤土   |
| 5. 黒褐色砂質土       | 15. 黒褐色土   | 26. 暗褐色土    | 37. 淡褐色土            | 47. 黄灰粘質土           | 57. 青白粘土     |
| 6. 灰色粘土         | 16. 黒褐色土   | 27. 暗褐色土    | 38. 暗黄土             | 48. 暗褐色土            | 58. 黄褐整地土    |
| 7. 黒褐色砂質土       | 17. 淡褐色土   | 28. 黄褐色土    | 39. 黒灰色粘土           | 49. 灰黒土             | 59. 地山       |
| 8. 黒褐色砂質土       | 18. 黒褐土    | 29. 暗褐色土    | 40. 暗褐色土            | 50. 黄灰粘質土           | 60. 青灰粘土     |
| 9. 黒褐色砂質土       | 19. 黒褐土    | 30. 淡灰色土    | 41. 灰褐砂質土           | 51. 基壇版築土           | 61. 青灰色粘土    |
| 10. 黒褐色砂質土      | 20. 褐色土    | 31. 灰褐色土    | 42. 暗褐色土 (黄色ブロックあり) | 52. 基壇版築土           |              |

Fig. 29-2 1-3・13区南壁面・1-7~12区北壁面2 (1:50)

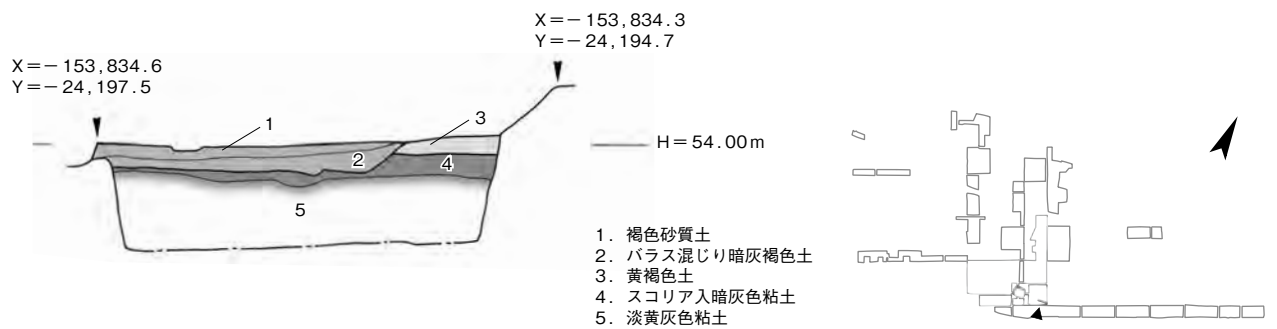


Fig. 30 1-5区1939東溝南壁面 (1:50)

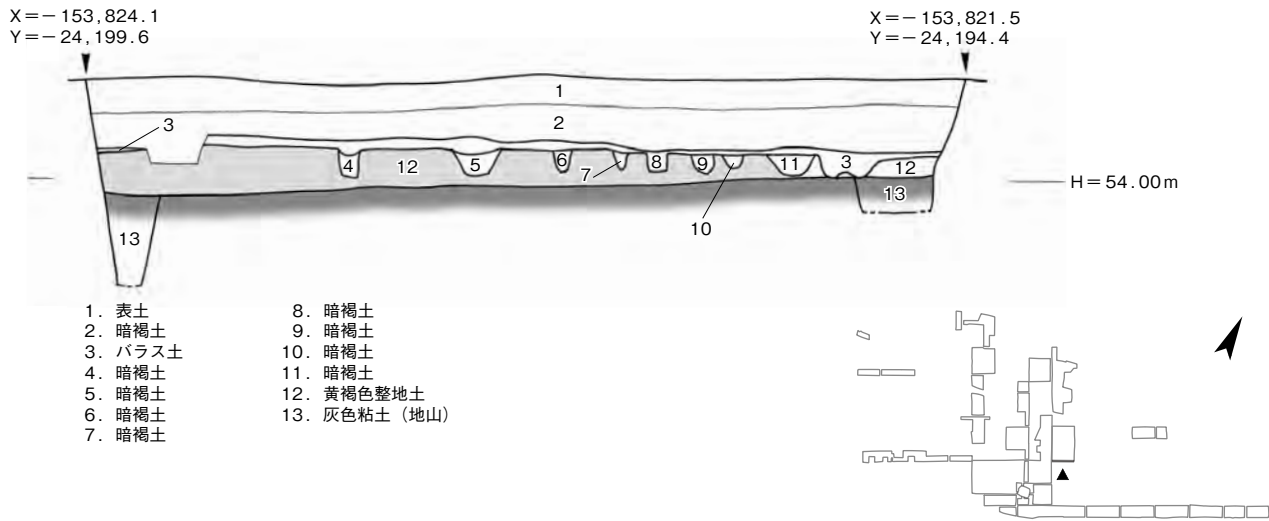


Fig. 31 2-18区南壁面 (1:50)

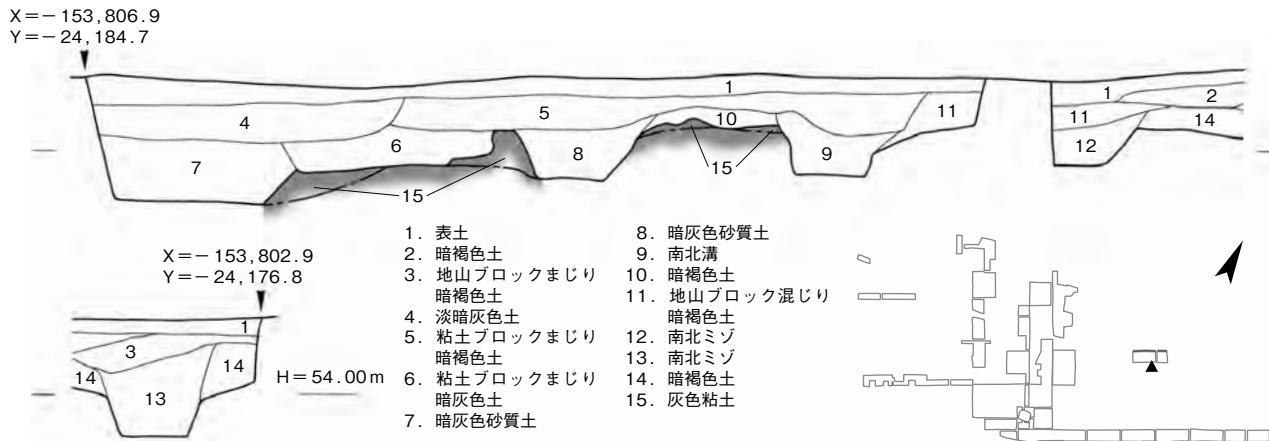


Fig. 32 1-14・15区北壁面 (1:50)

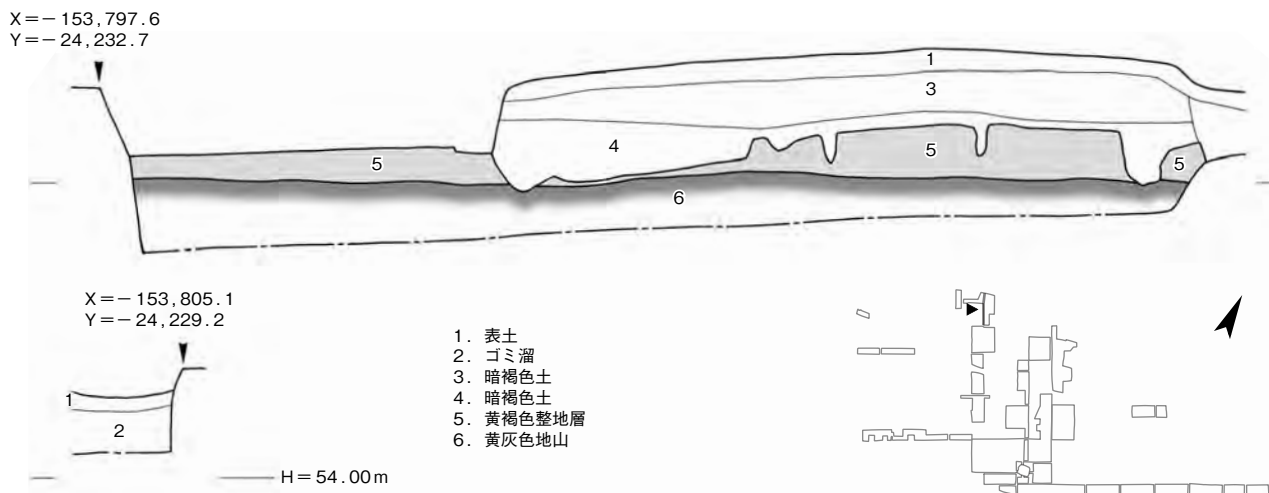


Fig. 33 2-7区西壁面 (1:50)



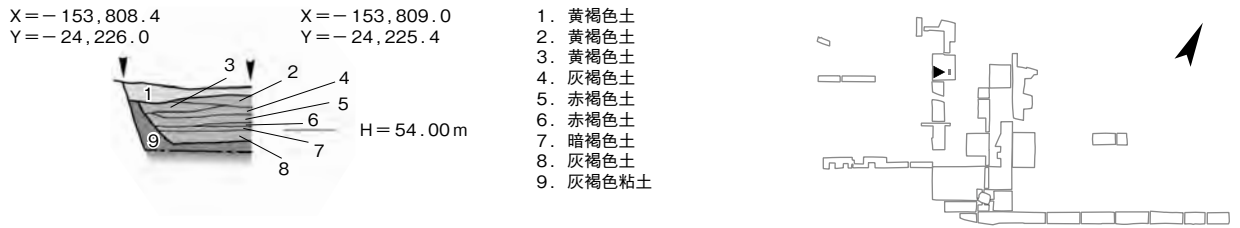


Fig. 34 2-8区1939北西溝1東壁面(1:50)

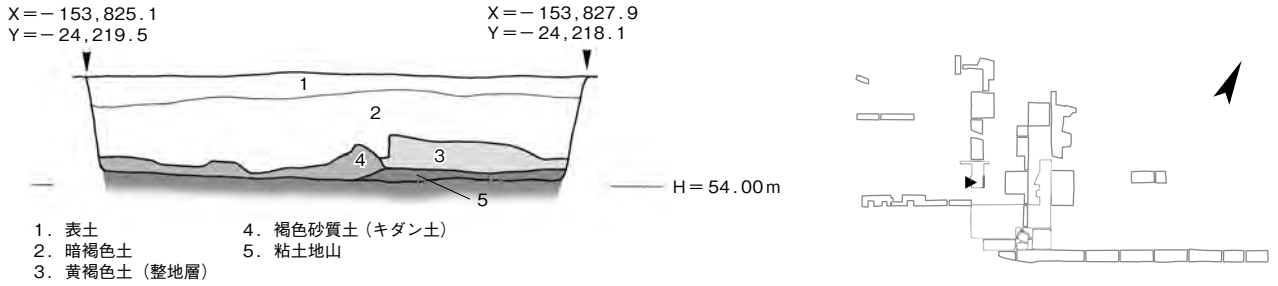


Fig. 35 1-1区東壁面(1:50)

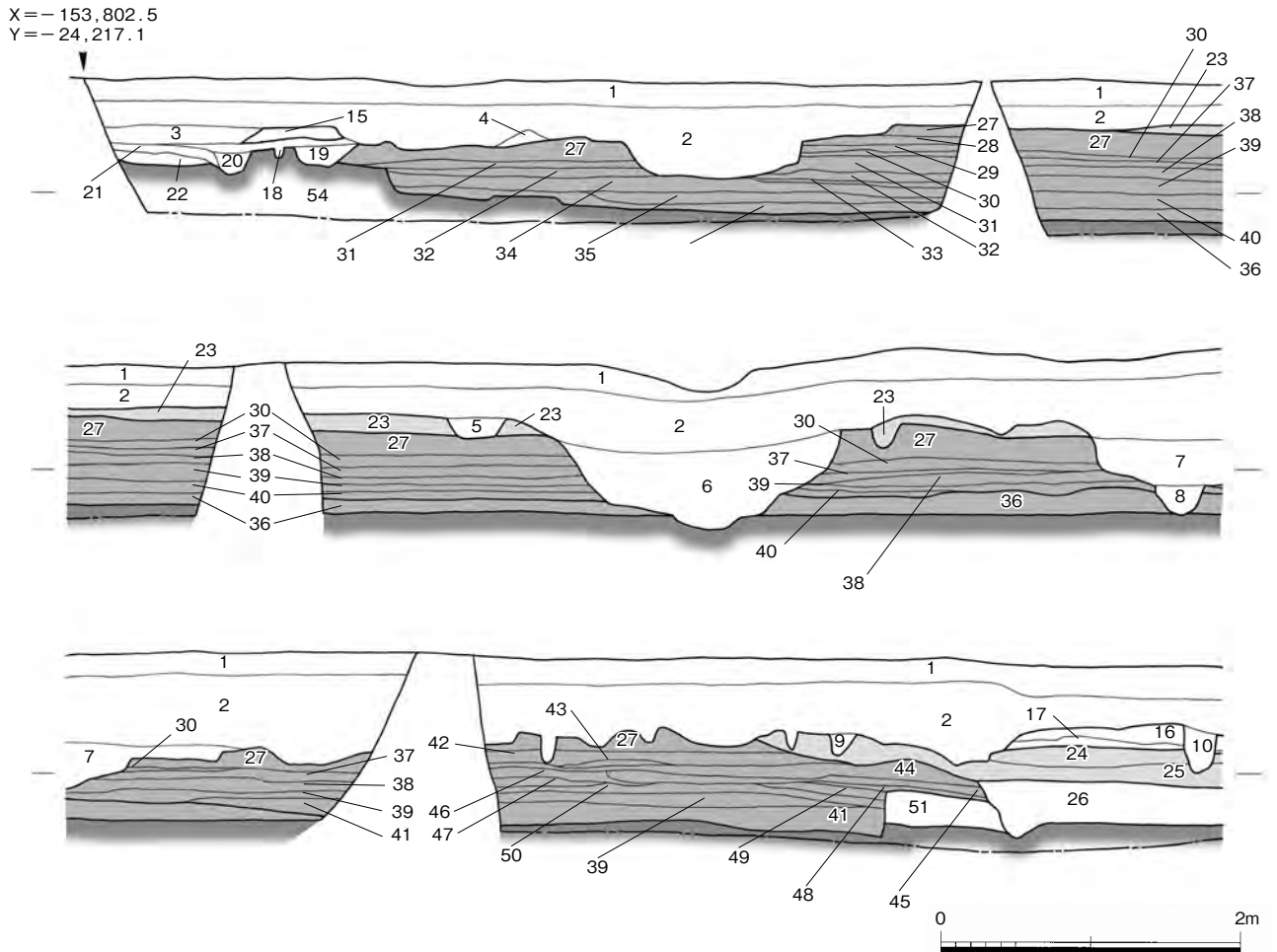
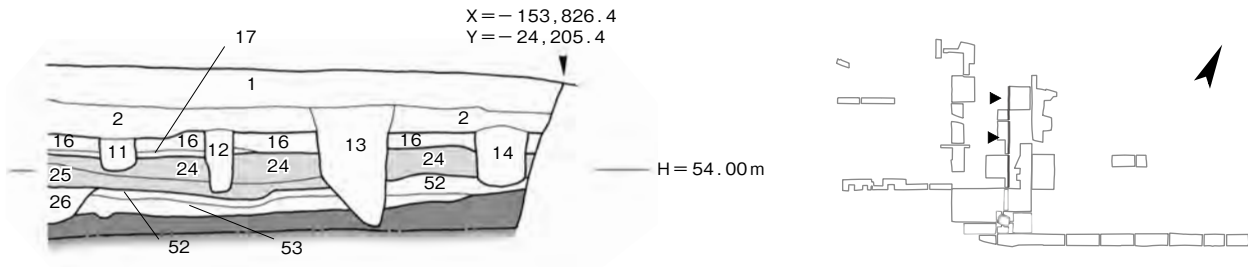


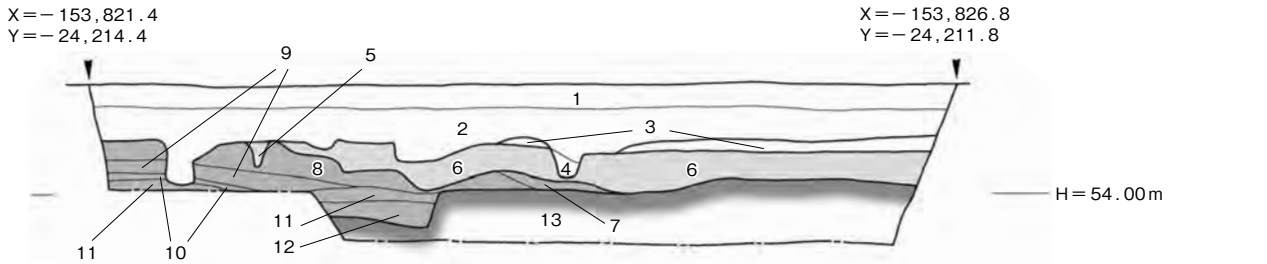
Fig. 36-1 2-12区西壁面・2-13~15区東壁面1(1:50)





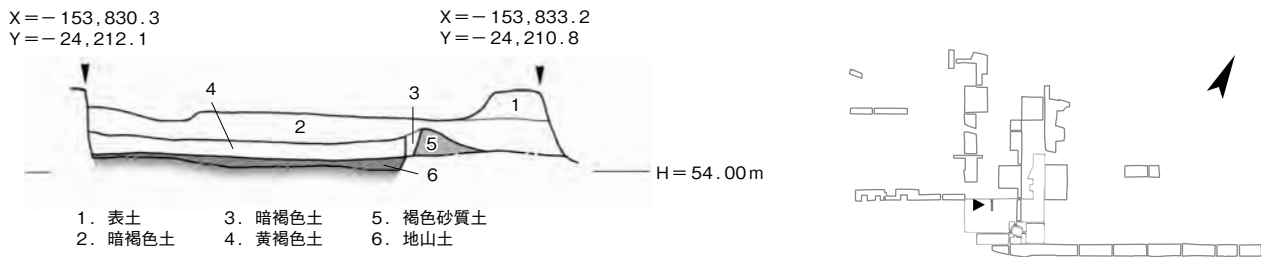
- |                                  |                               |                      |
|----------------------------------|-------------------------------|----------------------|
| 1. 表土                            | 19. 茶褐色砂質土                    | 37. 黄灰色砂質土           |
| 2. 暗褐色土・暗褐色                      | 20. 灰色土                       | 38. 淡灰褐色土 (砂質)       |
| 3. 暗褐色土                          | 21. 暗《原文通り》                   | 39. 灰褐色土 (粘質)        |
| 4. 黄灰色土                          | 22. 茶褐色砂質土                    | 40. 黄灰色砂質土           |
| 5. 暗褐色土                          | 23. 黄褐色整地層                    | 41. 黄灰色土             |
| 6. 黄灰色土・黄灰色土 (粘質)・灰色粘土           | 24. 黄褐色土 (砂質)                 | 42. 淡黄灰色土 (砂質)       |
| 7. 暗褐色土 (やや粘質)                   | 25. 黄褐色土 (粘質)                 | 43. 淡褐色土 (砂質)        |
| 8. 灰色土 (黄斑あり)                    | 26. 灰褐色粘質土 (上部砂質・下部粘質、花崗岩粒あり) | 44. 明褐色土 (砂質)        |
| 9. 淡黄褐色土                         | 27. 黄灰色 (粘質土)                 | 45. 褐色砂質土            |
| 10. 淡褐色土                         | 28. 灰色土 (粘質土)                 | 46. 灰褐色土 (粘質)        |
| 11. 淡褐色土                         | 29. 黄灰色 (粘質土)                 | 47. 淡褐色土 (粘質)        |
| 12. 淡褐色土                         | 30. 茶褐色粘質土、淡黄褐色土 (粘質)         | 48. 淡灰色土 (粘質)、黄斑     |
| 13. 淡黄褐色土 (黄褐色土・灰色粘土のブロック・小礫を含む) | 31. 灰褐色粘質土 (マンガン斑)            | 49. 淡灰色土 (砂質)、黄斑あり   |
| 14. 暗褐色土 (礫)                     | 32. 灰色土 (砂質、マンガン粒)            | 50. 明褐色土 (粘質)        |
| 15. パラス層                         | 33. 黄灰粘質土                     | 51. 黄灰色層             |
| 16. 暗褐色パラス土                      | 34. 灰褐色粘質土 (砂のブロック、マンガン斑入り)   | 52. 灰褐色土 (砂質)、黄斑あり   |
| 17. 暗褐色パラス土                      | 35. 灰色粘質土                     | 53. 灰褐色 (マンガン斑入り、砂質) |
| 18. 灰色粘質土                        | 36. 灰褐色粘質土                    | 54. 灰色粘土 (地山)        |

Fig. 36-2 2-12区西壁面・2-13~15区東壁面2 (1:50)



- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 表土     | 8. 黄灰色土    |
| 2. 暗褐色土   | 9. 淡黄灰色土   |
| 3. パラス土   | 10. 灰色粘土   |
| 4. 暗褐色土   | 11. 黄灰色粘質土 |
| 5. 暗褐色土   | 12. 灰褐色砂質土 |
| 6. 黄褐色整地土 | 13. 地山     |
| 7. 褐色砂土   |            |

Fig. 37 2-15区西壁面 (1:50)



- |         |         |          |
|---------|---------|----------|
| 1. 表土   | 3. 暗褐色土 | 5. 褐色砂質土 |
| 2. 暗褐色土 | 4. 黄褐色土 | 6. 地山土   |

Fig. 38 1-2区TS-KA 51ライン畦西壁面 (1:50)

X=-153,827.3  
Y=-24,206.1

X=-153,832.3  
Y=-24,203.8

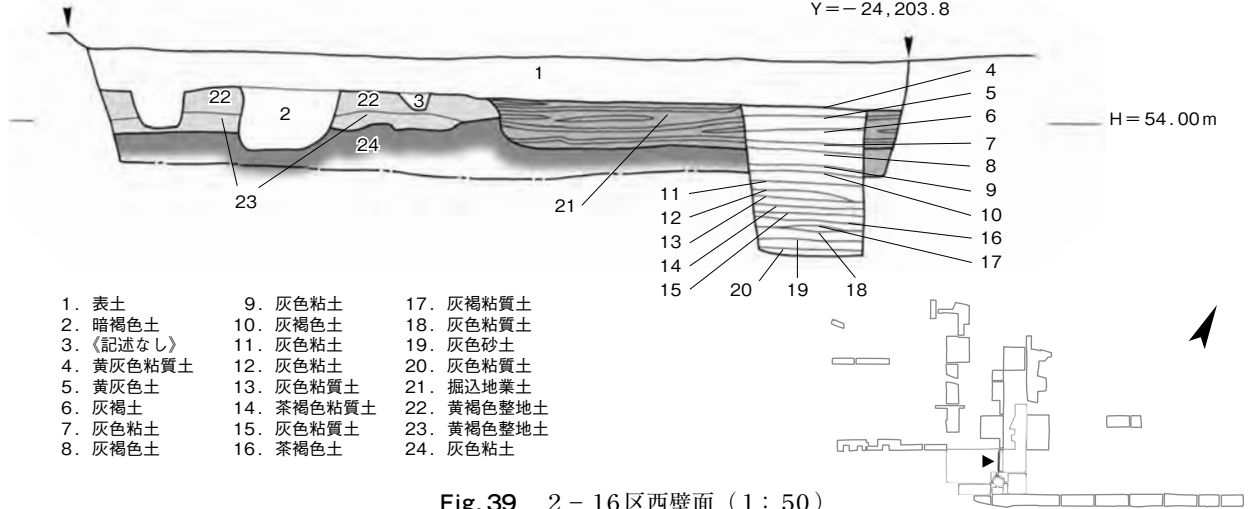


Fig. 39 2-16区西壁面 (1:50)

X=-153,826.8  
Y=-24,205.2

X=-153,830.7  
Y=-24,204.0

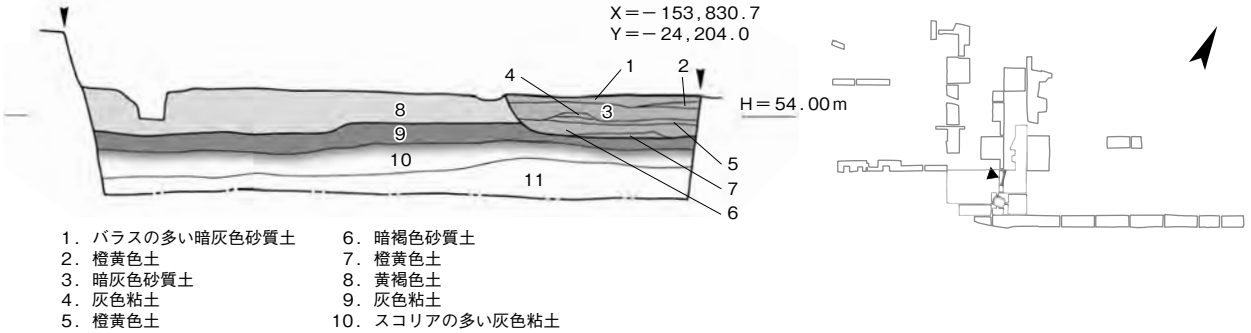


Fig. 40 1-2区1939北溝2西壁面南側 (1:50)

X=-153,818.0  
Y=-24,203.8

X=-153,823.5  
Y=-24,203.4

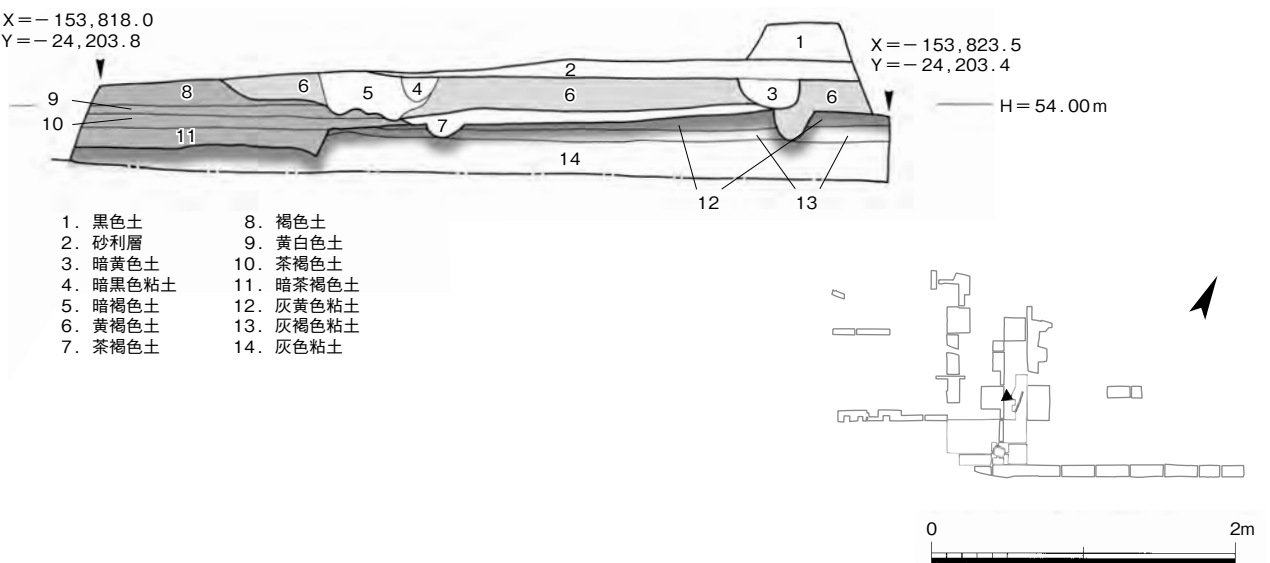


Fig. 41 1-2区1939北溝2東壁面 (1:50)

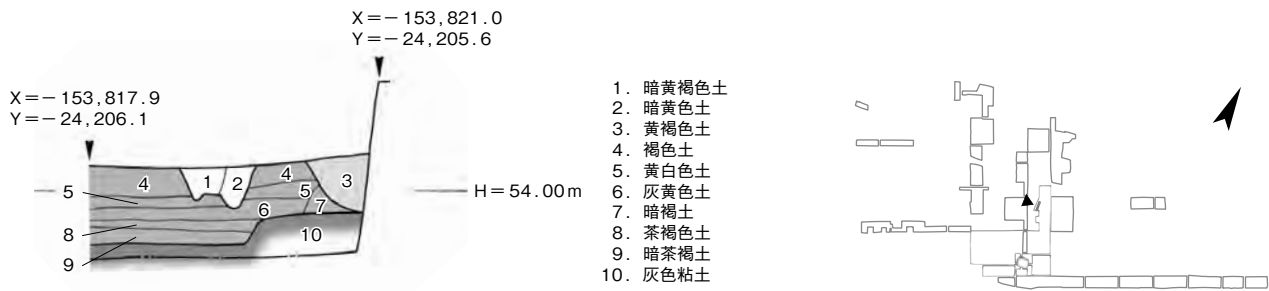


Fig. 42 1-2区1939北溝2西壁面北側 (1:50)

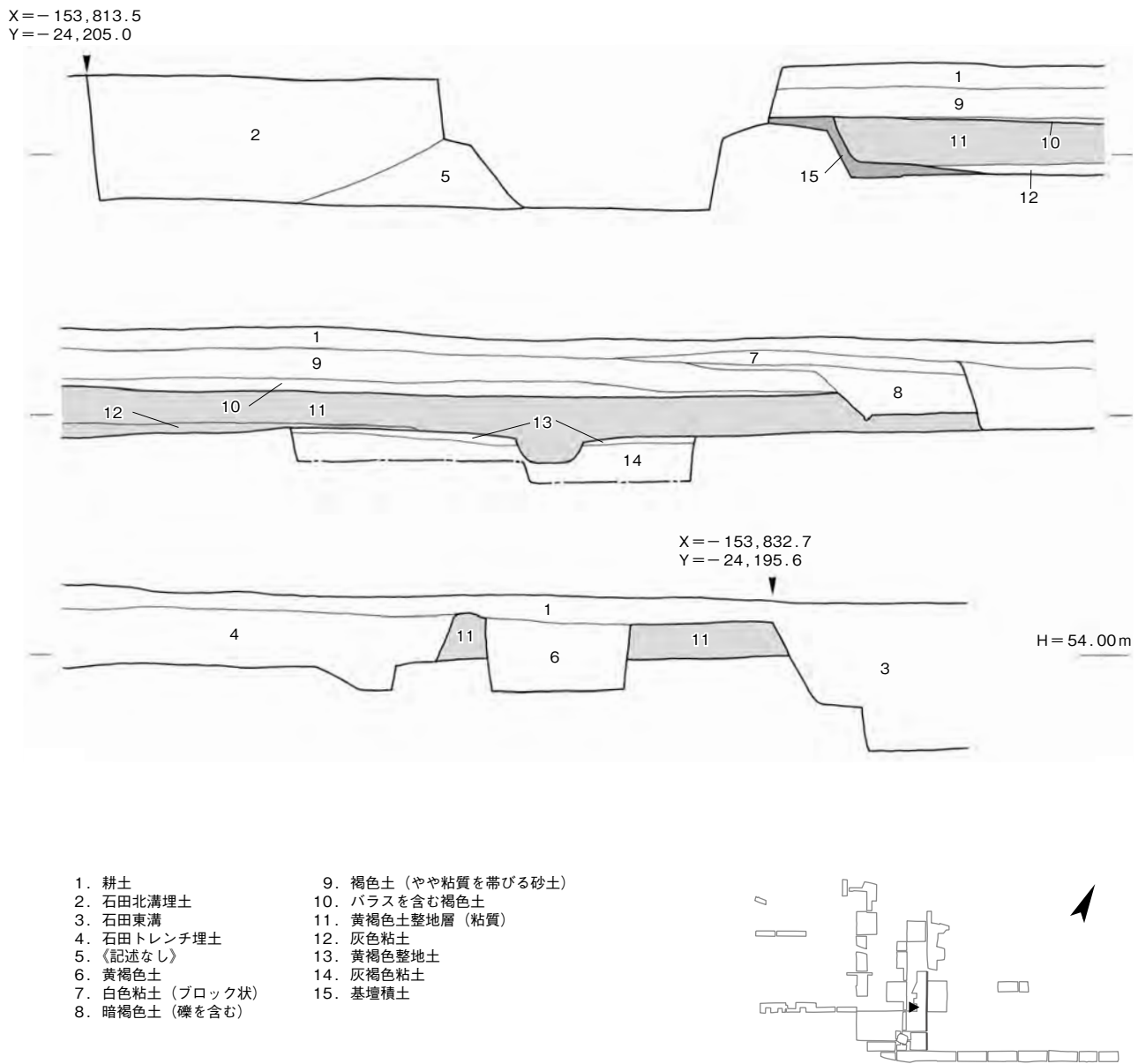


Fig. 43 1-2.5区東壁面 (1:50)

X=-153,797.3  
Y=-24,213.1

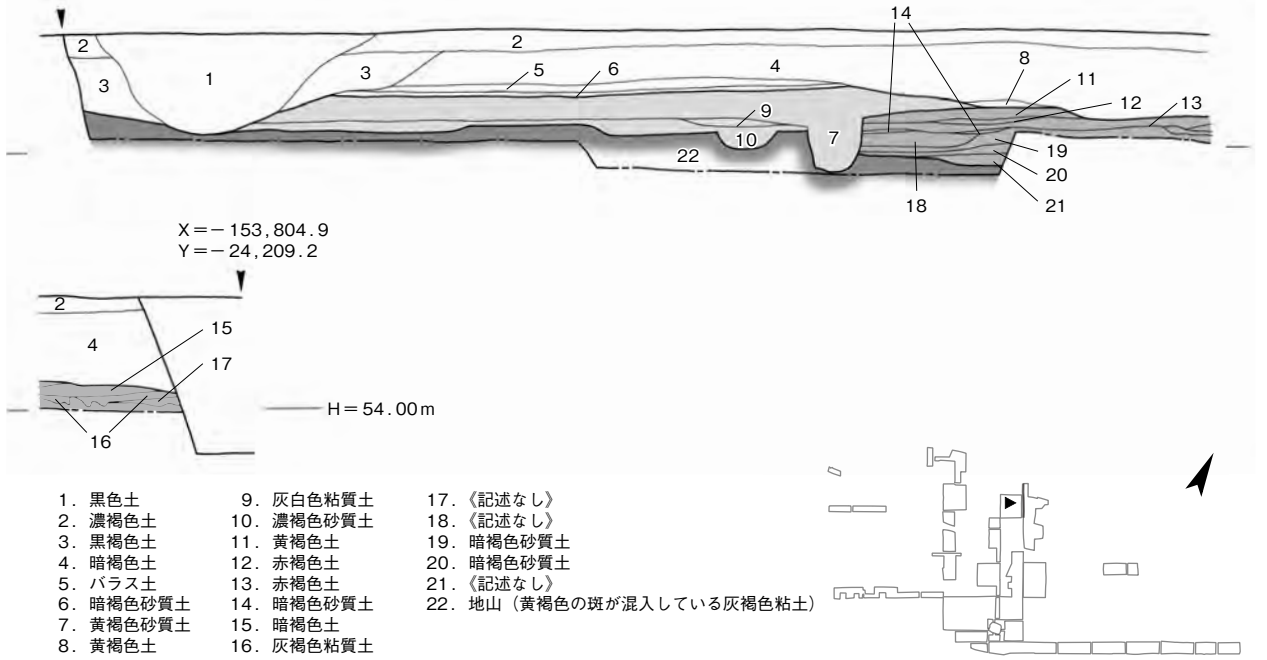


Fig.44 2-17区西壁面 (1:50)

X=-153,816.0  
Y=-24,203.8

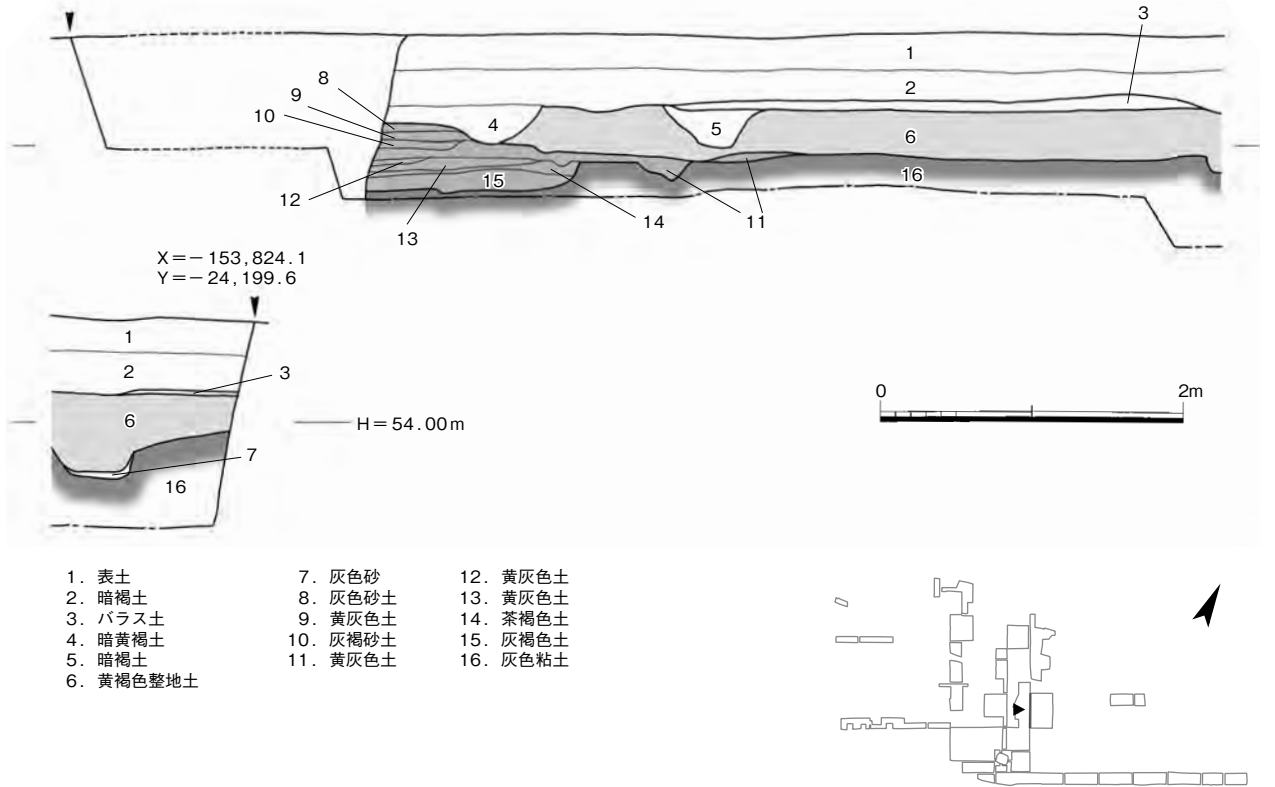


Fig.45 2-18区西壁面 (1:50)

## 2 遺構・遺物解説

### 若草伽藍にかかわる遺構・包含層

#### 地 山

2-15区 (Fig. 26) でおこなった断ち割り調査によれば、本調査区において遺物を一切含まない地山は、上から順に、灰色粘土、灰色砂質土、灰色砂土、紫灰色砂土、黄灰色粘土、青灰色粘土、灰色微砂、暗灰色粘土で、これらがほぼ水平に堆積していた。なお土層図には「地山」の注記があって、調査者の認識を知ることができる。この地点における地山の確認深度は標高53.30mである。地点ごとで、最上層の地山上面高をみると、北の2-1区では53.20m、西の2-4区では54.00m、南の1-7区では53.85m、最も東に位置する1-13区では調査が地山層まで到達していないので、この西の1-12区で地山の標高をみると53.05mであった。

また地山上面高については、金堂掘込地業後になされた第2整地土が地山上面に残存していれば、若草伽藍造営当初の寺地造成の高さを知ることができる。調査地の中で、この条件を満たしているのは2-5区北壁 (Fig. 23)、2-11区北壁 (Fig. 24)、1-5区1939東溝南壁 (Fig. 30)、2-18区南壁 (Fig. 31)、2-7区西壁 (Fig. 33)、2-8区1939北西溝1東壁 (Fig. 34)、1-1区東壁 (Fig. 35)、2-13~15区東壁 (Fig. 36)、2-15区西壁 (Fig. 37)、2-16区西壁 (Fig. 39)、1-2区1939北溝2西壁南側 (Fig. 40)、1-2区1939北溝2東壁 (Fig. 41)、1-2区1939北溝2西壁北側 (Fig. 42)、1-2・5区東壁 (Fig. 43)、2-17区西壁 (Fig. 44)、2-18区西壁 (Fig. 45) で、地山上面高は53.85~54.15mの範囲におさまる (Tab. 3)。したがって少なくとも金堂や塔部分を含めた南北約50m、東西約30mにわたる範囲が、若草伽藍の造営時に、標高54.0m前後に削土作業がなされたと推定できる。このほかに第2次整地土が分布しない地点で、地山上面のもっとも高い地点の標高は、伽藍推定中軸線から西に約39mにあたる2-2・3区の地点で53.90m、伽藍推定中軸線から東に約38mの1-10区の地点で53.95mである。この数値は、伽藍中枢域で得た値に近い。後世の削平を考慮しなければならないとはいえ、中枢域の地山高をほとんど越えない数値である点を評価して、金堂・塔を含め今回の調査のおよんだ南北54.4m、東西180.4mにわたる地域が、ほぼ標高54.0mで地ならしされた可能性を指摘しておきたい。

#### 第1整地土

第1整地土は、2-15区東壁 (Fig. 36) に限って検出されている (Fig. 46)。この壁面図によれば、掘込地業・版築土・金堂基壇地下版築土・第2整地土に先行する黄灰色土、灰色土、灰褐色土があって、後者には壁面実測原図 (「2次26-1」) に、「旧整地土a」と注記されている。これらは、厚い部分で25cm、南北方向に少なくとも5m広がっている。この整地土上面はほぼ版築土および第2次整地土によって覆われており、上面の標高は53.90mである。また同原図には、この土層のうち灰色土と灰褐色土に「瓦小片を包含する」とする注記があり、若草伽藍造営時の地ならし土とみなすことができる。なお上面の標高値は地山面のレベルにほぼ一致する事実とも整合する。つまり地ならしをおこなう

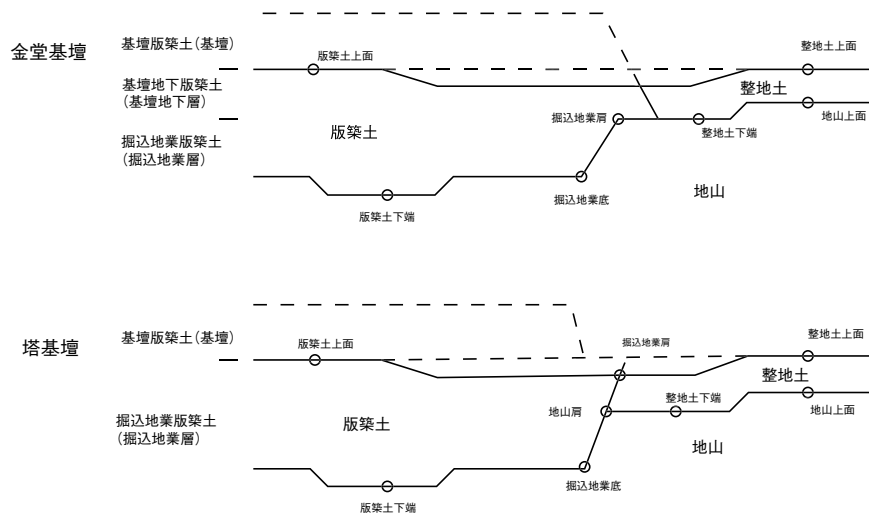


Fig. 46 土層図計測位置模式図

Tab. 3 地山標高値一覧

No.	土層断面位置	地山標高(最高値・m)	計測位置	備考
1	2-1区南壁面	53.20		
2	2-2区南壁面	53.90		
3	2-3区南壁面	53.80		
4	2-4区北壁面	54.00		
5	2-5区北壁面	54.05	第2整地土の外側	第2整地土下端は53.90m
6	2-11区北壁面	54.15	第2整地土下端、整地面	
7	1-2区1939西溝南壁面	54.05		
8	2-15区北壁面	53.75	版築土下端、掘込地業底	
9	1-2区1939北溝2東拡張溝北壁面	54.00	版築土下端、掘込地業層	
10	1-2区心礎北側部分南壁面	53.85	版築土下端、掘込地業底	
11	1-3区南壁面	53.95	版築土下端、掘込地業底	
12	1-7区北壁面	53.85	第2整地土下端、整地面	
13	1-8区北壁面	53.95		
14	1-9区北壁面	53.95		
15	1-10区北壁面	53.95		
16	1-11区北壁面	53.35		
17	1-12区北壁面	53.05		
18	1-13区南壁面	地山面まで到達せず		
19	1-5区1939東溝南壁面	53.95	第2整地土下端、整地面	
20	2-18区南壁面	53.90	第2整地土下端、整地面	
21	1-14・15区北壁面	54.15		
22	2-7区西壁面	54.05	第2整地土下端、整地面	
23	2-8区1939北溝3東壁面	54.20	第2整地土下端、整地面	
24	1-1区東壁面	54.10	第2整地土下端、整地面	
25	2-12区西壁面	54.30	版築土の外側	版築土下端は54.15m
26	2-13区東壁面	53.75	版築土下端、掘込地業底	
27	2-14区東壁面	53.70	版築土下端、掘込地業底	
28	2-15区東壁面	53.85	第2整地土下端、整地面	
29	2-15区西壁面	54.10	第2整地土下端、整地面	
30	1-2区TS-KA51ライン畦西壁面	54.10	第2整地土下端、整地面	
31	2-16区西壁面	54.05	第2整地土下端、整地面	
32	1-2区1939北溝2西壁面(南側)	53.95	第2整地土下端、整地面	
33	1-2区1939北溝2東壁面	54.05	第2整地土下端、整地面	
34	1-2区1939北溝2西壁面(北側)	53.85	第2整地土下端、整地面	
35	1-2・5区東壁面	53.95	第2整地土下端、整地面	
36	2-17区西壁面	54.20	第2整地土の外側	第2整地土下端は54.10m
37	2-18区西壁面	53.90	第2整地土下端、整地面	
38	1-2区南壁面	54.00	版築土下端、掘込地業底	報告書未掲載
39	1-2・3・6区50ライン東壁面	53.85	版築土下端、掘込地業底	報告書未掲載

No.	土層断面位置	第1整地上上面 (m)	第1整地土下端 (m)
1	2-15区東壁面	53.90	53.65

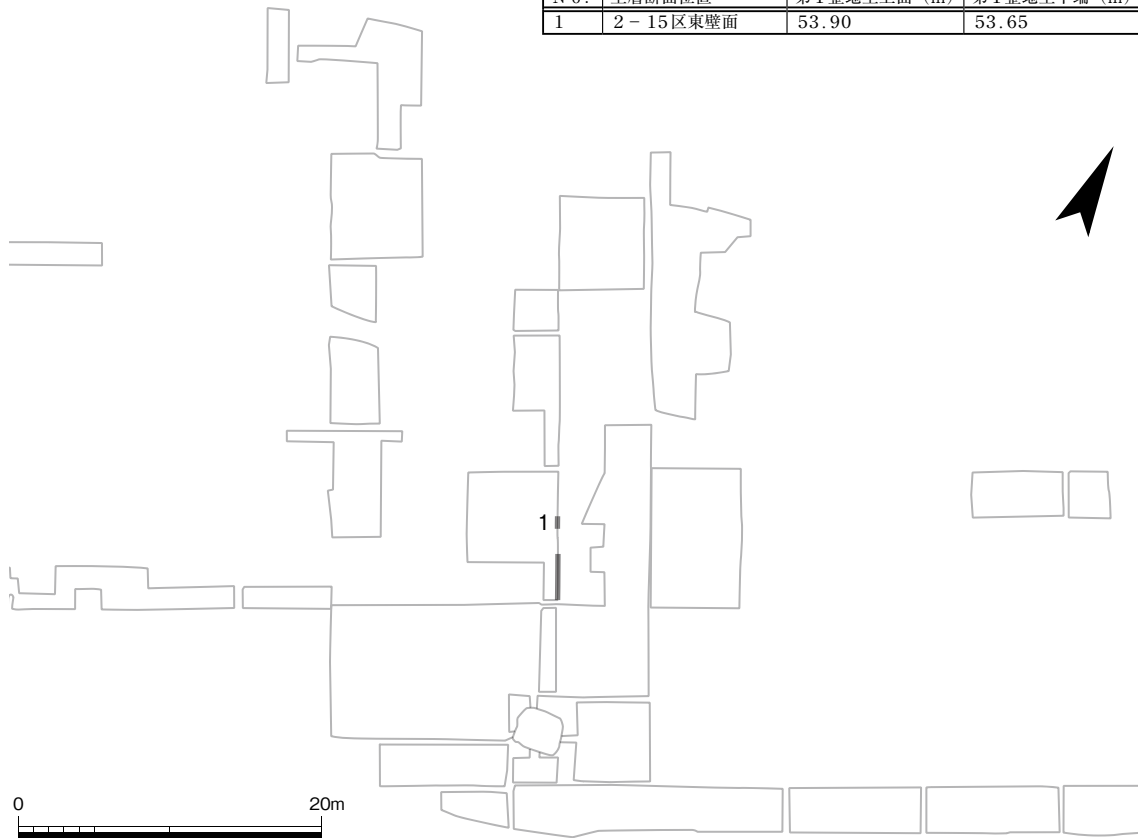


Fig. 47 第1整地土 (1: 500)

に際して、低い部分に土を入れて全体を平坦にした箇所と理解する。(深澤)

また、「KB46整地層下端」(ラベル) で取り上げた土器がある。若草伽藍造営以前にさかのぼる遺物なので、この地域の開発時期を示唆する資料として、報告する (Fig. 48)。

須恵器杯Hの蓋の破片とみられる。回転ヘラケズリの施された外面に2本の沈線からなるヘラ記号の一部をとどめる。天井部と口縁部との境につくべき稜や沈線をとどめず、径も13.0cmに復原できることなどから、陶邑編年のTK43型式、6世紀後半のものとみられる (田辺1966)。(高橋)

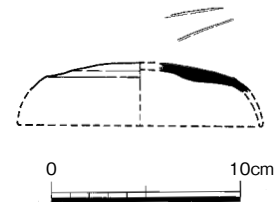


Fig. 48 KB46整地層  
下端 須恵器 (1: 4)

#### 金堂基壇と掘込地業 (SX7100) (PL.5~11)

金堂基壇については現在、地上に残存した遺構は認められず、基壇外装の痕跡もまったく残っていない。掘込地業版築土と基壇地下版築土の一部をとどめるのみである。したがってその基壇は、掘込地業などの版築土の存在によって金堂位置を確認し、その規模を推定しなければならない。

掘込地業は、北東隅 (2-17区)・南東隅 (2-18区)・南西隅 (1-1、2-11区) の3隅および東 (1-2、2-17・18区)・西 (2-8~11区)・南 (1-2、2-11・15・18区)・北 (2-8・12・17区) の4辺、そして中央部 (2-13・14区) で確認される。北西隅については1939年の調査 (2-8区1939北西溝1) で掘削されており、遺構は残っていなかった。

掘込地業の規模は、掘込地業肩部によれば、その輪郭の形状は正確な長方形ではなく、やや不整形

金堂基壇掘込地業の規模

位置	規模 (m)	備考
東西 (北)	22.80	東辺・西辺ともに推定位置を計測
東西 (中央)	22.50	東辺は推定位置を計測
東西 (南)	22.00	全長
南北 (東)	19.70	全長
南北 (中央)	19.05	北辺は推定位置を計測
南北 (西)	19.95	北辺は推定位置を計測

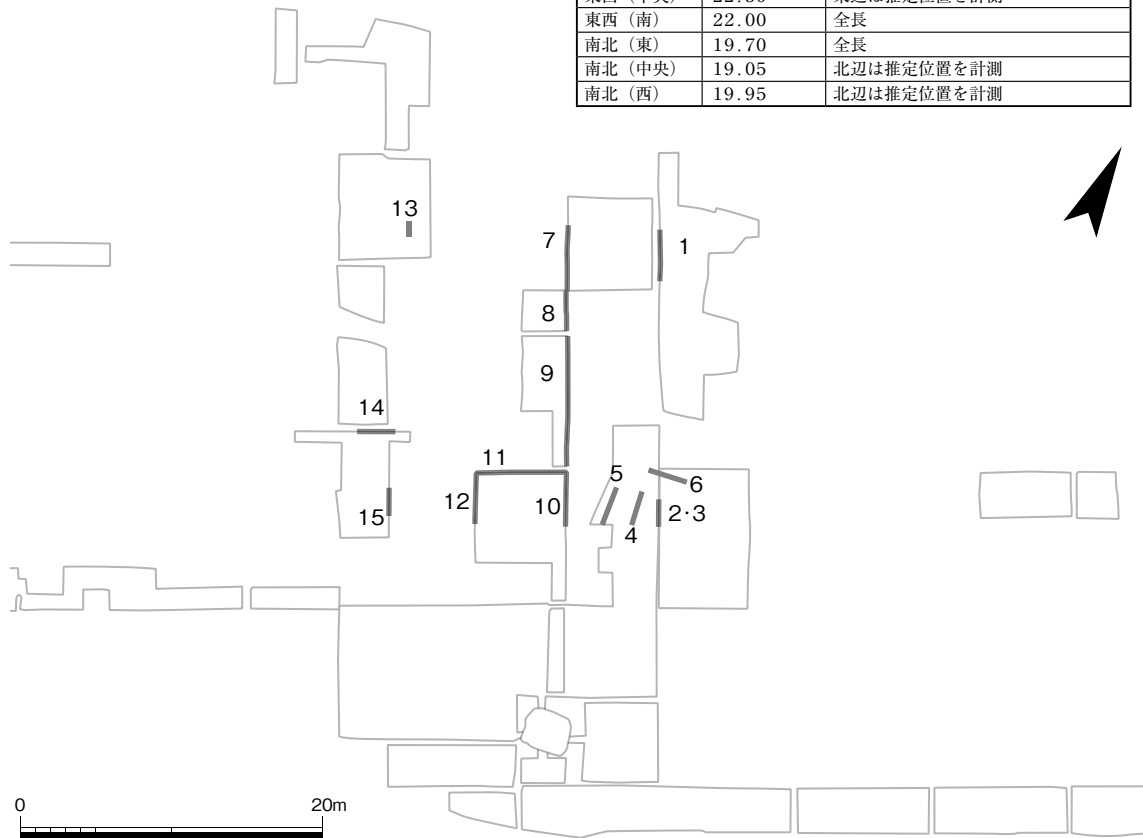


Fig. 49 金堂基壇掘込地業 (1:500)

Tab. 4 金堂基壇掘込地業の標高値

No.	土層断面位置	掘込地業 肩 (m)	掘込地業 底 (m)	版築土上 面 (m)	版築土下 端 (m)	整地土上 面 (m)	整地土下 端 (m)	地山上面 (m)	地山計測位置	備考
1	2-17区西壁面	54.10	53.95	54.25	53.90	54.40	54.10	54.20	第2整地土の外側、第2整地土下端標高は54.10m	
2	1-2・5区東壁面	53.85	53.85	54.30	53.85	54.30	53.85	53.95	第2整地土下端、第1整地面	掘込地業は底部まで掘削せず?
3	2-18区西壁面	53.90	53.70	54.15	53.70	54.25	53.90	53.90	第2整地土下端、第1整地面	
4	1-2区1939北溝2東壁面	53.85	53.65	54.20	53.65	54.20	53.90	54.05	第2整地土下端、第1整地面	
5	1-2区1939北溝2西壁面北側	53.80	53.65	54.20	53.65	54.25	53.85	53.85	第2整地土下端、第1整地面	
6	1-2区1939北溝2東拡張溝北壁面	54.00	53.80	54.20	53.80	-	-	54.00	版築土下端、第1整地面	
7	2-12区西壁面	54.15	54.00	54.40	53.85	-	-	54.30	版築土の外側、版築土下端標高は54.15m	
8	2-13区東壁面	-	-	54.40	53.75	54.40	54.30	53.75	版築土下端、掘込地業底	
9	2-14区東壁面	-	-	54.25	53.70	54.35	54.25	53.70	版築土下端、掘込地業底	
10	2-15区東壁面	53.90	53.55	54.30	53.55	54.30	53.90	53.85	第2整地土下端、第1整地面	
11	2-15区北壁面	-	-	54.40	53.75	-	-	53.75	版築土下端、掘込地業底	
12	2-15区西壁面	54.00	53.75	54.35	53.75	54.35	54.00	54.10	第2整地土下端、第1整地面	
13	2-8区1939北西溝3東壁面	54.20	53.90	54.20	53.90	54.35	54.20	54.20	第2整地土下端、第1整地面	
14	2-11区北壁面	54.10	53.80	54.15	53.80	54.25	54.00	54.15	第2整地土下端、第1整地面	
15	1-1区東壁面	54.10	54.00	54.25	54.00	54.30	54.10	54.10	第2整地土下端、第1整地面	掘込地業は底部まで掘削せず?



である。なお掘込地業肩部の平面実測図の輪郭位置は、2-12区西壁面図 (Fig. 36) および2-18区西壁面図 (Fig. 45) にみられる土層断面における掘込地業の肩部と一致していた。そしてこの輪郭やこれによって推定復原してえた数値によれば、東西は、北辺部が22.80m、中央部が22.50m、南辺部が22.00m、南北は、西辺部が19.95m、中央部が19.05m、東辺部が19.70mである (Fig. 49)。これらの数値は、概報が報告する東西約22m、南北約19.5mを含む数値である。ともあれ東西にやや長い長方形を呈し、概報報告にしたがって東西長と南北長の比率をおおよそ1.1:1とすることができる。基壇そのものの大きさは、基壇外装等の痕跡が残っていないので手がかりをまったく欠くとはいえ、2-15区東壁面・同西壁面・2-18区西壁面などから、版築土の外周すべてを整地土が覆っている事実を根拠に、基壇規模を掘込地業とほぼ同じと想定すべきであろう。

金堂基壇の掘込地業は、地山あるいは第1整地土面からおこなわれており、その標高は54.0mあたりである。掘込地業の肩部は、北辺では2-12・17区、東辺では1-2区、南辺では1-1・2・2-15・18区、西辺では2-11区で確認できる。西辺では肩部が崩れており、北辺 (2-12区) では溝に切られているため掘り込みの状況は不明である。比較的遺存状態の良い、東辺 (1-2区) や南辺 (2-15区) の断面でみるとやや傾斜するか、あるいはほぼ垂直に近く掘り下げている。

掘込地業底の標高には、場所によって53.55~54.00mまでの差異がある。しかし掘込地業の肩と底の比高差は多くが20~30cmで比較的浅い (Tab. 4)。掘込地業は、肩部の高さまで版築する。版築には、灰褐色や黄褐色の砂質土が積まれており、1層の厚さは5~10cm程度で、掘込地業内で、2~6層を数えることができる。遺存状況の良い2-15区東壁面で見ると、掘込地業の深さは35cmで、地業内の土層は、上から順に黄灰色土、灰褐色土、暗褐色土、淡褐色土の4層である。版築土内に瓦の小片を包含している (2-15区北壁面 (Fig. 26) 原図に記載あり)。

掘込地業をおこなってから、さらに第1整地面・地山上面より高く積み上げて基壇を形成する。間層を挟まないため、掘込地業から基壇土の積み上げは連続した工程であったと推定する。基壇土の積み上げは、掘込地業位置より外側に、0.7~1.2mほどはみでた位置から開始する (2-15区東西壁面 (Fig. 36・37))。基壇土の積み上げ後に金堂周辺に整地したので、この整地土で覆われる部分が生ずる。この部分は金堂完成時には、地表下にあつて下層基盤の一部となる。この基壇土部分が、基壇地下層である。

後世の削平を受けているため、基壇地下層の実際の高さは不明であるが、最も遺存状況のよい2-15区東壁面では、第1整地土上面から40cmの高まりを確認できる。灰褐色土、褐色砂質土、暗褐色土、淡黄褐色土、黄灰色土の5層からなる版築土である。2-15区東壁面の場合、掘込地業の分を合わせると、地業底から少なく見積もっても70cm以上の版築がおこなわれたことになる。したがって掘込地業の掘り下げの深さそれ自体は浅いのであるが、基壇地下層による量上げ分を足せば、地表下の版築層は決して浅くないことになる。なお基壇版築土と第2整地土の土質については、「金堂・塔と掘込地業」の項で後述する。

#### 金堂基壇外周の溝SD 7040・SD 7050・SD 7055 (Fig. 17、PL. 14~18)

SD 7040は、2-17区、2-18区、1-2区で検出した金堂掘込地業の東側にある素掘溝である。2-17区東張り出し部に位置する北端の上幅は65cm、深さ28cmである。金堂掘込地業南東隅

でSD 7050に接続する。この付近の溝上幅は50 cm、深さ20 cmである。塔心礎付近の断割調査において塔掘込地業版築土の下で、SD 7040の続きを検出している。ここでは、溝上幅50 cm、深さ15 cm（溝底標高53.70 m）である。これ以南の状況は、明らかになっていない。北端から南端までの総長は27.5 mあり、標高でみると、南端部が4 cm低い。なおこの溝には、2-18区西壁で底部に砂の堆積が認められており、水を流す水路として機能していたことを示している。SD 7050は、2-18区で検出した金堂掘込地業の南側にある素掘溝である。西端部は、上幅45 cm、深さ6.5 cm、西でSD 7040に接続する付近では、上幅50 cm、深さ8 cmである。東西間2 mで、西端が1 cm低い。金堂掘込地業の西側で、これらに対応する素掘溝は検出されていない。SD 7055は、2-12区と2-17区で検出した金堂掘込地業北側の素掘溝である。西端は、上幅20 cm、深さ15 cm（溝底標高54.15 m）、東端は後世の溝に壊されており、その地点で上幅30 cm、深さ8 cmである。溝底は、東端と西端の間10.5 mで、東が13 cm低い。この3条の溝は、金堂基壇周辺の排水を目的にして一連で掘られており、南側に排水したと推定する。なお1-2区東南部のSD 7040外東側において、完形の軒丸瓦や丸瓦などが東方向に並んでいるように見える箇所がある（PL. 16・17）。

2-12区西壁面・2-17区西壁面によれば、SD 7055が金堂基壇地下版築土より新しく掘削されているから、溝の掘削時期は金堂基壇構築後である。また1-2区東壁面・2-18区西壁面、2-17区西壁面ではSD 7040が第2整地土層によって最終的に埋められたことが確認されている。さらに1-2区の東西調査区内においてSD 7040が塔掘込地業版築土で覆われているのが確認されている（1-2区南壁面（Fig. 28））。これらの土層の重複関係からSD 7040・7050・7055は、金堂基壇土の造成後に掘られ、第2整地土で埋め立てられたことが確定する。（深澤）

SD 7040から、瓦が多量に出土した（Fig. 50～64、PL. 38～44）。これらの瓦は、溝と土層の重複関係から、金堂で所用するべく調達された瓦であった蓋然性が極めて高い。

1は、3Bb。丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好にみられる。接合方法は片柄形a（第Ⅲ章第1節、Fig. 158参照）。内面接合粘土はほぼ全て残り（Fig. 51-1）、ヨコ方向のナデツケがある。内面接合粘土と丸瓦の接する部分には、布目圧痕の転写をわずかにみとめる。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は、ヨコナデを中心とした不定方向ナデで、さらに下半部周縁に沿ってナデ。瓦当裏面の筒部凹面に沿う部分が、一部溝状にくぼむ。瓦当側面の調整はナデ。外縁上に範端痕を残す。

2は、3C。丸瓦も含めて完形。丸瓦全長38.2 cm、筒部厚さ1.5～1.8 cm、玉縁長5.0 cm、幅20.2 cm、厚さ1.1～2.1 cm。焼成は軟質で全体的に摩滅。外縁上に範端痕はない。狭端から約5.1 cmの位置に径0.9 cmの釘穴をあける。凸面から凹面方向の焼成前穿孔である。筒部凸面の調整は摩滅・剝離により不明。凹面は布目圧痕をタテ方向にナデ消す。玉縁凹面の調整は摩滅により不明。玉縁は筒部と別作りで、玉縁基部凹面の粘土を筒部狭端へナデつけた後、ナデツケ部分の一部にヨコ方向のヘラケズリを施す（Fig. 51-2）。側面は分割破面と分割断面をともにヘラケズリするが、分割断面と破面の境はわずかに段差、もしくは線となって残る。凹面側縁には幅5 mmほどの面取りあり。

3は、206A。全長36.7 cm。直線顎。焼成は軟質で全体的に摩滅し、瓦当面の調整は不明瞭である。唐草文中央にピン穴あり。文様の輪郭にケガキ線はみとめない。凹面、凸面、側面ともに狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。凹面は瓦当付近をさらにヨコナデ。凸面は瓦当付近をさらにヨコ方向のヘラケ

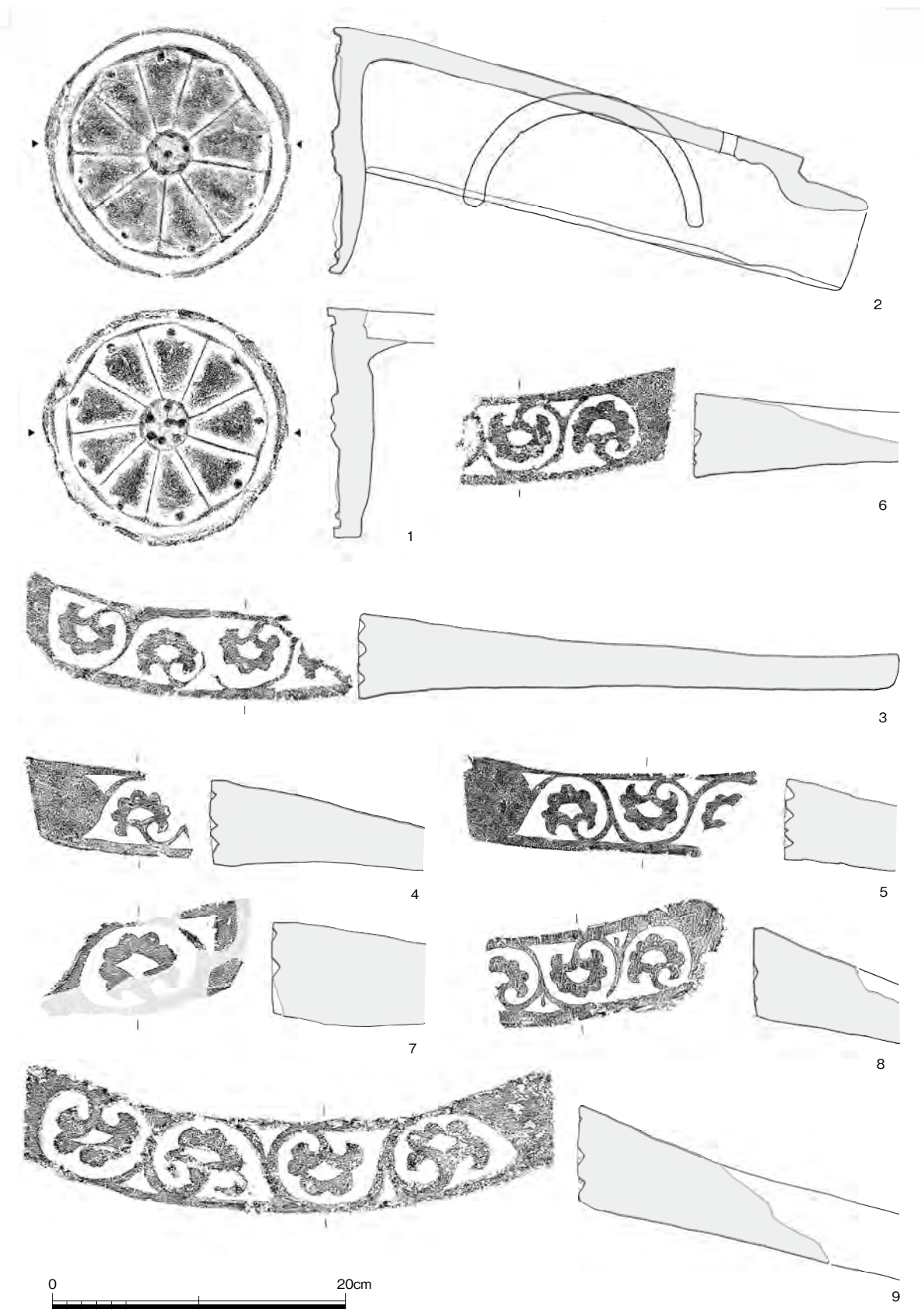


Fig. 50 SD 7040 軒丸瓦・軒平瓦 (1 : 4)



ズリ後、ナデ。

4・5は、206 C。4は直線顎。瓦当面をヨコナデ後に施文。唐草文中央にピン穴、文様の輪郭にケガキ線あり。粘土板合わせ目がみられる（S型〔用語は佐原1972に準拠〕、Fig.51-4、瓦当が下）。凹面はタテ方向のヘラケズリ後、ヨコナデ。とくに、瓦当から6cmほどは丁寧にヨコナデ。布目圧痕はみられない。凸面はほぼタテ方向のヘラケズリのみ。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。5は直線顎。瓦当面はヨコナデ後に施文。唐草文中央にピン穴、文様の輪郭にケガキ線あり。凹面には枠板痕あり（幅4cm）。凹面、凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ後、瓦当付近をヨコナデ。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。



6は、206 D。直線顎。焼成は軟質で、全体的に摩滅。瓦当面の調整は不明瞭。唐草文中央にピン穴あり。文様の輪郭にかすかにケガキ線が残る。粘土板合わせ目がみられる（Z型）。凸面・側面はタテ方向のヘラケズリ。凹面は摩滅により不明瞭だが、瓦当付近はヨコナデか。



7は、206か207。直線顎。瓦当面は施文前にヨコナデ。唐草文中央にピン穴はあるが、文様の輪郭にケガキ線はみとめられない。凹面はタテ方向のヘラケズリ後、粗くヨコナデ。布目圧痕は残らない。凸面はタテ方向のヘラケズリ後、両側面からそれぞれ幅4cmほど残してヨコナデ。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。

8は、207 A。直線顎。瓦当面はヨコナデ後に施文。唐草文中央にピン穴あり。文様の輪郭にはケガキ線があるが、蕾の表現はフリーハンドか。右隅の三角窓はケガキ線のみで彫り残される（Fig.51-8）。凹面は欠損するが、少なくとも瓦当付近はヨコナデ。凹面側縁は1.2~2cmほど面取り。凸面はヨコ方向のヘラケズリ。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。



9は、210 A。直線顎。焼成は軟質で全体に摩滅。瓦当面の調整は不明瞭。ピン穴、ケガキ線はない。凹面、凸面、側面はいずれも狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。凹面は瓦当付近をさらにヨコ方向のヘラケズリで調整する。凸面は瓦当付近をさらにヨコナデか。凹面側縁は幅5mmほど面取り。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、9点出土している。（中川）

Fig.51 SD 7040 軒丸瓦・軒平瓦  
細部

次に、丸瓦・平瓦を報告する。丸瓦の総出土量は30.4kgである。諸特徴から、すべて『至宝』における2IB型式に相当し、飛鳥前・中期に属する。

丸瓦の属性は模骨、布、粘土素材、タタキ、当て具、筒部凸面調整、玉縁接合、玉縁凹凸面調整、分割、筒部・玉縁の側面・側縁調整、胎土、焼成、色調に注目した。全て玉縁式で行基式はない。回転ヨコナデの方向は、玉縁側からみた状況を示した。

10は、筒部凸面不定方向のナデ。狭端部から玉縁凸面にかけて時計回りの回転ヨコナデ。広端面はヘラケズリで調整する。側面は分割後にヘラケズリで調整するが広端側に破面が残る。凹面側縁は面取りし部分的にタテナデ（Fig.54-10-1）、凹面広端縁も軽く面取りする。筒部凹面は未調整で糸切り痕跡や粘土板合わせ目が残る（Z型）。凹面玉縁接合部には布目の上からの指頭圧痕がある。玉縁凹面はヨコナデ後、基部を幅広くヘラケズリする（Fig.54-10-2）。

11は、筒部凸面が不定方向のナデ、側縁沿いに板状工具による無文タタキの痕跡がある（Fig.54-11）。玉縁凸面は回転ヨコナデ。広端面はヘラケズリで調整する。側面は分割後にヘラケズリで調整する。筒部凹面側縁を面取り後に凹面広端縁を面取り。凹面は未調整で糸切り痕跡、粘土板合わせ目が残る（Z型）。凹面玉縁接合部には部分的に帯状の窪みがある。玉縁凹面はヨコナデ後、基部、側縁の順でヘラケズリ調整する。

12は、筒部凸面が不定方向のナデ。狭端部から玉縁部凸面にかけては回転ヨコナデを施すが、方向は不明である。広端部は欠損している。側面は分割後にヘラケズリで調整し、筒部凹面側縁は面取りをする。凹面は未調整で糸切り痕跡が残る。玉縁凹面はヨコナデ後、基部と側縁をヘラケズリで調整する。

13は、筒部凸面が摩滅しているが、残存部にはナデ調整が確認できる。玉縁部は欠損しており、広端部も調整不明である。側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁と凹面広端縁は面取り、凹面は未調整で糸切り痕跡が残る。凹面玉縁接合部は帯状に窪み、玉縁凹面基部はヘラケズリで調整する。

14は、筒部凸面が不定方向のナデ。玉縁、狭端部は欠損している。側面、広端面はヘラケズリで調整し、凹面側縁と凹面広端縁は面取りをする。凹面は部分的にナデ調整を施す。

15は、筒部凸面が不定方向のナデだが一部強くタテナデ調整する。玉縁、狭端部は欠損している。広端面はヘラケズリで調整し、筒部側面は分割後に破面をヘラケズリで調整する。凹面側縁と凹面広端縁は面取りがなされていて、凹面は未調整である。

16は、筒部凸面が不定方向のナデ。狭端部から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデを施す。狭端側に凸面側からあけた釘穴がある。玉縁凸面には明確な凹凸がある。筒部側面は分割後にヘラケズリで調整し、凹面側縁は面取りをしている。筒部凹面は未調整で粘土板合わせ目が残る（Z型）。凹面玉縁接合部には断続的な窪みがあり、玉縁凹面はヨコナデ後に基部と側縁を幅広くヘラケズリで調整する。

17は、筒部凸面がヨコナデ主体で一部不定方向のナデ。狭端部から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデで調整する。玉縁凸面には明確な凹凸がある。側面は分割後にヘラケズリ、ナデで調整する。筒部凹面側縁は面取り、凹面玉縁接合部には帯状の窪みがある（Fig.54-17）。凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ後に側縁、基部の順にヘラケズリで調整する。

18は、筒部凸面が不定方向のナデで、工具の痕跡が残る。狭端部から玉縁凸面にかけては時計回り



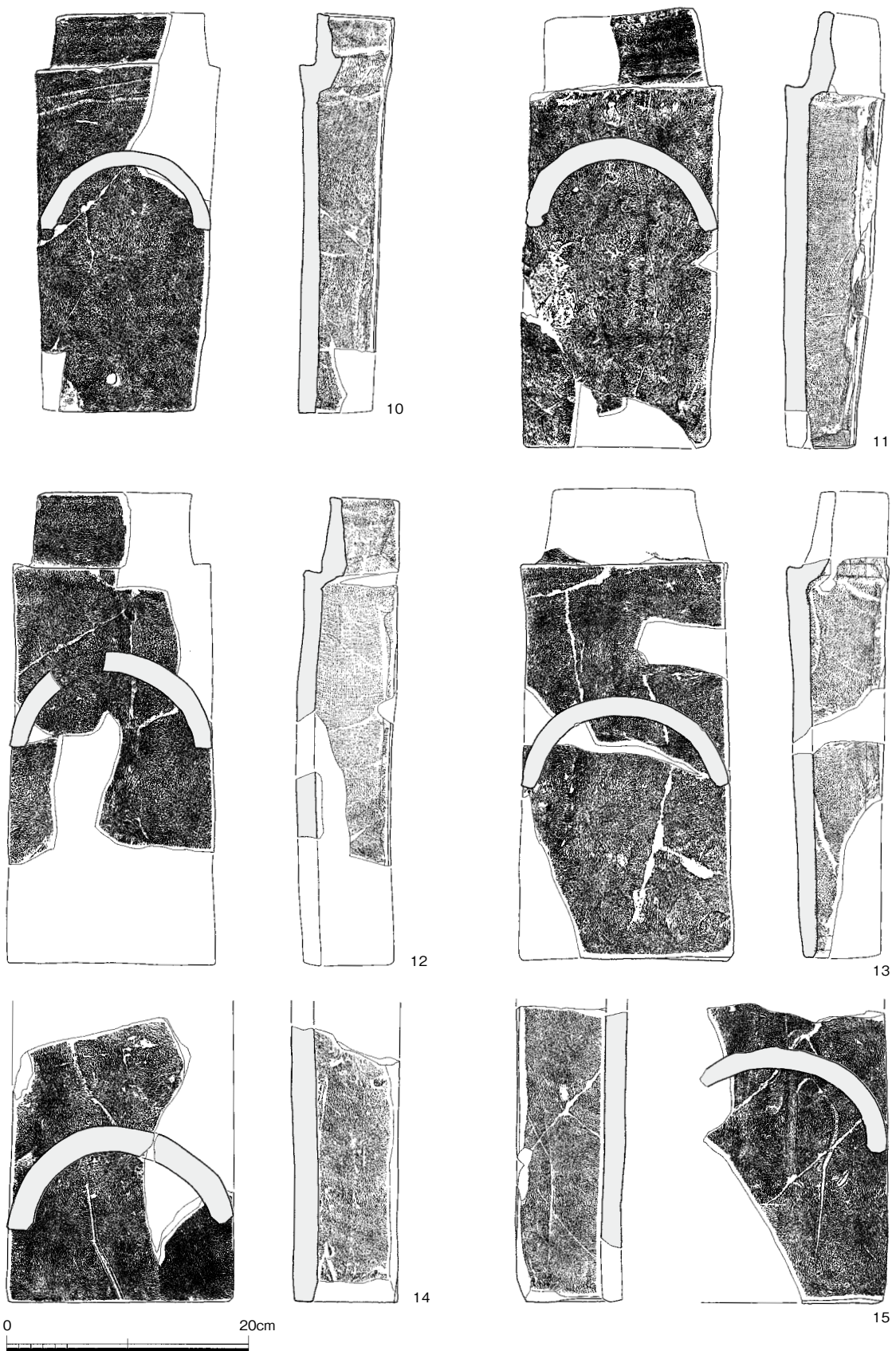


Fig. 52 SD7040 丸瓦1 (1:5)

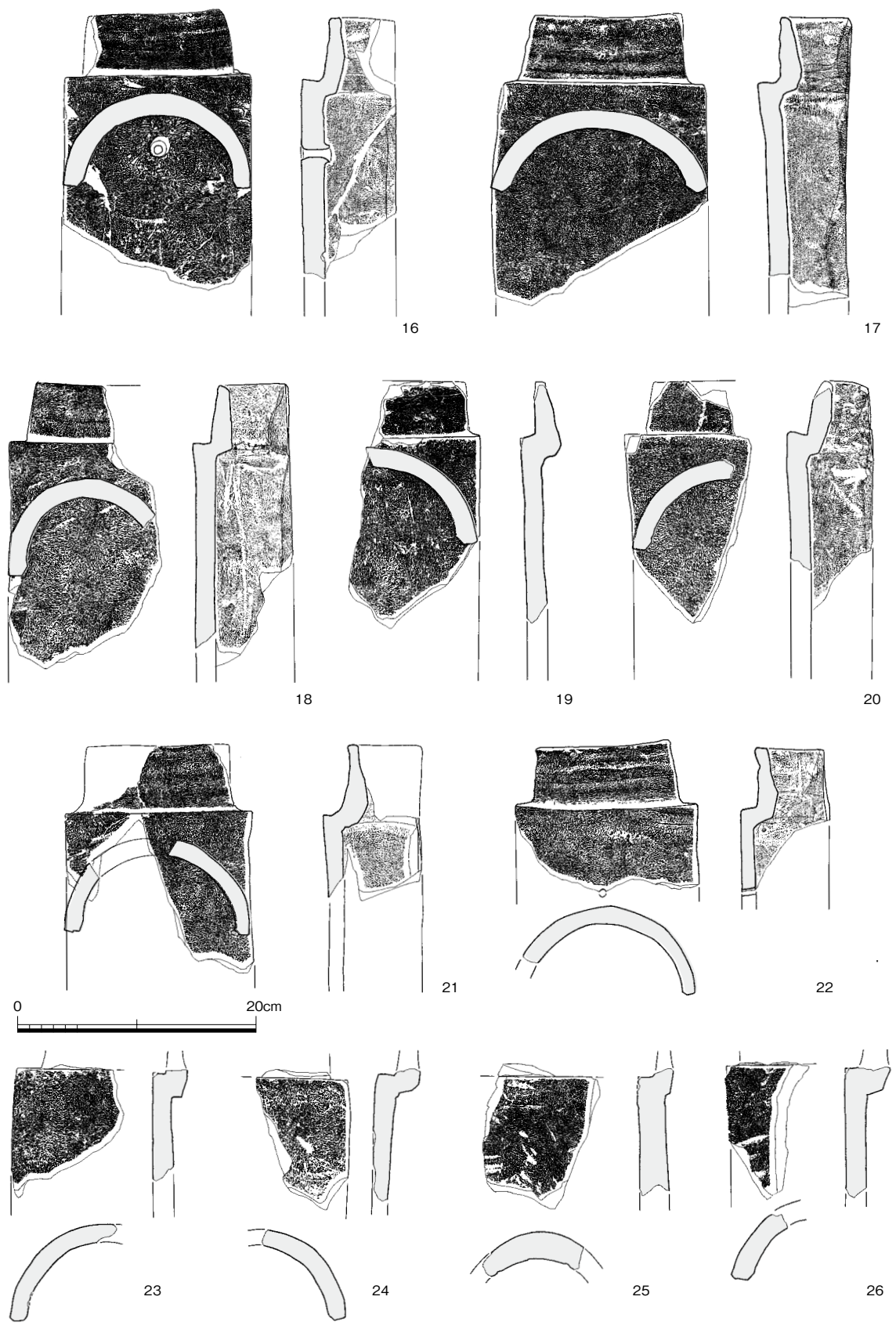


Fig. 53 SD7040 丸瓦 2 (1 : 5)



Fig. 54 SD 7040 丸瓦細部

の回転ヨコナデで調整する。側面はヘラケズリ、筒部凹面側縁は面取り、凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ後、凹面側縁のみを幅広くヘラケズリ、基部は未調整である (Fig. 54 - 18)。

19は、筒部凸面が不定方向のナデ。凸面狭端部から玉縁にかけて回転ヨコナデで調整する。側面はヘラケズリ、筒部凹面側縁は面取り、凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ、側縁と基部はヘラケズリで調整する。

20は、筒部凸面が摩滅し調整不明である。側面はヘラケズリ、凹面側縁は面取り、筒部凹面は未調整、



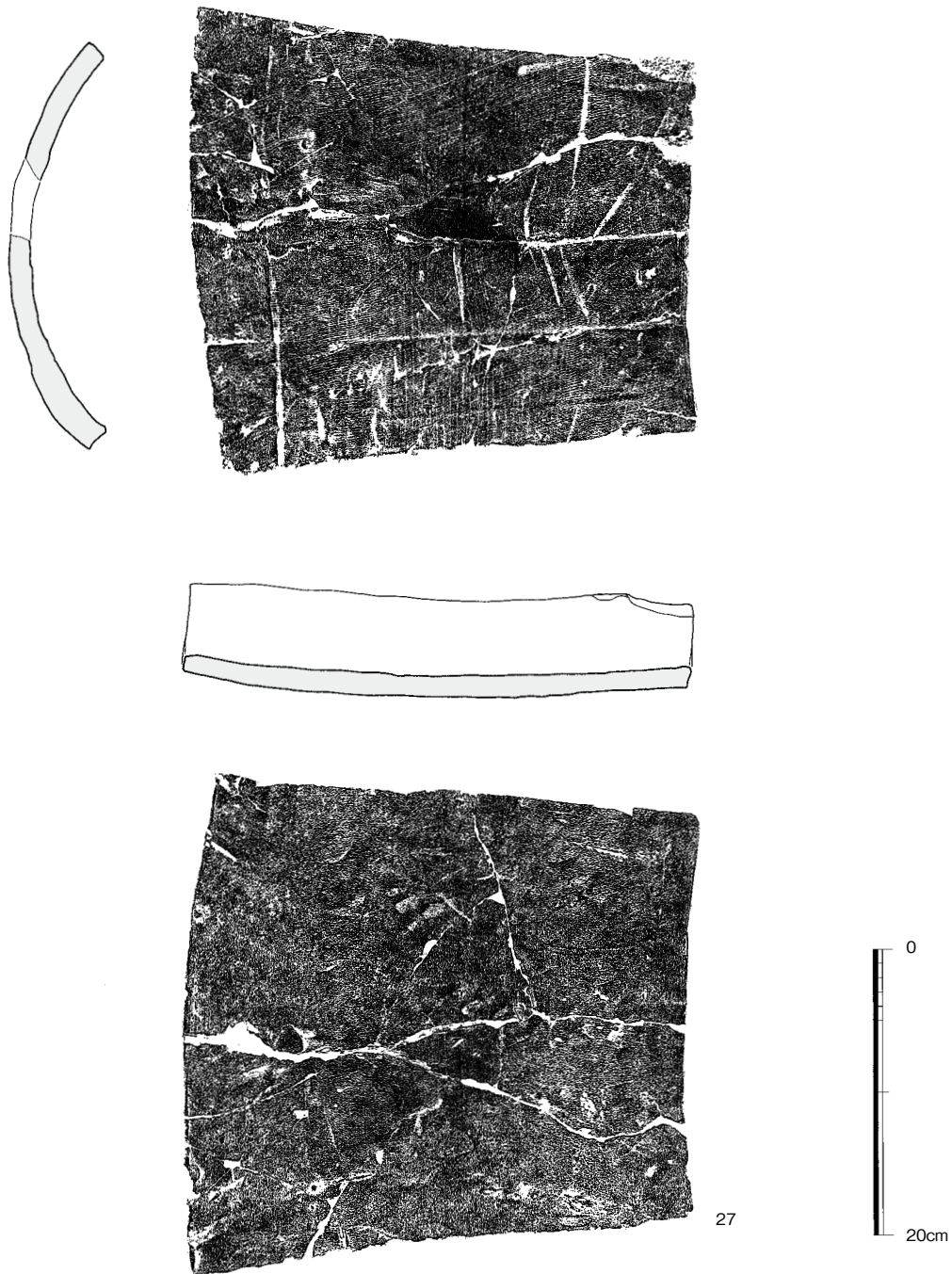


Fig. 55 SD7040 平瓦1 (1:5)

玉縁凹面側縁と基部はヘラケズリで調整する。

21は、筒部凸面がヨコナデ。狭端部から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデで調整する。側面は分割後にヘラケズリ、筒部側縁は面取り、凹面は未調整である。凹面玉縁接合部には帯状の窪みがある。玉縁凹面はヨコナデ後、基部と側縁をヘラケズリで調整する。

22は、凸面狭端部から玉縁にかけて回転ヨコナデ。玉縁凸面には明確な凹凸がある。側面は分割後ケズリ、筒部凹面側縁は面取り、凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ後に基部と側縁を幅広くヘ

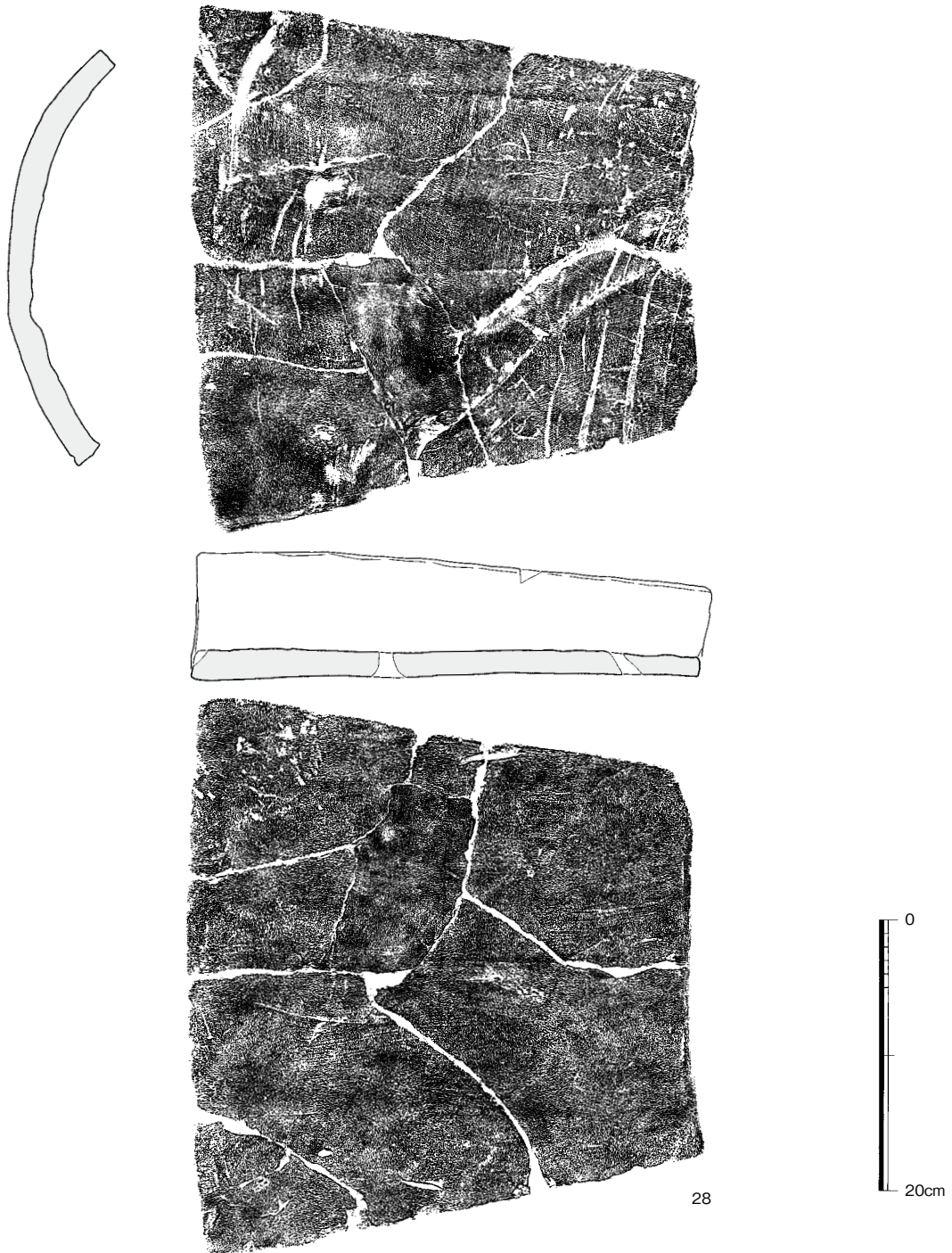


Fig. 56 SD7040 平瓦2 (1:5)

ラケズリ調整する。筒部の破断面に釘穴の痕跡が残る (Fig. 54 - 22)。

23～26は、凸面が摩滅し調整は不明である。側面はヘラケズリ、玉縁凹面基部も幅広くヘラケズリで調整する。

平瓦の総出土量は98.5kgである。粘土板の接合は、狭端側からみた状況を示した。

粘土紐の痕跡は一切みられず、凹面には糸切り痕跡と粘土板合わせ目、側面に分割痕跡があることからすべて粘土板桶巻作りである。『至宝』の1IA型式に属する瓦の凹面の調整には違いがあり、1類：



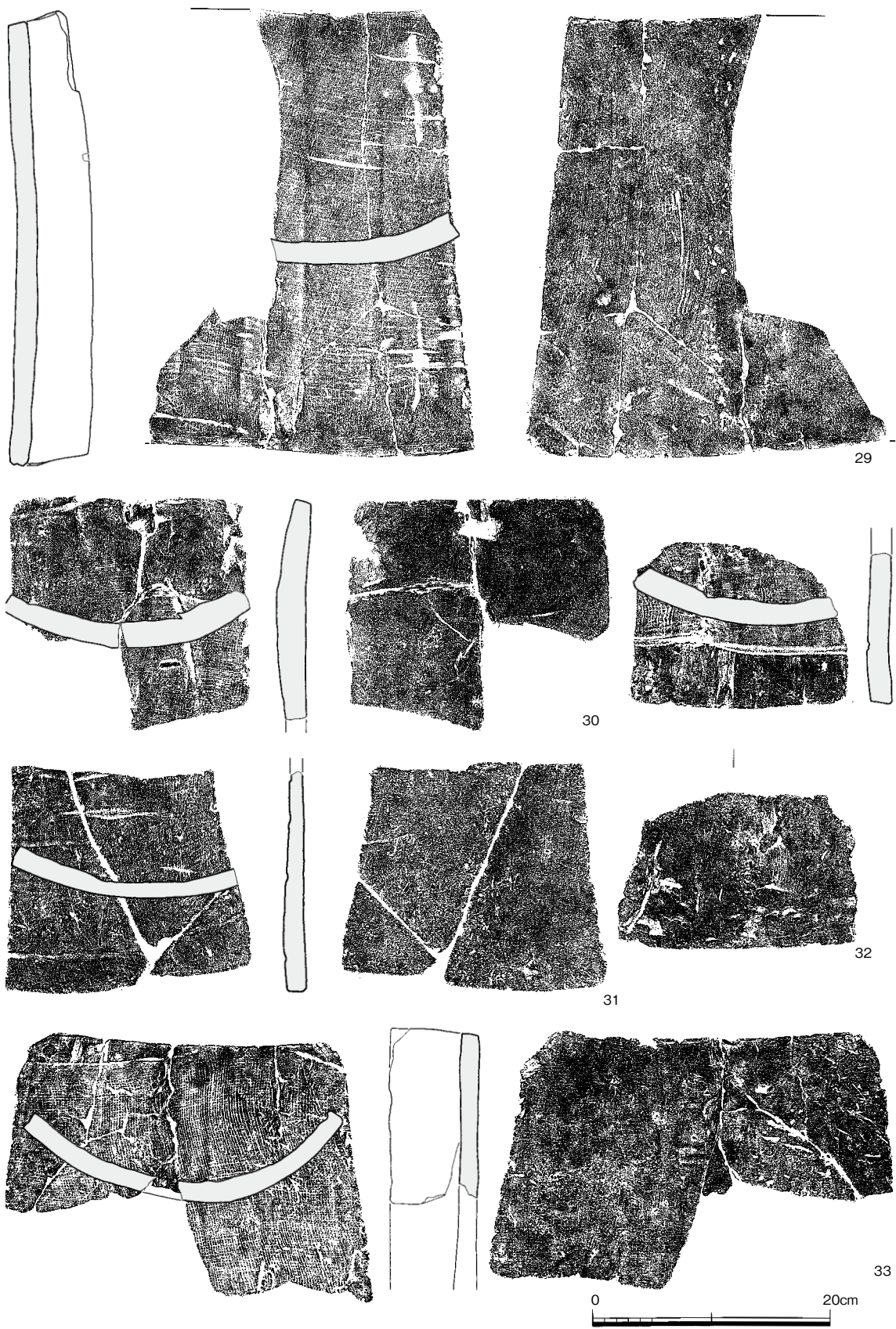


Fig. 57 SD7040 平瓦3 (1:5)

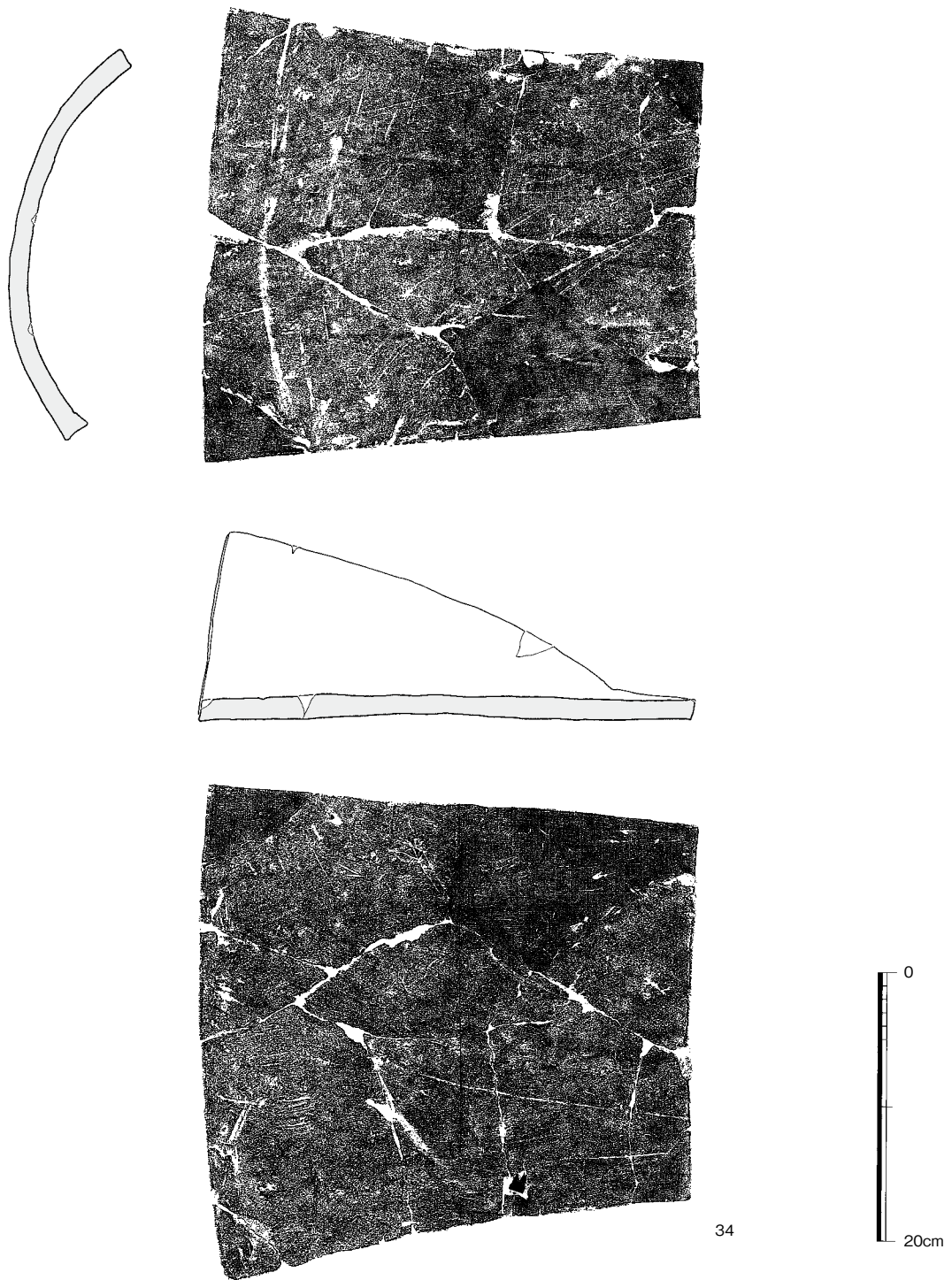


Fig. 58 SD 7040 平瓦4 (1:5)

未調整の例、2類：一部タテナデをほどこす例、3類：強いタテナデをおこなう例の3つに分類できる。以下この順にしたがって記述する。すべて飛鳥前期に属する。

**1 I A型式1類** 27は、凸面タテナデ。狭端縁は幅1cmほど、広端縁は幅2cmほどヨコナデする。広端面、狭端面はヨコナデをおこなう。側面は分割後未調整である。凹面は未調整で、杵板痕跡、粘土板合わせ目がみえる（Z型）。狭端縁は幅1cmほどヨコナデ、広端から5cmのところ布端が残り、



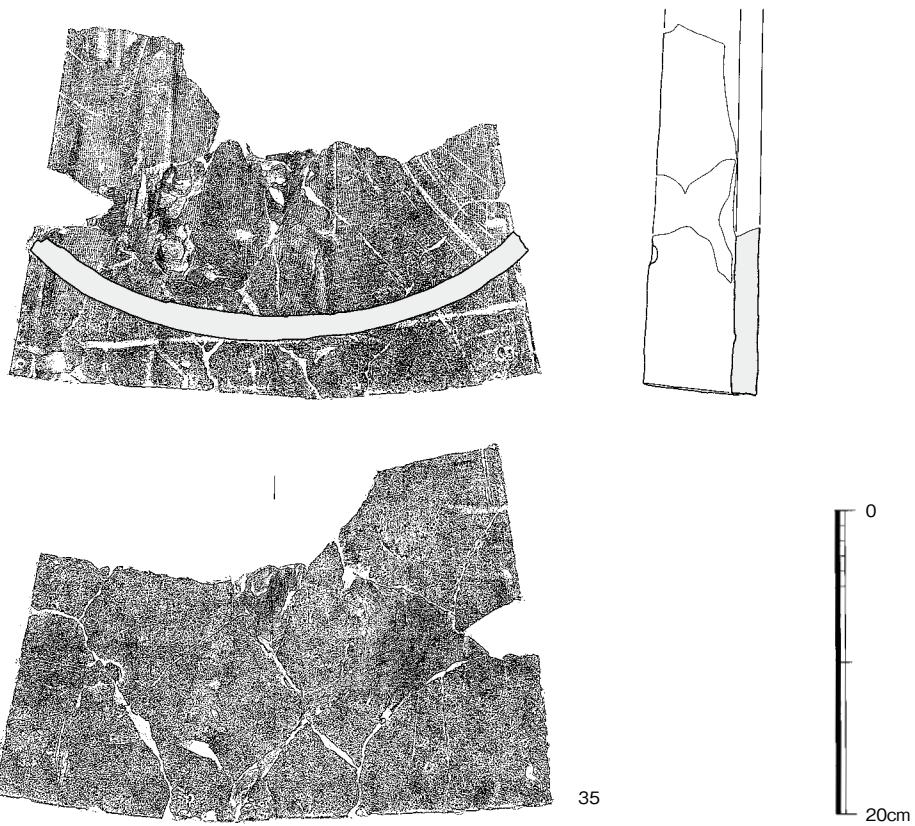


Fig. 59 SD7040 平瓦5 (1:5)

凹面側縁には分割界点がある。

28は、凸面タテナデ。狭端縁を幅3cmほどヨコナデで調整する。狭端面、広端面はヘラケズリで調整する。側面は分割後未調整である。凹面は杵板痕跡が残り、広端側隅を一部ヘラケズリで調整する。

29は、凸面がタテナデ。狭端沿いが幅2cmほどヨコナデ、広端面はヘラケズリ、狭端面はヘラケズリ後ヨコナデ、側面は分割後未調整である (Fig. 64 - 29)。凹面には杵板痕跡があり、広端沿いに布



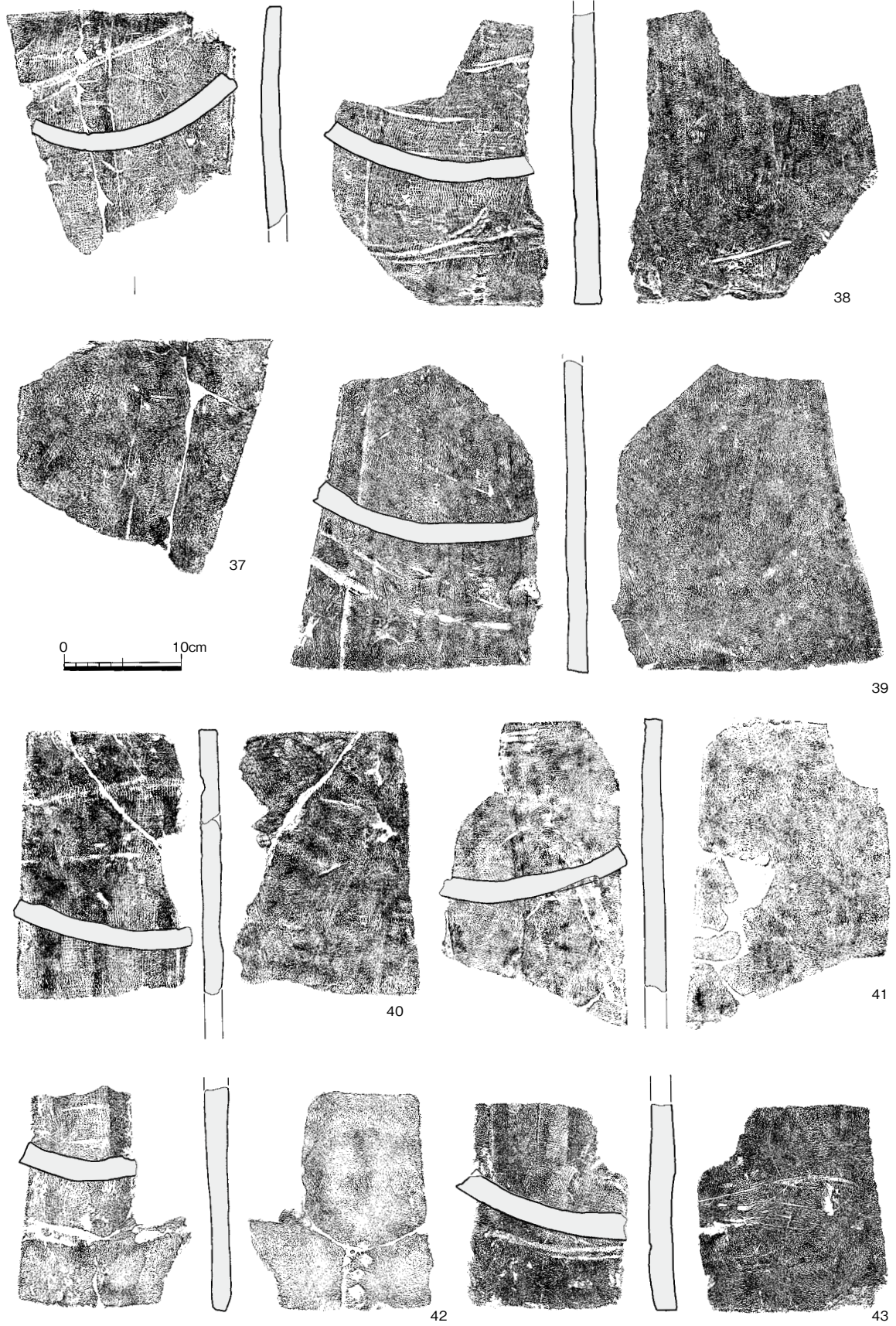


Fig. 60 SD7040 平瓦6 (1:5)

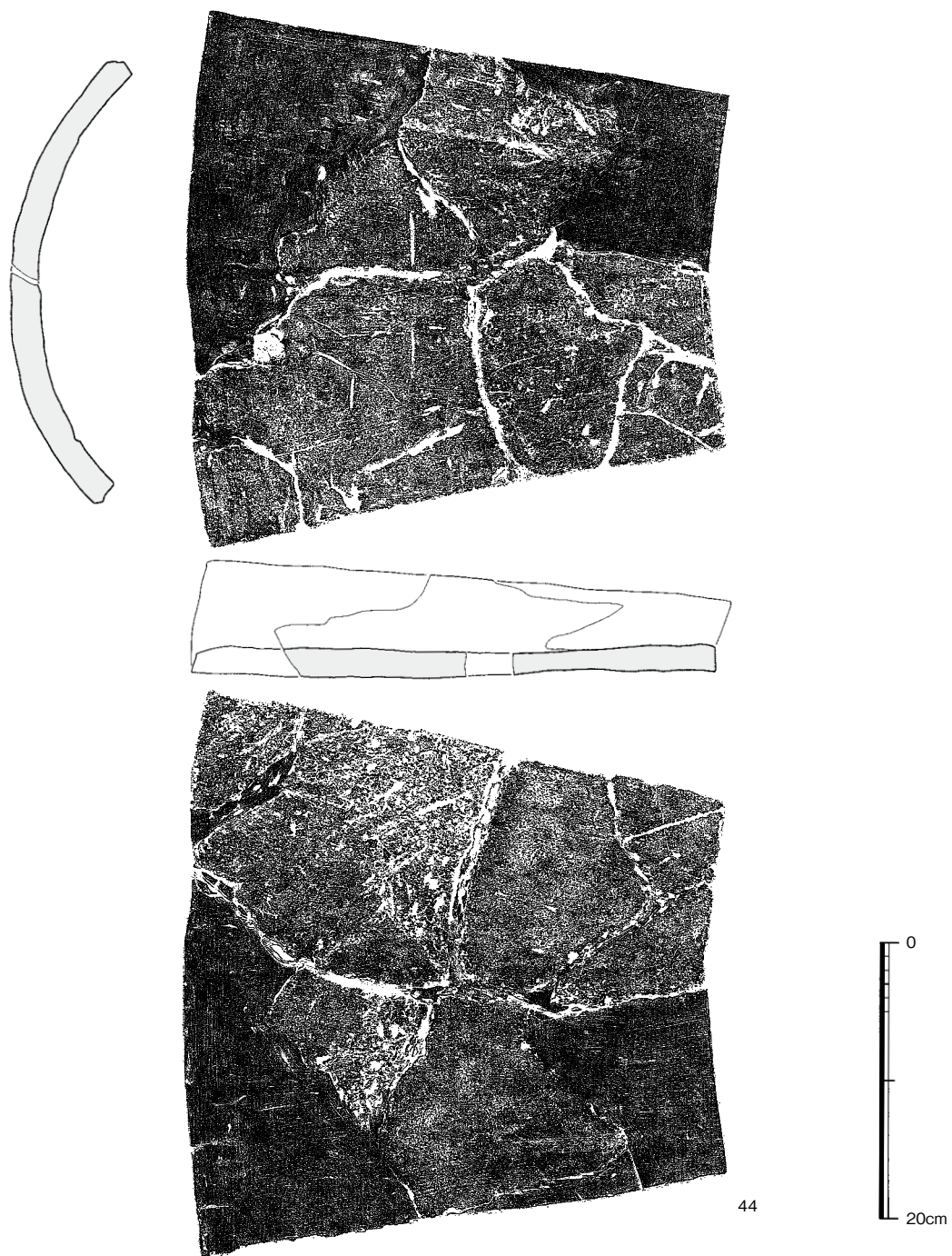


Fig. 61 SD7040 平瓦7 (1:5)

端が残る。広端縁は幅1cmほどヨコナデを施す。凹面右側縁沿いに分割界点があり、分割は界点からずれている。

30は、凸面タテナデ。側面が分割後未調整だが、切り込みは浅い。狭端面はヘラケズリで調整し、凹面には杵板痕跡と粘土板合わせ目が残る（Z型）。狭端側の布目を部分的にナデ消している。

31は、凸面タテナデ。側面が分割後未調整、広端面が調整不明である。凹面には広端より3cmのところ布端痕跡があり、10cmのところ点状の杵板綴紐痕跡がみられる。



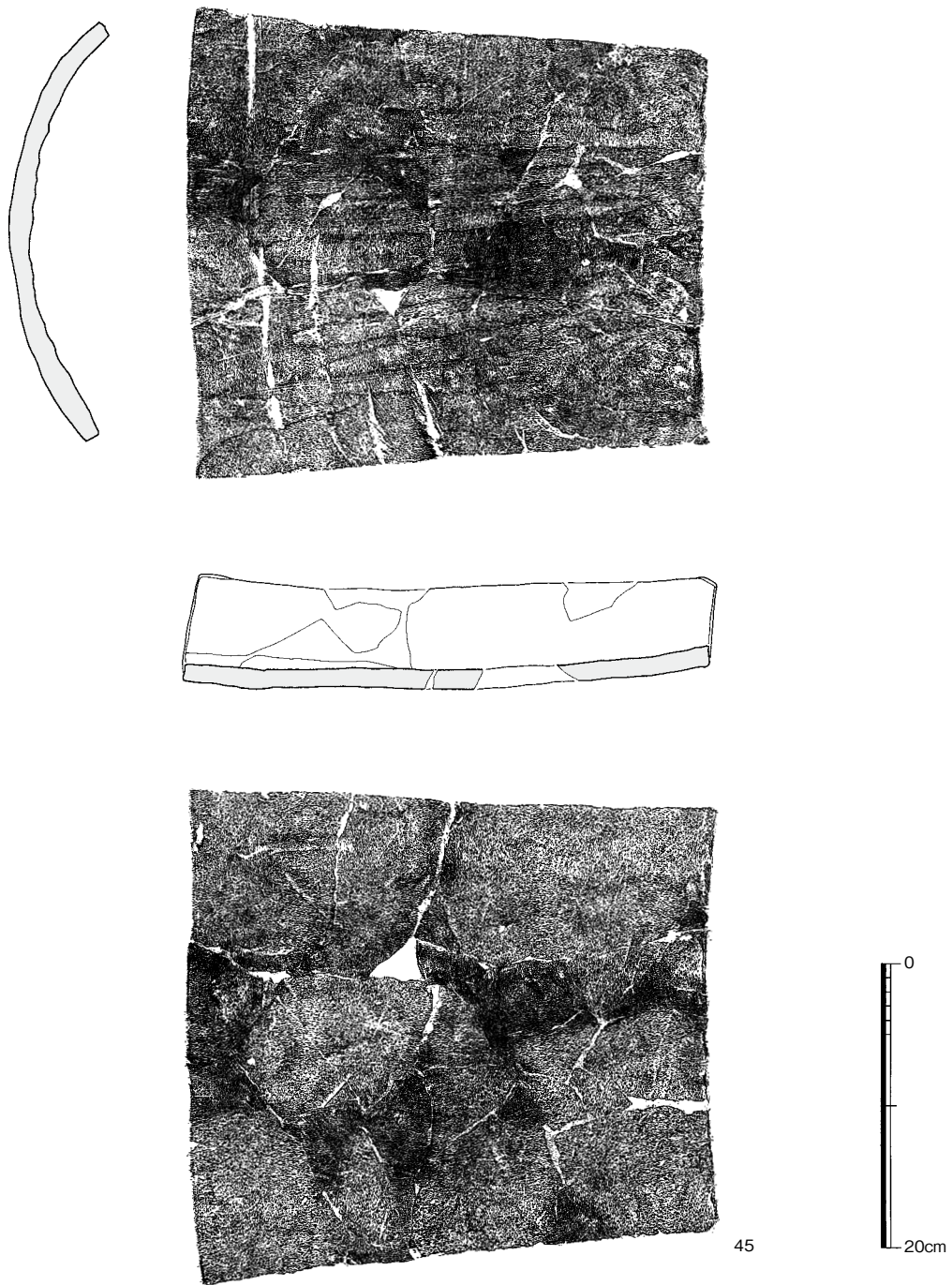


Fig. 62 SD 7040 平瓦 8 (1:5)

32は、凸面タテナデ。側面が分割後未調整、広端面がヘラケズリ調整である。凹面には布綴じ目、粹板、布端痕跡が残る。

33は、凸面タテナデ。狭端面が未調整、側面が分割後未調整である。凹面には布端、粘土板合わせ目（S型）、側縁には分割界点が残る。

37は、凸面タテナデ。狭端沿いを幅5cmほどヨコナデする。狭端面はヘラケズリ、側面は分割後未調整。凹面狭端沿いも幅1cmほどヨコナデする。



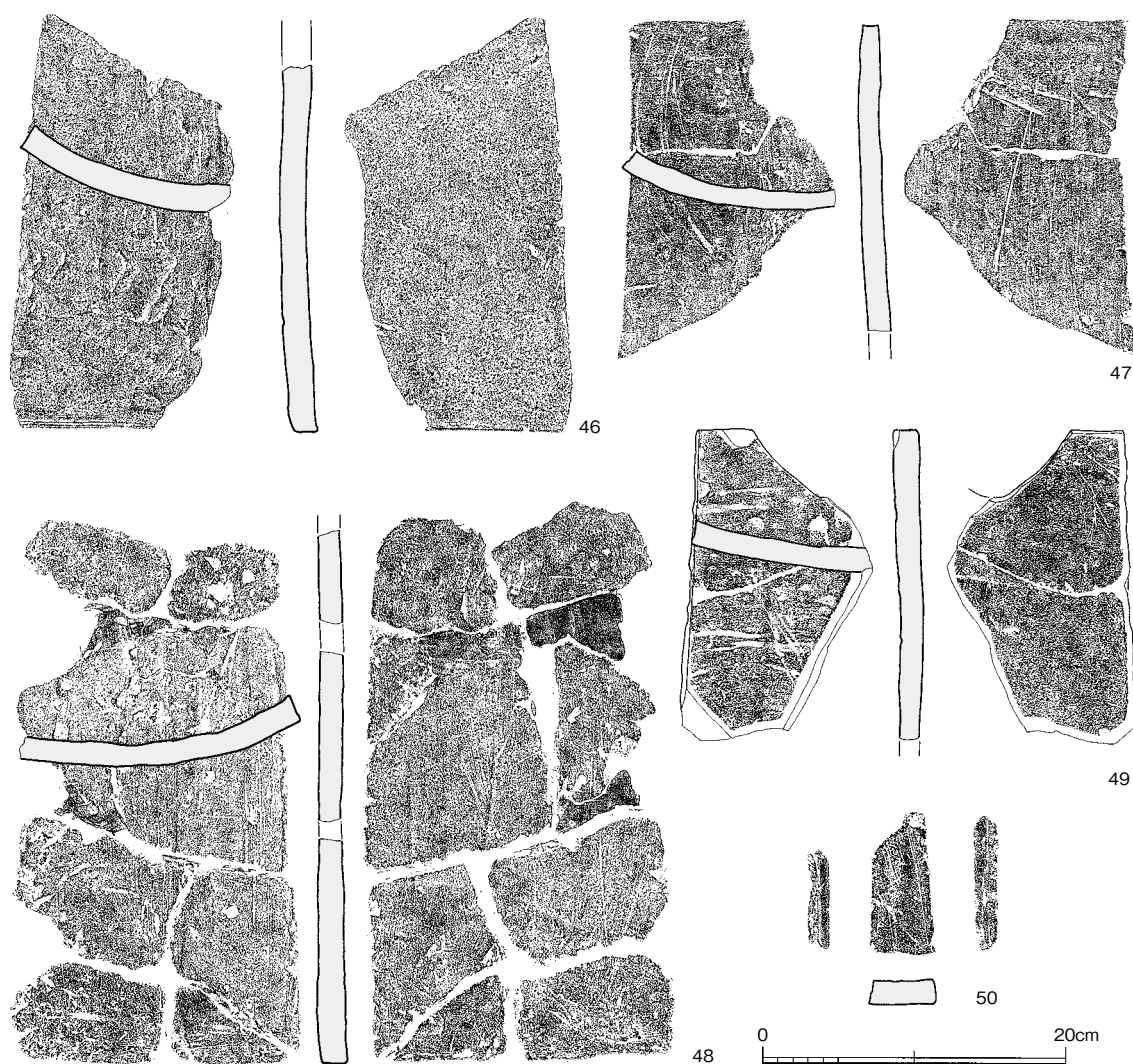


Fig. 63 SD7040 平瓦9・用途不明品 (1:5)

**1 I A型式2類** 34は、凸面がタテナデ。広端沿いは幅2cmほどヨコナデを施す。側面は分割後未調整で (Fig. 64 - 34)、凹面側縁に分割界点が残る。広端面はヨコナデ、狭端面は未調整である。凹面は部分的にタテナデし、凹面広端から幅2cmほどはヨコナデを施す。広端から4~6cmのところ布端がみられる。全体に焼けひずみが激しい。

35は、凸面がタテナデ。広端面はヘラケズリ、側面は分割後未調整である。凹面側縁には分割界点が残る。凹面は部分的にタテナデ調整で、杵板痕跡、布端がみられる。広端縁より10cmほどのところに点状の杵板綴紐痕がある。

36は、凸面タテナデ。狭端縁は幅1cmほどヨコナデ、狭端面はヨコナデ、広端面はヘラケズリ調整である。側面は分割後未調整で、凹面側縁に分割界点がある。凹面は部分的にタテナデし、狭端縁は幅1cmほどヨコナデ。狭端側には布端が残る。この瓦は、当初は布端のある方が広端であったが、分割後に広端の幅を切り詰めるため、新たに切り込みを入れて割り取り、布端のある側を狭端として使用したと考えられる。

38は、凸面タテナデ。側面が分割後未調整である。広端面はヘラケズリで調整し、凹面には布端、

杵板痕跡がある。

39は、凸面タテナデ。広端面がナデ調整、側面が分割後未調整である。凹面には部分的に工具によるナデがあり、広端縁まで達する。広端縁には幅1cmほどのヨコナデがある。

40は、凸面タテナデ。狭端面はヨコナデ、側面が分割後未調整である。凹面側縁に分割界点がある。凹面は部分的にタテナデ、狭端縁から5～6cmのところ帯状の窪みがあり、これより狭端まで布目をナデ消している。

41は、凸面タテナデ。狭端面はヨコナデ、側面は分割後未調整で、凹面側縁に分割界点がある。凹面は部分的にタテナデ、狭端縁はわずかにヨコナデする。破面に、粘土板合わせ目（Z型）が残る。

42は、凸面タテナデ。広端縁を幅2cmほどヨコナデし、側縁は分割後未調整である。凹面は部分的なタテナデで、布端が残る。

43は、凸面タテナデ。広端面がヘラケズリ、側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデを施し、布端が残る。

**1 I A 型式 3 類** 44は、凸面タテナデ。狭端面、広端面はナデ、側面は分割後未調整である。凹面は部分的に強くタテナデする。凹面狭端縁は幅2cmほどヨコナデを施し、凹面広端縁沿いは幅4cmほどのヨコ方向のヘラケズリで調整する。

47は、凸面タテナデ。狭端縁は幅2cmほどヨコナデ、狭端面もヨコナデをする。側面は分割後未調整であり、凹面側縁に分割界点が残る。凹面は部分的に強くタテナデする。

48は、凸面タテナデ。凸面広端縁は幅3cmほどヨコナデ、広端面はヨコナデ調整し、側面は分割後未調整である。凹面は大部分を強くタテナデする。凹面広端縁沿いは幅3cmほどヨコ方向のヘラケズリで調整する。

**1 I B b 型式** 45は、凸面タテナデ。狭端側にわずかに無文のタタキ工具痕跡が残る。狭端面と広端面から凸面広端縁にかけてはヨコナデを施す。側面は片面が分割後未調整、もう一方の面はケズリ調整し破面を残さない（Fig.64 - 45）。凹面広端縁はヨコナデ後に凹面を強くタテナデし、右側縁沿いはヘラケズリで調整する。広端側には布端を残す。飛鳥前期に属する。



29



34



45

Fig.64 SD7040 平瓦細部

46は、凸面タテナデ。側面は分割後、部分的にヘラケズリで調整する。広端面から凹面広端縁にかけてヨコナデを施し、凹面はタテ方向のヘラケズリで調整、一部には布目が残存する。

道具瓦は2点出土した。49は、残片。1IAの平瓦を加工したもの。凸面はタテナデ、端部に不定形の剥りがあり、凹面は布目が残る。飛鳥前期。

50は、最大幅4.6cmの小型品で、一方に向かって幅が減少する。両端は欠損しているため長さは不明。両側面は平瓦と同様、焼成前に切り込みを入れ分割後、未調整。凸面はナデ、凹面は部分的にタテナデ。残長9.4cm、厚さ1.6cm。1IAの平瓦を利用して作成しており、飛鳥前期に属する。(今井) **第2整地土** (Fig.67)

第2整地土は、基本的に黄褐色整地土と名付けられた土層で、調査区のかなり広い範囲に分布する。その範囲は、削平の著しい調査区南端部を除く南北50m、東西30mの範囲であって、金堂を中心とする伽藍中枢域にあり、さらに金堂の北方にも第2整地土が分布する点が注目される。第2整地土の存在が確認できないのは、東側で1-8~15区、西側で2-1~4区の調査区である。なお、第2整地土は瓦を包含する。(深澤)

ラベル名「TS51黄褐色整地土」で丸瓦・平瓦を取り上げているので、次に報告する (Fig.65)。

丸瓦の合計は1.0kgである。1は、筒部凸面不定方向のナデ。狭端沿いは幅2cmほど回転ヨコナデ

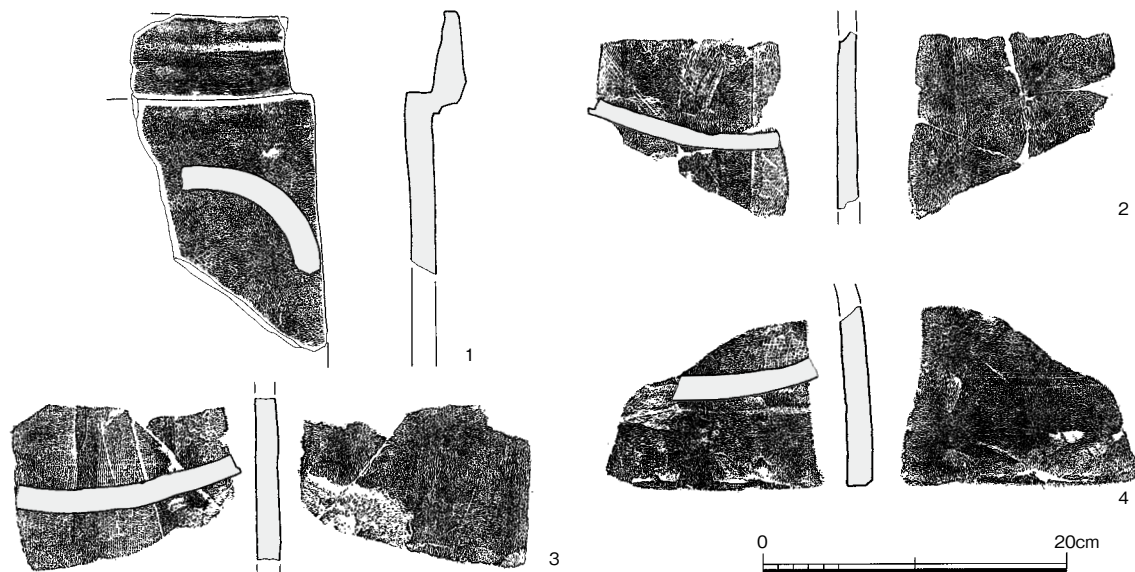


Fig.65 第2整地土 (TS51黄褐色整地土) 丸瓦・平瓦 (1:5)

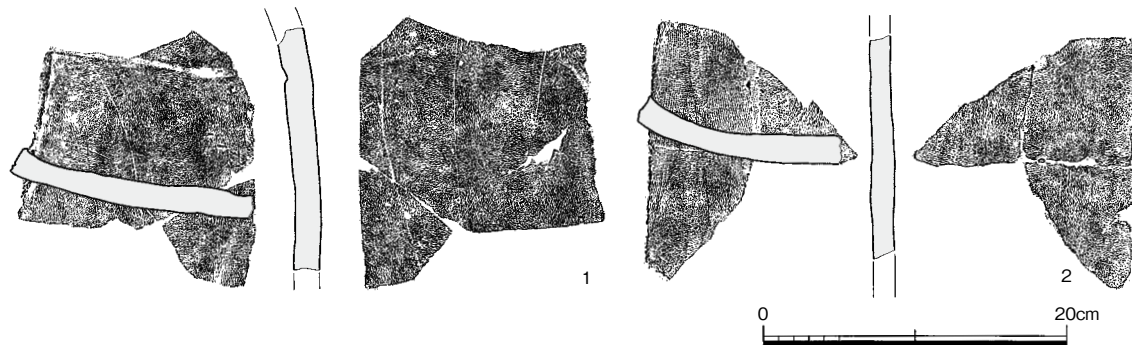


Fig.66 TS51地山面上 平瓦 (1:5)

を施すが、回転方向は不明である。肩から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデを施す。側面はヘラケズリ調整で、凹面側縁は2度面取りをする。筒部凹面は未調整、玉縁凹面はヨコナデ後、側縁と基部を幅広くヘラケズリ調整する。2IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦の合計は3.3kgである。2は、凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。

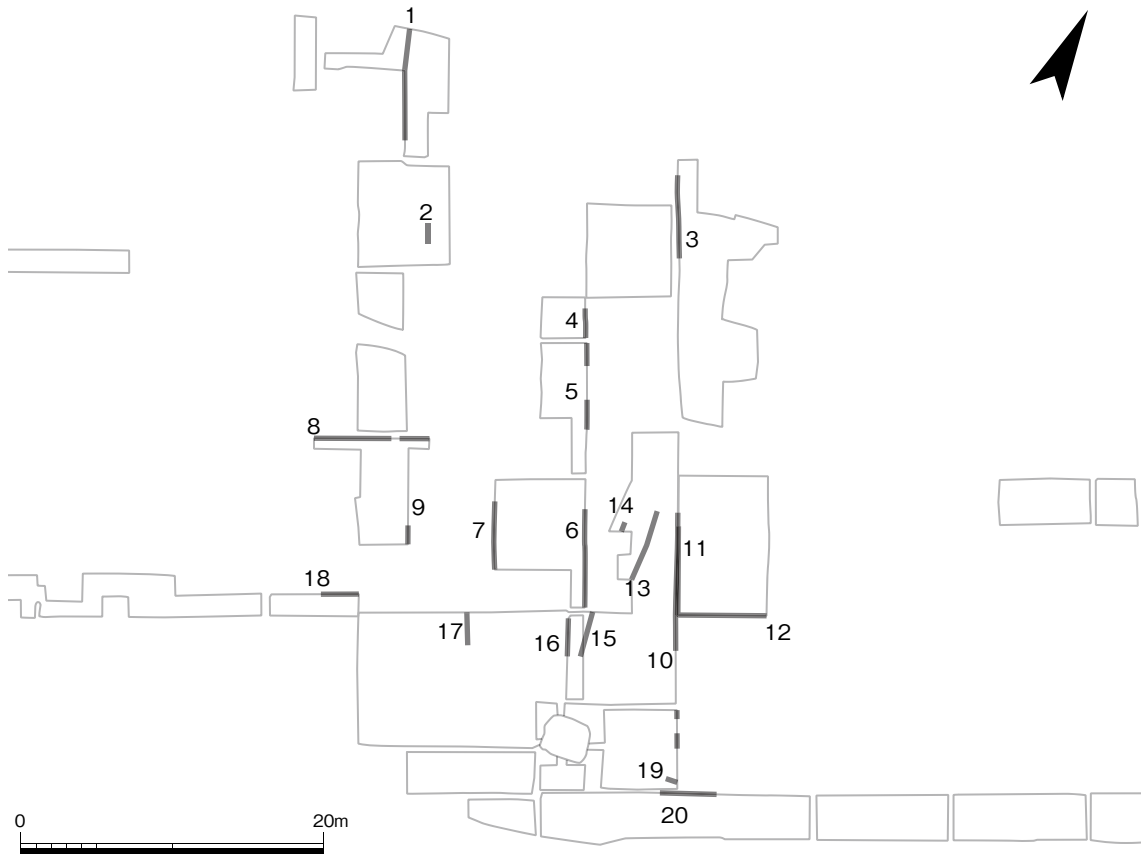


Fig. 67 第2整地土 (1 : 500)

Tab.5 第2整地土の標高値

No.	土層断面位置	第2整地土上面 (m)	第2整地土下端 (m)
1	2-7区西壁面	54.35	53.95
2	2-8区1939北西溝3東壁面	54.35	54.20
3	2-17区西壁面	54.40	54.10
4	2-13区東壁面	54.40	54.30
5	2-14区東壁面	54.35	54.25
6	2-15区東壁面	54.30	53.90
7	2-15区西壁面	54.35	54.00
8	2-11区北壁面	54.25	54.00
9	1-1区東壁面	54.30	54.10
10	1-2・5区東壁面	54.30	53.85
11	2-18区西壁面	54.25	53.90
12	2-18区南壁面	54.20	53.90
13	1-2区1939北溝2東壁面	54.20	53.90
14	1-2区1939北溝2西壁面北側	54.25	53.85
15	1-2区1939北溝2西壁面南側	54.20	53.85
16	2-16区西壁面	54.25	53.95
17	1-2区TS-KA 51ライン畦西壁面	54.25	54.10
18	2-5区北壁面	54.20	53.90
19	1-5区1939東溝南壁面	54.05	53.95
20	1-7区北壁面	54.15	53.85



凹面は部分的にタテナデ調整している。1IA2類、飛鳥前期に属する。

3は、凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。凹面は、部分的にタテナデ。1IA2類。

4は、凸面タテナデ。広端沿いは幅約7cmほどをヨコナデする。広端面はヘラケズリで調整する。側面は欠損しており、凹面は部分的にタテナデする。1IA2類。

またラベル名TS51地山面上としてあげられた瓦がある。第2整地土ではないが、同じ小地区から出土したので、次に報告する（Fig.66）。平瓦だけで、合計6点、1.8kgが出土した。このうち、1と2は凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデ調整する。1IA2類。（今井）

また、金堂基壇にかかわる版築土と第2整地土との関係についてここで述べておく。2-13・14区東壁面図（Fig.36）、2-11区北壁面図（Fig.24）では、第2整地土が基壇周縁部ばかりか中央部にもおよんだことになっている。図面どおりに理解すれば、地ならし後、掘込地業をおこない、さらに基壇土の積み上げを開始するが、不可解にもこの積み上げ作業を中断して、この全面を平坦に整地するといった作業工程を想定しなければならない。しかし2-17区西壁面実測図に整地土が「土壇の築成土とよく似ている」とする注記に注目して、基壇中央部の整地土が版築土であったと考えれば、金堂基壇積み上げ後に整地をおこなったと理解することが可能になる。この立場にたつて、SD7040・SD7050・SD7055は金堂建設時の基壇周りの排水溝であったのであり、さらにSD7040の多量の瓦は金堂で不要になって投棄された瓦と理解でき、様々な問題所見が整合する。そこで本報告では、基壇上の整地土を版築土であったと考える。つまり基壇の積み上げを途中で止めることなく続行し、この基壇を構築し金堂で不要になった瓦を排水用のこのSD7040に集中投棄した。それから第2整地土で基壇周囲を埋め立てて、SD7040などを覆ったとの作業工程を推定する。この推定は、基壇版築土が小片の瓦をわずかしか含まないという遺物の出土状況とも整合する。（深澤）

#### 塔基壇と掘込地業（SX7000）（PL.20）

現在地上には巨大な塔心礎がある。しかし塔にかかわる基壇外装や礎石等は、本調査によっても検出されなかった。

塔心礎の周囲下層では塔基壇掘込地業を検出している。掘込地業は、北西隅（1-2区）および東（1-2・5区）・西（1-2・3区）・北（1-2区・2-16区）の3辺で確認した（Fig.68）。南東隅も1-2区では後世の攪乱がかなりはげしく遺構は残存しない。また南側は、後世の攪乱が著しく不明である。

掘込地業北肩は、金堂掘込地業南肩部から、東西中央位置で8.90m南、また金堂の南西隅と南東隅を機械的に結んだ線から南に8.25mの位置にあって、塔基壇掘込地業の東西長は、中央部で15.90mである。南側は後世の攪乱のため不明であるが、南北長は東辺部で北肩から南に8.5m残存する。なお基壇や基壇外装等の痕跡が全く遺存していない状況は金堂と同じであり、基壇そのものの平面規模はわからない。

塔基壇の掘込地業は、1-2・5区東壁（Fig.43）、や2-16区西壁（Fig.39）の調査成果から、第2整地土を掘り込んでいる事実が判明している。そしてこの第2整地土を介し、「金堂基壇の掘込地業→第2整地→塔基壇の掘込地業」の順序で作業がなされたことが確定する。これは、SD7040・SD

塔基壇掘込地業の規模

位置	規模 (m)	備考
東西 (北)	15.90	東辺は推定位置を計測
東西 (中央)	15.90	全長
南北 (東)	8.50	北辺推定位置からの残存長
南北 (西)	6.45	北辺からの残存長



Fig.68 塔基壇掘込地業 (1 : 500)

Tab.6 塔基壇掘込地業の標高値

N o.	土層断面位置	掘込地業肩 (m)	地山肩 (m)	掘込地業底 (m)	版築土 上面 (m)	版築土 下面 (m)	整地土 上面 (m)	整地土 下端 (m)	地山上面 (m)	地山計測位置
1	1-2区1939北溝 2西壁面南側	54.15	53.95	53.90	54.15	53.85	54.20	53.85	53.95	第2整地土下端、第1整地面
2	2-16区西壁面	54.20	54.05	53.85	54.20	53.85	54.25	53.95	54.05	第2整地土下端、第1整地面
3	1-2区南壁面東側	-	-	-	54.25	53.85	-	-	53.85	版築土下端、掘込地業底
4	1-2区TS-KA 51ライン畦西壁面	-	-	-	54.30	54.10	54.25	54.10	54.10	第2整地土下端、第1整地面
5	1-2区1939西溝 南壁面	-	54.00	53.80	54.20	53.80	-	-	54.05	
6	1-2区南壁面西側	-	-	-	54.20	53.90	-	-	54.00	
7	1-2・3・6区50 ライン東壁面	-	-	-	54.10	53.85	-	-	53.85	版築土下端、掘込地業底
8	1-5区1939東溝 南壁面	54.00	53.95	53.80	54.00	53.80	54.05	53.95	53.95	第2整地土下端、第1整地面
9	1-7区北壁面	54.15	-	53.85	54.15	53.85	54.15	53.85	53.85	第2整地土下端、第1整地面
10	1-3区南壁面	-	-	-	54.10	53.95	-	-	53.95	版築土下端、掘込地業底

※6・7は報告書未掲載



Fig. 69 塔心礎下層の状況

7050・SD7055の状況とも良く整合する。掘込地業の掘り下げは、第2整地面から地山に達するまでなされている。1-5区1939東溝南壁面 (Fig. 30)、2-16区西壁面 (Fig. 39) でみれば、第2整地土の厚さに加えて、さらに地山も20cm程度掘削している。掘込地業からの版築は第2整地面上までつき固めており、6層程度を確認できる。版築土は灰褐色や黄褐色の砂質土であり、1層の厚さは5~10cm程度である。また、掘込地業底の標高は53.80~53.90mであり、金堂地業底と大きな差はない (Fig. 68、Tab. 6)。この事実は、塔基壇の掘込地業の深さが、金堂基壇の地表下の版築土にほぼ相当する厚さであったことを示している。(深澤)

**塔心礎 (SX 7020)** (Fig. 70、PL. 22~24) 長軸で3.14m、短軸2.63mを測る巨大なもので、全体的にみると直方体に近い形状である。高さについては

1.36m以上あることを確認している。北西部には後世に楔を入れて一回り小さくした痕跡をとどめており、さらに、その後に南西部分を大きく斜めに打ち欠いているが、上面加工部分は比較的残りがよい。平たい自然面を多少加工して水平に近い面を広く確保したのち、そのほぼ中央をまず四角く一段彫り下げている。その一辺は1.26~1.32mで、深さは5cm前後を測り、底面に敲打痕をよくとどめる。その後、中央部分に心柱穴とその四方にとりつく添木穴を同時に彫り込んである。ただし、添木穴の突出部を除いた心柱の輪郭は円形というより方形であり、方形の四隅に不正円形の添木穴を付加した形になっている。心柱穴の一辺は72cmなのに対して、添木穴は直径36cmとちょうど2分の1の長さになっている。ちなみに、一段下げた方形の一辺は添木穴径の3.5倍という関係である。この四角い面には、その北東側に幅、深さともに2~3cmほどの直線状の削り込みがみられるが、後世のものであろう。なお、露出している範囲においてはこの心礎には舍利孔は確認できない。(高橋)

**塔心礎の石材** SX 7020の石材は、弱片麻状中粒黒雲母花崗岩である。全体としてほぼ等粒状組織を示す。おもな造岩鉱物は石英、長石、黒雲母で、各大きさはほぼ3mm前後である。ただし長石にはごく少量とはいえ1cm大に達する大型粒が散在する。これらの鉱物以外では、1mm以下の赤色透明な石榴石が、少量散在する。これら各鉱物は、一定方向に配列する傾向を示している。

この岩石は、付近一帯に分布する領家花崗岩類に属す。したがってこの地域においてはごく一般的に産出する花崗岩である。ただし一部加工や損傷を受けているが、自然面のあり方からみて、露頭の石材を切り出したのではなく、転石を利用したと推定される。(肥塚)

**塔基壇掘込地業内の版築穴 (SX 7030)** (PL. 25-1) 1-2区で塔心礎の2m北に位置する (Fig. 17・38)。東西2.1m、南北2.2mで、深さは現状で1m。東北隅と西北隅が丸い方形を呈する。こ



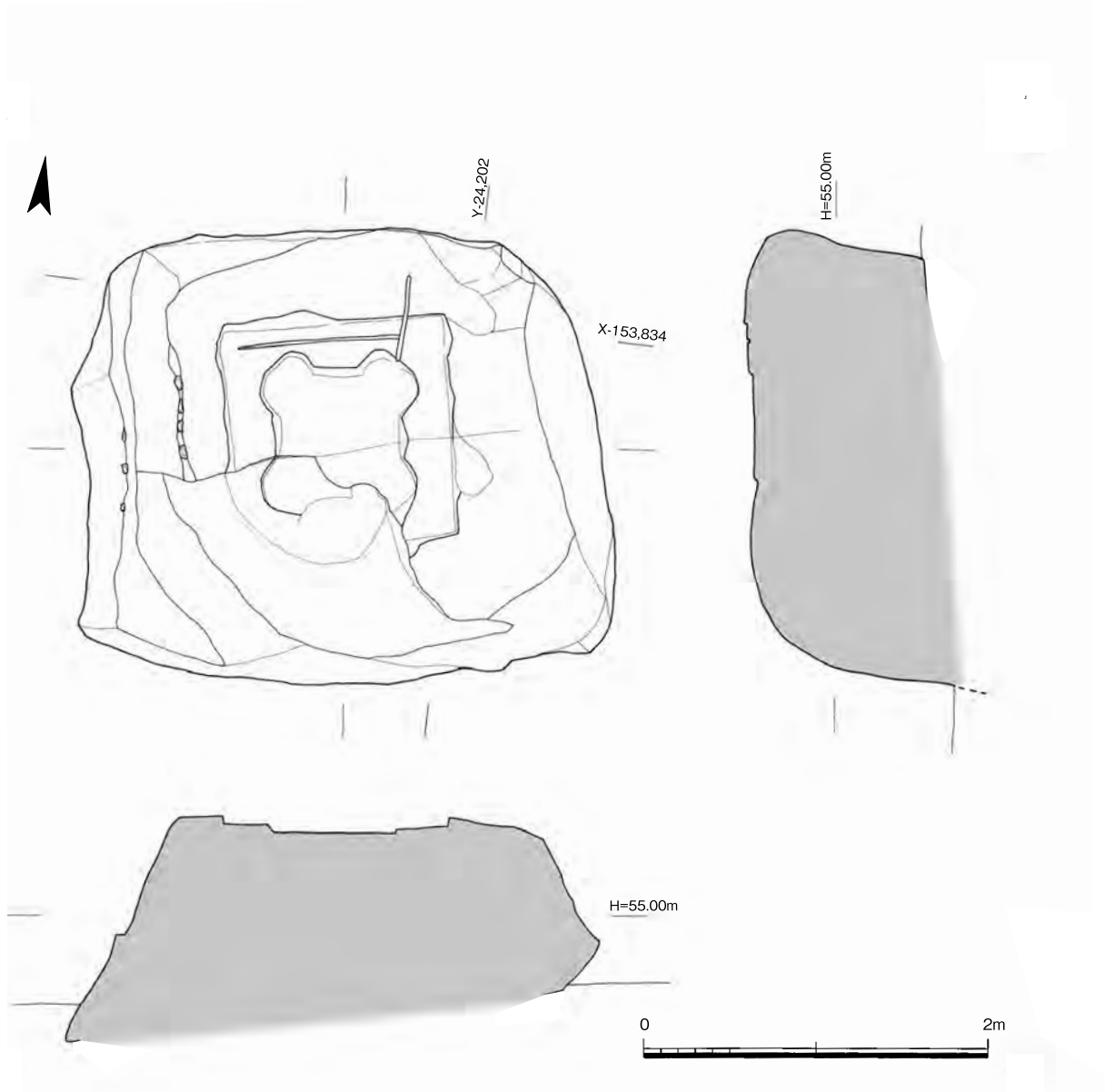


Fig. 70 塔心礎 (1:40)

の穴は、残存する掘込地業の上面から掘り込まれている。埋土は2-16区西壁面で確認できる版築層は16層あり、灰色ないしは灰褐色の粘質土を主体とし、1層の厚さは5cmあまりである。その性格は1969年10月30日付けの日記に、「性格については不明と言わざるを得ない」とあるとおり、この塔基壇に関わるものかどうかも含めて不明である。(深澤)

塔基壇掘込地業土からの出土とみられる丸瓦・平瓦がある。ラベル名「TR48基壇内の下面」として取り上げられた。次に報告する (Fig. 71)。

丸瓦の総出土量は2.2kgである。1は、筒部凸面がタテナデ。狭端から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデを施す。側面はヘラケズリ調整で、筒部凹面は未調整である。玉縁凹面は回転ヨコナデ後に基部、側縁をヘラケズリ調整する。2IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦の総出土量は5.4kgである。2は、凸面タテナデで、側縁沿いに自然釉がみられる。広端面はヘラケズリで調整し、側面は分割後未調整で、凹面側縁に分割界点がある。凹面は一部タテナデを施す、凹面広端縁は幅2cmほどヨコナデをする。1IA2類、飛鳥前期に属する。

3は、凸面タテナデ。端部沿い幅1.5cmほどをヨコナデし、端面はヘラケズリ調整。側面は分割後

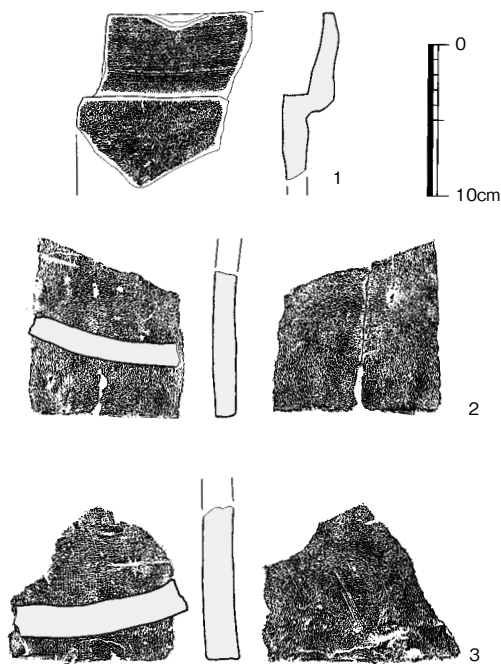


Fig. 71 TR 48基壇内の下面  
丸瓦・平瓦 (1: 5)

未調整である。凹面は未調整で杵板痕跡が残る。1IA  
1類。(今井)

#### 金堂・塔と掘込地業

それぞれの土層の重複関係から、①寺域地ならし(削  
土・第1整地土入れ)→②金堂基壇の掘込地業(SX  
7100)・基壇構築→③素掘斜溝掘削(SD 7040・SD  
7050・SD 7055)→④第2整地→⑤塔基壇の掘込地業  
(SX 7000)・基壇構築、の作業工程を復原できる。

まず地形を削平することから始め、金堂基壇南側など  
低い部分(2-15区)には土を入れて平坦にする。こ  
の地ならしは、地山の標高最高値が近似した数値である  
ことを根拠に、調査区のほぼ全域におよんだと推定する  
ことが可能である。次の段階に、金堂基壇の掘込地業が  
なされる。掘込地業の深さはだいたい30cm程度と浅い  
が、ここの版築は、地上部分の基壇土まで一気に積み上  
げていた可能性が高い。このうち基壇土の一部は第2整

地土によって地下に埋まるので、掘込地業の上の基壇地下版築土の部分は基盤の強化にあてられたのであろう。金堂基壇構築後には基壇周囲に溝を掘って、金堂建設時の排水用とした。そして金堂の屋根の瓦葺きが終了してから、不要になった瓦をこの排水用の溝に投棄し、さらに第2整地土で完全に覆った。この整地は中心伽藍域の南北に分布する。それから第2整地土を切って塔基壇の掘込地業がおこなわれた。このように金堂と塔を構築した順序を発掘成果から推定することができる。(深澤)

#### 金堂・塔の中心軸の方位

金堂と塔に関しては、礎石はもちろんのこと、地上部分の基壇土や雨落溝など外周の施設も完全に失われている。発掘時に確認できたのは地下部分の版築土だけであり、金堂と塔の完成時に目視できた部分は残っていない。金堂と塔の中心軸を出すに当たって、掘込地業の肩部でみた場合、塔は金堂の南8.25~8.90mにある。金堂基壇掘込地業の輪郭は正長方形をなさずかなり歪んでいる事実があり、また作業工程がまず金堂で、次に塔であって同時に着工されていない事実、さらに地上に突出した基壇部分の痕跡がまったく遺存しなかった事実から、本例が細かな数値による造営寸法を議論するには適さないことを示す。したがって、本例のような場合、金堂と塔の中心線の振れに接近するには、この作業工程から後で建設された塔の東西心を基点として算出するのが望ましいということになる。(深澤)

まず調査時に設定した局地座標系において、塔・金堂それぞれの東西中軸位置を設定した。Aは塔基壇の掘込地業中央付近での東西心、Bは金堂基壇掘込地業南辺での東西心、Cは金堂基壇掘込地業北辺での東西心で、その座標は表に示した。これに基づき、局地座標系における中軸線の振れを計算した。AとBを結んだ線(A-B)を中軸とした場合は北で東に1°11'52"、AとCを結んだ線(A-C)を中軸とした場合は北で東に3°8'15"振れる。前述のように、局地座標は、世界測地系に対して北で西に26°13'58"振れるので、世界測地系に対してA-Bは北で西に25°2'6"振れ、A-C

は北で西に  $23^{\circ} 5' 43''$  振れることとなる。このように中軸線の振れは、掘込地業のどこを東西心とみるかによって、 $2^{\circ}$  前後の幅が生じる。(島田)

掘込地業東西心座標

	S - N	E - W
A	S 14.60	E 18.50
B	S 0.25	E 18.80
C	N 19.15	E 20.35

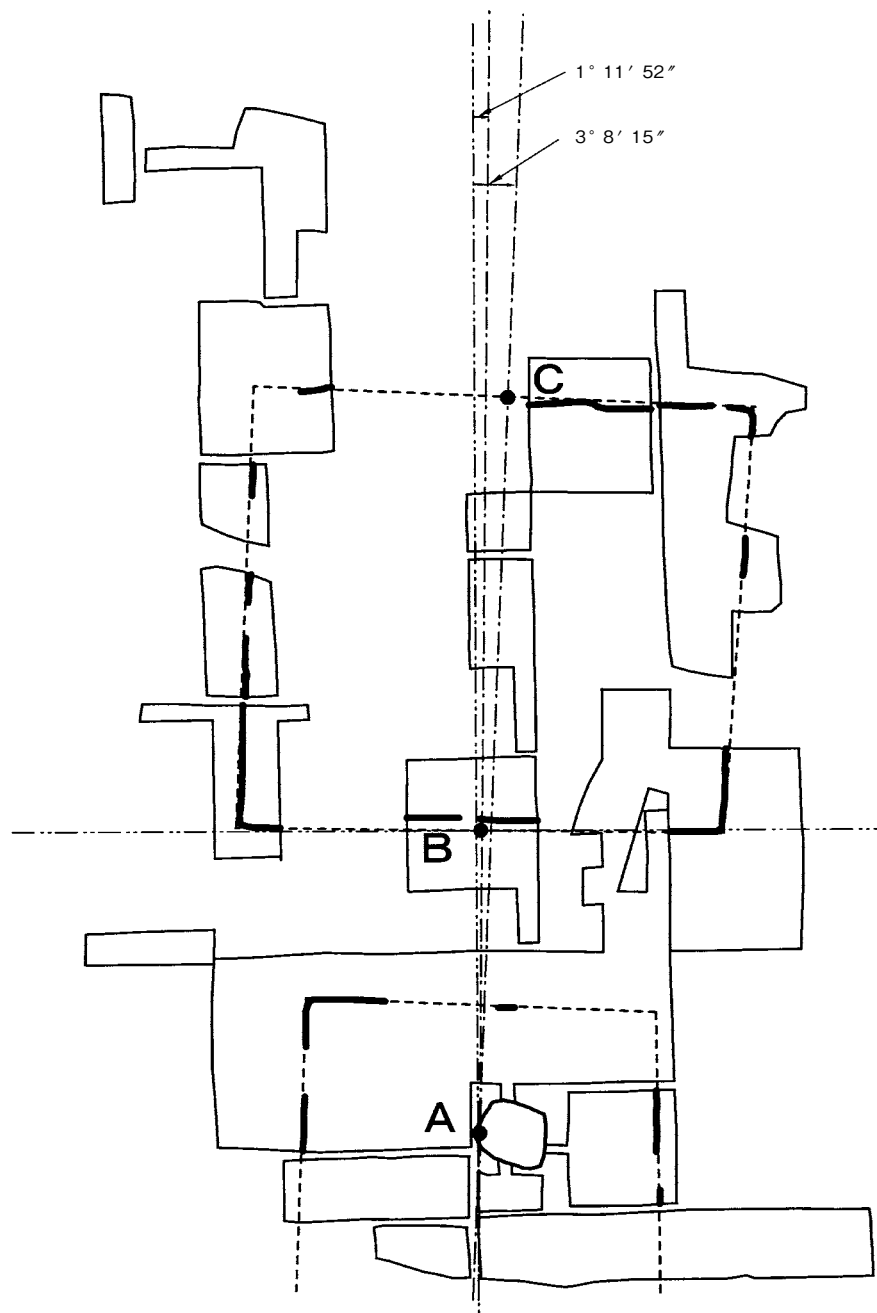


Fig. 72 伽藍中軸の方位

その他の遺構・包含層

井戸

SE 7074・KA 61土坑 2-4区西側にある井戸である (Fig. 16、PL. 3)。検出面の平面形は長円形を呈しており、南北1.3m、東西1.0m、現状の深さは1.6mで、掘削底は地山粘土層下層の砂層に達している。井戸の底部は円形を呈し、直径は50cmである。この底部には、曲物が二重にして据えられていた。(深澤)

土器は、黒色土器B類碗が1点出土している (Fig. 73、PL. 34)。口径15.3cm、器高6.2cm、高台径7.2cmを測る。細いハの字状に開く輪高台の底部に内湾する体部をもつが、同種の製品の中では、浅めの器形に作られている。口縁は端部付近をやや強くヨコナデし、端面を丸く整え、その内側体部との境には沈線を施す。体部外面は口縁部が密な横方向のヘラミガキ、その他は静止状態での粗いヘラミガキを施し、内面はほぼ全面に細かいヘラミガキを平行に施す。底部外面のみミガキを施さない。

これは橋本久和のいう畿内系5類に属し、11世紀中ごろの最終段階の黒色土器に属するものである

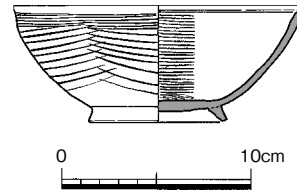


Fig. 73 SE 7074  
黒色土器 (1: 4)

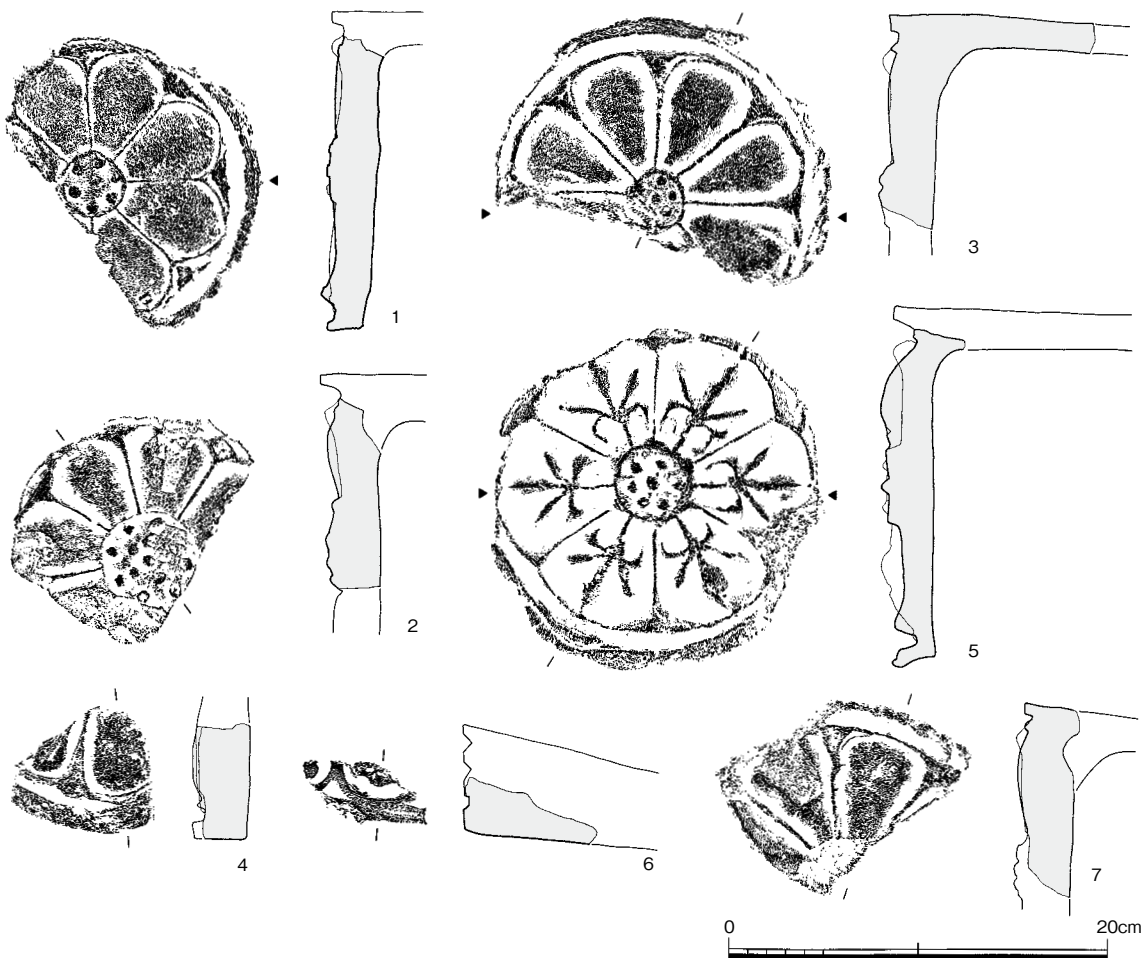


Fig. 74 SE 7074・KA 61土坑 軒丸瓦・軒平瓦 (1: 4)

う（中世土器研究会 1995）。（高橋）

また瓦類も出土した。そのうち、軒瓦から報告する。（Fig. 74・75）

1は、4 A。丸瓦と瓦当の接合部が残るが、大部分は欠損している。接合方法は不明。内面接合粘土は部分的に残る。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデ、下半部周縁に沿ってナデ。瓦当側面の調整はナデ。瓦当面では間弁部分の範詰めが不十分である。外縁上に範端痕は認められない。

2は、6 Db。丸瓦と瓦当の接合部が残るが、半分は欠損する。接合方法楔形 a。支持ナデツケあり。内面接合粘土はわずかししか残らない。瓦当裏面はほぼ平坦で、不定方向のナデ調整。瓦当側面は全く残らない。

3は、7 Ab。丸瓦が幅 20 cm、長さ 11 cm ほど残存する。接合方法楔形 a。内面接合粘土が瓦当粘土とよく密着しており、丸瓦を立てた際に、支持ナデツケが施されたと考えられる。接合部にはタテ方向のキザミと布目が転写される（Fig. 75 - 3）。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデ。内面接合粘土は横方向にナデつけている。瓦当側面の調整はナデ。筒部凸面の調整は瓦当に向けてナデ。凹面は布目圧痕を部分的に軽くナデ消す。布綴じ目がみられる。丸瓦の厚さは 1.6 ~ 1.8 cm。

4は、7 A。中房が残らず、AaかAbかの判別は難しい。裏面はほぼ平坦で、調整は周縁に沿ってナデ。側面はナデ。瓦当面蓮弁先端は三重になり、範ズレの可能性はある。

5は、33 A。瓦当はほぼ完形に近い。接合方法楔形 a。支持ナデツケ、タテ方向のキザミ転写がみられる（Fig. 75 - 5）。内面接合粘土は良好に残る。瓦当裏面はほぼ平坦で、不定方向ナデ。側面はナデで、大きく外反する。瓦当面の蓮弁と外縁の間には、木目に沿った範傷が多数ある。蓮弁にも木目痕が認められる。

6は、206 A。直線顎。文様の輪郭のケガキ線が残る。凸面瓦当付近をヨコナデ。

この他に、ラベル名が「KA 61 土坑」であるものも SE 7074 の可能性が高いので、ここで報告する。

7は、7 A。AaかAbかは不明。丸瓦との接合部にあたる。接合方法は楔形 a か b。丸瓦は残存しない。内面接合粘土は剥離し、支持ナデツケを施した際に生じた溝のみ残る。溝の幅は 1.5 cm、深さは 0.8 cm ほど。接合部の瓦当粘土には丸瓦のキザミが転写される。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデ。側面はナデ。瓦当面では間弁の輪郭が二重になり、範ズレ、もしくは間弁部分の範詰めが不十分



Fig. 75 SE 7074 軒丸瓦細部



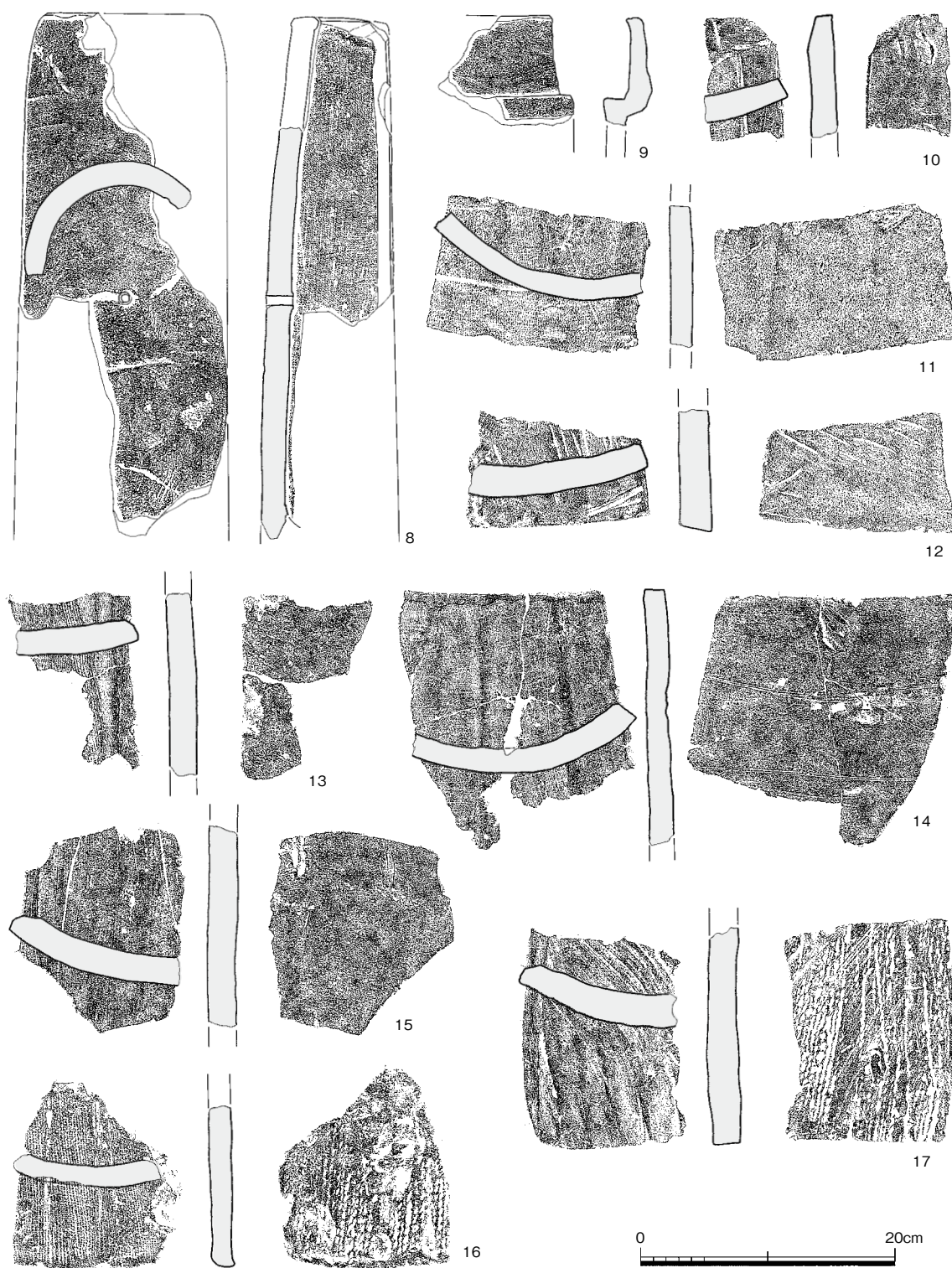


Fig. 76 SE 7074 丸瓦・平瓦 (1:5)

であると考えられる。(中川)

次に丸瓦・平瓦を報告する (Fig. 76・77)。

まず丸瓦の総出土量は14.0kgである。

8は、行基式丸瓦。広端には瓦当に接合した痕跡がある。凸面はタテナデ、狭端から22.0cmのと

ころに凸面よりあけた円形の釘孔がある。狭端面は未調整。側面はヘラケズリ、凹面側縁は面取り。凹面は未調整で杵板痕がみられず、布綴じ合わせ目が残る。1ⅡA、飛鳥前期に属する。

9は、肩から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデがみられる。玉縁側面はヘラケズリ、玉縁凹面は回転ヨコナデ後に側縁と基部をヘラケズリで調整する。2IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦の総出土量は39.0kgである。

10は、凸面タテナデ。端面はヘラケズリ、側面は全面ヘラケズリ、凹面は未調整である。凹面側縁は幅3cm、凹面端縁も幅2.5cmがヘラケズリ調整。時期は不明である。

11は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整であり、端部は欠損している。凹面は未調整で、杵板痕跡が残る。また、杵板痕跡の稜線上に点状の杵板綴紐痕があり、横方向に等間隔に並ぶ。1ⅠA1類、飛鳥前期に属する。

12は、凸面はヨコナデ調整するがタタキメが残る。広端面はヨコナデ、側面は全面ヘラケズリで調整、凹面側縁は幅の狭い面取りをおこなう。凹面は縦方向に工具を使用したタテナデを部分的に施す。1ⅣB、白鳳前期。

13は、凸面は不定方向のナデ。端部を欠いており、側面は分割後ヘラケズリ、凹面側縁は2度面取りをする。凹面は一部タテナデ。1Ⅳに相当し、白鳳時代にあたる。

14は、凸面ヨコナデ。側面は分割後、破面をヘラケズリで調整する (Fig. 77)。狭端面はヘラケズリで調整し、凹面狭端縁と凹面側縁は面取りをする。凹面は杵板痕跡の稜部分をタテナデする。1ⅣB。

15は、凸面ヨコナデ。端部を欠いており、側面は分割後、破面をヘラケズリで調整する。凹面側縁は2度の面取りする。凹面は部分的にタテナデ調整をおこなう。1ⅣBに相当する。

16は、凸面は粗いタテ縄タタキ。側面は欠損しており、端面は未調整である。凹面は未調整で、杵板痕跡が残る。平安時代か。

17は、凸面はタテ縄タタキ。端面をナデで調整し、側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁は面取りをおこない、凹面は布目がなく弧状の粗いナデ調整をほどこす。時期は不明である。

道具瓦は、2点出土している (Fig. 78)。

18は、面戸瓦で舌部のみ残存している。器表が摩滅しているため調整は不明である。時期も不明。

19は、鴟尾。鱗部の破片か、あるいは胴部の破片で表面にのみ正段をけずり出す。表面は丁寧なナデ調整。裏面は粗いナデ。飛鳥時代に属する。なお、この資料は『至宝』未掲載である。(今井)



Fig. 77 SE 7074 平瓦細部

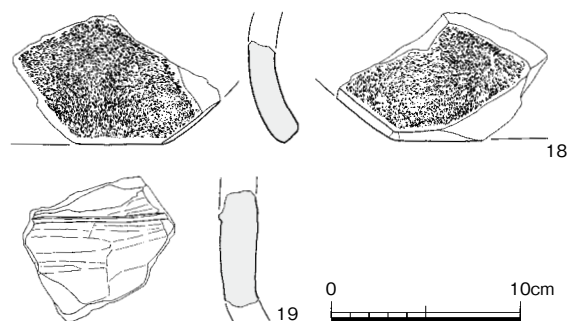


Fig. 78 SE 7074 道具瓦 (1:4)



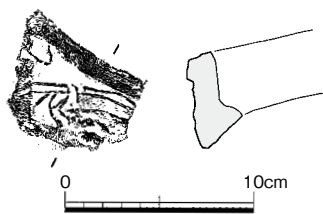


Fig. 79 KG 53土坑 軒平瓦 (1:4)・細部



**SE 7075** 2-4区中央にある井戸で (Fig. 16)、平面形は楕円形を呈し、南北1.40m・東西0.95m、深さは現状で1.46mである。(深澤)

#### 土 坑

**SK 7052** 2-17区南端の土坑である (Fig. 17)。調査区内に北辺・西辺が入っているが、他は調査区外にある。現状で、南北3.8m以上・東西4.8m以上、深さは現状で0.53mである。(深澤)

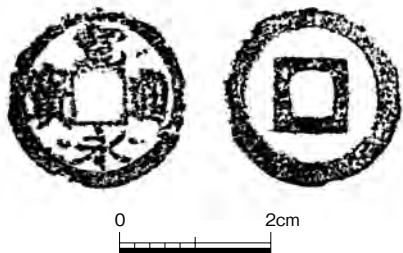


Fig. 80 KG 49土坑 銭貨 (1:1)

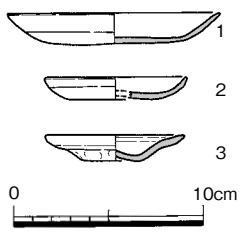


Fig. 81 KC 46土坑 土師器 (1:4) (中川)

**KG 53土坑** 軒平瓦を取り上げている (Fig. 79、PL. 47)。217Bb。瓦当貼付曲線顎で、平瓦部貼付部分で剥離する。(中川)

**KG 49土坑** 寛永通宝を取り上げている (Fig. 80、PL. 33 b)。「寶」字の最終画を「ス」字状につくる「ス寶」とよばれるもの。1636年初鑄の古寛永。(次山)

**KC 46土坑** 図化した遺物は土師器皿3点である (Fig. 81)。そのうち2、3が小皿。1と2はヨコナデ痕を軽くとどめるもので、口縁端部は丸く収めるだけである。これに対して、3は赤褐色系のへそ皿に属し、口縁部も水平気味にヨコナデし、端部を細く尖らす。上げ底の底部外面には指頭圧痕が顕著である。1の口径11.2cm、器高1.7cm、2の口径7.4cm、器高1.2cm、3の口径7.3cm、器高1.4cmである。14世紀頃とみられようか。(高橋)

#### 穴

**SX 7065** 2-12区で検出した小穴で、SD 7055と一部重複する (Fig. 17)。平面形は円形で、直径約45cm、深さは現状で13cmである (PL. 8)。瓦の出土状況を実測した図面がある。「KI 47穴」のラベルで取り上げた瓦がこれにあたる可能性がある。(深澤)

軒丸瓦3Cが出土している (Fig. 82、PL. 47)。接合方法片柄形aかb。内面接合粘土が瓦当・丸瓦に完全には密着せず、わずかに隙間を生じている (Fig. 82写真)。内面接合粘土は丸瓦凹面に沿ってナデつける。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデ。若

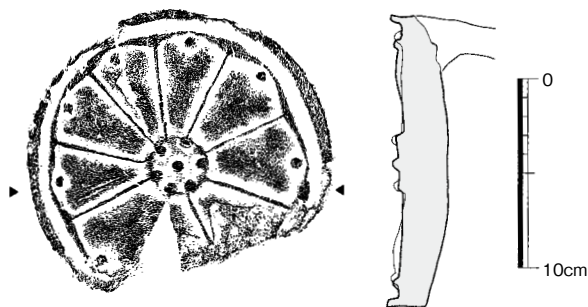


Fig. 82 SX 7065 軒丸瓦 (1:4)・細部



干外反する。外縁上に範端痕をわずかに残す。(中川)

丸瓦の総出土量は0.5kgである。Fig. 83は筒部凸面がヨコナデ。肩から玉縁凸面は回転ヨコナデで調整する。凸面の狭端から6.5cmのところには釘穴がある。側面はヘラケズリ、筒部凹面側縁は面取りをおこなう。凹面は未調整だが、側縁よりに粘土板合わせ目（Z型）があり強くナデつける。玉縁凹面基部と側縁はヘラケズリで調整する。2IB、飛鳥前・中期に属する。平瓦は細片のみの出土で、合計0.1kgである。(今井)

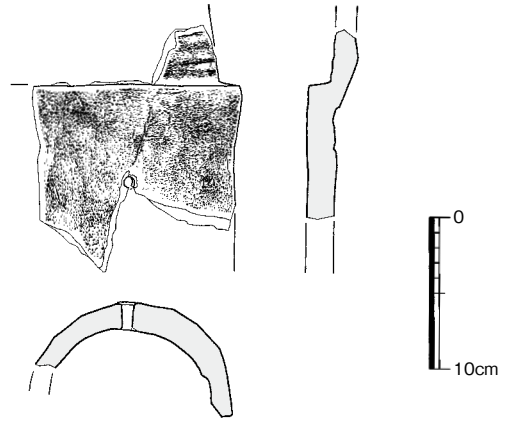


Fig. 83 SX 7065 丸瓦 (1:5)

**KJ46東穴** 軒丸瓦1点を取り上げている。型式は不明である。瓦当の3分の1ほど残存するが、瓦当面が完全に剝離している。裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整はヘラケズリの後、回転ナデ。中心部分はさらに不定方向ナデ。側面はナデ。瓦当裏面の形状や調整から、飛鳥時代に位置付けられる可能性が高い。(中川)

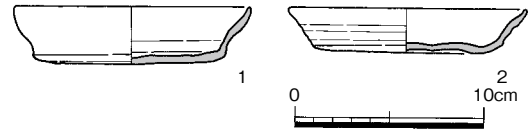


Fig. 84 KH 62小穴 土師器 (1:4)

**KI61穴** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片1点を取り上げている。(中川)

**KH 62小穴** 完形の2点の土師器皿を取り上げている (Fig. 84、PL.34)。ともに、平たく広い底面から体部が比較的急角度で立ち上がり、口縁端部をわずかにつまみ上げたものである。強めのヨコナデによって強調された体部と底部の境はかなり低い位置にあり、そこに明瞭な段をもつ。それゆえ、側面形は箱形に近くなっている。口径は1・2ともに12.4cm、器高は1が3.1cm、2が2.3cmを測る。淡褐色の胎土の製品である。13～14世紀のものであろう。(高橋)

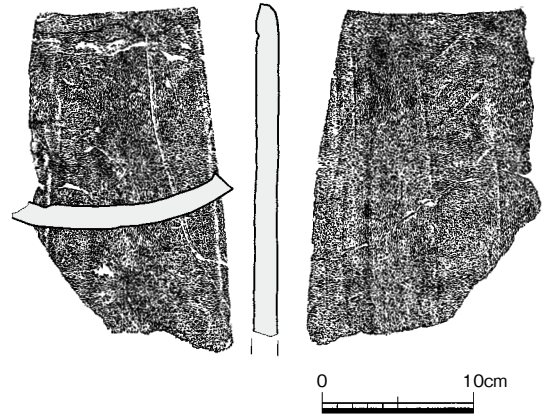


Fig. 85 KG 49大穴 平瓦 (1:5)

**KG 49大穴** 平瓦合計1.0kg分を取り上げている。このうちFig. 85に図示した平瓦は、凸面タテナデ、狭端縁を幅2cmほどヨコナデ。狭端面はヨコナデ。側面は分割後に部分的に削るが、一部破面が残る。凹面は一部強いタテナデ、狭端縁は面取り後にヨコナデする (PL. 46)。1IBb、飛鳥前期。(今井)

**KA 46小穴** 瓦当が欠損した軒平瓦の一部と考えられる破片を2点取り上げている。(中川)

## 東西溝

**SD 7058** 2-9区にある溝で上幅1.30m、深さ0.67mである (Fig. 17)。「KG 53東西溝」として、遺物を取り上げた可能性がある。ここでは土器を報告する (Fig. 86-1・2)。

1は、須恵器大甕。肩部から口頸部にかけての破片で、頸部の器壁は2.0cmと非常に厚い。体部は内面に同心円の当て具痕、外面に格子目のタタキメをとどめるが、口頸部は回転ナデによる調整で仕上

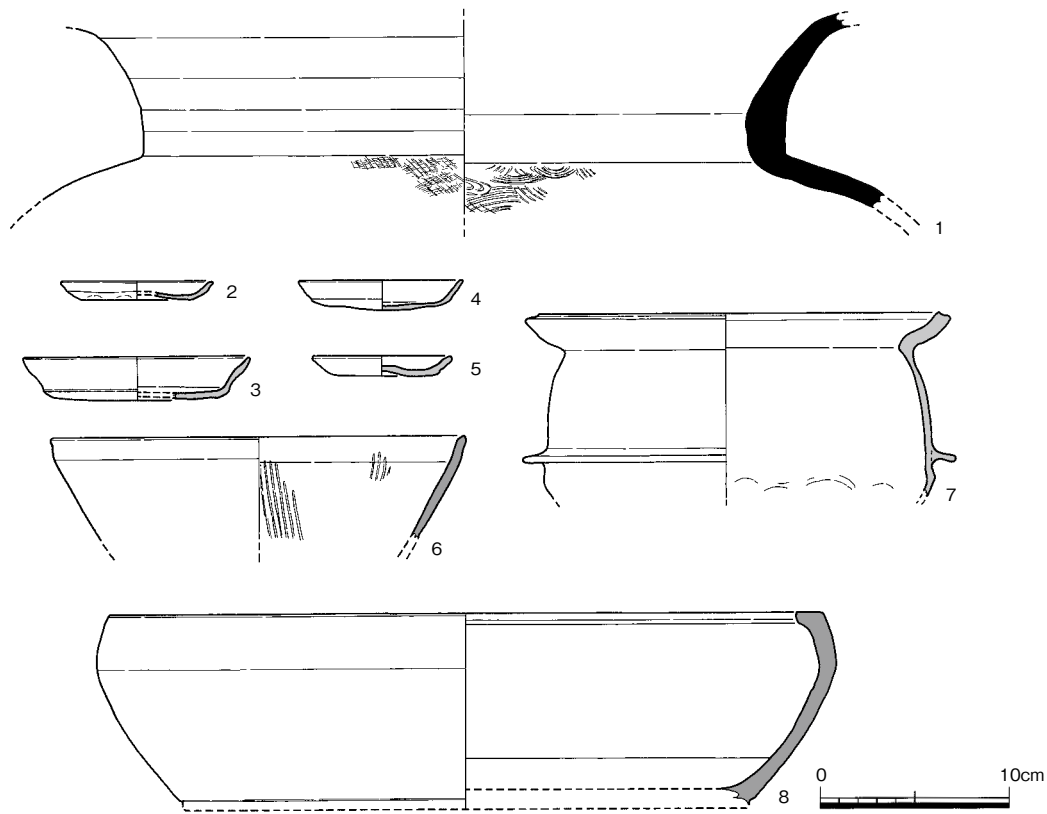


Fig. 86 東西溝 土師器・須恵器・瓦器 (1:4)

げてある。外反の角度から考えて波状文等は施さないものだろう。頸部付け根での径は34.0cm、口頸部の残存高は6.4cmを測る。時代の限定は難しい。

2は、瓦器小皿。口径8.0cm、器高1.0cmで浅い器形である。底面は上げ底状を呈す。体部内外面はヨコナデ仕上げであるが、内面見込みにはジグザグ文の暗文を施してある。13世紀代のものであろう。(高橋)

**SD 7054** 2-14区中央の溝で、上幅1.85m、深さ0.48m (Fig. 17)。埋土は、上から順に、黄灰色土、灰色粘土、黄灰色土である。図面に、中世溝と注記している。ラベル「KF 49東西溝」や「KE 49東西溝」で、遺物を取り上げたか。土器と瓦が出土している。(深澤)

**KF 49東西溝** 瓦器摺鉢を取り上げている (Fig. 86-6)。上半部しか残っていない。大和では14世紀に須恵器こね鉢にとってかわるようになんて生産され始めたもので、本例は15~16世紀頃のものであろうか。口縁端部付近をヨコナデし、端部を丸く収めただけの単純な形態で、内面には粗い櫛目の工具によっておろし目を、間隔をあけてつけている。おろし目の櫛の数は6本である。(高橋)

軒丸瓦は、3Bb (Fig. 87)。丸瓦が長さ6cm、幅11cmほど残存。丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好にみられる。接合方法片柄形a (Fig. 87写真)。内面接合粘土はヨコ方向にナデつけられる。筒部凹面に沿って瓦当裏面が溝状にくぼむのは、内面接合粘土ナデつけの際に強く押圧したためか。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデを認める。側面の調整はナデ。外縁は残りが悪く、範端痕は確認できない。筒部凸面は不定方向ナデ、凹面は布目圧痕を軽くナデ消す。丸瓦の厚さは1.7cm。(中川)

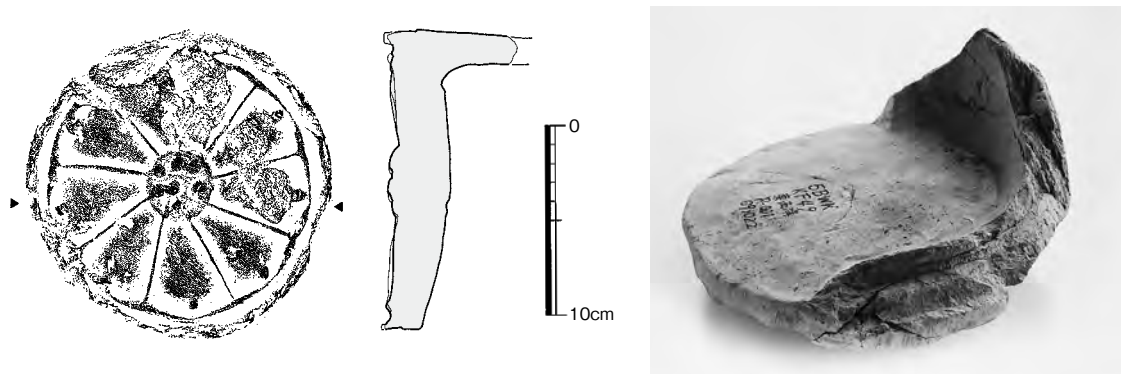


Fig. 87 KF 49 東西溝 軒丸瓦 (1:4)・細部

**KE 49 東西溝** 4・5の土師器皿と、7の土師器釜、そして8の瓦器火鉢を取り上げている (Fig. 86、PL. 34)。4は口径8.7 cm、器高1.6 cm、体部を一段のヨコナデで仕上げたもので、底部はやや丸みを帯びる。白色系の胎土である。

5は4よりさらに精良な白色系の胎土の小皿で、口径7.3 cm、高さ1.1 cmを測り、底部は中央がやや上げ底状となる。体部は一段ナデによる仕上げで、やや厚手の製品である。

7の羽釜は、鏝のすぐ下で、体部が丸く閉じる大和I型の羽釜である。体部に比べて口縁部は厚く作られていて、内湾気味に立ち上がり、端面を整える。体部は底面に向かってすぼまる内面に当て具痕が認められる。鏝は薄く端部を丸めたもので、ほぼ水平に伸びる。元興寺旧境内食堂跡埋甕土坑SX 06出土品と類似し、17世紀前半頃に比定できよう (奈良市教育委員会 1983)。砂をわずかに含む橙褐色の胎土である。口径21.0 cmを測る。

8は、瓦質土器の火鉢である。底部を完全に欠損している。大きく内湾する口縁の上面は平らな面をもち、端部は稜をもつ形に仕上げられる。すぼまった体部と底部の境にははっきりとした段がつく。この底部にどのような足が付いていたかはわからない。内面には重ね焼きしたときの痕跡が観察できる。体部最大径39.0 cmを測る。これも7の羽釜と同じく近世に下るものであろう。(高橋)

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。(中川)

**KE 49 東石溝** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。(中川)

このほか、丸瓦・平瓦も取り上げている。このうち丸瓦は、合計1.5 kgあり、Fig. 88に図示したものは、筒部凸面がタテナデ。肩から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデ、側面はヘラケズリ、凹面側縁は面取りをする。凹面は未調整で、布袋の吊り紐痕跡がみえる。玉縁凹面側縁と端縁も面取り。室町時代。また平瓦は、合計1.2 kgあった。(今井)

**SD 7085** 2-2区南西部にある溝である。上幅0.25 m、深さ7.4 cmで、埋土は暗褐色土である (Fig. 16)。

**SD 7080** 2-3区西半部にある溝で、上幅0.60 m、深さ9.0 cmである (Fig. 16)。

**SD 7095** 2-6区南端にある溝で、北肩のみ調査区内にある。

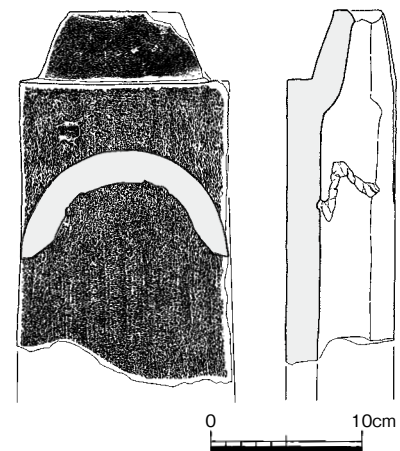
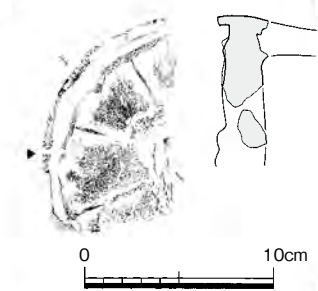


Fig. 88 KE 49 東石溝 丸瓦 (1:5)





上幅1.50m、深さ0.84mである (Fig.17、PL.4)。

**SD 7061** 2-12区南端にある溝で、上幅0.70m、深さ9.8cmである (Fig.17)。

**SD 7017** 1-8区にある溝で、上幅0.60m、深さ0.30mである (Fig.18)。

**SD 7005** 1-10区の溝で、上幅0.50m、深さ8.0cmで、埋土は暗褐色土である (Fig.18)。(深澤)



**Fig. 89** KG 46 東西溝  
軒丸瓦 (1:4)・細部

**KF 53東西溝** 土師器皿を取り上げている (Fig.86-3)。平たく広い底面から体部が比較的急角度で立ちあがり、口縁端部をわずかにつまみ上げたもので「KH 62小穴」取り上げの2点 (Fig.84) と同一の型式と言える。口径は12.0cm、器高が2.3cmを測る。13~14世紀のものであろう。(高橋)

**KG 46東西溝** 軒丸瓦3Bbを取り上げている (Fig.89)。接合方法は片柄形aかb。丸瓦の先端加工は凹面からの切り込みが深く、その部分で丸瓦が折れ、切り込みより先端が瓦当に貼りついて残る (Fig.89写真)。瓦当と丸瓦の間は完全に密着せず、部分的に隙間がみられる。内面接合粘土が残存し、横方向にナデツケられている。瓦当裏面は残りは悪いが、調整は不定方向ナデ、さらに周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデ。外縁上には範端痕がわずかに残る。

このほか、瓦当面が欠損した軒平瓦1点を取り上げている。(中川)

## 南北溝

**SD 7001~7016** 1-8~13区にある溝群で、上幅0.40~1.00m、深さは0.50m前後である。埋土は、多くが黒灰色砂質土である (Fig.18・19、PL.27~29)。

**SD 7076** 2-4区西端の溝で、上幅0.55m、深さ0.35mである (Fig.16)。

**SD 7041~7044** 1-14区と1-15区にある溝群で、上幅約0.50~0.90m、深さは0.30m前後である (Fig.18)。(深澤)

**KA 59南北溝** 土師器小皿2点を取り上げている (Fig.90-1・7)。

1は丸みをもって大きく広がる皿で、口縁部付近のみヨコナデして整えたもの。体部下半には指頭圧痕が明瞭に残る。口径11.6cm、器高2.0cm。7は体部下半で一度屈曲しながら口縁が広がるもので、ともに白色系の胎土の製品で、15~16世紀頃のものであろう。口径10.8cm、器高2.1cm。(高橋)

**KM 53南北溝** 土師器皿2、陶磁器皿1、須恵器壺1、瓦器挿鉢3を図化した (Fig.90-2・3・8・9・14・16・17、PL.34)。

2・8は、ともに厚手丸底の小皿だが胎土が異なる。2は白く精良な胎土の製品で、口縁部の一部にタール状の煤が付着していることから燈明皿として利用されたことがわかる。近世に下るものであろう。8は表面が荒れていて淡褐色を呈する。2の口径7.2cm、器高1.4cm。8の口径7.0cm、器高1.3cm。

3は内面に水引き痕を明瞭に残す須恵器壺の下部の破片である。輪高台がはずれている。青灰色で内面に一部自然釉が認められる。

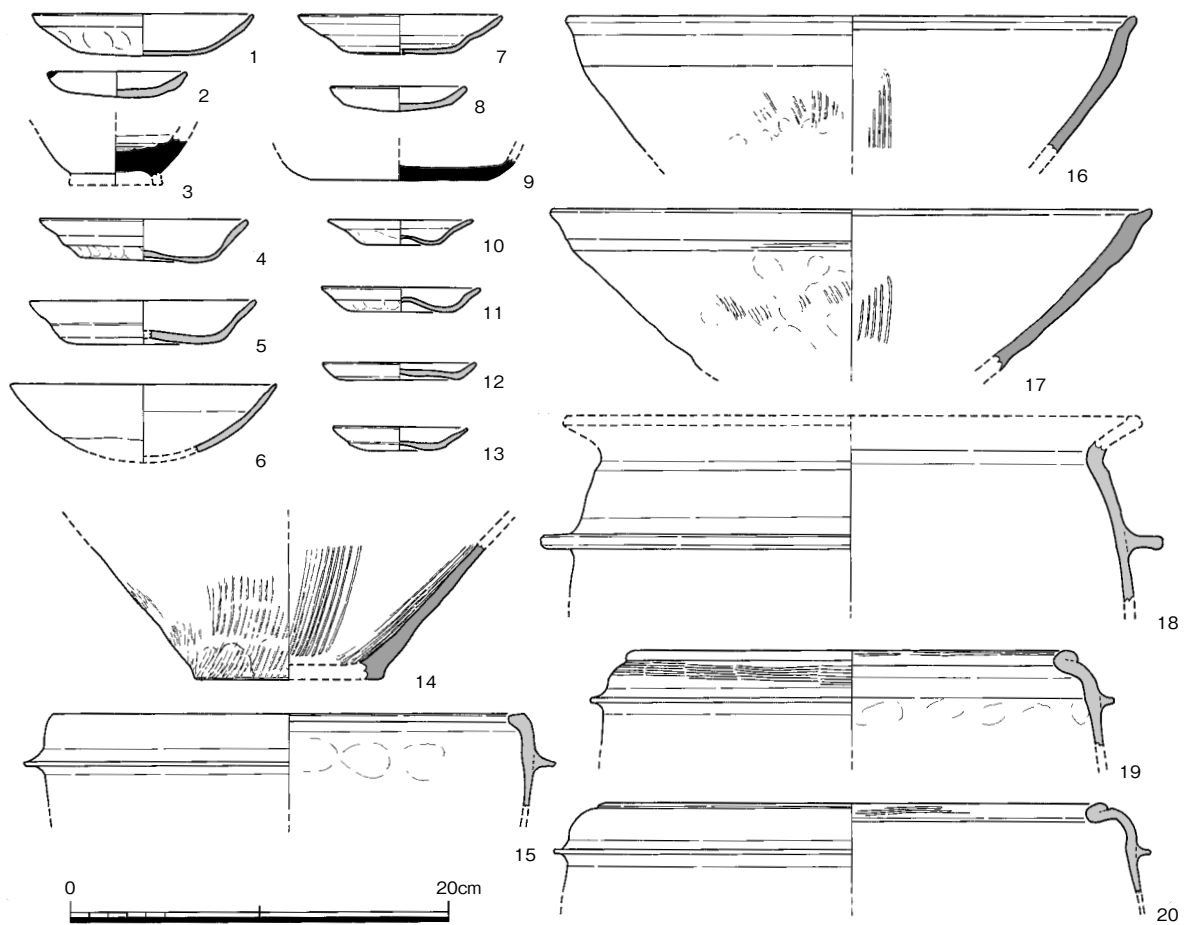


Fig.90 南北溝 土師器・須恵器・瓦器・陶磁器 (1:4)

9は全形をうかがい知れないが、平底から丸く緩やかに体部が立ち上がることがわかる陶磁器である。底部外面は糸切り痕を明瞭にとどめ、内面には緑がかった透明な釉が厚くかかっている。

14・16・17は、いずれも瓦器播鉢で、16・17が口縁部を残し、14が底部を残す。外面はすべてハケメ調整だが、それが不完全なため指頭圧痕が見え隠れする。体部下半がほぼ45度の角度で直線的に立ち上がった後、口縁近くで内湾し、最後に外側に端部をつまんで引き伸ばしている。その際、端部内面は浅くくぼむ。おろし目の本数は16が6本、17が5本以上、14が10本である。16の口径29.8cm、17の口径31.6cmを測る。古市城跡出土品に類し、16世紀中ごろに年代を求められる(奈良市教育委員会1981)。(高橋)

また軒平瓦も取り上げられている。

Fig.91は210。AかBかは不明。直線顎。凸面の調整は瓦当に向けてタテ方向のヘラケズリ。瓦当付近のみナデか。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、1点ある。(中川)

**TO35南北溝** 土師器の杯、皿類とともに、鍋、甕類を取り上げている (Fig.90 - 4・6・10~13・15・18~20、PL.34)。

4~6が大皿である。4・5は一段ナデによって体部外面中位か

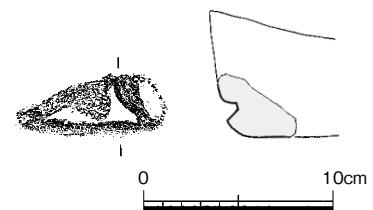


Fig.91 KM53南北溝 軒平瓦 (1:4)

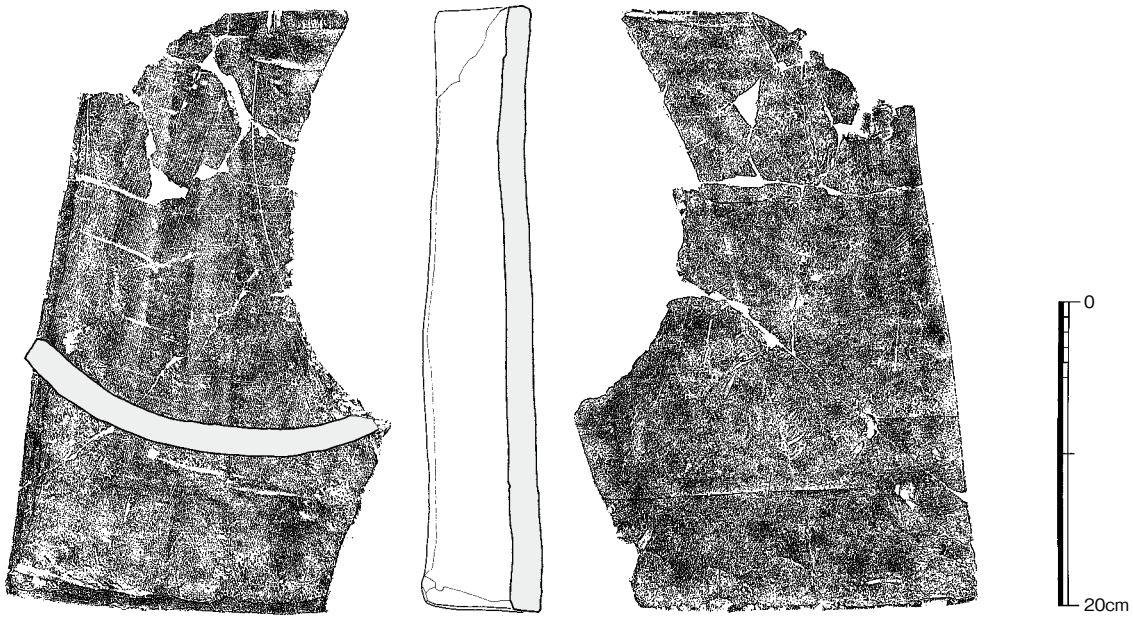


Fig. 92 TO 35南北溝 平瓦 (1:5)・細部

から外反する口縁をもち、底面はわずかに上げ底状になる皿である。橙褐色の胎土の製品である。これに対して、6は摩滅のため調整の詳しい観察はできないが、丸底気味の底部からやや内湾気味に口縁が立ち上がる異なる形態を呈する。胎土も白色系で相違する。4の口径10.8cm、器高2.3cm、5の口径11.8cm、器高2.3cm、6の口径14.0cm。10～13は、小皿に相当する。そのうち、13のみ白色系の胎土で、10～12は赤褐色系の胎土で作られている。いずれも底部を下から上にくぼませているが、10・11がとくに顕著で、典型的なへそ皿となっている。12は器高の低い皿である。10の口径7.8cm、器高1.3cm、11の口径8.3cm、器高1.3cm、12の口径8.2cm、器高0.9cm、13の口径7.1cm、器高1.3cmを測る。

18は、大和B 2型釜とみられ、大きく突出した鋳部の最大径は32.8cmを測る。鋳下面以下に煤状の付着物がある。淡褐色の胎土を有する。

15は、端部がわずかに内側に肥厚するだけで、上面が平坦に仕上げられた羽釜で、本遺跡では類例の少ないものである。大和H 2型に該当するのであろうか。砂粒をわずかに含んだ精良な淡褐色の胎土で、鋳下半以下に煤をつけている。口径28.0cm。

19・20がいわゆる大和H 1型釜で、19では肩部外面や口縁部、そして20も口縁部にハケメをとどめる。また、19の内面には成形の際の当て具痕が観察できる。鋳は15に比べて薄くて小さいもので、折り返された口縁端部は丸められて肩部と一体化して玉縁状を呈する。20は鋳より下に煤が付着している。19・20ともに胎土は白っぽい精良なもので、15世紀に下るものだろう。



以上の遺物は、総じて14～15世紀頃のものと考えられ、同一地点の褐色土として発掘された土層出土品の中では新しい遺物群にほぼ並行する。(高橋)

平瓦は合計5.5kgである。Fig. 92は、凸面は板状工具によるヨコナデ。狭端面は未調整で、広端面はヘラケズリで調整する。側面は少なくとも3度に分けてヘラケズリで調整し (Fig. 92写真)、凹面側縁を面取りする。凹面には杵板痕跡が残り、部分的にタテナデ、凹面広端縁は面取り、凹面狭端縁はヨコナデ。1 IV B、白鳳前期に属する。(今井)

### 斜行溝

**TS 47 地山上溝** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。(中川)

**TS 47 地山斜溝** 軒平瓦は、292 A (Fig. 93)。段顎。顎部粘土と平瓦部粘土の接合状況は不明瞭。凹面は布目圧痕をナデ消し、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリで調整する。顎面はヨコナデし、顎裏面側縁の面取りはない。顎裏面はタテナデで、凹型調整台痕が残る (Fig. 93写真)。凹面側縁は幅5mmほど面取りをしている。側面はタテ方向のヘラケズリ後ナデか。(中川)

**KA 46 斜行溝上** 軒平瓦は、208か (Fig. 94)。直線顎。唐草文にピン穴、ケガキ線はみられない。凹面は布目圧痕を残し、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリで調整する。凸面の調整は摩滅により不明瞭である。(中川)

### 瓦溜

**SX 7096** 1-2区と1-3区にまたがる瓦溜で、南北3.8m以上、東西4.0m、深さは0.15mである (Fig. 17)。

ラベルは、「TQ 52 西南瓦溜まり」と「TQ 53 瓦溜まり」である。(Fig. 95)

1は、6C。瓦当下半部に当たる。裏面はほぼ平坦。調整は大部分はユビオサエで仕上げ、さらに周縁に沿ってナデをおこなう。側面にはナデを認める。

2は、6D。瓦当下半部に当たる。裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデ。周縁に沿ってナデが強く施され、わずかに凹む。側面はナデ。瓦当面の蓮弁には掌文を認める。(中川)

**KJ 46 新瓦溜** 軒丸瓦3Bbが取り上げられている (Fig. 96)。丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好にみられる。接合方法片柄形aかb (Fig. 96写真)。丸瓦先端が一部残り、瓦当と隙間なく密着。内面接合粘土が一部残る。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は回転ナデの後、不定方向ナデ、下

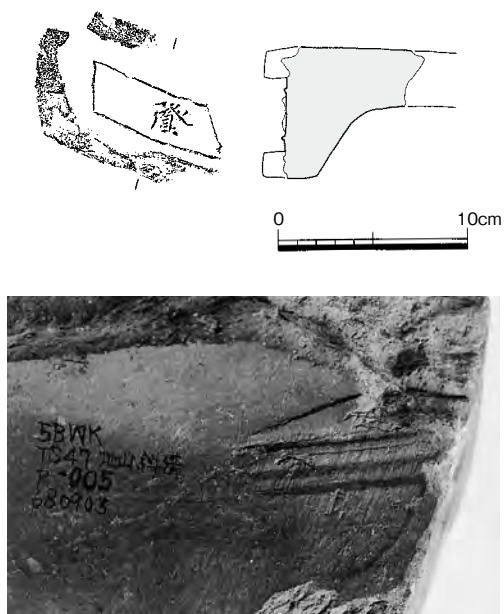


Fig. 93 TS 47 地山斜溝  
軒平瓦 (1:4)・細部

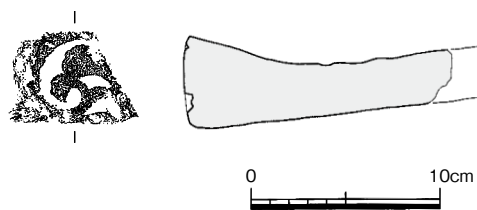


Fig. 94 KA 46 斜行溝上 軒平瓦 (1:4)

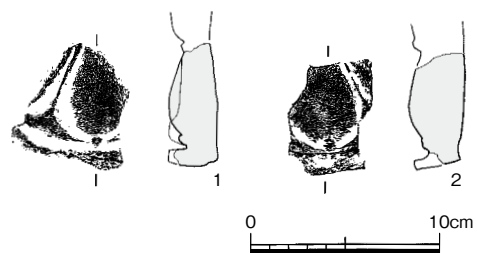


Fig. 95 SX 7096 軒丸瓦 (1:4)

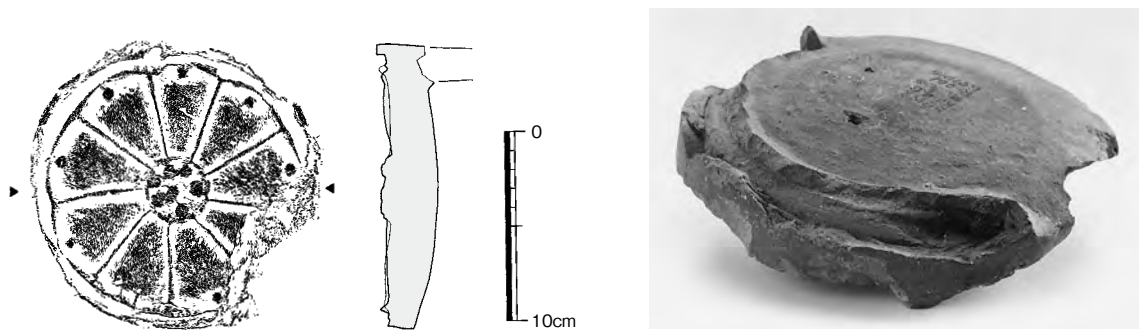


Fig. 96 KJ 46新瓦溜 軒丸瓦 (1:4)・細部

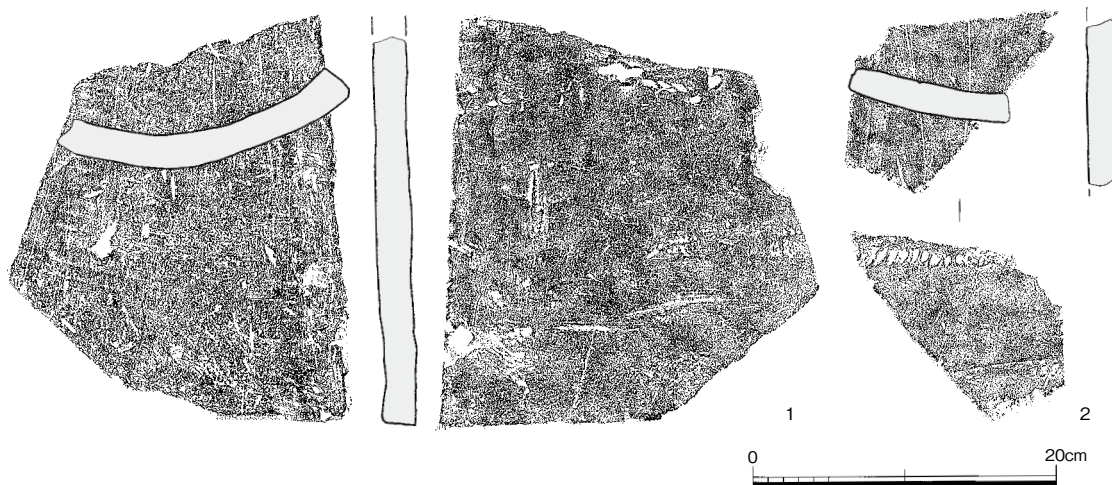


Fig. 97 KI 62瓦溜 平瓦 (1:5)

半部周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデ。瓦当面全面に掌文あり。外縁は遺存状況が良くない。(中川)

**KI 62瓦溜** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。(中川)

その他には、平瓦2点(合計0.36 kg)を取り上げている(Fig. 97)。

1は、凸面不定方向ナデ。広端面はヘラケズリで、側面も全面ヘラケズリで調整する。凹面は全面ナデ調整、凹面広端縁をわずかに面取りする。室町時代に属する。

2は、凸面を工具によるヨコナデ後、棒状の工具で刻みを施す。側面はヘラケズリ、凹面は部分的にタテナデ、凹面側縁はヘラケズリで調整する。時期は不明である。

このほか二次的に被熱し、焼け膨れた瓦片が数点あるが、時期は不明である。(今井)

**KH 48瓦溜** 丸瓦・平瓦を取り上げている(Fig. 98)。

丸瓦の合計は6.1 kgである。

1は、筒部狭端から玉縁凸面にかけて時計回りの回転ヨコナデ。玉縁凸面にはヨコ方向の明確な凹凸がある。玉縁と筒部の側面はヘラケズリで調整する。玉縁凹面は回転ヨコナデ後に、基部と側縁をヘラケズリ、さらに基部を指押さえる。2IB、飛鳥前・中期に属する。

2は、筒部凸面から玉縁凸面にかけて時計回りの回転ヨコナデ。側面はヘラケズリ、凹面側縁はタテナデで調整する。筒部凹面は未調整であり、側縁よりに粘土板合わせ目がみえる(Z型)。玉縁凹面は回転ヨコナデ後、側縁と基部をヘラケズリで調整する。2IBに属する。

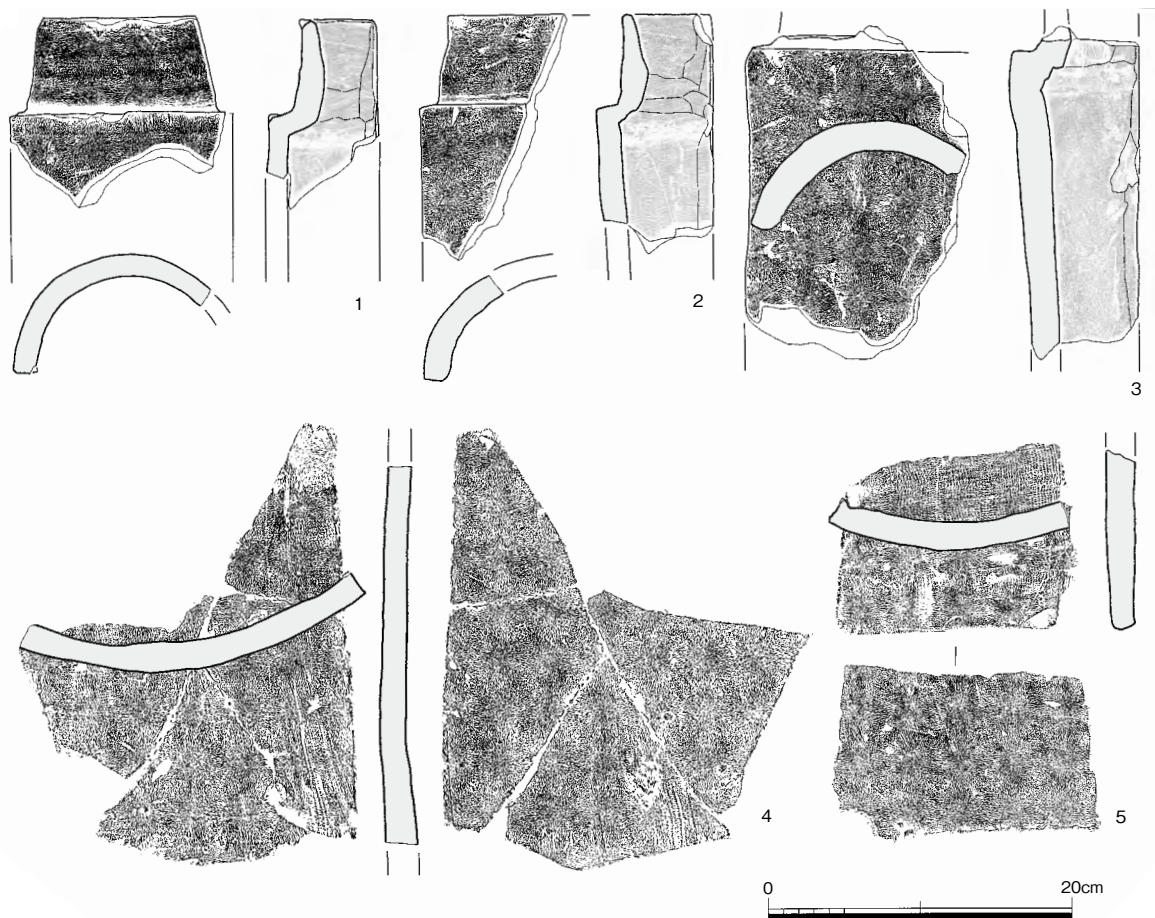


Fig. 98 KH48瓦溜 丸瓦・平瓦 (1:5)

3は、筒部凸面タテナデ。狭端沿いはヨコナデで、玉縁は欠損している。側面はヘラケズリで調整し、凹面側縁は面取りをしている。筒部凹面は未調整である。玉縁凹面基部はヘラケズリで調整する。2IB。

平瓦は、合計で18.0kgである。

4は、凸面タテナデ。狭端がわずかに残存する。側面は分割後未調整で、凹面側縁広端よりに分割界点が残る。凹面は部分的に強いタテナデ調整をおこなう。1IA3類、飛鳥前期にあたる。

5は、凸面タテナデ。広端沿いを幅5cmほどヨコナデ。側面は分割後未調整であり、凹面側縁に分割界点が残る。凹面は未調整である。1IA1類。(今井)

**KE47瓦溜** Fig.99は、89V。丸瓦が幅12cm、長さ9cmほど残存。丸瓦先端は未加工で、キザミの有無は不明。接合粘土は外面・内面ともに付加 (Fig.99写真)。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデ。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリ後、ナデ。また、側面はナデ、凹面側縁は丸く面取りをしている。筒部凹面の布目圧痕は、斜め方向に走る糸切

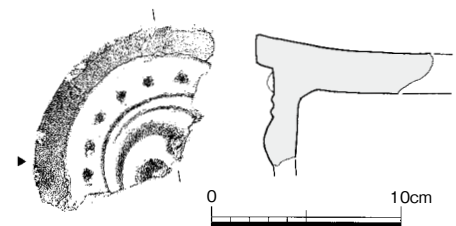


Fig. 99 KE47瓦溜 軒丸瓦 (1:4)・細部



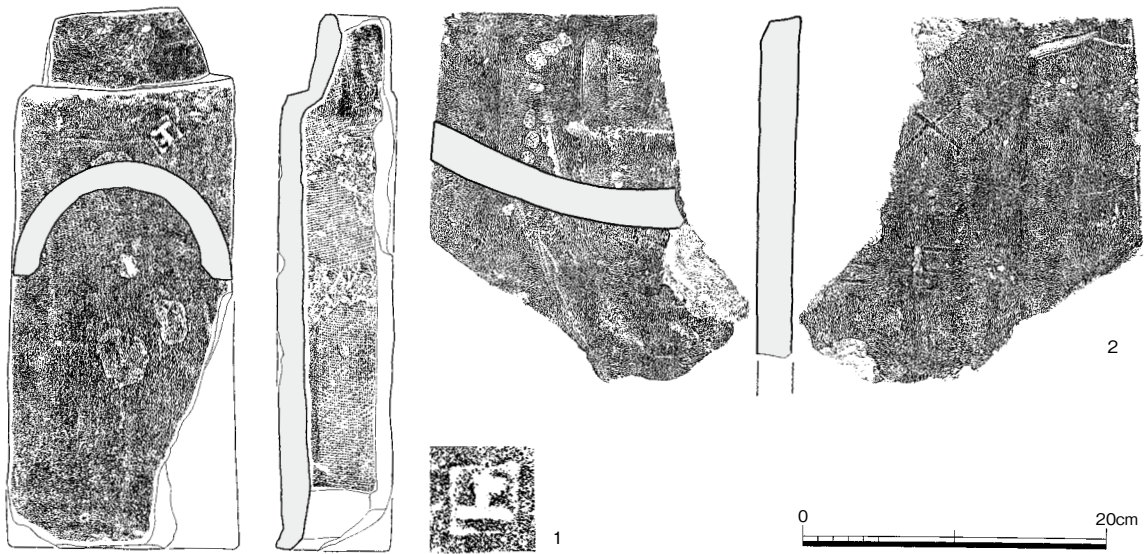


Fig. 100 KE 46新瓦溜 丸瓦・平瓦 (1:5)

り痕により不明瞭である。瓦当外縁角は面取りをしていない。丸瓦は厚さ2.1cm。(中川)

**KE 46新瓦溜** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、2点取り上げている。(中川)

丸瓦は、合計1.8kgである (Fig. 100)。

1は、筒部凸面がタテ縄タタキ。凸面狭端付近に「上」字の刻印がある。肩から玉縁凸面の調整は摩滅のため不明である。側面はヘラケズリで調整し、凹面側縁は面取りをおこなう。凹面は未調整であり、広端縁を面取りする。玉縁凹面側縁も面取りを施す。平安前期に属する。

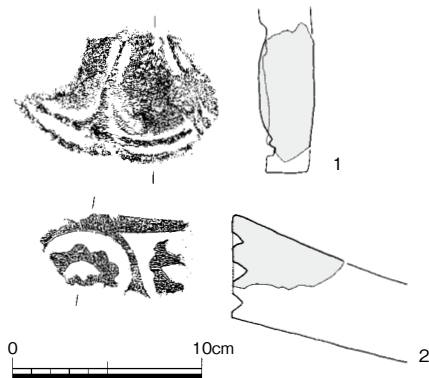


Fig. 101 KE 46瓦溜  
軒丸瓦・軒平瓦 (1:4)

また平瓦は、合計3.8kgを測る。

2は、凸面が「×」文と「三」文のタタキ後にタテナデする。側面と狭端面はヘラケズリで調整し、凹面は全面タテナデ、凹面狭端縁は面取りをする。鎌倉時代。(今井)

**KE 46瓦溜** 軒丸瓦・軒平瓦を取り上げている (Fig. 101)。1は7A。A aかA bかは不明である。焼成は軟質で全体に摩滅が激しい。瓦当下半部か。瓦当裏面は平坦。裏面、側面ともに調整は不明瞭である。

2は、206A。唐草文の中央にはピン穴があり、破損面の観察によって深さが0.5cmにも及ぶことがわかる。文様の輪郭にはケガキ線あり。凹面瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリで調整する。(中川)

**KC 45瓦溜** 土器類が取り上げられている (Fig. 102)。

1は、須恵器杯H身の小破片から復原したものの。立ち上がりは内傾した短いもので、身も浅くなった段階のもの。復原した口径は立ち上がり端部で11.6cmを測る。TK 43型式に相当しよう (田辺1966)。

2は、体部と平底の境に退化した小さな高台を貼り付けている。底部と体部の境は肥厚し、体部に向

かって薄くなる山茶碗の形態に似る。高台付け根外面に重ね焼きに由来する不要な粘土が貼り付いている。12～13世紀の製品であろうか。

3は、須恵器広口壺の口頸部。下端は壺胴部にほとんど接しているとみられる。残存部分ではほぼ直立しているが、上方では外反する勢いをみせている。残存範囲下半には格子目タタキを斜めにかけたようなかすれた波状文が観察できる。1と同様に、6世紀の須恵器の混入とみなせよう。

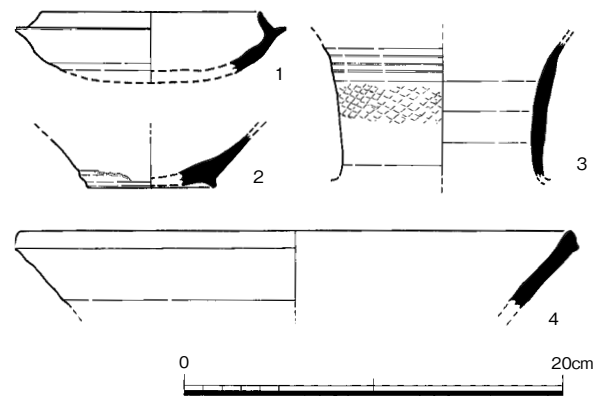


Fig. 102 KC 45瓦溜 須恵器 (1:4)

4は、須恵器鉢である。口縁端部は三角形にととのえられ、端面はそれほど広く拡張されていない。13世紀頃の製品か。復原口径29.2cm。(高橋)

瓦類も多量に取り上げている (Fig. 103～106、PL. 49)。

1は、3Bb。丸瓦との接合部にあたり、内面接合粘土ともに残る。接合方法片柄形b。内面接合粘土には、筒部凹面の布目圧痕が転写されている。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面は不定方向ナデ。瓦当面上房部分に掌文を認める。外縁上に範端痕を残す。

2は、3Bbか。丸瓦との接合部が残るが、内面接合粘土は剥離痕跡のみである。接合方法片柄形a。瓦当裏面は大部分剥離し、調整は不明である。側面には不定方向のナデを施す。瓦当面にはわずかに掌文を認める。外縁上に範端痕を残す。

3・4は、3C。3は、瓦当下半部。焼成は軟質で、全体的に摩滅がはげしい。丸瓦先端部のアタリがわずかに残る。接合方法は不明。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整はナデ。側面の調整は不明。瓦当外縁は大部分欠損しているが、残りの良い部分で範端痕はみられない。4は丸瓦との接合部を大部分欠いている。接合方法片柄形bか。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向のナデである。回転台を用いている可能性があるが、明瞭ではない。粘土が部分的に層状に剥離している。瓦当側面はナデ調整をしている。外縁上にわずかに範端痕を残す。

5～8は、4A。5は、丸瓦との接合部にあたる。接合方法片柄形bか。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデで、若干外反する。外縁上に範端痕は認められない。6は、丸瓦との接合部にあたる。接合方法片柄形b。内面接合粘土は部分的に残る。側面の調整はナデ。外縁上に範端痕は認められない。7は、瓦当裏面が全体に剥離。側面はナデで調整する。外縁上に範端痕は認められない。蓮弁先端は二重で、範ズレの可能性あり。弁端の珠点に範傷あり。8は瓦当下半部。裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデで、外反する。外縁上に範端痕は認められない。

9・10は、6Cか。9は丸瓦との接合部にあたるが、接合方法は不明。内面接合粘土は剥がれて痕跡のみかすかに残る。支持ナデツケは施されていない。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ。側面は全て欠損。10は外縁部が欠損しており、どの部分にあたるか不明。瓦当裏面には不定方向ナデ。

11は、6D。瓦当下半部か。裏面は不定方向ナデで調整する。側面は大部分欠損するが、わずかにナデが認められる。



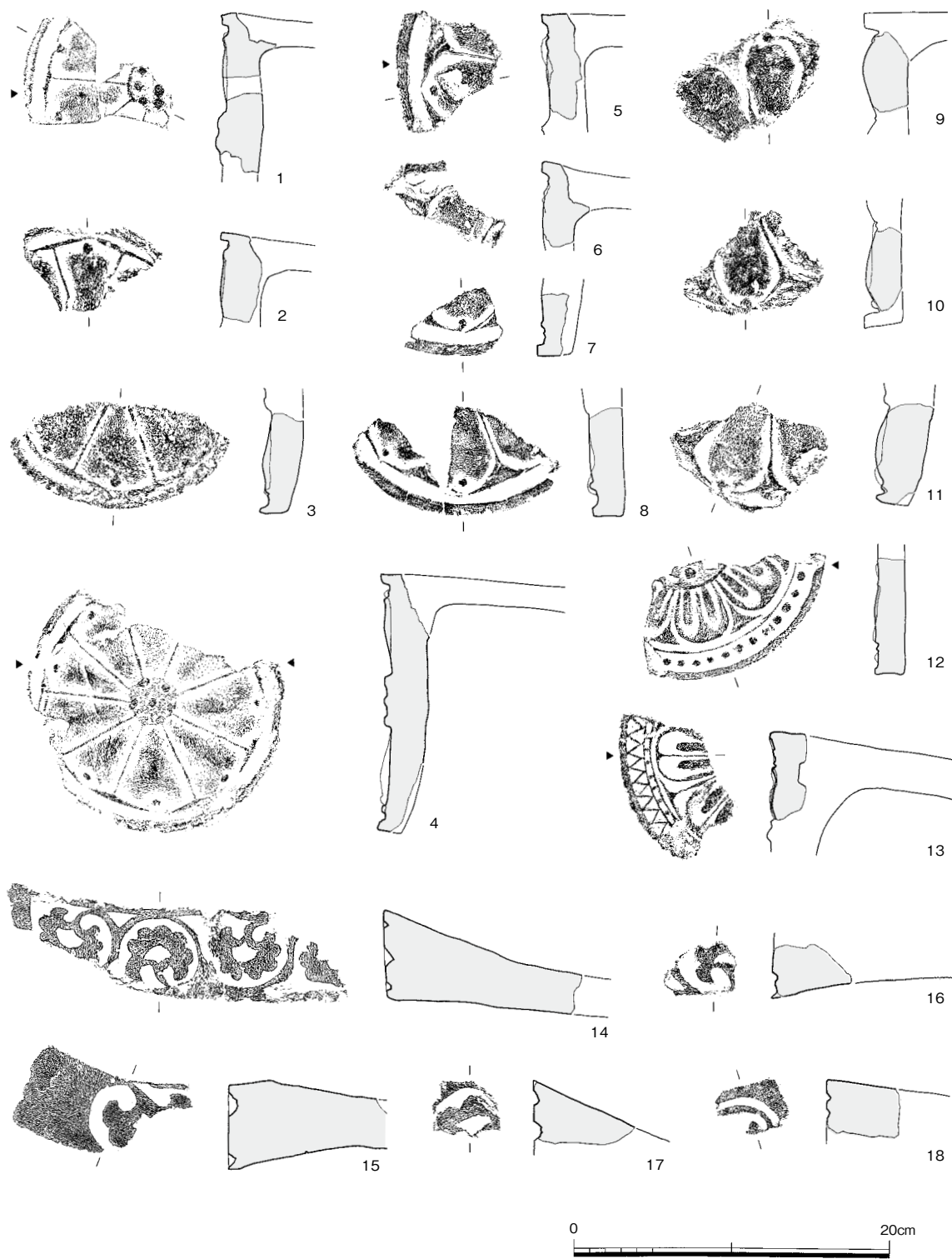


Fig. 103 KC 45瓦溜 軒丸瓦・軒平瓦 (1 : 4)

12は、37Db。瓦当下半部で、丸瓦先端部のアタリがわずかに残る。裏面は平坦で、調整は不定方向ナデで、周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデである。外縁上に範端痕が認められる。瓦当面蓮弁には掌文あり。

13は、53 A。丸瓦との接合部が残る。丸瓦接合溝は瓦当外縁から2cmほど内側に位置する。摩滅により調整は不明である。側面に残る範端痕から、範は側面にかぶるタイプと推測される。

14は、206 A。法隆寺所蔵品と接合。直線顎。唐草文中央にピン穴、文様の輪郭にケガキ線があり、右端の唐草文下部には彫り残しがある (Fig. 104 - 14)。凹面はタテ方向のヘラケズリ後にユピオサエを施しており、布目圧痕がわずかに残る。瓦当付近は斜め方向にヘラケズリ、凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ、瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリ、側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。

15は、208 B。直線顎。ピン穴、ケガキ線ともになし。凹面には杵板痕が残る。また、ほぼ全面に布目圧痕を残し、側縁付近のみタテナデで調整する。瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリで調整する。凸面は板状工具でヨコナデを施した後、ヘラ描き文を施す (Fig. 104 - 15、瓦当が上)。瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリ、側面はタテ方向のヘラケズリで調整し、凸面側縁はわずかだが面取りをおこなう。



Fig. 104 KC 45瓦溜 軒平瓦細部

16は、208か。直線顎。ピン穴、ケガキ線ともになし。凸面瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリで調整する。

17は、210か。施文前にヨコナデ。凹面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整し、瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリ後、瓦当から幅2cmほどをヨコナデで調整する。

18は、211 Aか。凹面はタテ方向のヘラケズリ。凹面側縁は幅1cmほど面取りをおこない、側面はタテ方向のヘラケズリ後、ナデ調整する。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片2点を取り上げている。(中川)

丸瓦は、合計6.5kgである。

19は、筒部凸面ナデ調整。狭端から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデ、側面はケズリで調整し、筒部凹面側縁は面取りをおこなう。凹面は未調整であり、玉縁凹面はヨコナデ後、側縁と基部をヘラケズリで調整する。2IB、飛鳥前・中期。

20は、筒部凸面狭端から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデ。側面は2度のヘラケズリをおこない、筒部凹面側縁はナデ調整、凹面は未調整である。凹面玉縁接合部には紐状の窪みがある。玉縁凹面はヨコナデ後、側縁と基部をヘラケズリで調整する。2IB。

21は、筒部凸面ナデ。狭端沿いから玉縁凸面にかけては回転ヨコナデで調整する。側面は欠損しており、凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ後、基部をヘラケズリで調整する。2IB。

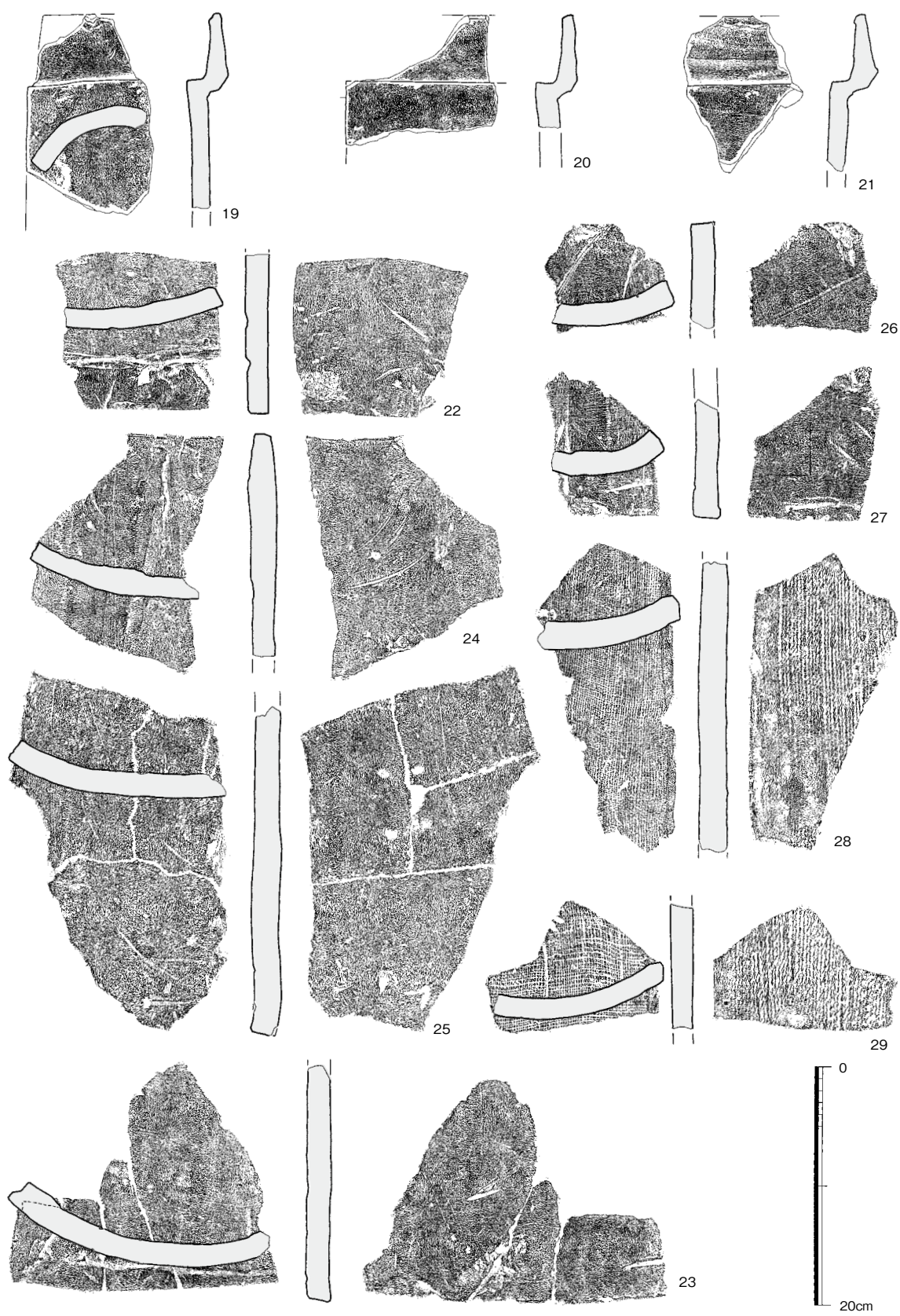


Fig. 105 KC 45瓦溜 丸瓦・平瓦 (1:5)



平瓦は、合計45.8kgである。

22は、凸面タテナデ。側面は欠損しており、広端面はヨコナデ、凹面は部分的にタテナデで調整する。端部より3cmほどのところには布端痕が残る。1IA2類、飛鳥前期に属する。

23は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整、凹面左側縁沿いを幅広くヘラケズリで調整する。広端面はヨコナデ調整、凹面は一部ナデ調整で粘土板合わせ目（S型）、布端痕が残る。凹面中央には径1cmほどの窪みが3点、5.5cmの等間隔で並ぶ。ただし、広端からの距離は一致しない。1IA2類に相当する。

24は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整、狭端面も未調整である。凹面は部分的にタテナデ、特に粘土板合わせ目（S型）を狭端から広端方向へナデツケする。1IA2類に属する。

25は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整、広端面は調整不明である。凹面は部分的に強いタテナデで調整する。1IA3類。

26は、凸面は斜行ナデ。分割後、破面をヘラケズリで調整、凹面側縁を軽く面取りする。狭端面はヘラケズリで調整する。凹面には杵板痕跡が残り、一部タテナデで調整する。1IV、白鳳時代に属する。

27は、凸面ヨコナデ。側面は分割後、破面をヘラケズリで調整し、凹面側縁を軽く面取りする。広端面はヘラケズリで調整する。凹面は一部タテナデで調整し、杵板痕跡が明瞭に残る。1IVに相当する。

28は、凸面はタテ縄タタキ。端部を欠いており、側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁は2度の面取りをおこなう。凹面は粗い布目圧痕で未調整である。平安時代。

29は、凸面はタテ縄タタキ。端部を欠いており、側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁は幅のある面取りをおこなう。凹面は未調整で、粗い布目圧痕が残る。平安時代に属する。

道具瓦は1点を取り上げている（Fig.106）。

30は、鷗尾の胴部側面部分。側面はヨコナデ後に横位の細い沈線を描く。沈線の間隔は8.5cm。そのほか底部と頭部面の一部が残存している。裏面は軽いナデ調整。『至宝』の鷗尾5で、飛鳥中期に属する。（今井）

**KC45瓦溜北凹み** 土器を取り上げている（Fig.107、PL.34）。

土師器皿はいずれも小皿に相当し、1はいわゆるへそ皿で口縁部は大きく広がり、底径の2倍以上の口径をもつ。口径8.8cm、底径3.7cm、器高1.0cmを測る。胎土は淡褐色で15～16世紀頃のものと思われる。2は、平底に一段ナデの口縁をもつ小皿である。

3は1にくらべて口縁は短い、底部は上げ底に作られており、4の方がさらに上げ底が顕著となっている。2～4は白色系土器に相当する。全体的にみて14世紀頃の年代を与えうる。2は口径8.0cm、器高1.4cm、3は口径7.5cm、器高1.0cm、4は口径6.8cm、器高1.3cmを測る。

5は、瓦器播鉢である。片口部分の一部を残している。おろし目は8本でそれをかなり疎に付けてあ

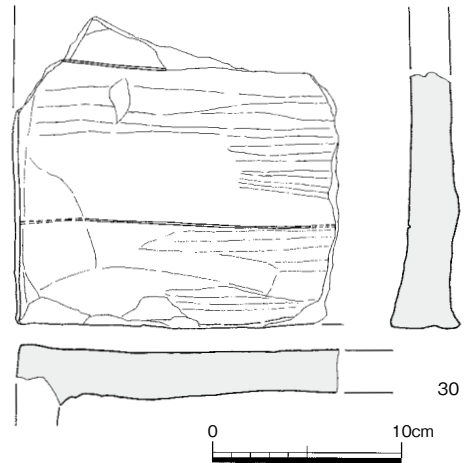


Fig. 106 KC45瓦溜 道具瓦（1：4）



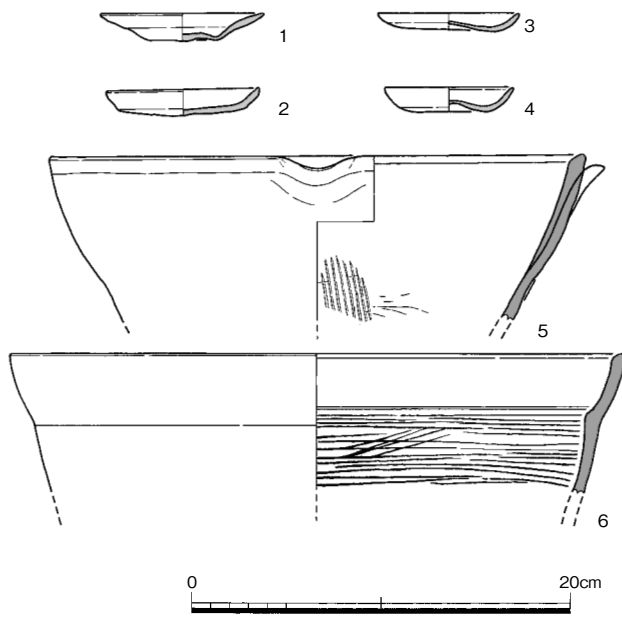


Fig. 107 KC 45 瓦溜北凹み 土師器・瓦器 (1:4)

TR 51 瓦溜 瓦類を取り上げている (Fig. 108 ~ 110)。

1は、6 D。丸瓦との接合部にあたるが、接合部をほぼ欠いている。接合方法は不明で、支持ナデツケは施されない。裏面は平坦で、調整は丸瓦凹面に沿ったナデ。側面は欠損している。

2は、37 C。法隆寺所蔵品と接合する。接合方法楔形b。内面接合粘土は剝離して残っていない。支持ナデツケはない。接合部で丸瓦先端があたる部分にはナナメ方向のキザミ、凹面があたる部分にはタテ方向のキザミが転写される (Fig. 109)。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデ。側面はナデ。外縁上には範端痕。線鋸歯文帯に範ズレがみられる。

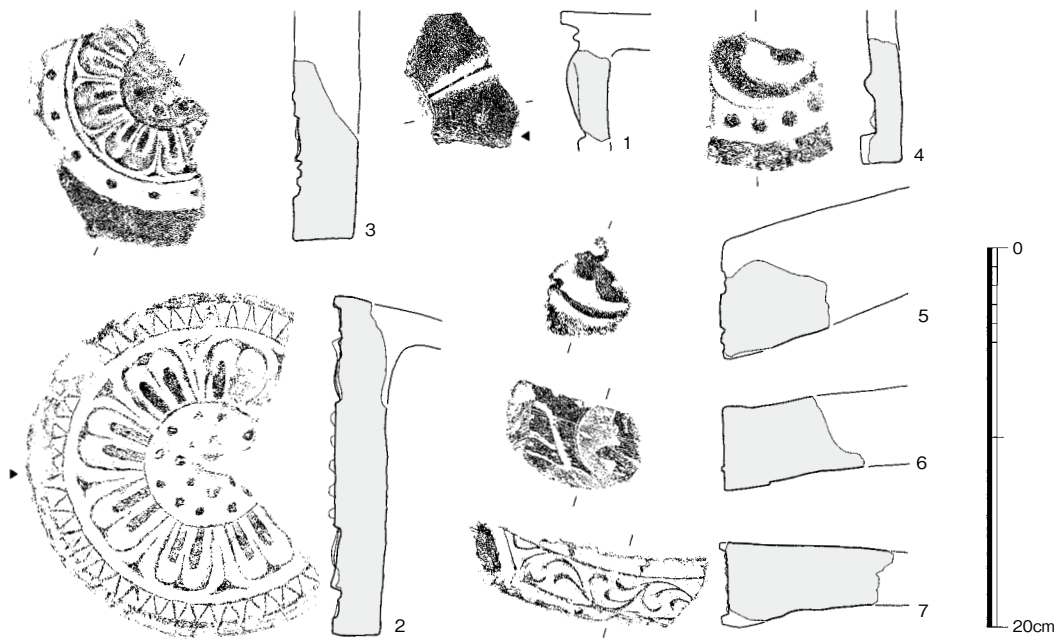


Fig. 108 TR 51 瓦溜 軒丸瓦・軒平瓦 (1:4)

たと思われる。ほぼ直線的に開く体部の口縁は他の例と異なり内傾する面をなす。体部外面はナデやオサエの痕跡しか認められない。畿内では瓦器挿鉢は14世紀後半以後みられるようになる。

6は、瓦器鍋で鉄鍋の形態を移した器形とされる。この種の器形は13世紀以後、16世紀までみられる (菅原1989)。口縁は直線的に開く体部から屈曲部をもって内湾気味に開いて、端部を単純に収めるもので、内面の屈曲部より下位には横方向のミガキが施される。また、内面の屈曲部のすぐ上に一条の沈線がめぐる。口径は32.4 cmに復元される。(高橋)

3は、48 A。焼成は軟質で全体的に摩滅。瓦当下半部にあたるか。裏面は平坦で調整は不明瞭である。側面にはかすかにナデが認められる。

4は、91 F。瓦当下半部にあたる。裏面は平坦。裏面、側面ともに摩滅しており、調整は不明瞭である。

5は、213 B。右側面を残す。側面、凸面の調整は摩滅のため不明瞭である。

6は、214 B。左側面を残す。瓦当面はヨコ方向のヘラケズリ後、施文。凹面には布目圧痕が残るが、側面・瓦当付近はナデ消す。凸面の調整はヨコナデ。側面の整形は粗雑で、調整は不明瞭である。

7は、246 A。曲線顎。凹面は大きく破損するが、布目圧痕が残り、瓦当付近のみヨコナデをおこなう。凸面はタテ縄タタキ。側面はタテナデを施す。(中川)

丸瓦は、合計1.1 kgである。

8は、筒部、玉縁とも凸面は回転ヨコナデ、方向は不明。凸面の肩部が剝離しており、筒部から玉縁まで成形したのちに、肩部を貼り足したことがわかる (Fig. 110)。側面はヘラケズリで調整する。凹面は未調整で、筒部から玉縁にかけて布目圧痕が連続する。玉縁凹面基部には布をしぼる紐の痕跡が残る。2 II Aa、白鳳前期に属する。

平瓦は、合計で2.4 kgあったが、細片のみであった。(今井)

#### その他の遺構

**SX 7097** 2-6区南端にある凹みで、南北1.50 m、深さは南端で0.84 mである (Fig. 17)。

軒丸瓦は、72 A (Fig. 112)。瓦当下半部にあたる。断面観察により、瓦当の成形粘土を2回に分けて範詰めたと推測される。裏面はほぼ平坦で、不定方向ナデが認められる。側面は、不定方向のナデで調整する。瓦当面には離れ砂が付着している。

2は、215 Aの大型品。焼成は軟質で、全体的に摩滅している。凸面で斜めに剝離がみられ、粘土板合わせ目 (Z型) の可能性がある (Fig. 111)。凹面にはかすかに布目圧痕をとどめる。瓦当付近が一段高くなっているのは、範の押圧時に生じたと考えられる。凸面の調整は不明瞭である。

3は、240 Ab。直線顎。凹面は瓦当付近まで布目圧痕を残し、未調整。凹面側縁は4 mmほど面取り。凸面はナデか。側面はナナメ方向にナデ。(中川)



Fig. 109 TR 51瓦溜 軒丸瓦細部

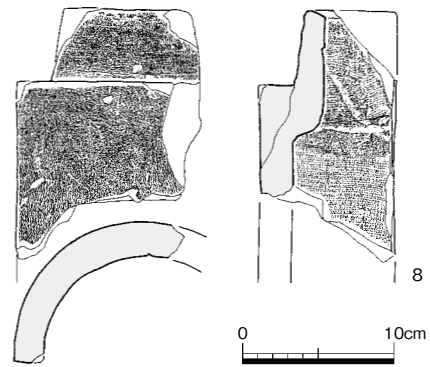


Fig. 110 TR 51瓦溜 丸瓦 (1:5)



Fig. 111 SX 7097 軒平瓦細部

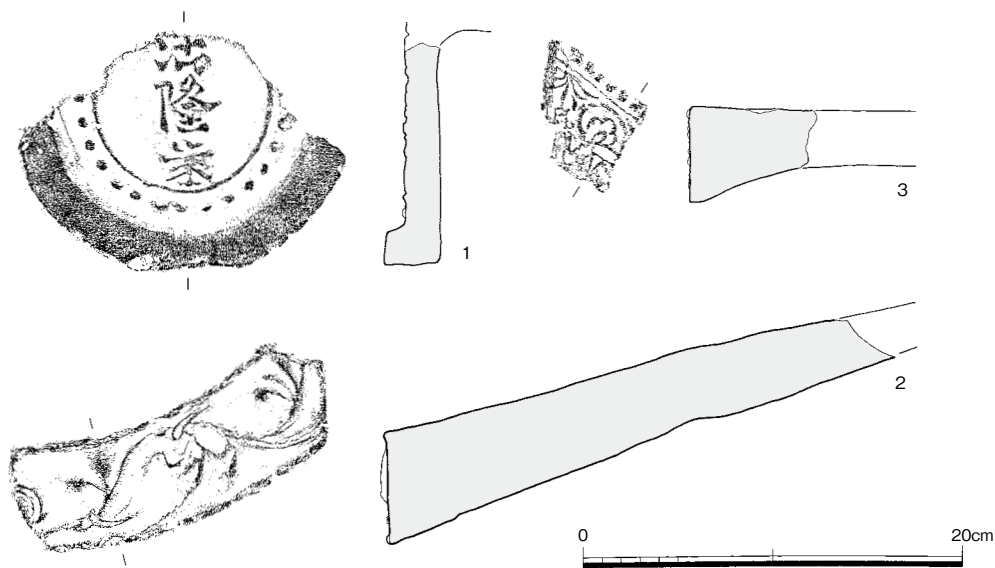


Fig. 112 SX 7097 軒丸瓦・軒平瓦 (1:4)

**TQ 47瓦敷** 丸瓦・平瓦を取り上げている (Fig. 113)。このうち、丸瓦は、4.6kgあるが、細片のみであった。

また平瓦は、合計28.5kgである。

1は、凸面タテナデ。狭端面はナデで調整している。側面は分割後未調整であり、凹面側縁に分割界点がある。凹面は未調整であり、杵板痕跡が残る。凹面広端縁は幅1.5cmほどをヨコナデ。1IA 1類、飛鳥前期に属する。

2は、凸面タテナデ。広端面はヘラケズリで調整し、側面は分割後未調整である。凹面側縁には分割界点がある。凹面は部分的にタテナデで、布端痕が残る。凹面広端縁は幅1cmにヨコナデが施される。1IA 2類。

3は、凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデで、杵板痕跡が残る。1IA 2類。

4は、凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデで調整する。1IA 2類。

5は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整であり、狭端面はヘラケズリで調整する。凹面は広端から狭端への強いタテナデで、部分的に布目圧痕が残る。1IA 3類。

6は、凸面タテナデ。側面、端面は欠損している。凹面は部分的に強いタテナデで調整する。1IA 3類。

7は、凸面は摩滅のため調整不明である。狭端面はヨコナデで調整し、側面は分割後未調整である。凹面は布目圧痕がほとんど残らず、粘土板合わせ目がある (S型)。飛鳥時代に属する。

8は、凸面端部沿いを幅4cmほどヨコナデする。側面は欠損している。凹面端縁は幅3cmほどの明確なヨコナデ、凹面は強いタテナデ、凹凸面のヨコナデ後に端面をヨコナデ調整している。1IA 3類。

9は、凸面はナデ。端面と側面はヘラケズリで調整する。凹面は強いタテナデで、端縁を幅2cmほどヨコナデする。飛鳥時代に属する。

10は、小型品残片でSD 7040出土用途不明品 (Fig. 63 - 50) と同類である。一方に向かって幅



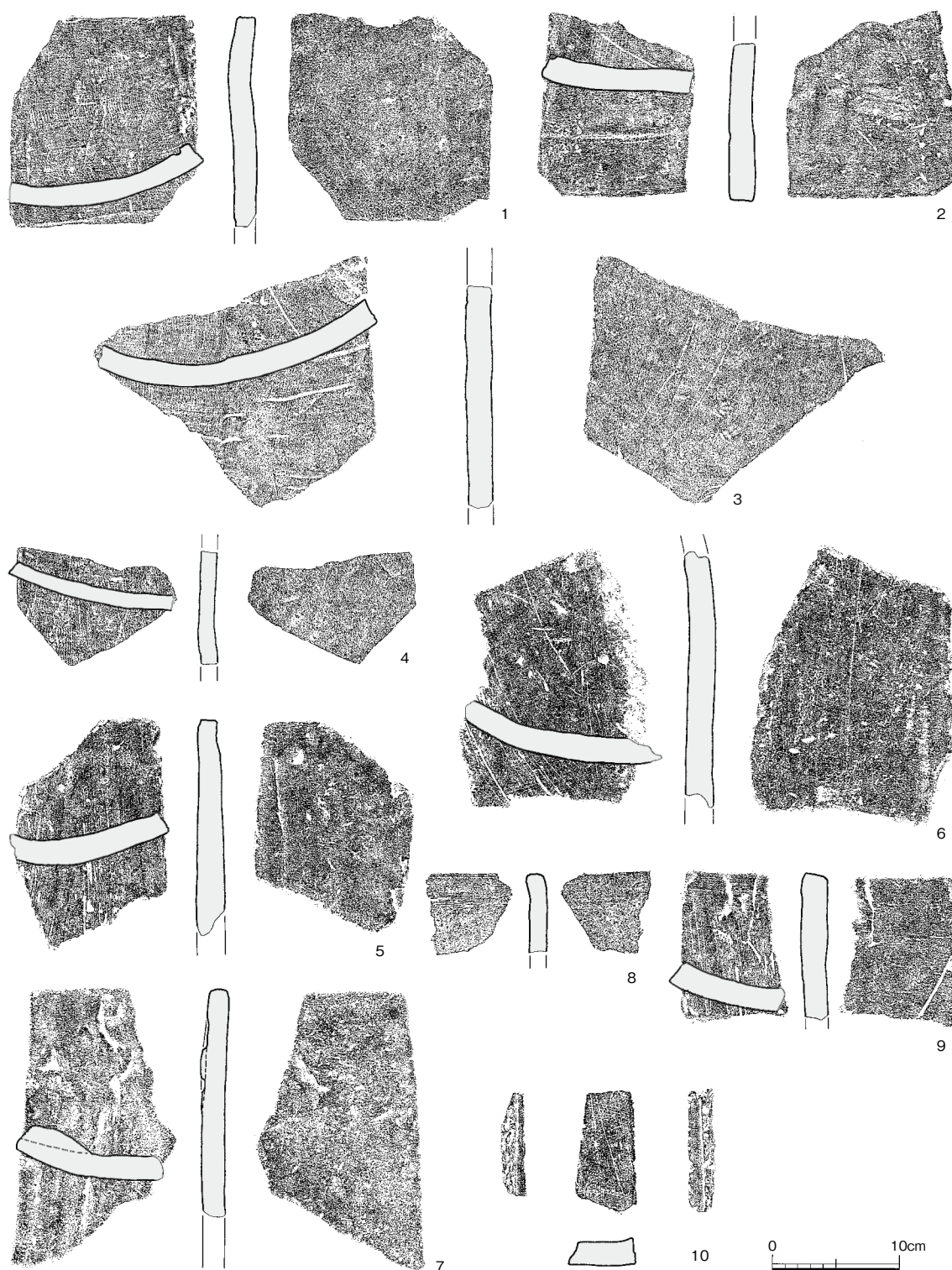


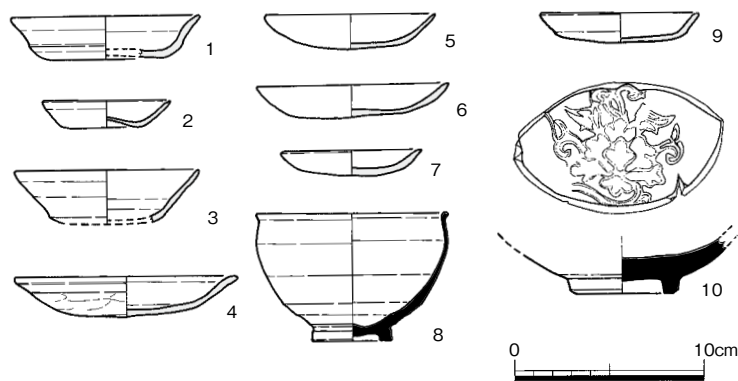
Fig. 113 TQ47瓦敷 平瓦・用途不明品 (1:5)

を縮小させ、凸面はタテナデ、両側面は分割後未調整であり、凹面は布目圧痕を残す。最大幅5.5cm、残長10.0cm、厚さ1.9cm。1IAの平瓦を使用して製作したと考えられる。飛鳥前期に属する。(今井)

**KL55凹み** 土師器皿7点と肥前系陶磁器椀1点を図化しえた (Fig. 114-1~8、PL. 35)。

1は、平たい底部と段をもってヨコナデ調整された体部が立ち上がるもので、復原された口径10.0





cm、高さ2.3cmを測る。赤褐色の胎土で、残存率も悪い。12～13世紀代の製品と思われる。

2・3は、いずれも白色系の胎土で3はとくに白い。2はいわゆるへそ皿で、口径6.8cm、器高1.5cm、1よりは新しく14～15世紀頃のものである

**Fig. 114** KL55 凹み・KC46北落ち込み 土師器・陶磁器（1：4） うか。3は口径9.6cm、深手の大皿に復原できるもの。平らな底部からほぼ外側45度の角度で体部が開く。体部はヨコナデし、口縁端部は薄く仕上げる。15世紀に下るものとみられる。

4～7は、いずれも水籤した精良な胎土の製品である。

4は、底部と体部の境が不明瞭なもので、口縁部付近のみヨコナデによって整えており、口縁端部を少し外反させ、その部分が若干肥厚する。口縁以下の部分はナデやオサエの痕が残る。16世紀以後のものであろう。口径11.8cm、器高2.2cmを測る。5と6は、薄手の小皿で、6が口径9.0cm、器高1.9cm、7が口径10.2cm、器高1.8cmである。これも底部から口縁部にスムーズに移行する器形をもち、口縁端部を薄く整える。7は、小型ながら厚手の単純な器形で、全体をナデにより仕上げている。口径7.4cm、器高1.4cmの小皿である。いずれも近世に下るものであろう。

8は、唐津焼とみられる椀。断面ほぼ正方形の輪高台に半球形に近い胴部を載せるもので、口縁端部のみ外側へ短く折り返し丸めている。体部下半にはロクロケズリ痕が明瞭である。淡灰褐色の胎土で、内面全面と外面上から3分の2の範囲には薄く灰緑色の釉を漬け掛けしている。器壁は薄く17世紀前半のものだろう。口径9.9cm、底径4.2cm、器高6.8cmである。（高橋）

**TO37中央凹み** 大和H1型の土師器釜を取り上げている。肩部の長さが比較的長く、口縁端部の折り返しは小さい。体部はあまり球形に膨らまず、直線的なプロポーションをみせる。14世紀のものであろう。

**KC46北落ち込み** 土器を取り上げている（Fig.114-9・10、PL.34）。

9は、土師器小皿で比較的丸みをもつ底部に短い口縁部がとりつく。一段のヨコナデによって、底部と体部の境にわずかな段がつく。口径8.4cm、器高1.6cmを測る。白色系の胎土で14～15世紀のものであろう。

10は、白磁椀の底部破片である。断面が外側の隅を面取りした五角形の削りだし輪高台を有し、鉢ないし椀形の器形になるものと思われる。底部中心付近の器壁は1.2cmと厚く、重い。内面にはスタンプによる陰刻で複雑な文様を付加している。表現は細く流麗な線によるものではなく、しっかりとした幅のある陰刻である。この文様は、中心にクローバー状の文様単位を十文字に配し、渦のように巻く蔓状の文様を左右に、角状の文様とからまりながら蔓状に伸びる文様を上方に左右対称に続けるというものだが、どのような全体像になるかは不明である。この内面のすべてと、外面の高台を少し離れたところまで透明な釉をかけている。付け掛けしたときにできる露胎部分との境界が外面にはっきり確認で

きる。底径5.0cm。(高橋)

#### 包含層

**バラス土層 (含礫暗褐色土層)** バラス土層は、1939年の調査では、金堂伽藍に伴う「小石敷」とされており、金堂の周囲に幅12尺で廻ると判断された。今回の調査においても金堂基壇北側の2-12・17区および南側の1-2区、2-15・17・18区で検出されている。金堂周辺に限って分布しており、塔基壇周囲を含め、他には分布しない。バラス土層は1-2区1939北溝2東壁面 (Fig.41)、2-18区西壁面 (Fig.45) では第2整地土層の直上に、また、2-17区西壁面 (Fig.44) では第2整地土層の上に間層 (暗褐色砂質土層) を挟み、その上に堆積する。調査開始当初から、このバラス土層の検討が重要課題の一つであった。日誌によれば、開始間もない1969年10月2日、「石田博士のトレンチを確

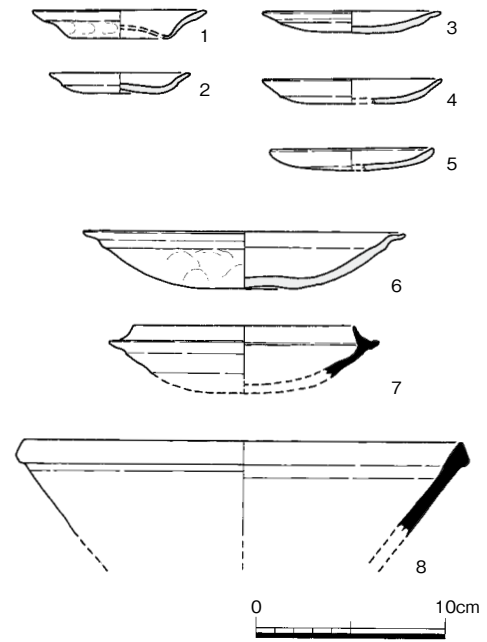


Fig. 115 バラス土層  
土師器・須恵器 (1:4)

認するとともに、「石敷」を追求する」と、記録されており、当初からその実体解明を目指していたことは明らかである。実際、バラス土層をめぐる特に綿密な検討がなされている。第2次調査では、この礫層の下からも中世の土器が出土しており、また、この下層の第2整地土層面で検出した穴 (遺構) から平安時代より下の時期の土器が出土している。たとえば1969年10月12日の日誌には「KB45でバラスの下から中世の燈明皿を検出した」、あるいは1969年10月14日の日誌に「バラス土を除去。黄褐色土面に多数の小穴を検出。バラス土中及び穴から出土する土器は、平安後期～鎌倉初期のものが多く見られる」などとある。以上の検討からも、このバラス土層は若草伽藍創建当初の遺構とは結びつかない。しかしその分布状態から、バラス土層の内側にバラスのない範囲があり、この範囲がほぼ掘込地業の範囲に一致している点に注意したい。バラスがある原因については、不明としなければならないものの、出土遺物の検討によってバラス土層を敷いた年代が14～15世紀を遡らないので、その頃まで若草伽藍の金堂基壇がある程度の高まりとしてあった可能性を指摘できよう。(深澤)

**KB45バラス土下** 土器を取り上げている (Fig.115-1・2)。

1は、口縁部が外反しながら広がるへそ皿で、体部外面に指頭圧痕が顕著にみえる。赤褐色の胎土で、他の地点でも出ている同種の土器と同様14～15世紀頃のものともみられる。口径9.0cm、器高1.5cm。

2は、短い口縁をもつ一段ナデ調整の小皿で、白色系の胎土をもつ。底部がやや上げ底になる小皿で、1に共伴したとみなしてさしつかえない。口径7.4cm、器高1.1cm。(高橋)

**KA46・KB45・46バラス** 鉄滓は、2点が取り上げられている。大小あり、大きいものは477.4gをはかり、内実質である (PL.31-d、Tab.7)。(次山)

土器も出土している (Fig.115-3～8)。

3～5は、各種小皿。3は「て」の字状口縁の小皿が摩滅により断面の輪郭が甘くなったもの。口径9.2cm、器高1.2cm。橙褐色の胎土で、6とほぼ同時期のもの。

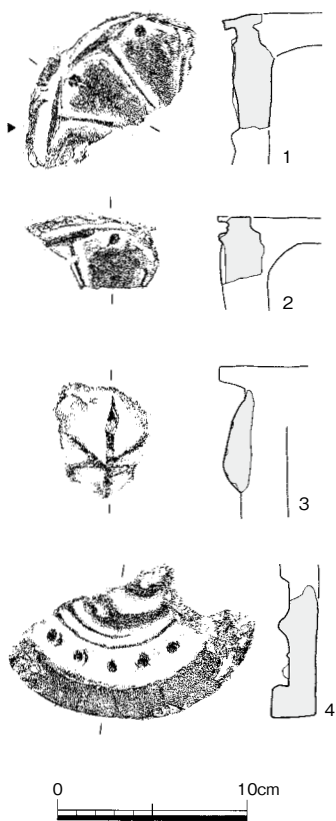


Fig. 116 バラス土層  
軒丸瓦 (1:4)

4～5は、それより後出する型式で赤褐色系の土器。4の口径9.4 cm、器高1.3 cm、5は口径8.6 cm、器高1.2 cm。底部に指頭圧痕がよくみえる。

6は、古代の杯Aの系譜を引く土師器大皿。口径は17.0 cmで器高3.0 cmと浅い杯形。口縁端部は強めのナデを施し、端部は軽くつまみ上げる。口縁を除く体部外面はユビオサエが顕著に残る。橙褐色の胎土で器壁は荒れている。11世紀に遡るとみてよい。

7は、古墳時代の杯Hの小片を図化したもの。先のKC 45瓦溜出土品とほぼ同様なものである。そして8が須恵器鉢。拡張された口縁端部が若干下方に垂れる特徴をもち、14世紀に下るものであろう(宇野1984)。(高橋)

次に瓦を報告する (Fig. 116)。

1は、3Bb。丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好に残る。接合方法片柄形b。丸瓦先端の一部が瓦当に貼りついて残る。内面接合粘土は剝離して痕跡のみである。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらむ。調整は不定方向ナデ。側面はナデ。外縁上に範端痕を残す。

2は、3Bbか。丸瓦との接合部にあたる。内面接合粘土は残っていない。接合方法片柄形a。裏面は剝離しており、調整は不明である。側面はナデ。外縁は欠損しており、範端痕の有無は不明である。

3は、33A。焼成は軟質で全体的に摩滅している。裏面は剝離しているため、調整は不明であり、側面も欠損している。

4は、89V。瓦当下半部にあたる。裏面は平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデである。周縁は回転ナデ、側面はナデが施される。外縁角に面取りはほとんど施さない。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、3点取り上げている。(中川)

**KB 50 バラス上面** 鉄製品を、2点取り上げている。うち1点は完形の角釘で、長さ5.0 cm、幅0.8 cm。頭をつくり出しのない平釘。(次山)

**炭化物層・木炭層** 木炭層と炭化物層は、調査途上にある1968年8月3日と同年9月1日の調査日誌によれば、土坑と認識されているが、その後作図された図面をみる限り、1-10区と1-11区にまたがって検出された包含層とされており、東に低い傾斜堆積をなしている (Fig. 29)。東西方向で、5.5 mにわたって検出されている。西で厚く20 cmあり、東にいくにしたがって次第に薄くなり、土層としては消滅する。壁面原図には、1-10区は、「黒色土 (炭火物層)」とし、「瓦 (古い)」、「フイゴ口、鉄滓、木炭片等、焼土層」と注記する。1-11区では、「灰色粘土 (木炭片、遺物を含む)」とし、「遺物は地山にはりついている」と注記する。なお壁面原図の1-10区と1-11区の間にある畦畔部分に、赤線で東西の土層の対応が示しており、これによるとここに挙げた両層は同一の層位と認識されていたことが明らかである (PL. 27-2)。(深澤)

遺物は、まず鍛冶関係のもので、鞆羽口、半筒形土製品、炉壁片、鉄滓が出土している (Fig. 117)

～119)。

1～8は、轆羽口である。8点を図示したが、このほかに小片が13点ある。全体の形状は、先端にむかってわずかに径を減じ基部が広がるもので、いずれも共通の特徴が認められる。もっとも遺存状態のよい1で、残存長17.8cm、外径約7.5cm、内径約3.4cmを測る。外面は長軸方向に沿った幅2cmほどの匙面により構成されるが、簾状の明瞭な痕跡は認められない。2では、親指の指腹の圧痕を2箇所に残し、3では、ひねったような粘土の皺を器面にとどめる。表面には被熱による変色がみられ、先端から、黒灰色の溶融部、灰褐色、灰白色、橙褐色となる。胎土は、全体に粘土質で大粒の砂粒を含む。



Fig. 117 炭化物層・木炭層 鍛冶関係遺物

9および10は、半筒形の土製品である。同一個体片と考えられる2点を図示した。残存長17.5cm、高さ約9cmとなる。外面の変色の様子が羽口と共通し、灰褐色、灰白色、橙褐色となることから、灰褐色の側を先端、橙褐色の側を基部とする。長軸方向で厚さが異なり、基部は厚みを減じながらわずかに外反する。また両側縁は薄くおわる。外面は長軸方向に沿ったナデ調整をおこない、部分的に粘土を塗り足した箇所がある。灰白色部には帯状の器面の荒れが認められ、内面は全体が著しく風化している(PL.31-b)。羽口に較べ胎土中の砂礫の粒が大きく含有量も多い。この半筒形品は、全体の形状や被熱の様子から、羽口と組み合わせられて用いられたと考えられる。間宮林蔵の口述をもとに編纂された『北蝦夷圖説』には、「鍛冶図」として、羽口先端および炉にかかる位置にアーチ状の覆いが描かれており、本資料の性格を考えるうえで参考になる。

11は炉壁片で、6cm四方、厚さ3.0cmの三角柱状の小片である。強く熱を受けたと考えられる面を内面とすると、内面は暗赤色でガラス化した溶融状態がみられる。外面は暗灰色を呈し、気泡もわずかである。胎土内には藁スサの痕跡をとどめる箇所が認められる。

鉄滓は、全体で17点出土した(PL.32、Tab.7)。大きさは3cm未満のものから、15cmほどのものまでがある。このうち、14～17は、底側に曲面をもち浅い皿状を呈する椀形滓である。1は表面にガラス質の溶融箇所があり、10・15・16には、底面に灰白色を呈する炉底土の溶融固着層の付着が認められる(PL.31-c・32-b)。また、2・4・12・13・17は、重量感のある内実質の滓である。(次山)

TO 34とTO 35といった隣接する調査グリッドからそれぞれ以下の土器が出土している。

TO 35炭化物層出土土器で図化しえたのは土師器2点と須恵器1点である(Fig.120)。1は、口縁



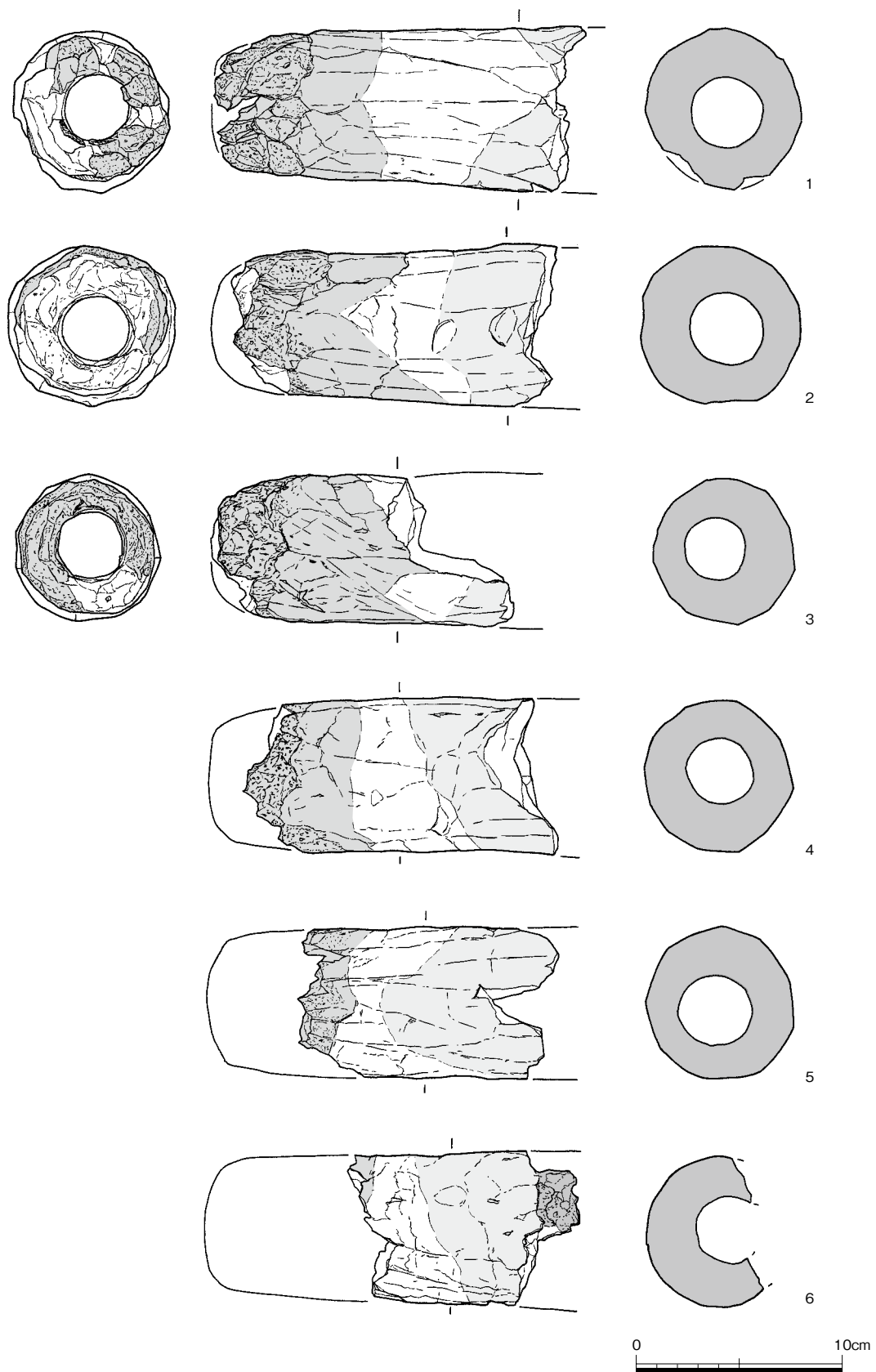


Fig. 118 炭化物層・木炭層 鍛冶関係遺物 1 (1:3)

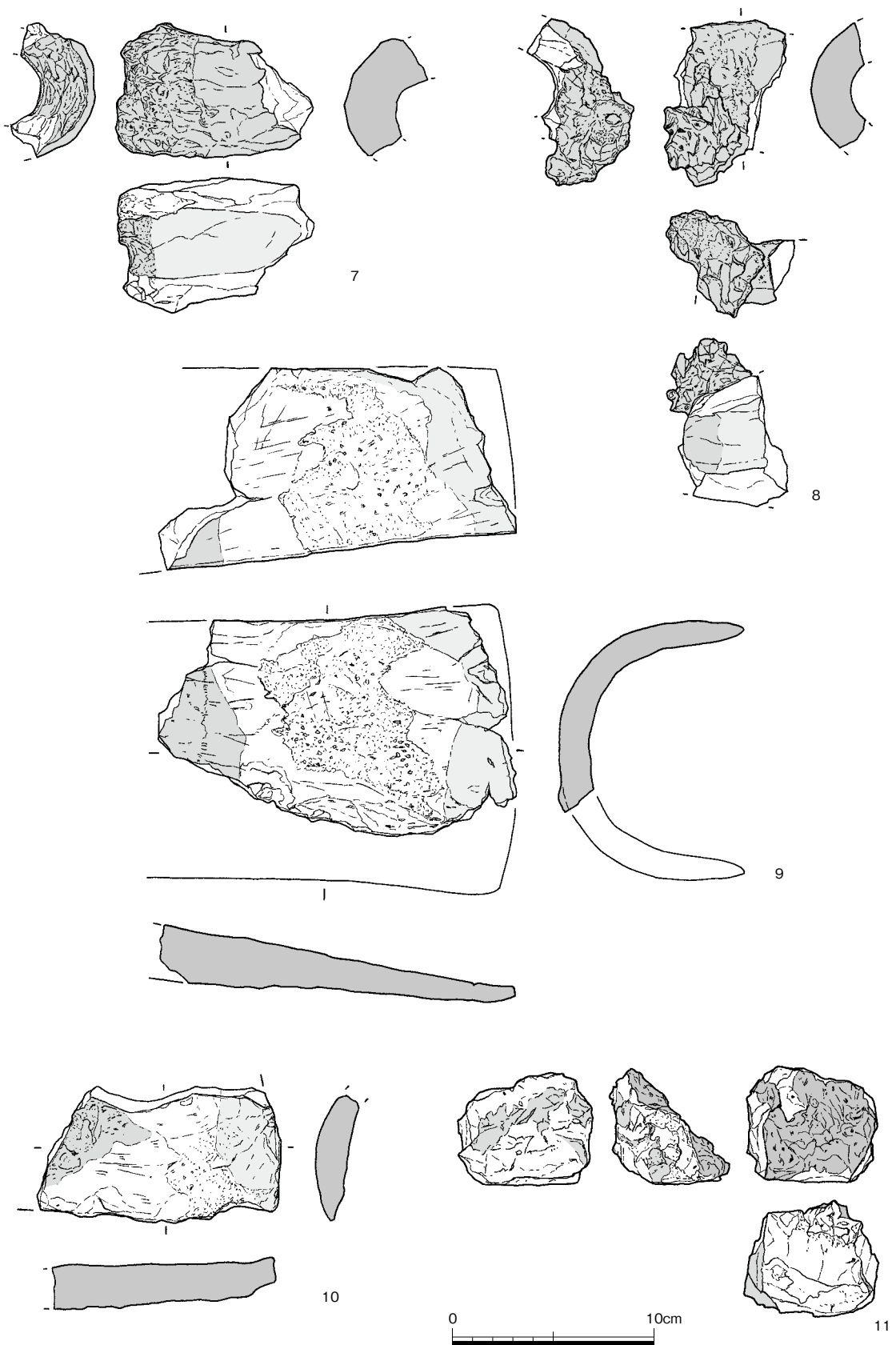


Fig. 119 炭化物層・木炭層 鍛冶関係遺物 2 (1:3)

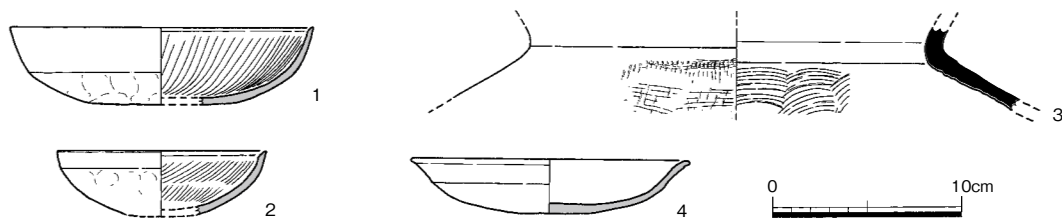


Fig. 120 炭化物層・木炭層 土師器・須恵器 (1:4)

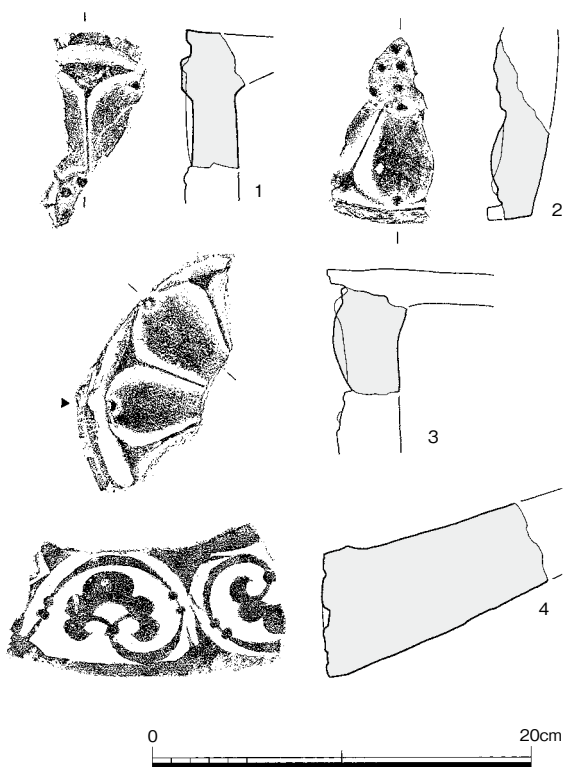


Fig. 121 炭化物層・木炭層 軒丸瓦・軒平瓦 (1:4)



Fig. 122 炭化物層・木炭層 軒丸瓦細部

1は、4A。丸瓦との接合部が残る。接合方法は、片柄形 a か b。内面接合粘土は大部分が剥離し、わずかに残る部分にヨコナデが認められる。瓦当裏面はほぼ平坦で、ナデが認められる。側面の調整はナデであり、瓦当縁端に範端痕は認められない。

2は、6Db。瓦当下半部が残る。裏面は中央にかけて高くふくらみ、中心寄り是不定方向ナデで、

端部に内傾する面をもち、丸味のある杯形の体部をもつ杯Cである (PL.34)。口径は16.0cm、器高4.1cmを測る。外面下半にはユビオサエの痕跡が残るが、内面には一段の放射状暗文を施してある。一方、2は径11.0cmの小型の杯C小片から図化したものである。内面に二段の放射状暗文がかろうじて確認できる。1・2とも、橙褐色の胎土の製品である。

このほかにも放射状暗文をもつ別個体の破片もあるが、図示しえない。

3は、須恵器甕の頸部片を図化したもの。体部外面は格子目タタキ、内面は同心円の当て具痕をとどめる。体部の破片はほかにもある。

これらの資料は、飛鳥ⅢあるいはⅣにほぼ該当し (西1986)、7世紀後半の一括資料とみなせよう。

T O 34木炭層出土土器である4は、土師器の皿で、丸みをもった底部と外反する口縁からなるもので、外面は一段のヨコナデで仕上げている (Fig.120、PL.34)。砂粒を含む橙褐色の製品であり、特徴にとぼしく時期を限定するのが難しい。10世紀後半～11世紀前半頃のものであろうか。T O 35炭化物層の土器群とは一括性において明らかに区別される。口径14.8cm、器高2.9cm。(高橋)

また瓦も出土した (Fig.121)。

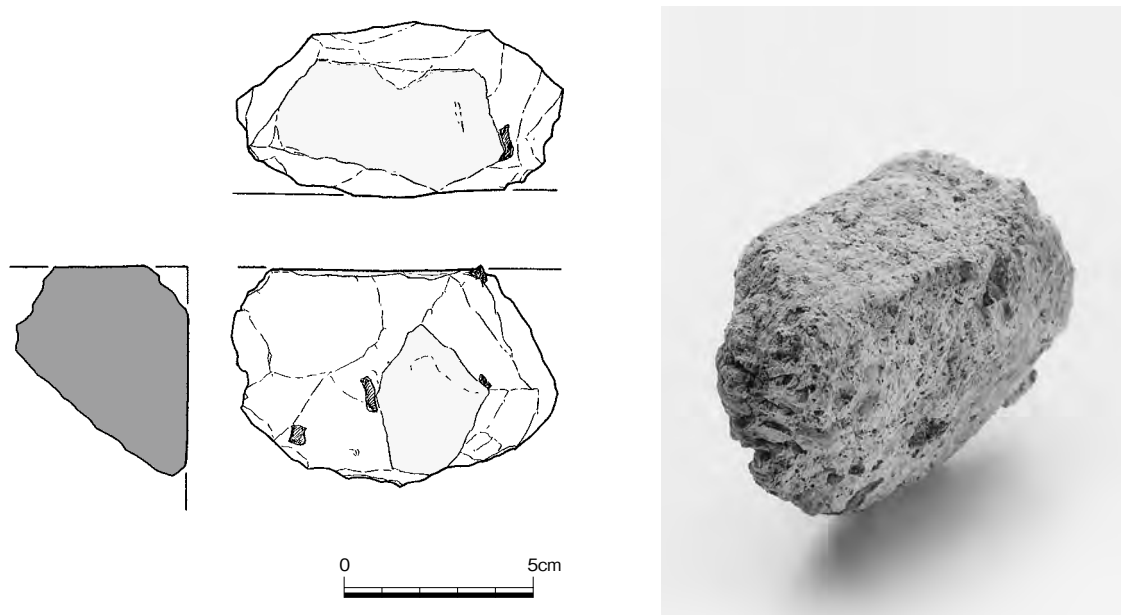


Fig. 123 黄褐色土 凝灰岩片 (1:2)

さらに周縁に沿ったナデが認められる。側面にはナデが施される。

3は、6 D。丸瓦との接合部が残る。接合方法は楔形 a。内面接合粘土は一部残る。支持ナデツケは施されていない可能性が高い。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、中央寄りには不定方向ナデで、さらに周縁に沿ったナデが認められる。内面接合粘土は横方向にナデつけられる。側面はナデ。瓦当面にはわずかに掌文を認める。

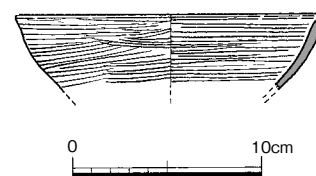


Fig. 124 黄褐色土 黒色土器 (1:4)

4は、213 B。焼成は軟質で、全体的に摩滅。唐草文の施文方向は左から右か。範傷あり。凹面の調整は不明瞭。凸面はヨコナデか。凹面の瓦当付近が一段盛り上がっているのは、スタンプの押圧によるためと考えられる。(中川)

**黄褐色土** 黄褐色土あるいは黄褐色土とされた土層から凝灰岩切石片と土器、それに瓦が取り上げられているが、土層の性格は不明である。(深澤)

凝灰岩切石片は、長さ 8.2 cm、厚さ 4.5 cm の凝灰角礫岩の破片である (Fig. 123)。全体に破損が著しいが、加工痕を残す 2 面はほぼ直角をなす。KB 50 出土。調査日誌によれば、第 2 次調査金堂南面中央トレンチにおいて、金堂南縁にあたる位置で出土したものであることが知られる。同様の凝灰角礫岩の碎片は、金堂東側で検出した KC 45 瓦溜からも出土しており、金堂の基壇外装を知るうえで重要な資料である。(次山)

また黒色土器碗が出土している (Fig. 124)。口縁部はヨコナデによってわずかに外面がくぼむ。端部内面には痕跡的に沈線が施されている。外面は比較的密に静止状態でのヘラミガキ、内面にも平行するヘラミガキが密に施されている。調査区からの黒色土器の出土は非常に少なく、SE 7074 井戸出土品とともに 11 世紀に下る頃のものであろう。復原口径 16.2 cm。(高橋)

次に軒瓦を報告する (Fig. 125)。

1は、3Bb。瓦当完存。接合方法は片柄形 a。丸瓦はわずかに一部が貼りついて残るが、内面接合



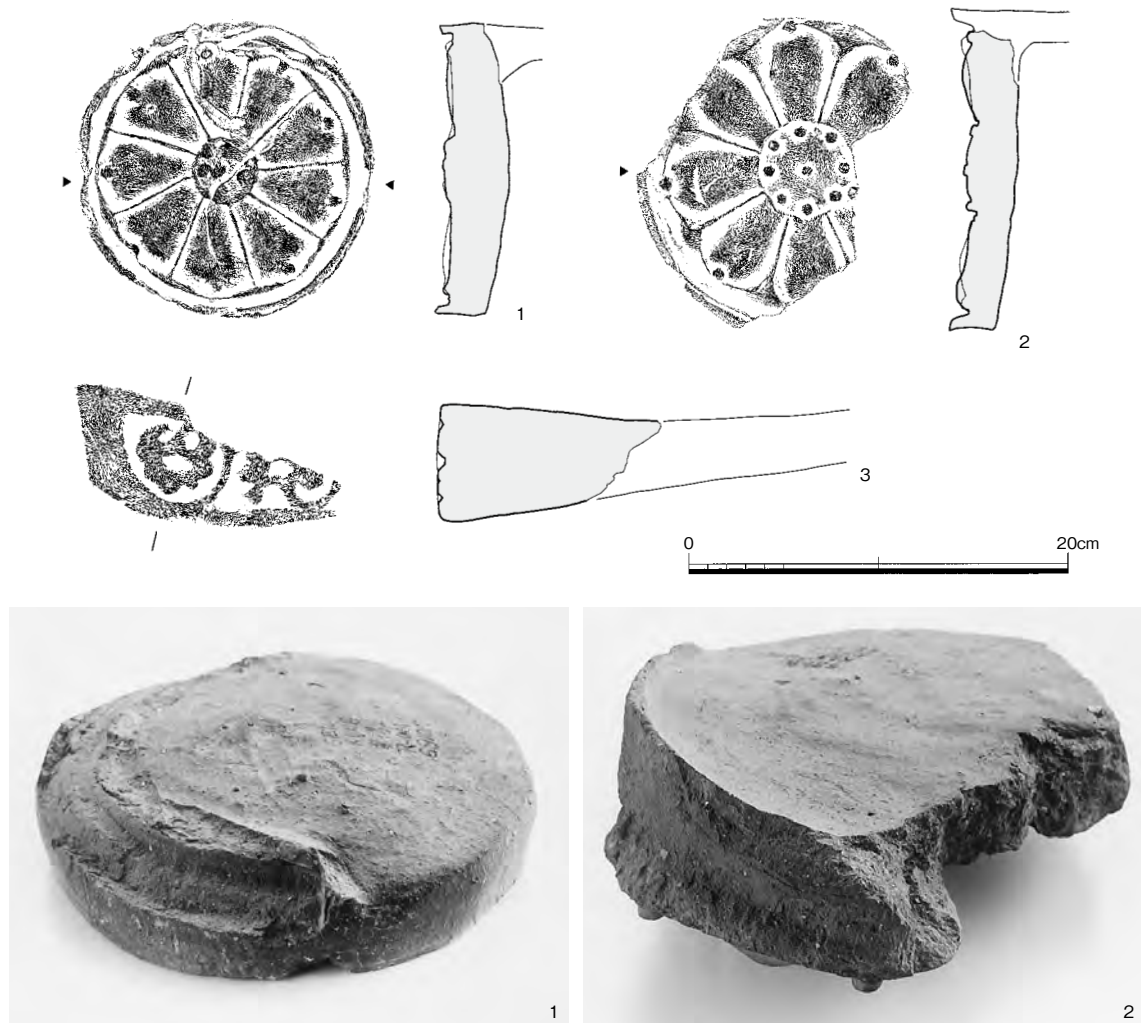


Fig. 125 黄褐色土 軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・細部

粘土は痕跡のみである（Fig. 125写真1）。瓦当裏面は中央にかけて高くふくらみ、中心は粘土が寄せられてやや突出する。調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデ。瓦当面には一面に掌文があり、外縁上には範端痕が残る。

2は、6Da。接合方法は楔形aかb。内面接合粘土に丸瓦凹面の布目圧痕が転写されておらず、bの可能性が高い。内面接合粘土は瓦当粘土と隙間なく密着しており、丸瓦接合の際に支持ナデツケが施されていると考えられる（Fig. 125写真2）。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらむ。調整は不定方向ナデで、さらに周縁に沿ったナデが認められる。下半部では同心円状に砂粒が動いているため、回転台を使用している可能性がある。内面接合粘土は横方向にナデつけられている。側面調整はナデで、瓦当面に向けて外反する。瓦当面には部分的に掌文がある。

3は、206A。直線顎。焼成は軟質で、全体的に摩滅している。唐草文中央にピン穴があり、文様の輪郭にはケガキ線は認められない。凹面・側面・凸面ともに調整は不明瞭である。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、4点出土している。（中川）

丸瓦・平瓦も出土している（Fig. 126）。

丸瓦の総出土量は、7.9kgである。

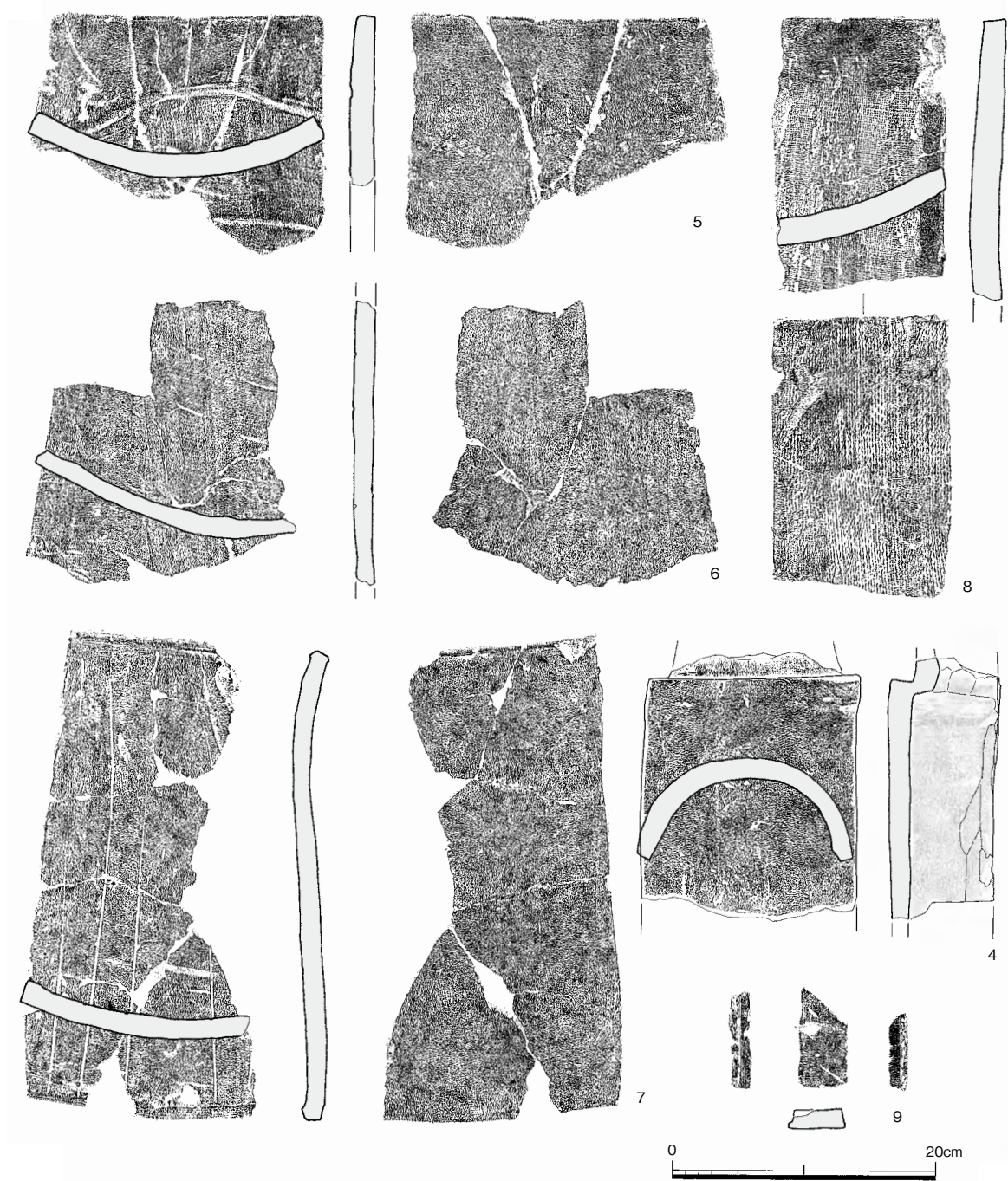


Fig. 126 黄褐色土 丸瓦・平瓦・用途不明品 (1:5)・細部

4は、筒部凸面タテナデ。狭端沿いは幅2cmほど回転ナデが施され、肩から玉縁凸面にかけても回転ヨコナデで調整される。側面はヘラケズリで調整し、凹面側縁は面取りをする。凹面は部分的にタテナデ、玉縁凹面基部はヘラケズリ調整である。2IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦の総出土量は27.9kgである。

5は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整、狭端面はナデ調整である。凹面は未調整で布端痕がみえる。1IA1類、飛鳥前期に属する。

6は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整で、広端側に分割界点がある。凹面は部分的にタテナデ。1IA2類。飛鳥前期に属する。

7は、凸面タテナデ。狭端と広端沿いは幅2cmほどをヨコナデする。側面は分割後、破面をヘラケズリで調整するが、一部破面を残す（Fig.126－写真7－1）。狭端面と広端面はそれぞれヨコナデし、丸みを帯びた端部に仕上げる（Fig.126－写真7－2）。凹面は強いタテ方向のヘラケズリを施した後、縦方向に沈線を入れる。布目圧痕が残る。1IBb、飛鳥前期。

8は、凸面タテ縄タタキ。側面はヘラケズリで調整し、凹面側縁を幅広くナデ調整後面取りをおこなう。凹面は未調整で、やや粗い布目が残る。奈良時代。

9は、破片。凸面ナデ。側面は分割後未調整で、分割界点がある。凸面は部分的にタテ方向のヘラケズリで調整する。残長7.7cm、幅4.3cm。1IAの平瓦を加工した用途不明品。飛鳥前期に属する。（今井）  
**暗褐色土** 本土層は、第1次・第2次調査区の表土直下等に広く分布する。金属製品、銭貨、石製品、鉾滓、土器、瓦が出土している。

金属製品には、銅製品と鉄製品があるが、図示しえたのは銅製品1点である（Fig.127－1）。1は現存長4.2cm。鏃に似た形状を呈するが、本来は厚みのある本体に弓状の部分が附属するものであったとみられる。KE53出土。鉄製品は、金具片など4点あるがいずれも錆化が著しい。

銭貨には、寛永通宝が1点ある（Fig.127－2）。2は全体に錆化が著しく銭文が不鮮明であるが、「永」字の4画目の筆頭にかぎをもつ。背文はない。1697年初鑄の新寛永とよばれるもの。KM55出土。

石製品には、石鍋の転用品、方形板状品、敷磚状石製品がある（Fig.127－3～6）。3は、滑石製石鍋を再加工した破片で1辺に口唇部をとどめる。残存長7.5cm。全体に曲面をなす。鏝は削りおとしたのであろう。中央に径8cmほどの円孔が貫通する。破断面にさらに1ヶ所貫通孔の痕跡があり、本来は2孔あけられていたものと考えられる。また、内面側に未貫通の深さ2cmほどの窪みがある。上端の厚さ1.6cm、下端の厚さ1.0cm。温石に転用したものであろう。KD49出土。4は、全体に曲面をなすこと、曲面の外側にあたる側に煤状の付着物のみられることから、3と同様に滑石製石鍋の転用品であろう。残存長9.9cm。95°をなす隅と、斜めに面取りをし、130°をなす隅を残すことから五角形状に加工されていた可能性がある。2側面にはほぼ垂直な切断面を残す。KM55出土。5は、方形の板状の破片。幅6.1cm、残存長7.1cm、厚さ0.9cm。両側縁は直線的な擦りきりにより作る。端部はわずかに厚みを増し、敲打痕を残す。結晶片岩類。KB46出土。6は、厚さ2.1cmの流紋岩製板石の破片である。残存長14.5cm。端部を欠くが2側面を加工し、約45°の隅部をもつ。側面は弱い「逃げ」をとる。これらのことから、方磚を二分したかたちの直角二等辺三角形の敷磚の破片と推定される。断面を逆台形となるようにおくと、上面は丁寧に研磨され、下面は斜方向のケズリ痕を多数残す。また、

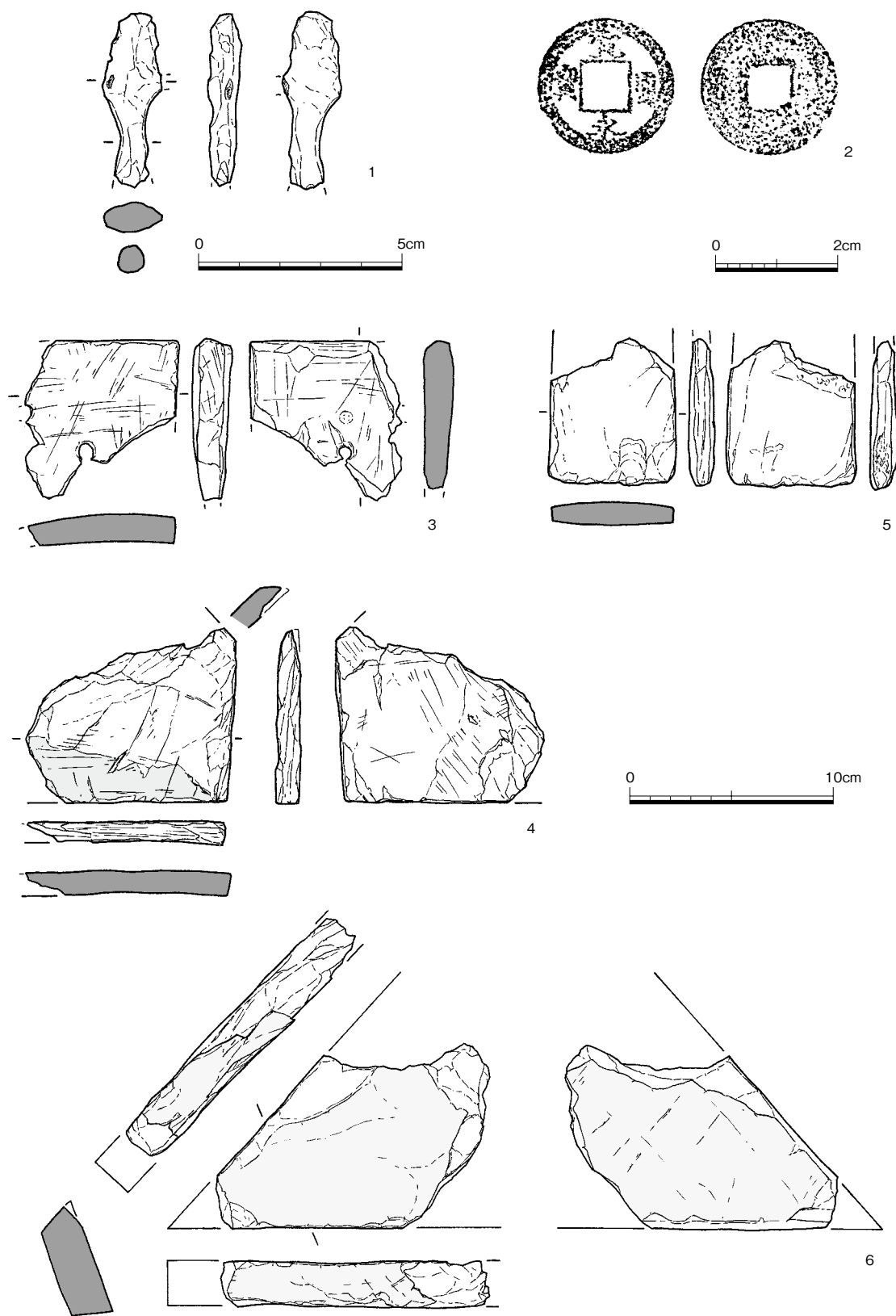


Fig. 127 暗褐色土 金属製品 (1 2:3)・銭貨 (2 1:1)・石製品 (3~6 1:3)



側面の加工も下端に近い部分にケズリ残しが認められ、上下の面の加工に意識の差をうかがうことができる。KE 53出土。本資料は、包含層からの出土品であるが、後述の三角柱状石製品 (Fig. 151 - 3) とともに、金堂西辺のトレンチより出土しており、石材および形状 (厚み) の点からも他の石製敷磚類とは異なり、須弥壇等に用いられた材料である可能性を考慮する必要がある (PL. 33 - e)。(次山) 次に土器を報告する。

暗褐色土とされた包含層は調査区の各地点に存在し、それぞれで土器が出土しているが、それらが厳密に同一時期に形成されたものか明らかでなく、かつ、上下の層と明確に掘り分けられているとは言い切れない。実際、古代から近代以後にいたるまで各時代の土器が含まれている。このうちで、以下に掲げる2地点での土器の集中的出土状況は、それ以外での土器の出土傾向に照らしてみると特異である。それはTO 28とKA 55の2地点である。そこで、この2地点のみを他とは分離して扱い、続いて1969年に暗褐色土層から採集された他地点のものを、暗褐色土層を代表するものとして報告する。また、TO 28暗褐色土直下で検出された遺構出土品もあわせて報告する (Fig. 128、PL. 35)。

それらは土師器皿 (1~22) と瓦器椀・皿類 (23~35) からなり、以下に示すように時期的にはかなりまとまりがあるものと思われる。

1~5は、いわゆる「て」の字状口縁をもつ土師器の皿である。口径が8.8~10.6 cm、器高は1.0~1.5 cmのあいだにおさまリ、口縁端部を上方に丸く折り返す。褐色の胎土をもつ。1は比較的薄手に作られているが、それ以外は器壁がやや厚い。また、5は「て」の字状の形態はやや鈍い。11世紀後半~12世紀前半を中心とする年代におさまるものであろう。

6・7に示したのが、体部に2段のヨコナデが施されたもの。6は口径10.4 cm、器高1.8 cm、7は口径10.0 cm、器高2.0 cmである。

8~10に示したのが、ヨコナデが1段施され、外面にナデの範囲が明瞭にわかるもので、口縁端部をつまむようにして尖らせる。前2者は、先の「て」の字状口縁の皿とほぼ同じ時期とみられるのに対して、後3者はそれよりやや遅れる時期のものともみられる。8は口径9.6 cm、器高1.7 cm、9は口径8.9 cm、器高1.2 cm、10は口径9.4 cm、器高1.8 cmである。

11~19までのものは、型式的にまとまりを強くみせないもの。口径9.2~10.3 cm、器高1.5~2.2 cmにおさまる。11~15は、外面にナデによる明瞭な稜線は認められず器形としては比較的類似した小皿であるが胎土はさまぎまである。その中でも13・14は、ともに器壁の厚い鈍重な感じを受けるものであり、15は水簸したような精良な胎土をもち他と区別される。

16・17は、口縁が外反気味に開くもので、器高もやや高い。16は、体部に比べて口縁部が厚くなり、底部はやや上げ底となっている。いずれも赤褐色の胎土で、16は、口径10.3 cm、器高2.2 cm、17は口径10.0 cm、器高2.3 cmを測る。ともに14ないし15世紀に下るものであろう。18・19は丸い底部に大きく開く口縁を有し、端部を薄く仕上げる。一群の中でもっとも新しく近世に下るものであろう。胎土は白っぽい。18の口径は10.2 cm、器高2.1 cm、19の口径は12.2 cm、器高2.3 cmである。

20~22は、体部に明瞭な2段ヨコナデが認められる土師器の大皿である。体部下半外面には指頭圧痕が明瞭に観察できる。口径は15.6~16.6 cm、器高は2.5~3.4 cmにまとまり、「て」の字状

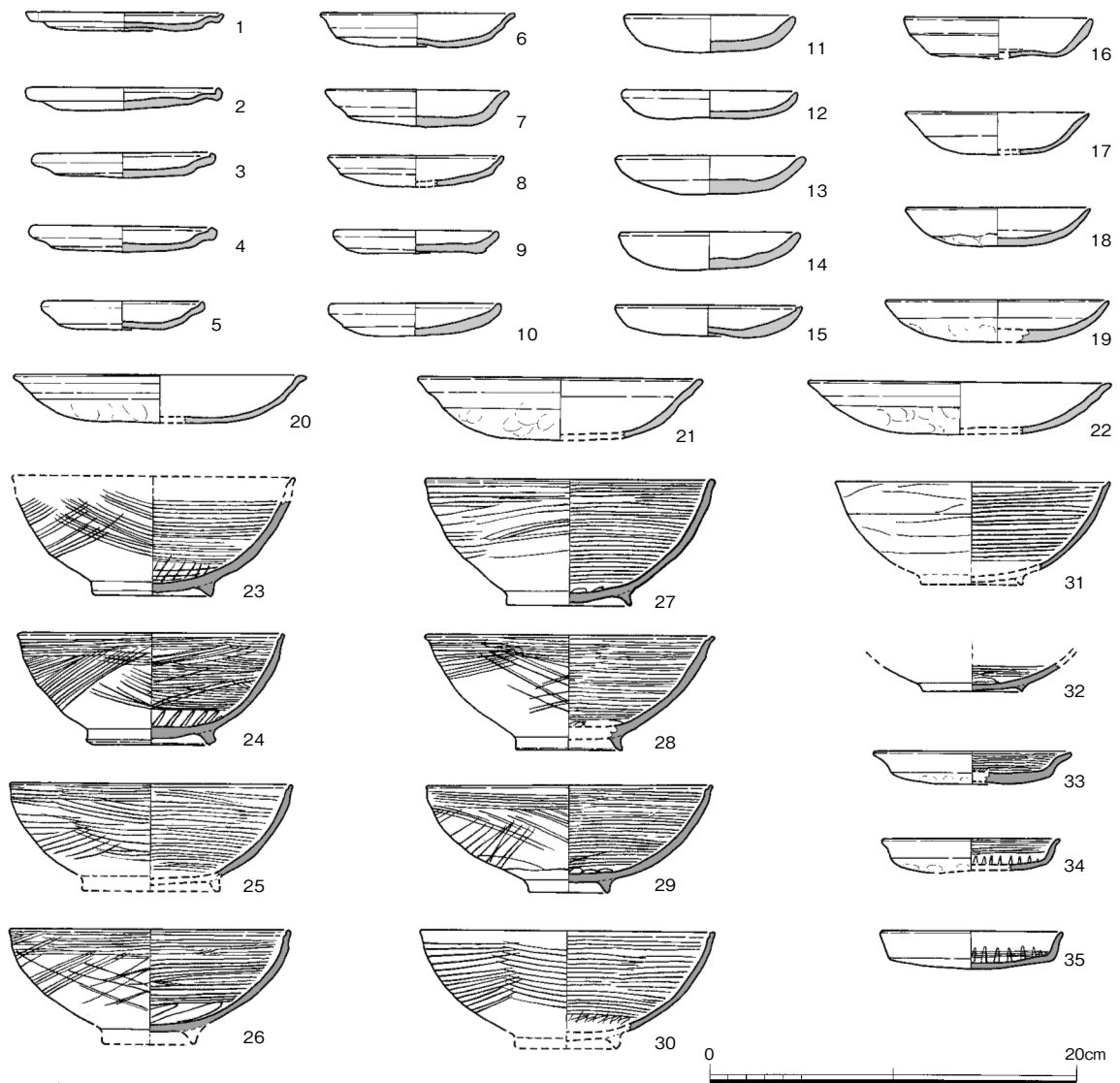


Fig. 128 TO 28暗褐色土 土師器・瓦器 (1:4)

口縁の皿と同時期のものとみなせる。褐色の胎土をもつ。

23～32の瓦器碗のうち、30～32の3点だけが下層の小ピットなどの遺構出土品である。いずれも、口縁端部内側に沈線を引くように段を有する大和型瓦器碗である。体部は比較的膨らみをもって立ち上がり、器壁も平均で5mmほどの厚いものである。このうち23がもっとも厚手に作られている。これに対して高台は断面台形で重厚なものから断面が三角形に近い薄いものまでばらつきがあるが、いずれも十分な高さをもつ。川越俊一による分類の第1段階CないしD型式にほぼ相当するであろう(川越1983)。24～29の平均口径は15.3cmである。

暗文については、23と30のように内面見込み部分に格子目状の暗文を施し、その後に体部内面の圏線状のミガキを施すものは少数で、多くは体部内面のミガキの後に、内面見込みにジグザグ状の暗文を施す(24・26・27)か、螺旋状の暗文を施す(28・29・32)ものである。とくに後者は、外面の横方向のミガキがまばらで、成形の際の凹凸がそのまま認められる。高台も断面三角形で径が小さなものとなっているうえ、器形も丸みがやや少ない形で川越分類の第2段階B型式に該当しようか(川越

1983)。相対的に新しいものといえよう。そうした目でみると26にも新しい様相がすでに読み取れる。ジグザグ文の椀と螺旋文の椀を比較すると、後者の器形には深みがないことがわかる。ただし、口径に大きな違いはない。

これらと比べて遺構出土の瓦器椀はどういう特徴をもっているだろうか。

小ピットから出土した31は器壁の厚さが平均で3mmに満たない薄手の製品で、復原口径、器高ともに小さい。外面のミガキは非常にまばらで内面のミガキも単位のあいだにすきまがあく。川越分類の第3段階に属するもので、上述の製品に明らかに後出し、12世紀後半～13世紀前半のものであろう。

32は「凹みの穴」で取り上げられたもの。底部のみの遺存であるが、螺旋状の暗文をもち、器壁も薄く、高台が三角形の小さな貼り付けとなりほとんど用をなさないものにまで矮小化していることから、やはり、31同様、暗褐色土出土品より新しいものといえる。

これに対して、東小ピットから出土した破片と西北ピットから出土した破片が接合した30は器形や暗文の施し方から、暗褐色土出土の一群と区別することができない。上部の遺物の混入かもしれない。以上の瓦器椀を総括すると、暗褐色土とされる一群は近江俊秀による編年（近江1991）の1～2期を主体とし同3期のものが加わる比較的純粋な資料で、そこに1～5期ないし同6期の遺構が重複して形成されたとみられよう。つまり、11世紀後半～12世紀初めに形成されたところに、12世紀後半以後の新たな遺構が作られたと解することができる。

33～35は、いずれも暗褐色土層から出土した瓦器皿である。そのうち33は厚手で非常に丁寧な作りをしている。内面には格子目文状の暗文を密に施し、外反する口縁部は内面を密にヘラミガキしている。11世紀代にさかのぼるものだろう。

これに対して、34・35の2点は、ジグザグ状に内面見込みの暗文を施すもので、内面のヘラミガキも粗雑である。12世紀頃のものであろう。

このように、TO 28から出土した暗褐色土層の土器は、土師器皿の1～7の一群の小皿と20～22の大皿からなるまとまりと瓦器の大皿とがともに11世紀後半～12世紀初めの一括性をよくみせており、他地区の様相と大きな隔たりをみせている。おそらくこの3mグリッドに土器廃棄土坑といった類の大きな遺構があって、そこに包含される遺物が下層の遺構とともに、上を覆う暗褐色土と識別されないまま掘り上げられたものと判断される。

次に、KA 55暗褐色土出土土器を報告する（Fig. 129、PL. 36）。TO 28とは時期が異なるが、ここでもまとまりのよい大量の土器が出土している。大小2種類の土師器皿がほとんどで、それに若干の土師器羽釜と瓦器椀がともなっている。

1～12は、土師器大皿で、14～17は、小皿である。大皿は2～5のように外面に2段のナデによる凹凸が顕著に認められるものと、6～12のように1段のナデが目立つものに分けられるが、両群の差は漸移的である。1段ナデのものも、6・7のように、ナデの下端が体部下位にまでおよんで、ほぼ平らな底部と段をもって直線的に立ち上がる体部という箱形の断面形に近いものから、ナデのおよぶ範囲が下から3分の1（8～10）、あるいは2分の1（11・12）のものまでばらつきがある。ナデの範囲が狭いほど、底部は丸みをもち、ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。一方、1はその対極で体部外面全面に数段分のナデの痕が明瞭で、底部との段は逆にあいまいである。また、8や12は、底部がやや

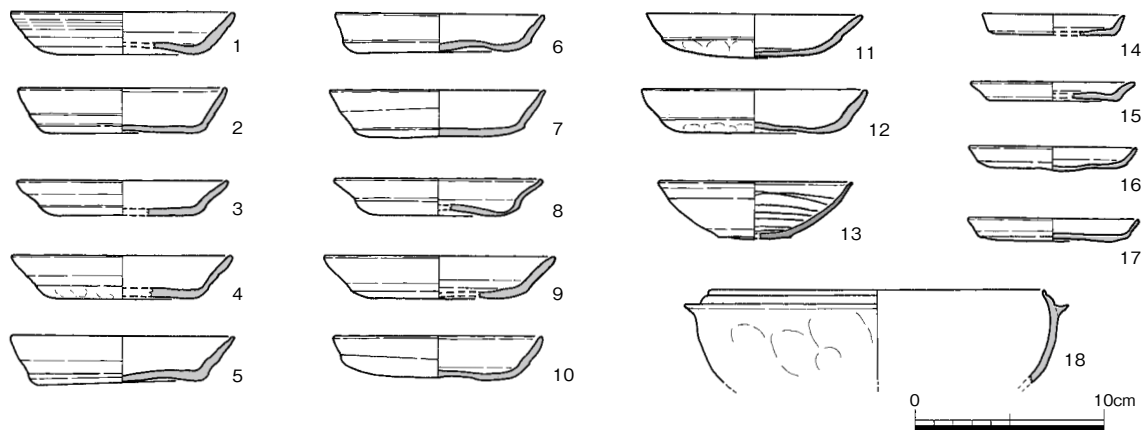


Fig. 129 KA 55 暗褐色土 土師器・瓦器 (1:4)

上げ底になっている。これらはいずれも淡褐色の胎土の製品で、平均の法量は口径11.5 cm、器高2.3 cmである。

小皿(14~17)はいずれも平らな底部から短く体部が外反気味に立ち上がるもので、1段のナデによりわずかな段を外面にとどめる。図示したものうち14がやや小さく口径7.6 cmを測るが、平均は8.6 cmである。やはり淡褐色の胎土をもつ。

13は、瓦器碗である。ほとんど痕跡と化した断面三角形の貼り付け高台を有し、体部は深みをもたずやや直線的な開き方をみせる。口縁部に1段強めのナデが認められるが、それがおよぶ範囲には、内外面ともにミガキがおよばない。また、内面のミガキもまばらで、内面見込みの暗文も大振りなくずれた渦巻き文のようである。体部外面には、ミガキがまったく施されていない。口径10.4 cm、器高3.1 cm。

上述の土師器と瓦器は、13世紀後半から14世紀前半頃のものともみられる。土師器に白色系と赤褐色系の土器の共存が顕著になる前の段階ともみられる。

18の羽釜は薄くて丹精な鏝がかなり上位に取り付いたもので、口縁の端部は外面に段をもって丸く収められたものである。端部の丸め込みが萎縮したものとも取れるが、端部を折り返したものではない。体部外面にはヘラナデが施されたようにみえる調整痕が観察される。胎土はきわめて精良であるが、これも、土師器皿や瓦器碗と年代的に併行するものとみてよい。復原口径17.6 cmである。

以上のまとまりから、KA 55の暗褐色土として掘り上げられた多数の土器は、土坑や土器捨て場といった遺構内資料であった可能性が高い。

これ以外の暗褐色土層出土土器を次に報告する (Fig. 130、PL. 36)。TO 28やKA 55を除くと、それ以外の地区で出土した暗褐色土層出土土器は量的に乏しく、かつまとまりにかける。とくに、新しい時期の土器も含まれ、一括性に乏しいと判断されることから、1969年度出土品の中から代表的な出土品を呈示するにとどめた。

1~11が土師器皿、12~15が瓦器碗・皿、16・17が土師器釜、18が低火度釉の製品、19~21が須恵器、22が瓦器甕である。

土師器皿は大皿と小皿とに大別できる。大皿は底部が平らで、明瞭な底部と体部の境から直線的に開く1がもっとも古く、体部は2段のナデを施す。赤褐色の胎土をもつ製品である。口径11.2 cm、器



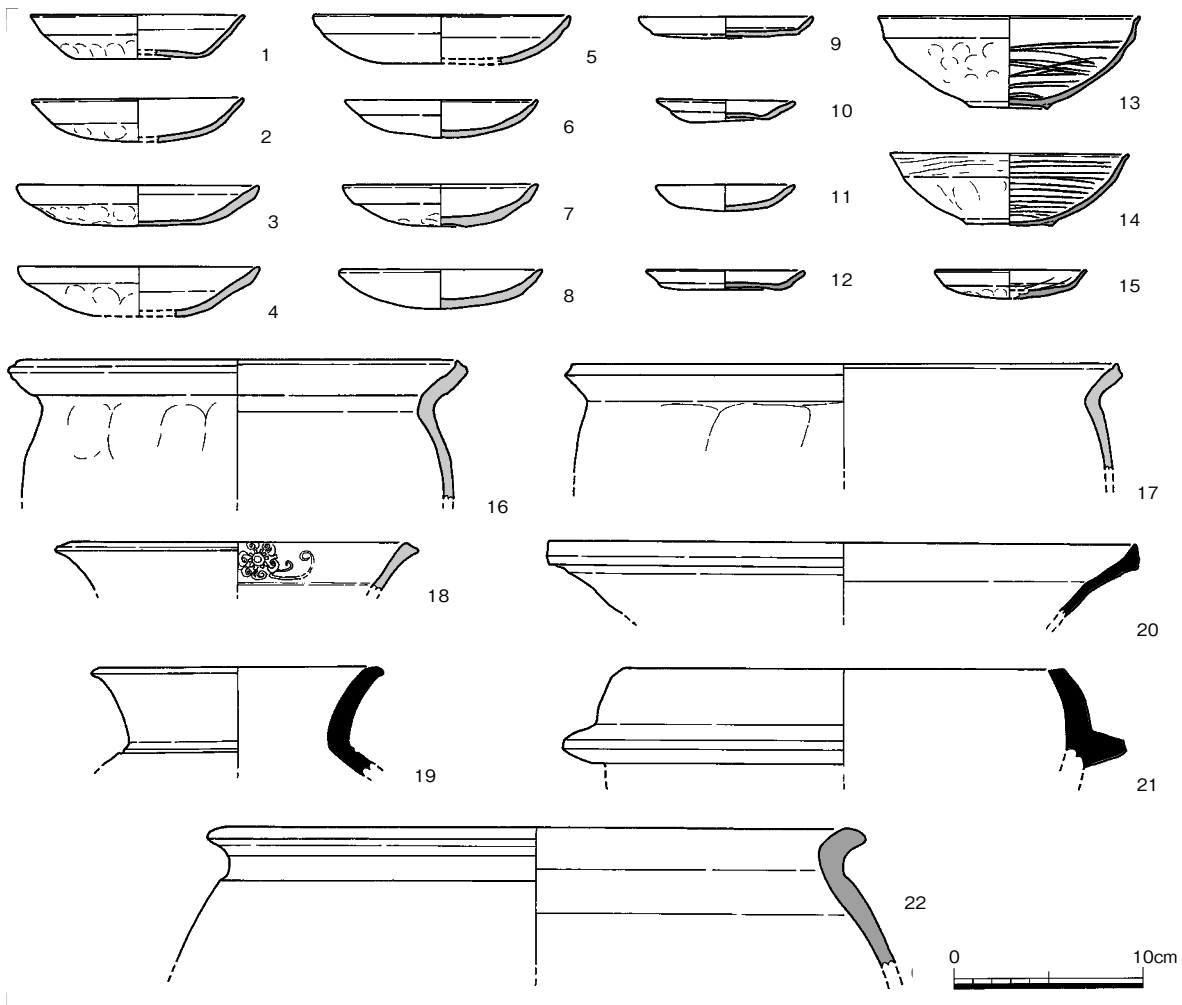


Fig. 130 暗褐色土 土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器 (1:4)

高2.3cmを測る。これに対して、2は白色系の胎土をもち丸みを帯びた器形で、体部のナデの範囲も狭い。口径11.2cm、復原高2.3cm。

この2点に対して、3～8は、いずれも白っぽい精良な胎土で作られた皿である。いずれも体部中ほどまでヨコナデを施し、丸みのある底部は体部にかけて外面に指頭圧痕を明瞭にとどめた焼き締まりのよい皿である。3～5は、6～8に比べて径が一回り大きく、平均口径13.1cm。体部下半のユビオサエが顕著である。口縁端部は外面に面をもつように薄く仕上げられている。3～8は、16世紀以後にまで下るものだろう。

径がやや小さい6～9は、丸みをもった底部と体部の境のない器形である。口縁部を除くと外面は乱雑なナデや指頭圧痕が観察できる。7は、口縁の残存部全周、8は、口縁端部の一部にタール状に煤が付着している。燈明皿として使われたことがわかる。平均口径10.4cm、器高2.1cm。

9～11が小皿。9は、赤褐色の胎土で、短い体部をヨコナデで整えるもの。口径9.2cm、器高1.1cm。これに対して10は、口縁が開きながら長く伸び、底部が上げ底になる白色系の小皿。へそ皿である。口径7.3cm、器高1.1cm。ともに、14～15世紀のものであろう。これに対して、11は底部と体部の境が不明瞭な個体で、白っぽい精良な胎土で厚ぼったく作られている。口縁の一部に煤が付着し

ており、燈明皿として用いられたことがわかる。先の6～8に対応する。口径7.4cm、器高1.4cm。

12～15、そして22は、瓦器である。そのうち13と14が椀である。ともに器壁が薄くなった新しい瓦器椀に属し、14は13に比べて体部は浅く、高台も痕跡的になっていて、より後出するものであろう。しかし、14の外面はヨコナデによりくぼんだ部分にのみ粗いミガキが施されているのに対して、13は外面のミガキは施されておらず、器壁の凹凸も激しい。また、13の内面ミガキは口縁端部までおおよぼ省略傾向にある。内面見込みの暗文はともに簡単な渦巻き文となっているようであるが、観察しづらい。13は口径13.8cm、器高4.9cm、14は口径12.6cm、器高3.9cmを測る。これに対して、12・15の瓦器小皿は、指頭圧痕の残る底部に短く外反する口縁を有するもので、体部のミガキは内外面ともに施されていない。内面見込みにはいずれもきわめて粗いジグザグ文が観察できる。12は口径8.4cm、器高1.0cm、13は口径8.4cm、器高1.7cmである。

以上の瓦器は13～14世紀のものともみられ、土師器皿の1・2や9・10の年代に近い。

16・17は、土師器釜。ともに、よく似た器形だが、径がかなり異なる。16は23.0cm、17は28.6cmに復原される。薄い体部から「く」の字に屈曲する口縁は比較的厚みをもち、端部を上方につまみ上げる。体部外面はヘラナデ状のタタキ痕が多面体状に残る。どちらも鐙のつく羽釜で、大和I型の羽釜と考えられる（菅原1983）。ともに胎土は精良だが、17は橙褐色を呈し、やや砂粒を含んでいる。土師器皿3～8や11などと同一時期のものであろう。

上述の土師器皿、釜や瓦器椀、皿類がいずれの地点でも比較的主体を占めるものである。これに対して、個体数は少ないもののそれ以外の器種も散見される。以下にその代表的なものを掲げる。

まず、18は、花状のスタンプ文を内面に施し、そこを中心に低火度釉を施して飾った軟質の器である。平底の鉢形になるのだろうか。中心の文様は、円文の周りに蓮弁状のものを10葉付け、さらに外側に「の」の字形の渦巻き文を6個配したもので、そこから蔓状の帯が少なくとも右側に2本伸びている。蓮弁の花芯と「の」の字形の文様部分には褐色の釉をかけており、それ以外の地の部分には黄緑色の釉を薄くかけてある。体部内面は主文様のすぐ下に沈線を1本入れている。舶載品の破片とみられる。復原口径17.8cm。

19～21は、須恵器である。このうち20に図示した鉢に類する破片は、比較的多いほうである。20は口縁端部が断面三角形に整えられ、端面は幅広くほぼ直立する。本来片口を備えたものであろう。口縁端部下端は下方に肥厚せず、13世紀代にとどまるものと考えられ、これまでに取り上げた中では古い方の一群にあたるものと思われる。口径31.0cmを測る。

19は、小型の壺で、「く」の字に屈曲してやや長く伸びる口縁部を有する。端部はやはり外側に軽くつまみ出されているが、端面を整えることはしていない。頸部付け根のやや下の体部上端に一条の沈線が施されている。タタキ調整の痕は残存していない。珠洲系の須恵器に同形の口縁部をよく見る。なお、口縁部内面は自然釉がかぶる。口径14.8cm、口縁高4.0cm。

21は、石鍋の形を模倣した須恵器である。器壁は1.2cmと厚く、断面観察から、鐙を最後に付加するのではなく、体部上半の成形と同時に取り付けていることがわかる。口縁端部は鋭利な道具で水平に切っている。口径23.2cm。使用の痕跡は認められない。

22は、短くて外反する口縁をもつ厚手の甕で、須恵質にもみえるが瓦質の範疇で捉えるほうが妥当



である。体部の調整痕は不明。口縁端部は外側に軽くつまみ出されており、断面形はやや丸みをもつ。また、口縁と体部の境はナデによって外側が顕著にくぼんでいる。口径33.0cm。他地域産のものと思われ、和泉産の可能性もある。口縁部が萎縮していく和泉の瓦器甕の変遷観からすれば、14世紀の製品と位置づけられる(菅原1989)。(高橋)

軒丸瓦・軒平瓦について報告する(Fig.131～136)。

1～3は3Bb。1は、丸瓦が長さ3.5cm、幅12cmほど残存している。接合方法は片柄形b(Fig.131-1)。

1

丸瓦先端では、凹面からの切り込み面が確認できる。内面接合粘土はヨコ方向にナデツケ。瓦当裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデである。側面の調整はナデ。外縁は欠損している。筒部凸面の調整は瓦当付近のみヨコナデで、凹面は不明である。丸瓦は厚さ1.6cm。2は、



9

裏面全面が剥離。側面調整はナデ。中房の蓮子に掌文があり、外縁上に範端痕が認められる。3は、焼成は軟質で全体的に摩滅している。接合方法は片柄形a。丸瓦は残らず、内面接合粘土は剥離痕跡のみが残る。瓦当裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデ。瓦当面には所々に掌文が認められる。外縁上に範端痕を残す。

Fig. 131 暗褐色土 軒丸瓦細部

瓦当面には所々に掌文が認められる。外縁上に範端痕を残す。

4～8は3Bbか。4は、裏面全面が剥離し、丸瓦との接合状況は不明である。側面調整はナデ。外縁は欠損しており、瓦当面の蓮弁の一部に掌文がある。5は、接合方法が不明である。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ、側面の調整はナデ。外縁は欠損しており、範端痕の有無は不明である。成形の際に弁端点珠がつぶれる。6は、丸瓦が長さ7cm、幅10cmほど残存している。接合方法は片柄形b。内面接合粘土はヨコ方向にナデツケ。瓦当裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデである。側面の調整は不定方向ナデ。外縁上に範端痕は認められない。丸瓦は厚さ1.5cm。7は、瓦当面がほとんど欠損するが、わずかに残る中房と間弁から、3Bbの可能性もある。接合方法は不明である。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデ。8は、接合部にあたるか。内面接合粘土は瓦当裏面の粘土とともに剥離する。接合方法片柄形aか。裏面の調整はヨコナデ。側面は欠損している。

9～16は、4A。9は、丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好にみられる(Fig.131-9)。接合方法は片柄形b。丸瓦広端の一部が瓦当に貼りついて残る。内面接合粘土は痕跡のみ残る。瓦当裏面は中央がやや高くふくらむ。同心円状にゆるやかな凹凸がみられ、調整は回転ナデ後、不定方向ナデを施したと考えられる。さらに、下半部は周縁に沿ったナデ。側面はナデで、若干外反する。瓦当面蓮弁の一部と中房に掌文がある。蓮弁先端が二重になる部分があり、範ズレと考えられる。外縁上に範端痕。外縁上面に部分的に範の木目痕あり。10は、接合方法片柄形b。内面接合粘土は剥離痕跡のみが残る。瓦

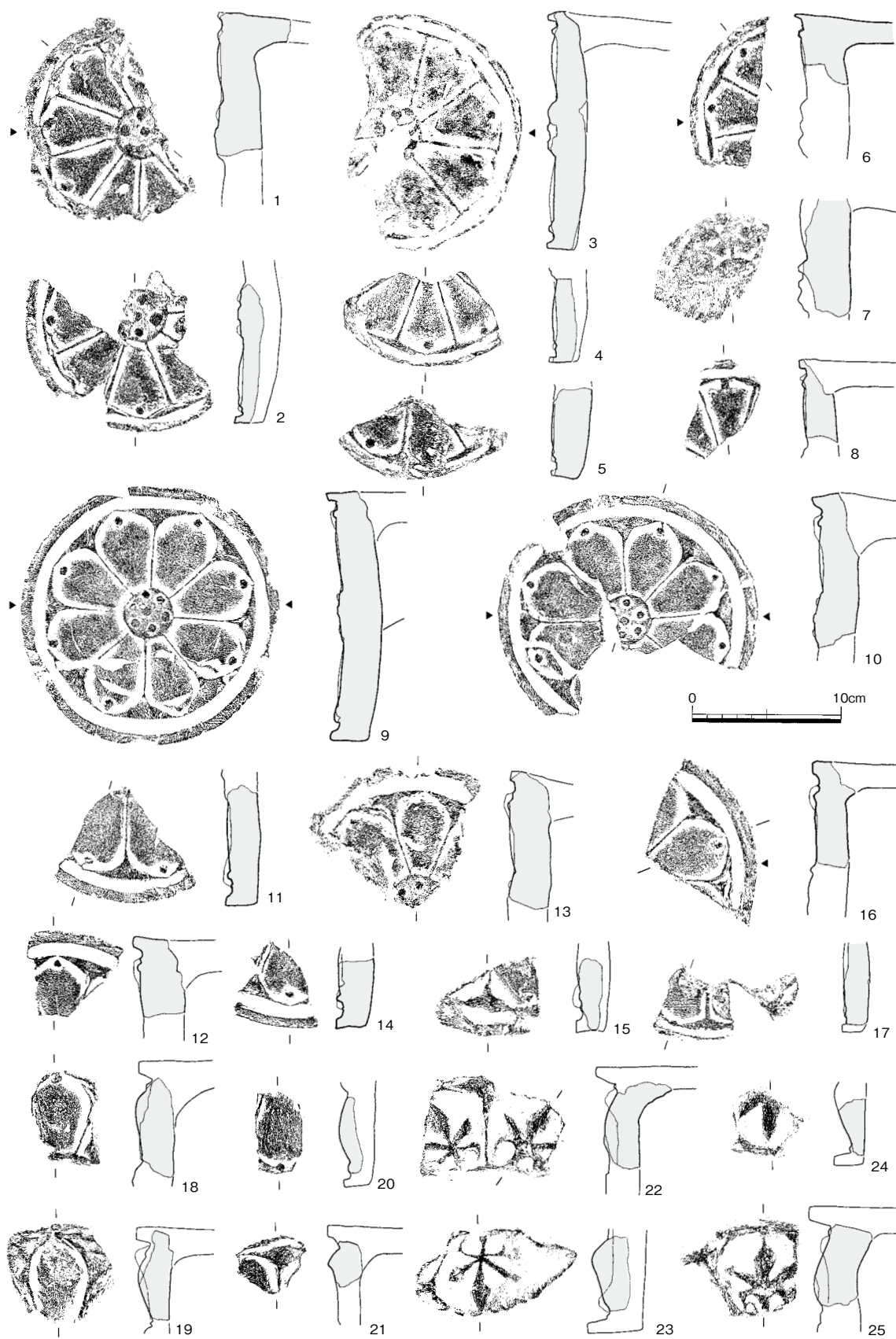
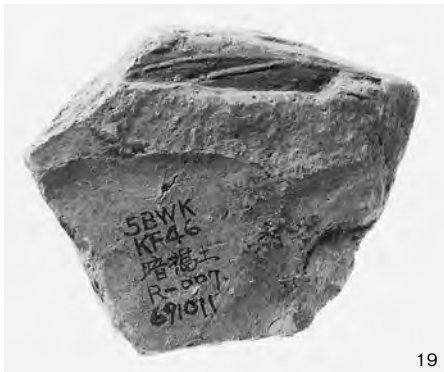


Fig. 132 暗褐色土 軒丸瓦 1 (1 : 4)





19



22

Fig. 133 暗褐色土 軒丸瓦細部

当裏面は中央がやや高く、調整は回転ナデ後に不定方向ナデ。側面はナデが施され、若干外反する。蓮弁先端は範ズレかと考えられる。外縁上に範端痕。外縁上面には部分的に範の木目痕がある。11は、瓦当下半部。瓦当裏面は中央がやや高く、調整は回転ナデである。側面の調整はナデ。外縁上に範端痕がわずかに認められる。12は、丸瓦と瓦当の接合部。接合方法は片柄形a。内面接合粘土は剝離痕跡のみが残る。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ、側面はナデ。外縁上には範端痕がわずかに認められる。13は、丸瓦との接合部。接合方法は片柄形b。内面接合粘土はわずかに残り、横方向にナデつけられている。瓦当裏面の調整は不定方向ナデで、側面はナデ。外縁上に範端痕なし。14は、瓦当下半部にあたり、丸瓦との接合方法は不明。瓦当裏面は中央がゆるやかにふくらみ、調整は周縁に沿ったナデ。側面はナデが施され、若干外反する。外縁上にはわずかに範端痕あり。15は、瓦当裏面が摩滅し、どの部分か不明である。側面の調整はナデが施され、若干外反する。外縁上に範端痕はない。16は、丸瓦との接合部。接合方法は片柄形b。内面接合粘土が一部残り、横方向にナデつけられている。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデである。側面の調整はナデ。瓦当面間弁の段差は範ズレ、もしくは粘土の範詰め不良によると考えられる。外縁上にはわずかに範端痕がある。

17は、4D。瓦当下半部にあたり、裏面はほぼ平坦である。調整は不定方向ナデで、周縁にはさらにナデを施している可能性がある。側面は欠損している。

18は、6C。丸瓦との接合部か。接合方法は不明である。支持ナデツケは施されていない可能性が高い。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデである。側面は欠損している。瓦当面間弁の段差は範ズレ、もしくは粘土の範詰めが不良であるためと考えられる。

19は、6Cか。丸瓦との接合部。接合方法は片柄形dか。内面接合粘土は剝離痕跡のみが残る。接合部にはナナメ、ヨコ方向のキザミが転写されている (Fig. 133-19)。瓦当裏面の調整は不定方向ナデである。側面のほか、瓦当面も大部分欠損している。

20・21は、6D。20は、裏面が剝離している。側面を欠いており、蓮弁、とくに点珠付近には掌文が認められる。21は、丸瓦との接合部。接合方法は楔形aかb。支持ナデツケは施されていない。接合部にはタテ方向のキザミが転写されている。

22～25は、33A。22は、丸瓦との接合部。接合方法は楔形a。内面接合粘土が残るが、支持ナデツケの有無は不明瞭。瓦当粘土は2層に分かれる。接合部にはタテ方向のキザミが転写されている (Fig. 133-22、瓦当が上)。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ。23は、裏面が欠損し、どの部分にあたるかは不明である。焼成は軟質で、全体的に摩滅が激しい。24は、瓦当下半部にあたるか。厚さが非常に薄い。瓦当裏面の調整はヨコナデ。側面は欠損している。25は、丸瓦との接合部にあたる。接合方法は楔形a。支持ナデツケ、キザミ転写ともにあり。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ。側面は欠損している。

26は、37Db。丸瓦との接合部。取り付け位置が高い。側面の調整は不定方向のナデである。

27は、53A。丸瓦との接合部。焼成は軟質で、全体的に摩滅している。丸瓦の接合溝が残る (Fig.134 - 27)。側面の調整は不明瞭である。

28～30は、89V。28は瓦当下半部。裏面は平坦で、調整はヨコナデである。側面はナデか。外縁外角は幅2mmほど面取りをしている。29は丸瓦が幅12cm、長さ12cmほど残存。接合部には外面と内面に接合粘土を付加 (Fig.134 - 29)。丸瓦を設置後に瓦当裏面に薄く粘土が足される。丸瓦先端は未加工で、瓦当の丸瓦接着面にはかすかに布目圧痕が転写される。裏面は平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデである。側面はナデ。外縁外角は幅2mmほど面取りをする。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリ後ナデ調整を施す。凹面は布目を粗くナデ。側面にはナデが認められ、凹面側縁は幅1cmほど面取りをする。外縁粘土の範詰めは瓦当粘土の端を折り曲げておこなっているとみられる。瓦当面には離れ砂が付着する。丸瓦は厚さ2.0cm。30は瓦当下半部。瓦当裏面は平坦で、調整は回転ナデ後、ヨコナデを中心とする不定方向ナデ、周縁に沿ってナデ。側面はナデか。外縁外角を幅5mmほど面取りしている。

31は、19F。棟飾りか。裏面は平坦で調整はナデである。側面はナデ、外縁上面はヨコナデ。瓦当面菊花文の蓮弁に掌文がある。

32は、91F。瓦当下半部にあたる。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデである。側面はナデ。瓦当面にはキラコ。

33・34は、91Y。33は丸瓦との接合部にあたる。瓦当裏面の接合面にはカキメがある。側面調整はナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。外区珠文には範傷がある。34は、丸瓦との接合部。瓦当裏面の接合面にはカキメがある (Fig.134 - 34)。裏面、側面ともに調整はナデ。外縁上面はヨコナデ。

35～37は、型式不明軒丸瓦。35は、中世末～近世のものか。瓦当下半部にあたる。裏面は平坦。周縁に沿って強めにナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。36は、中世末～近世のものか。瓦当下半部にあたる。裏面は周縁に沿ってナデ。側面はナデで、若干外反する。外縁上面はヨコナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。37は、近世のものか。丸瓦との接合部で、丸瓦が幅6cm、長さ3cmほど残存している。筒部凸面にはナデを施し、凹面は欠損している。側面はタテナデ。瓦当面珠文には範傷。

38・39は、206A。38は、直線顎。唐草文中央にピン穴がわずかに残る。ケガキ線はみられない。凸面はヨコ方向のヘラケズリ後、タテナデを施す。39は、左側面がわずかに残る。瓦当面はヨコナデ後に施文しており、唐草文中央にはピン穴がある。ケガキ線はない。

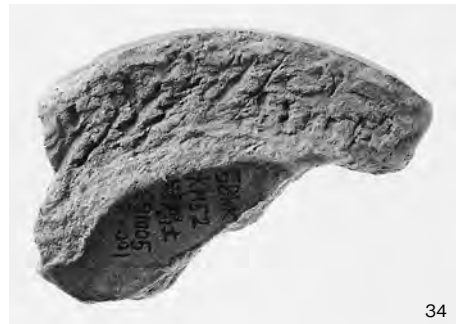
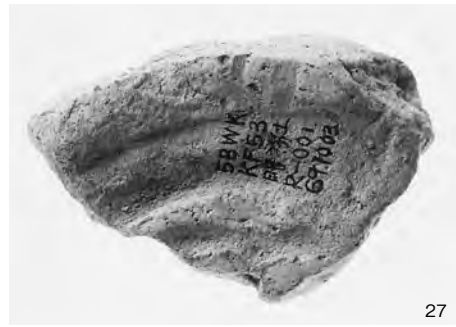


Fig. 134 暗褐色土 軒丸瓦細部

27

29

34

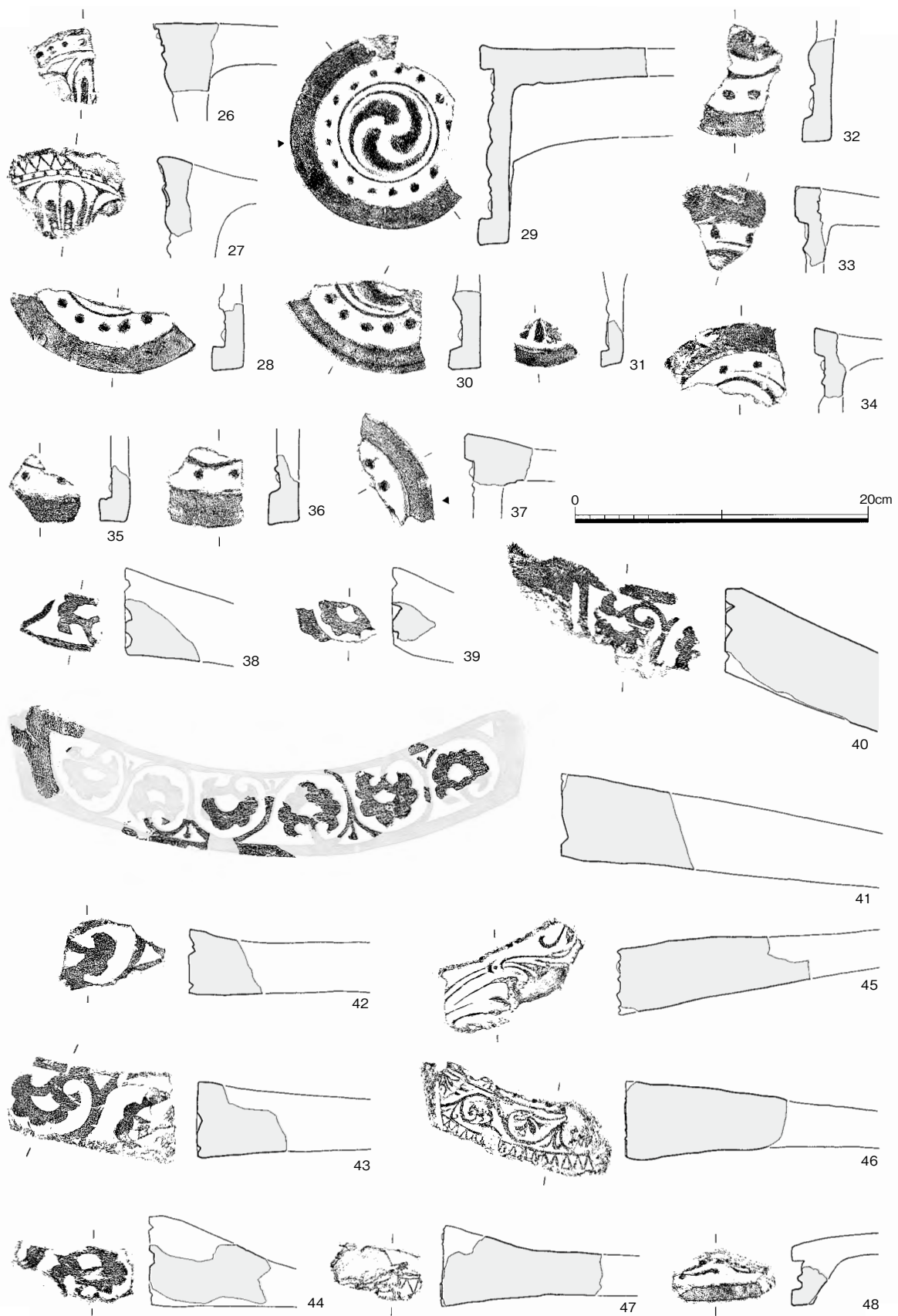


Fig. 135 暗褐色土 軒丸瓦 2・軒平瓦 (1:4)

40は、206 B。直線顎。分割截線と考えられる切り込みが凹面に明瞭に残る（Fig. 136 - 40）。瓦当面は施文前にヨコ方向のヘラケズリで調整する。唐草文中央にかすかにピン穴があり、文様輪郭にはケガキ線がある。凹面はタテ方向のヘラケズリで、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリ、凸面・側面は狭端へ向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。凹面側縁は幅0.5～1cmほど面取りをする。



40

41は、207 A。唐草文中央にピン穴、文様輪郭にはケガキ線がある。型紙の端のケガキ線も明瞭に残る（Fig. 136 - 41）。蕾の輪郭にはケガキ線が認められず、この部分のみフリーハンドの可能性はある。瓦当面は、施文前にヨコナデを施し、凹面はタテ方向のヘラケズリで調整する。瓦当付近は5cmほどヨコ方向のヘラケズリ、さらに瓦当付近2cmほどのところで屈曲が変わっており、その部分のみヨコナデかと思われる。側面はタテ方向のヘラケズリで調整する。出土時は破片であるが、現在は石膏が入れられ完形に復原されている。



41

42は、208か。直線顎。ピン穴、ケガキ線はなく、唐草文の葉の輪郭の一部が彫り込まれていない。凹面はヨコ方向のヘラケズリで調整する。凸面はヨコ方向のヘラケズリ後ナデか。



42

43は、209 A。直線顎。ピン穴、ケガキ線はともになし。平瓦の残存部が少なく、凹面・凸面ともにヨコナデしか認められない。側面は欠損する。

44は、305 Aか。右側面が残る。唐草文は7葉か。ピン穴、ケガキ線はともになし。凹面の調整は摩滅により不明瞭である。側面は瓦当面向けてタテ方向のヘラケズリで調整している。凹面側縁を幅8mmほど面取りか。

Fig. 136 暗褐色土 軒平瓦細部

45は、216 C。直線顎。凹面はヨコ方向のヘラケズリ後、瓦当付近のみナデを施す。凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ後、瓦当付近のみナデ、側面はタテ方向のヘラケズリで調整する。

46は、240 Ab。直線顎。凹面は未調整で布目圧痕が残る。凸面は摩滅により調整は不明瞭である。側面は瓦当に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。

47は、240 A。直線顎。瓦当面鋸歯文がわずかにしか残らず、AaかAbかが不明である。凹面はタテナデにより、布目圧痕をほとんど消している。凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。

48は、284 C。貼付段顎か。瓦当剥離面に、横方向のカキメが転写されている（Fig. 136 - 48、瓦当が上）。瓦当面にはキラコ。外縁下側外角を幅1mmほど面取りをしており、顎面、顎裏面はヨコナデで調整する。



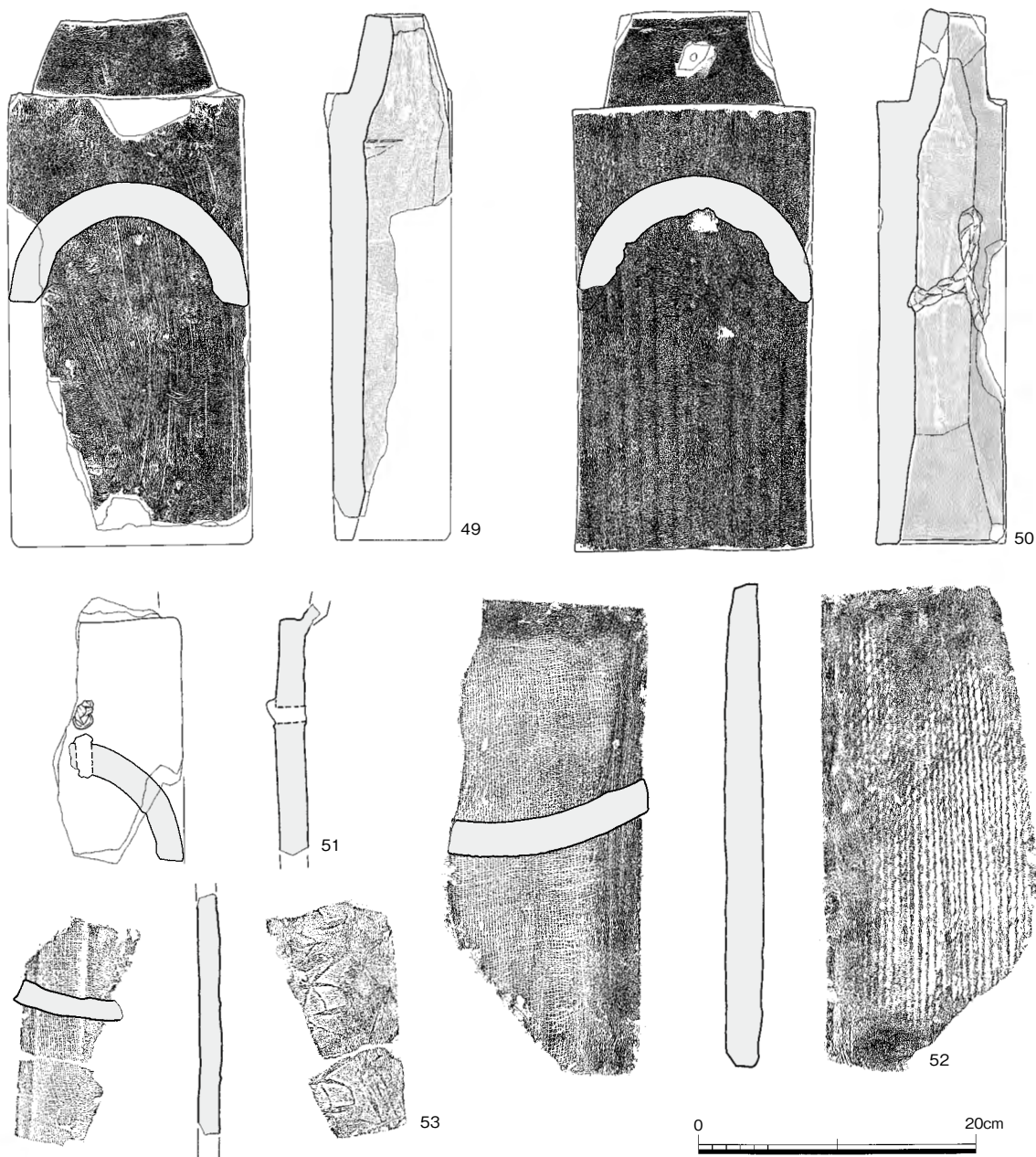


Fig. 137 暗褐色土 丸瓦・平瓦 (1:5)

このほか、284か285が1点、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が8点出土している。  
(中川)

丸瓦・平瓦、それに道具瓦が出土しているので、報告する (Fig. 137・138)。

丸瓦の総出土量は5.7kgである。

49は、筒部凸面はタテ縄タタキ後に、全面タテナデで調整する。肩から玉縁凸面にかけては回転ヨコナデ、側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁は面取りをしており、凹面は未調整で、糸切り痕跡が残る。凹面広端縁のほか、玉縁凸面側縁、玉縁凹面端縁も面取りする。平安時代に属する。

50は、筒部凸面はタテ縄タタキ後に、全面タテナデで調整する。肩から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデで調整し、玉縁凸面端縁、凸面側縁を面取りする。玉縁の釘孔は焼成後にあける。側面はナデ、凹

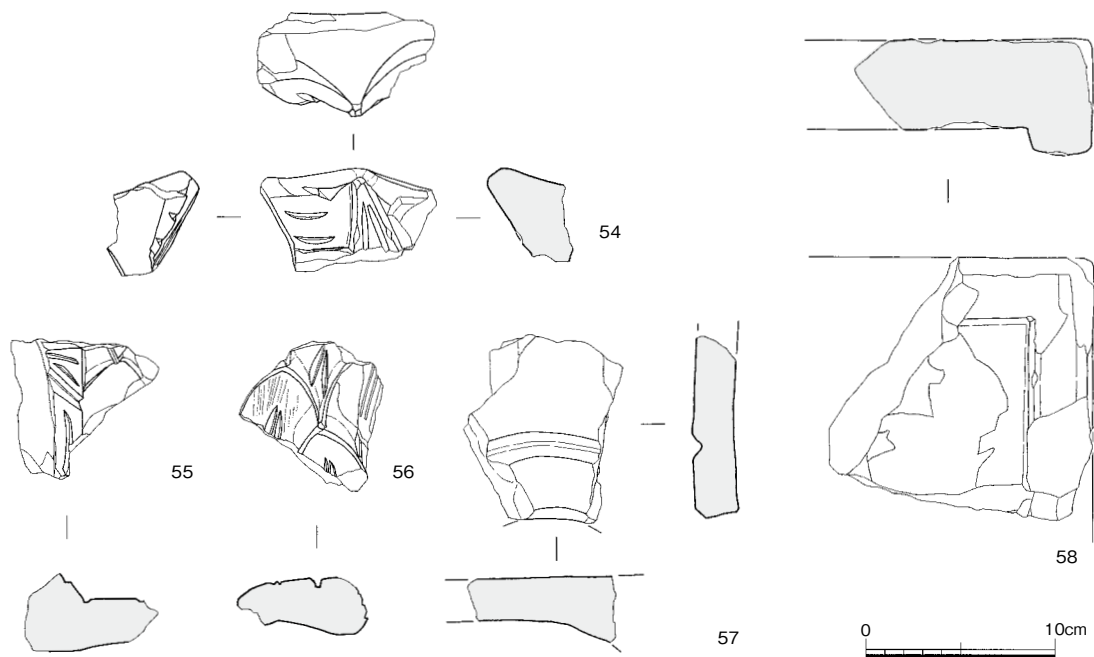


Fig. 138 暗褐色土 道具瓦 (1:4)

面側縁は筒部から玉縁にかけて幅広く面取りをする。凹面は未調整で、布目圧痕と吊り紐痕跡が残る。凹面広端縁、玉縁凹面端縁も幅広く面取りをする。室町時代に属する。

51は、凸面ヨコナデ。狭端から7.0cmのところ鉄釘が残る。側面はヘラケズリ、凹面は未調整である。玉縁凹面基部をケズリ、面取りする。2IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦は総出土量27.3kgである。

52は、凸面タテ縄タタキで、端部付近は部分的にナデ消している。狭端面はヘラケズリ、広端面は未調整である。側面はヘラケズリで調整する。凹面は粗い布目圧痕で狭端縁と側縁は幅広くナデ調整、広端縁はわずかに面取りする。平安時代に属する。

53は、凸面には、文様タタキがある。側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデを施す。飛鳥時代に属する。

また、道具瓦が出土している。

54は、鴟尾の頂部と推定される。文様部分はやや斜め上方に突出し、頂部と前面に平坦面がある。

55は、鴟尾の縦帯部分である。縦帯以外の文様では、鱗状の文様をけずりだしている。

56は、鴟尾腹部の鱗文部である。裏面はナデ調整する。

57は、鴟尾頭部の破片である。棟の瓦を受ける刳りの一部が残存している。54～57はいずれも『至宝』の鴟尾1に相当し、飛鳥前期に属する。

58は、磚である。上面は平坦で、下面は辺縁に突帯がめぐり内側はくぼむ。突帯部分で厚み6.0cm、窪み部分で4.5cmある。飛鳥時代か。(今井)

**褐色土** 本土層は、第1次・第2次調査区に広く分布し、金属製品、銭貨、石製品、鋳滓、土器、瓦が出土した。

金属製品には、銅製品・鉄製品があるが、図示しえたのは銅製品1点である (Fig. 139-1)。1は、

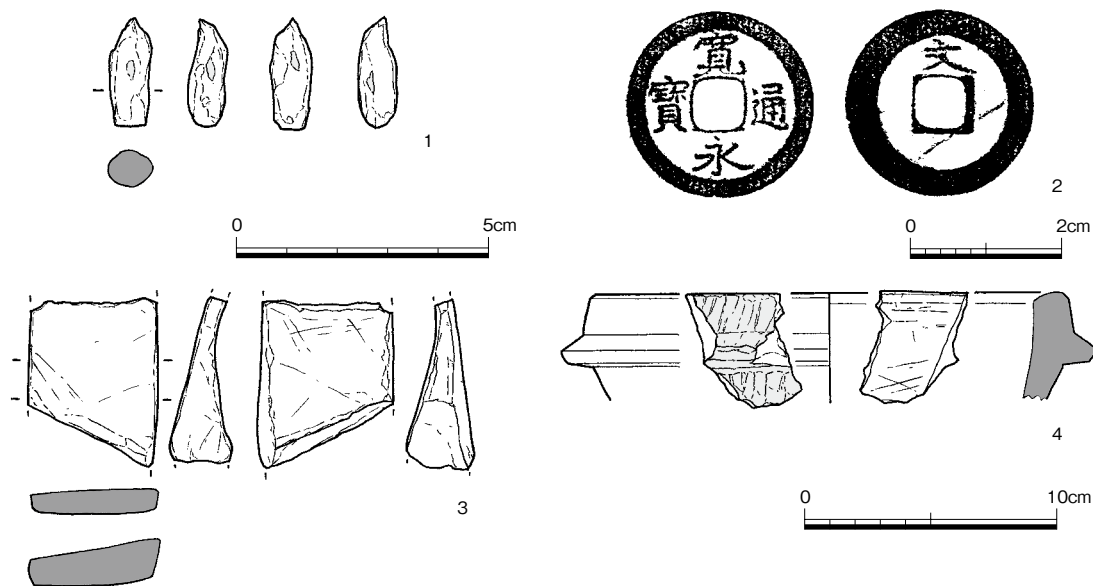


Fig. 139 褐色土 金属製品 (1 2 : 3)・銭貨 (2 1 : 1)・石製品 (3・4 1 : 3)

長さ2.1 cm、径0.8 cmの筆先形を呈する小片で、基部の断面はわずかに杏仁形となり、先端は蓮弁状の反りをもつ。表面に鍍金の痕跡が残る。TQ 50出土。鉄製品は26点出土したが、この中には丸釘や排水用皿など時代の下るものが多数含まれる。

銭貨には、寛永通宝が1点ある (Fig. 139 - 2)。2は、「寛」字の12画と13画の頂部が離れ、「寶」字の最終画を「ハ」字状につくる「ハ寶」とよばれるもの。背面に「文」字をもち、1668年初鑄の「文銭」。背面には範傷がある。TO 40出土。

石製品には、砥石、石鍋片がある (Fig. 139 - 3・4)。3は、流紋岩製の砥石。幅5.0 cmに側面を加工し、表裏面に使用の痕跡が認められるが、片面は強い曲面をなし断面が梯形状になる。上下端を欠く。残存長6.4 cm。TQ 52出土。4は、滑石製石鍋の口縁部から体部上半にかけての小破片である。残存高4.4 cm。口唇部は厚さ1.4 cmでゆるやかな曲面をなし、体部にかけて器厚を減じる。口唇端部から1.4 cm下位に幅1.4 cm、断面台形で高さ1 cm程の鐔をつける。推定口径19 cm。外面は4 cmほどの単位幅をもつ縦方向のケズリ、内面には横位の擦痕が多数認められる。外面全体に煤が付着する。TR 50出土。

このほかに、鉄滓が1点出土している (PL. 31 - d、Tab. 7)。(次山)

次に土器を報告する (Fig. 140、PL. 37)。

褐色土層には暗褐色土に比べてさらにまとまりにかけける多様な土器類が混在している。せいぜいTO 35での鍋、釜類が少々まとまるくらいであろう。ここでは1968年度出土品の中から目につくものを任意に抽出した。

1～11が土師器杯・皿類、12・13が瓦器碗、15～18が土師器の甕・鍋類、14が土師器甌、19が須恵器鉢である。

1は、深手丸底の土師器杯片で、口縁部は端面に内傾する面を有する。外面の一部と内面にハケメをとどめ、内面にわずかにミガキないし暗文の痕跡のようなものが残る。7世紀後半の土師器杯Cと思わ

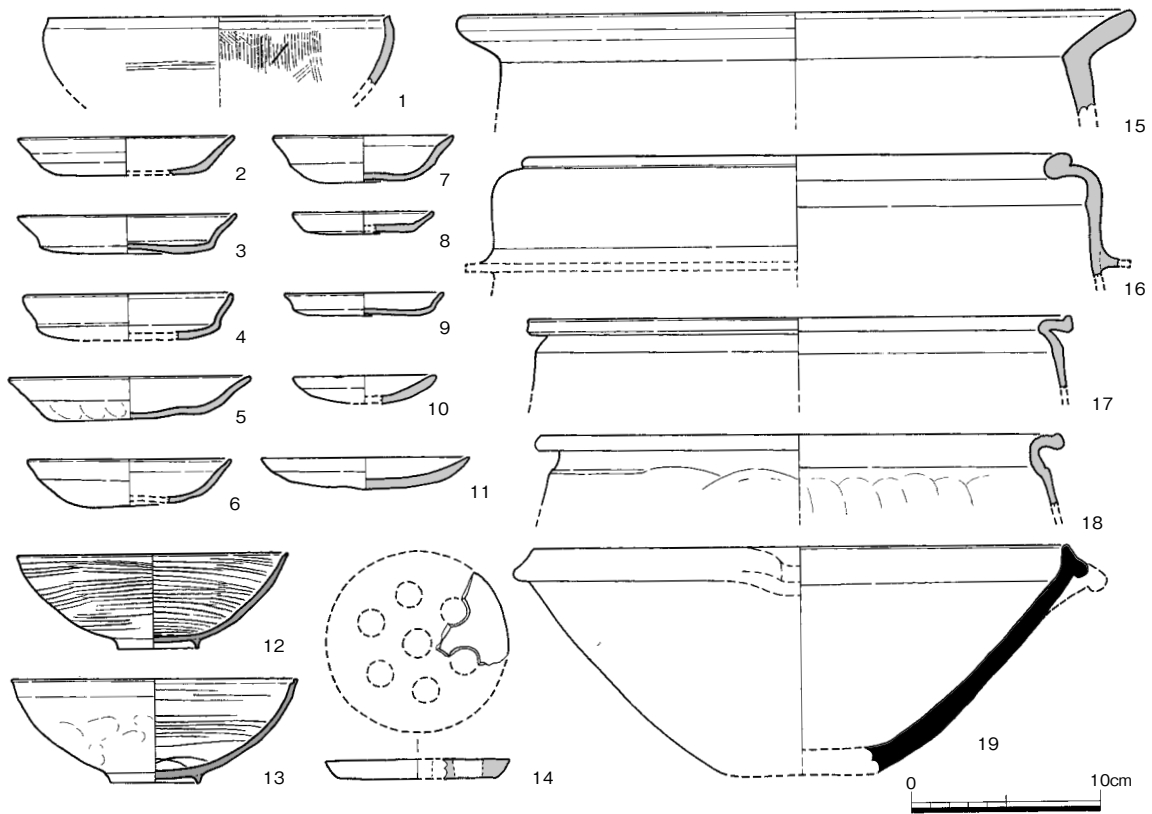


Fig. 140 褐色土 土師器・須恵器・瓦器 (1:4)

れる。復原口径18.2cmを測る。

2～11が各時代の土師器皿である。

2は、外面に2段ヨコナデの痕跡が明瞭なもので、胎土は褐色を呈する。これに対して3・4はほぼ同様な径であるが、1段ナデで底部と体部の境を明瞭にみせるもので、橙褐色を呈する。前者が13世紀頃のものであるのに対して、後者は14～15世紀頃のものであろう。2は口径11.4cm、3は口径11.6cm、器高2.1cm、4は口径11.0cmである。

5～7も同じく橙褐色の胎土のものだが、外反気味に口縁が長く開き、ヨコナデの範囲が狭い。さらに時期の下るものと思われる。5は口径12.8cm、器高2.3cm、6は口径10.7cm、7は口径9.6cm、器高2.6cmを測る。また、11は白色で精良な胎土をもち、口縁を薄く引き延ばすもので、近世に属するものであろう。口径11.0cm、器高1.8cm。

こうした大ないし中皿の多様な中身に対応するように、小皿にもいくつか種類がある。まず、8・9は1段ナデ仕上げで橙褐色の胎土をもつもので、13～14世紀頃のもの。8は口径7.4cm、器高1.2cm、9は口径8.4cm、器高1.2cmを測る。これに対して、10は厚手ながら精良な胎土で作られた小皿。口縁の一部に煤が付着する燈明皿で、11に対応する。口径7.6cm、器高1.5cm。

12と13は、瓦器碗である。矮小化が進んだ小さい径の高台を有し、内面見込みには螺旋状の暗文を施している。18は、外面のミガキをすでに失っており、より後出のものとみられるが、それでも13世紀代におさまるのであろう。12は口径14.4cm、器高は5.6cm、13は口径15.2cm、器高5.5cmである。



14は、甑の底板で、図に復元的に示したように小円孔を計7個ほどあけるものであろう。孔は管状のもので抜くようにしてあけられている。底部がすぼまり気味の深鉢状の体部内側に落とし込んで使用したと考えられる。復原径は9.8cm、厚さ1.1cmを測る。

ところで、暗褐色土にはあまり含まれていなかった鍋、甕類が褐色土からはやや多く出土している。

15は、単純な「く」の字に屈曲する口縁をもつ厚手の甕の口縁である。復原口径35.4cm。距離にして30m以上離れた地点の破片が接合しており、褐色土が二次的に大きく乱されていることがわかる。時期を含め遺物の性格はわからない。

16は、口縁を強く内側に巻き込んだ後、端部を外側に丸く折り返し、玉縁状に仕上げる大和H型と呼ばれる釜である。薄い鏝の下側にも煤の付着が認められない未使用品と判断される。胎土は精良で白っぽい褐色を呈する。近世に下るものだろう。復原口径は28.5cm。17・18は、口縁がきつく外反し、水平に折れた口縁の端部を丸く上方につまむ釜で、いわゆるB1類に属するものである。18は体部外面に幅の広い面取り状の調整痕が残る。17は口縁部から体部外面にかけて、18は残存内外面全面に煤の付着が観察できる。口縁の形状から15世紀頃のものと思われる（菅原1983）。復原口径は17が28.8cm、18が27.4cmである。

19は、須恵器の鉢で、残存していないが片口がつくものと思われる。口径は29.2cm、器高12.1cmで、底面は平底と思われる。他の地点で出土する須恵器の鉢はほとんど端面が外傾する面を広くもつ東播系の製品であるのに対して、本例は端面下端を玉縁状に仕上げ、外面にロクロによるナデ調整の凹凸をみせる独特のものとなっている。胎土に砂粒を多く含み、灰色を呈している。産地は不明だが他の例と同じ13～14世紀頃のものなのであろう。（高橋）

軒瓦を報告する（Fig. 141～146）。

1は、3Bb。瓦当下半部にあたる。裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデである。同心円状の凹凸がわずかにみられ、回転台を使用した可能性がある。側面の調整はナデであり、外縁上には範端痕がある。

2・3も、3Bbか。2は瓦当下半部。裏面は中央がやや高くふくらみ、調整はナデである。瓦範の粘土が部分的に層状に剝離する。側面の調整はナデで、外縁は欠損している。3は瓦当下半部か。裏面は大部分剝離し、調整は不明瞭である。側面も大部分欠損するが、かすかにナデが認められる。

4・5は、6C。4は、瓦当下半部である。裏面はほぼ平坦で、大部分はユビオサエで仕上げ、さら



Fig. 141 褐色土 軒丸瓦細部

に周縁に沿ったナデを施す。側面はナデを施す。

5は、瓦当下半部である。裏面はほぼ平坦。大部分はユビオサエで仕上げ、周縁のみナデで調整する。側面はナデが施され、若干外反する。瓦当面には掌文あり。

6は、6Db。瓦当は外縁をのぞき、ほぼ完形である。接合方法は楔形a。内面接合粘土が良好に残り、支持ナデツケの有無は不明であるが、内面接合粘土と瓦当粘土が完全に密着してはいない

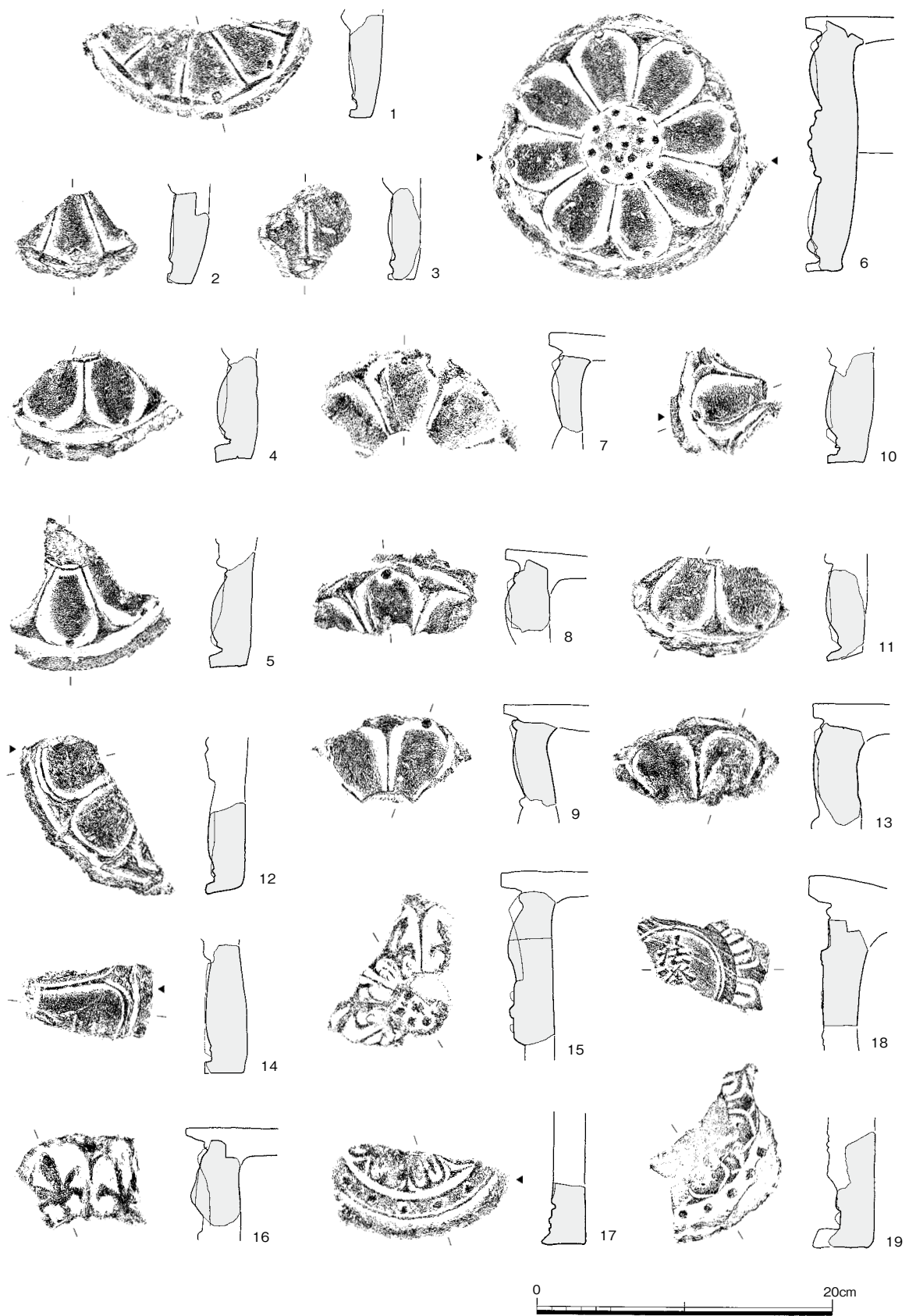


Fig. 142 褐色土 軒丸瓦 1 (1 : 4)

(Fig. 141 - 6)。丸瓦側面が当たる部分のみキザミが転写される。瓦当裏面は中央がやや高くふくらむ。調整は中央部が不定方向ナデ、下半部は周縁に沿ってナデ。側面はナデが施され、外反する。瓦当面全面に掌文あり。

7～11は、6D。7は、丸瓦との接合部にあたる。外縁は欠損しており、接合方法は楔形aかb。内面接合粘土が残るが、支持ナデツケの有無は不明である。瓦当裏面は不定方向ナデ。内面接合粘土はヨコ方向にナデつける。8は、瓦当下半部である。裏面は大部分が剝離しているが、調整は不定方向ナデである。側面は欠損する。瓦当面には掌文あり。9は、丸瓦との接合部にあたる。外縁は欠損しており、接合方法は楔形aかb。内面接合粘土が残るが、支持ナデツケの有無は不明である。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデ。内面接合粘土はヨコ方向にナデつける。瓦当面にはかすかに掌文あり。10は、丸瓦との接合部が残るが、接合方法は不明である。内面接合粘土がわずかに残る。瓦当裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面はナデが施され、若干外反する。瓦当面蓮弁には範ズレがみられる。11は、瓦当下半部か。裏面の調整は不明である。側面はナデが施され、若干外反する。瓦当面には掌文あり。瓦当厚と外縁幅が6Dの中では薄手である。

12～14は、7A。12は、AaかAbか不明である。瓦当下半部にあたり、丸瓦との接合部をわずかにとどめる。裏面は平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデが施される。側面はナデで、若干外反する。瓦当面間弁には範ズレがみられる。13は、AaかAbか不明である。丸瓦との接合部にあたり、焼成は軟質で、全体的に摩滅している。内面接合粘土が瓦当粘土とよく密着しており、支持ナデツケが施された可能性が高い。キザミの転写は不明瞭である。瓦当裏面は摩滅と剝離により、調整は不明瞭である。14は、AaかAbか不明である。丸瓦との接合部端が残る。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデで、さらに周縁に沿ってナデ、側面にはナデが施され、若干外反する。

15・16は、33A。15は、瓦当中央部である。裏面はほぼ平坦で、剝離しているため明瞭ではないが、調整は不定方向ナデである。側面は欠損している。瓦当中房の蓮子間に範傷がある。16は、丸瓦との接合部にあたる。焼成は軟質で全体的に摩滅している。接合方法は楔形a。キザミ転写が認められるが(Fig. 143 - 16)、支持ナデツケの有無は不明。裏面の調整は不明瞭である。側面は欠損している。

17は、54Ba。瓦当下半部である。焼成は軟質で、全体的に摩滅している。調整は裏面・側面ともに不明瞭で、外縁側面には範端痕が巡る(Fig. 143 - 17、瓦当面は左)。

18・19は、67B。18は、丸瓦との接合部。内面接合粘土をヨコにナデつけている。側面は欠損。瓦当中房には糸切り痕を残す。瓦当面には離れ砂が付着する。19は、瓦当下半部にあたる。裏面は平坦で、調整は不定方向ナデが施される。側面にはナデが施される。

20～24は、89V。20は、丸瓦玉縁式で残りが良好である。丸瓦全長31.0cm、筒部厚さ2.0～2.3cm、玉縁長さ5.0cm、厚さ1.6cm。筒部中央、狭端から約10cmの位置に径1cmの釘穴がある。焼成後に凹凸両面から穿つ。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリを加えた後、ナデを施す。凹面は布目圧痕を粗くナデ消す。糸切り痕が斜めに走り、吊り紐痕はみられないが、1.5～2cmの間隔をあけて紐状の破線が縦に複数走る(Fig. 143 - 20)。凹面側縁は幅1～2cmほど面取りをする。筒部凹面段部付近には、半円形の滑り止め(引掛け)が取り付く(凹面側縁の面取り後に接合)。調整は、側面がナデ、段部、玉縁もナデ。玉縁端部凹面は1cmほど面取りをし、瓦当外縁外角は幅0.3cmほど面取り

をする。裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデである。21は、丸瓦との接合部にあたる。丸瓦先端は未加工で、キザミも施されていない。外面・内面ともに接合粘土を付加する。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデである。側面はナデ。瓦当外縁外角は幅0.1～0.2cmほど面取りをし、外縁内角も部分的に幅0.2～0.3cmほど面取りをする。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリ後ナデを施す。22は、丸瓦との接合部にあたる。接合方法は不明。カキメあり (Fig.145-22)。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデで、さらに下半部は周縁に沿ってナデ。側面はナデ。外縁角には0.3cmほどの面取りがなされる。瓦当面巴文には掌文がある。瓦当裏面と側面の一部が銀化する。23は、丸瓦との接合部にあたり、丸瓦が幅8cm、長さ4cmほど残存している。丸瓦先端加工は施されていないと考えられるが、凸面の外面接合粘土が接着する部分にはキザミが、瓦当裏面の接合部にはカキメが施される (Fig.145-23)。外面、内面両方には接合粘土を付加。瓦当裏面はヨコナデ。側面は欠損している。瓦当面には離れ砂が付着する。筒部凸面・凹面ともに調整はナデであるが、筒部凹面には斜め方向に糸切り痕が走る。24は、瓦当下半部である。裏面は平坦で、調整は不定方向ナデで、さらに周縁に沿ってナデ。側面はナデ。外縁角には幅0.3cmの面取りが施される。

25は、89 X。丸瓦との接合部にあたる。瓦当裏面にはカキメが施される。側面の調整はナデで、若干外反する。外縁上面には糸切り痕が残る。瓦当面には離れ砂付着か。

26は、90 A。裏面は大部分欠損し、どの部分にあたるか不明である。瓦当面には離れ砂が付着する。

27・28は、96 Iか。27は、丸瓦との接合部で、丸瓦が幅14cm、長さ9cmほど残存している。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリを施した後、タテナデを施す。筒部凹面には鉄線切りの痕跡があり、布目圧痕はほぼナデ消されている。凸面側縁は幅5mmほど面取りをするが、凹面側縁の面取りの有無は欠損により不明である。丸瓦先端は未加工だが、凹面で内面接合部分の接着する部分にキザミを確認できる。先端には瓦当裏面のカキメが転写される。外面・内面ともに接合粘土を付加している。裏面はほぼ平坦で、調整はナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。丸瓦は厚さ1.9cm。28は、丸瓦との接合部。外面・



Fig. 143 褐色土 軒丸瓦細部



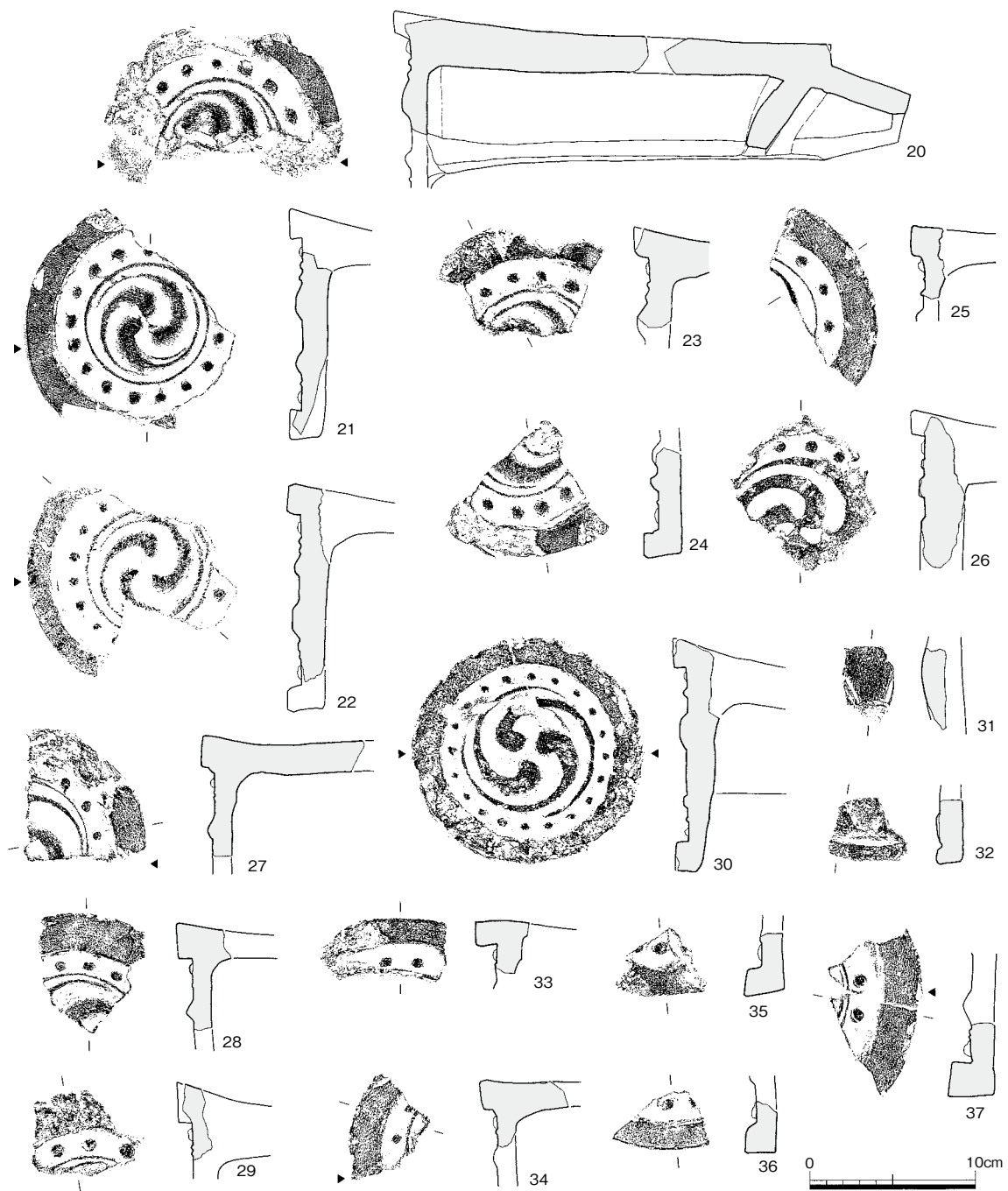


Fig. 144 褐色土 軒丸瓦 2 (1:4)

内面ともに接合粘土を付加。内面接合粘土には筒部凹面のキザミを転写する。瓦当裏面は平坦で、調整はナデ。側面はナデ。瓦当面との角度は鋭角をなす。外縁上面はナデ。

29は、96 IかX。裏面が剝離し、どの部分にあたるか不明である。側面にはナデが認められる。瓦当面には離れ砂が付着する。

30は、97 D。瓦当がほぼ完存する。丸瓦との接合部には、タテ方向にキザミを密に施し、さらにヨコ方向にカキメを施す (Fig. 145 - 30)。接合粘土の有無は不明である。裏面は平坦で、調整はヨコナデである。側面はナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。巴文には掌文がみられる。

31～37は、型式不明軒丸瓦。31は、飛鳥時代軒丸瓦の蓮弁の一部か。裏面は剥離している。32は、瓦当下半部で、裏面は平坦である。飛鳥時代軒丸瓦の蓮弁と間弁の一部か。33は、外縁高が高く、珠文は大きく間隔は疎らである。裏面は全面に剥離し、どの部分にあたるかはわからない。側面調整は不定方向ナデ。外縁内面は瓦当面对して垂直方向にナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。室町時代のものか。34は、丸瓦との接合部にあたり、丸瓦が幅6cm、長さ5cmほど残存する。外面、内面ともに接合粘土を付加している。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリ後、ナデを施す。その後、瓦当付近のみヨコナデ。筒部凹面側縁の面取りは明瞭ではないが、幅1cmほどと考えられる。瓦当面には離れ砂が付着する。室町後期～江戸前期のものか。丸瓦は厚さ1.7cm。35は、瓦当下半部である。瓦当裏面は平坦で、周縁の調整は回転ナデである。側面はナデ。外縁上面は円周に沿ってナデ。外縁角には幅0.3cmの面取りがなされる。中世のものか。36は、瓦当下半部である。瓦当裏面は周縁に沿ってナデ。外縁上面は円に沿ってナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。中世のものか。37は、左巻き巴文。瓦当下半部である。瓦当裏面の調整は、中心寄りには雑な不定方向ナデ、さらに周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデ。室町時代のものと考えられる。

38は、206か。凹面の調整はタテナデで、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリが施される。

39は、213 B。瓦当の一部。凸面が一部残るが、摩滅により調整は不明瞭である。

40は、229 B。直線顎。凹面は粗くタテナデする。瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリを施し、布目圧痕が残っていない。凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ、側面は瓦当に向けてタテ方向のヘラ



Fig. 145 褐色土 軒丸瓦細部

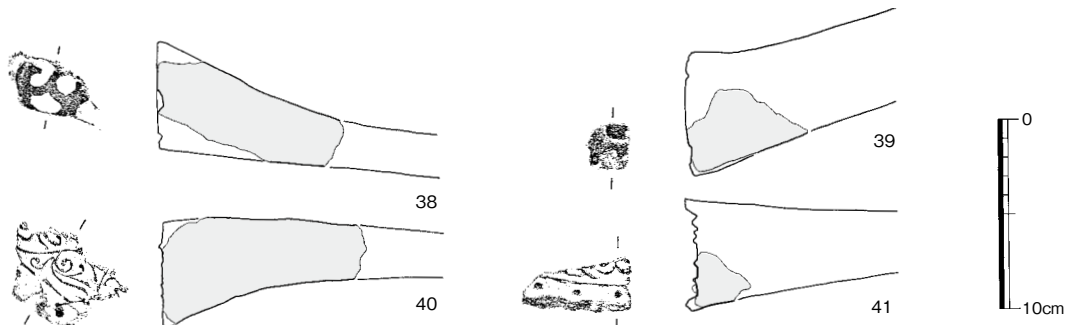


Fig. 146 褐色土 軒平瓦 (1:4)

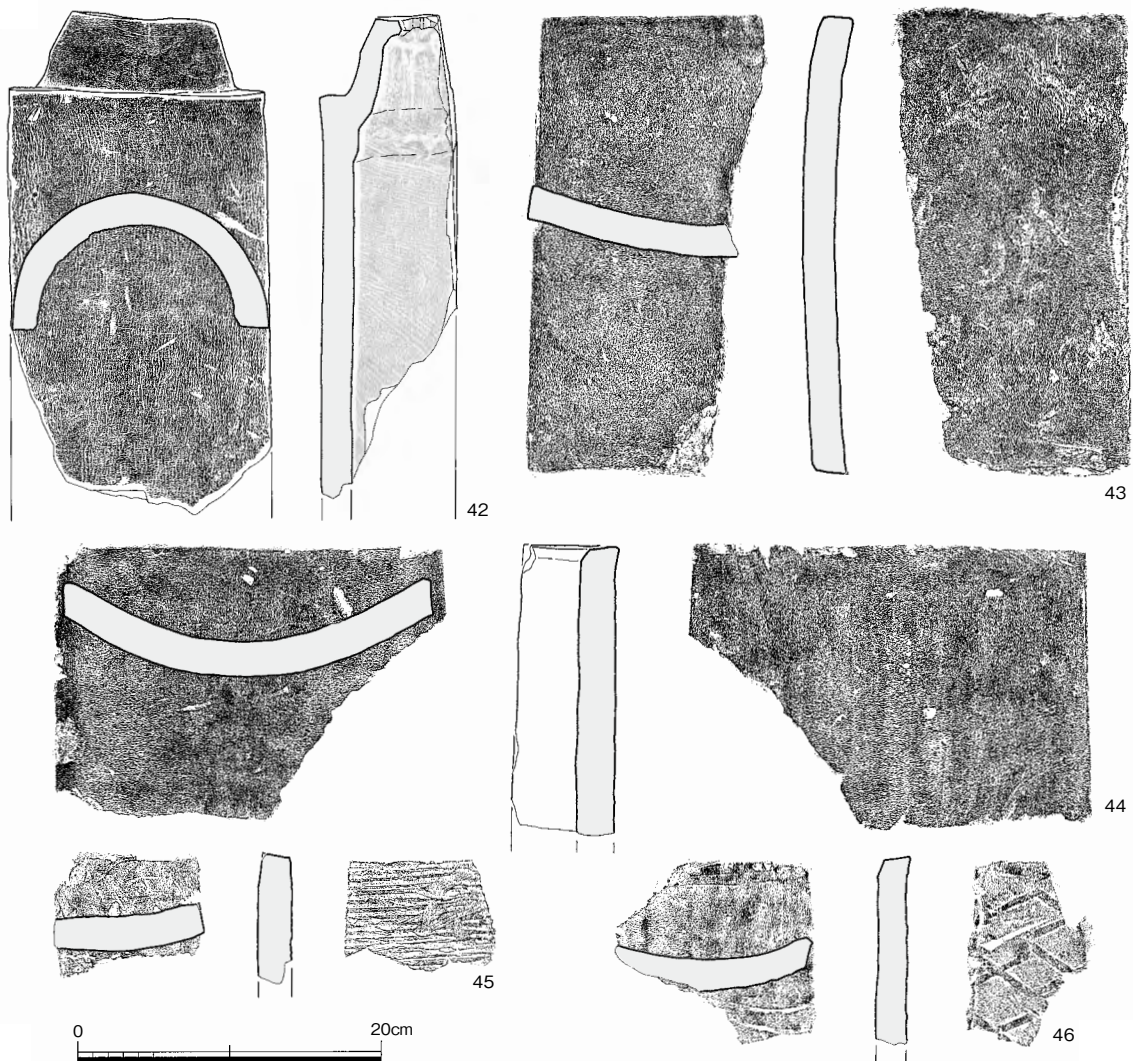


Fig. 147 褐色土 丸瓦・平瓦 (1:5)

ケズリで調整する。凹面側縁を幅1.2cmほど面取りする。

41は、242 A。瓦当中央下部にあたる。凹面側外縁外側を幅4mmほど面取り。凹面の調整はヘラケズリか。

このほか、266 Aと284 Bが各1点、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が5点出土している。(中川)

また丸瓦、平瓦、鴟尾、および道具瓦が出土した (Fig. 147・148)。

丸瓦は総出土量は19.0kgである。

42は、筒部凸面はタテ縄タタキ後に部分的にヨコナデ。玉縁凸面端部側をケズリ後に肩から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデする。側面はヘラケズリで調整し、筒部凹面側縁は面取りをする。凹面は未調整だが、玉縁凹面側縁も面取りをする。平安時代に属する。

平瓦は、合計107.2kgである。

43は、凸面はタテナデ、狭端面、広端面、側面はヘラケズリで調整する。凹面は全面ヨコナデで、狭端縁をわずかに面取りする。鎌倉時代に属する。



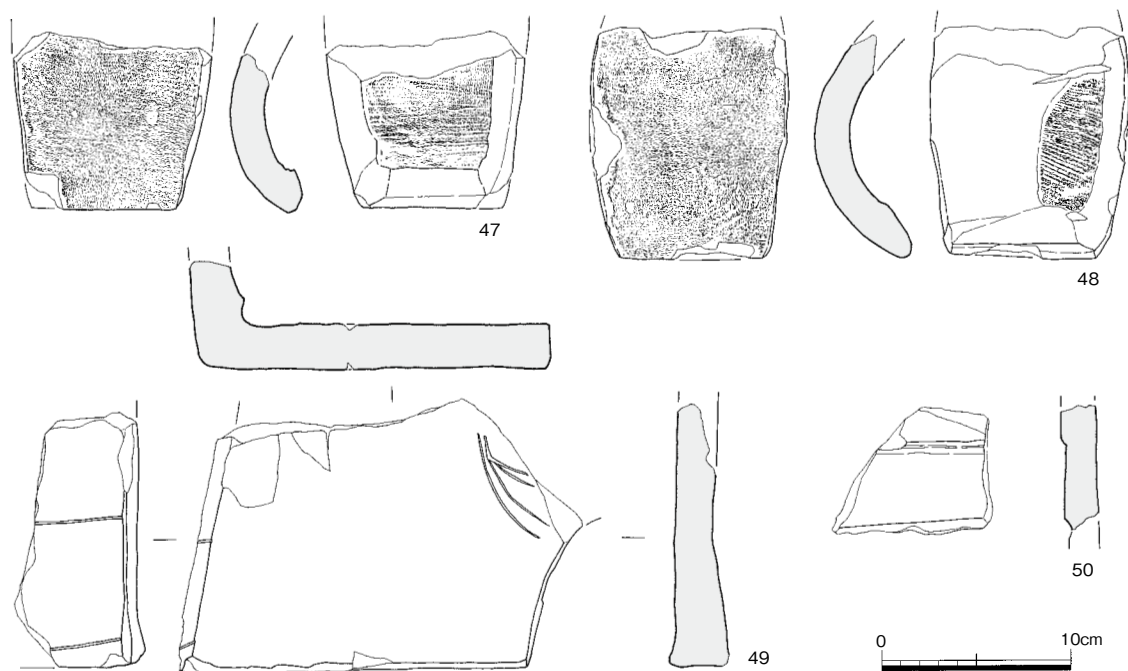


Fig. 148 褐色土 道具瓦 (1:4)

44は、凸面タテナデ。狭端面と側面はヘラケズリで調整する。凹面は未調整で、狭端縁を面取り、凹面側縁をタテナデする。室町時代に属する。

45は、凸面に櫛状工具でカキメを施す。側面はナデ、凹面は不定方向のナデで、布目は見えない。時期は不明である。

46は、凸面に格子文。側面はナデ、凹面側縁はナデ、凹面端縁は面取りをする。鎌倉時代に属する。道具瓦を報告する。

47は、面戸瓦。凸面はタテ縄タタキ、凹面は両側縁とも面取りをする。『至宝』の面戸12にあたる。

48は、面戸瓦。凸面はタテ縄タタキ、凹面は片側側縁のみ面取りをする。『至宝』の面戸12にあたる。47・48はいずれも室町中期に属する。

鴟尾は、2点出土している。

49は、鴟尾の頭部と胴部が残存している。頭部は中央の削りが残り、削りの上方にはヘラ描きの戯画がみえる。胴部の段は横位の沈線で表現する。頭部、胴部とも表面はヨコナデ、底部は粗いナデ、裏面はタテナデ調整。『至宝』における鴟尾4で、飛鳥中期に属する。

50は、鴟尾の鱗部分。表面はタテナデ調整。正段で裏面は粗いナデ。この個体は『至宝』には掲載されていないが、鴟尾3と同一個体の可能性がある。飛鳥時代に属する。(今井)

**表土** 金属製品、土器、瓦が出土した。

金属製品として、銅製品と鉄製品が出土している。鉄製品には釘、金具片等6点があるが、いずれも錆化が著しい。銅製品は円盤形の銅板が1点ある。(次山)

次に土器を報告する (Fig. 149)。

1・2は奈良時代の須恵器杯B蓋である。1は、つまみを欠損していて、ほとんど器高がないもので、端部は短く下向きに折り返されている。2は、つぶれた宝珠形つまみだが、大きなものである。

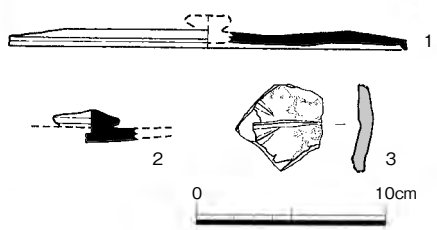


Fig. 149 表土 須恵器・施釉陶器 (1:4)

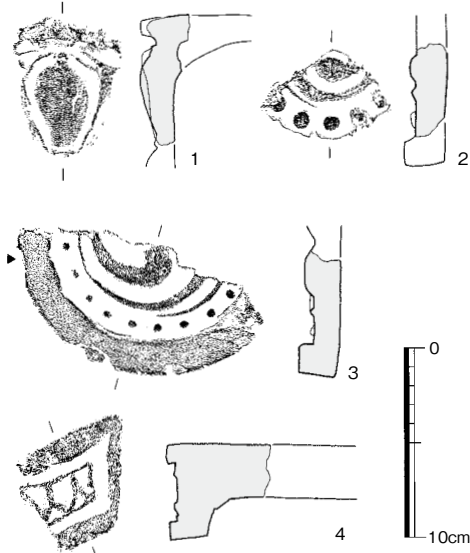


Fig. 150 表土 軒丸瓦・軒平瓦 (1:4)

4は、204 C。貼付段顎。凹面には布目圧痕が残るが、側面と瓦当面付近はナデ消す。凸面顎部はヨコナデ。平瓦部はタテナデ。凹面側縁は幅3mmほど面取りをする。瓦当縁には面取りがない。(中川)

#### その他の包含層

金属製品、石製品、土製品、軒瓦の順に報告する。

金属製品には、銅製品・鉄製品がある (Fig. 151 - 1)。1は、銅製品で本来は半円形を呈していたと考えられる板状の破片。長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ2cm。KH 53石田トレンチで取り上げている。鉄製品は釘、火箸状品、釜片など6点がある。

石製品には、火打石・三角柱状石製品がある (Fig. 151 - 2・3)。2は安山岩製の火打石である。長さ6.9cmの厚みのある剝片を利用したもので、一側縁の全体と他側縁の2分の1ほどに打撃痕が認められる。出土地点不明。3は、周囲の3面を平坦に研磨することにより不整形な三角柱状を呈する石製品の破片。流紋岩製。各面が幅約7cm、6.5cm、6.1cmとなる。現状の厚さ約3.7cm。1面のみが黒灰色を呈する。KH 53石田トレンチで取り上げている。

4は、長さ9.7cm、幅8.6cm、厚さ3.2cmほどの不整形な土製品片である (Fig. 151 - 4)。一部に灰褐色となる部分もあるが、全体に明橙褐色を呈する。被熱の程度は強くなく融解している箇所などはない。胎土は粘土分が高く砂粒と風化雲母粒子が目立つ。「実相院北トレンチ第3層」で取り上げている。(次山)

次に軒瓦を報告する。

3は、緑色の低火度鉛釉を施した軟質の製品 (PL. 37)。表面および図の上下端面に施釉されている。図上での中心部分に沈線を有し、右側端面は何かに接合してあったものが剥がれたようになっている。また、上辺と下辺は摩滅のためはっきりしないが、おそらく図の状態通りに完結しているようであり、そこに型の合わせ目状バリを残す。これらの形状から、容器類ではなく施釉の製品の一部ではないかと思われる。しかし、表土出土ということもあり、奈良三彩として認定できるかどうか疑わしい。(高橋) 軒瓦について報告する (Fig. 150)。

1は、6 C。丸瓦との接合部にあたる。接合方法は片柄形bか。支持ナデツケが施されるが、キザミ転写はない。裏面の調整はユビオサエである。側面はナデ。瓦当面の蓮弁には掌文あり。

2は、91か92。瓦当下半部か。裏面は平坦で、調整はナデ。側面は欠損している。

3は、97 D。瓦当下半部にあたる。裏面は平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデである。側面はナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。



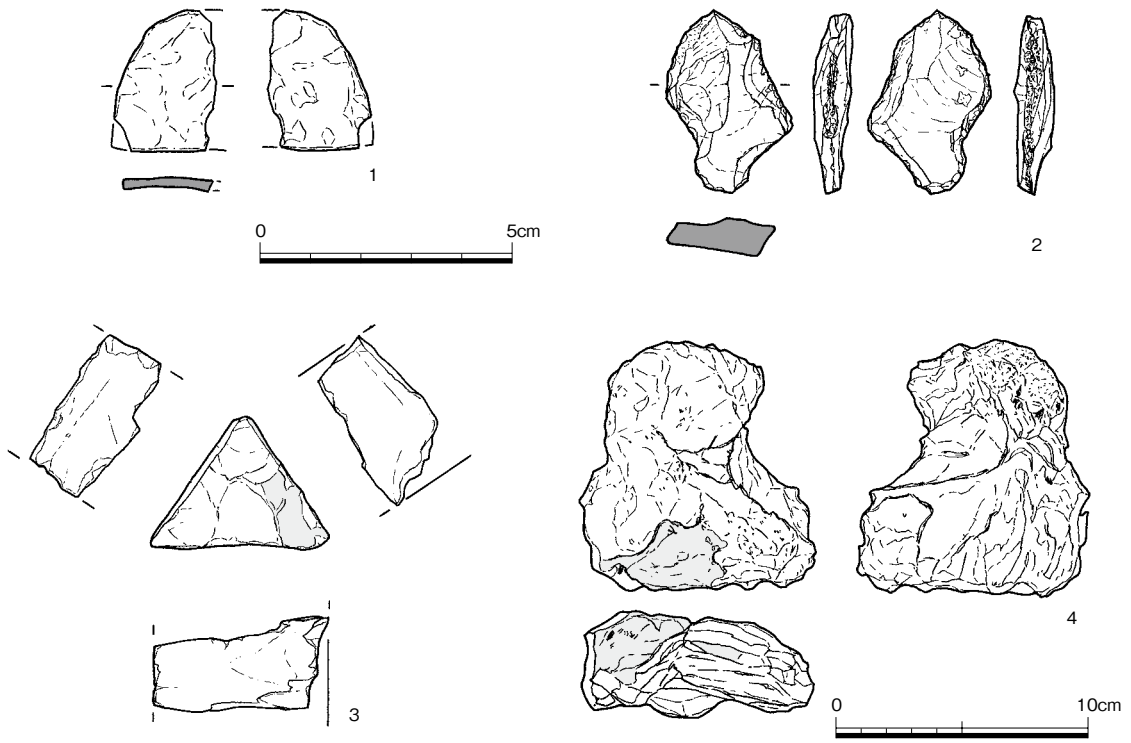


Fig. 151 その他の包含層 金属製品 (1 2:3)・石製品 (2・3 1:3)・土製品 (4 1:3)

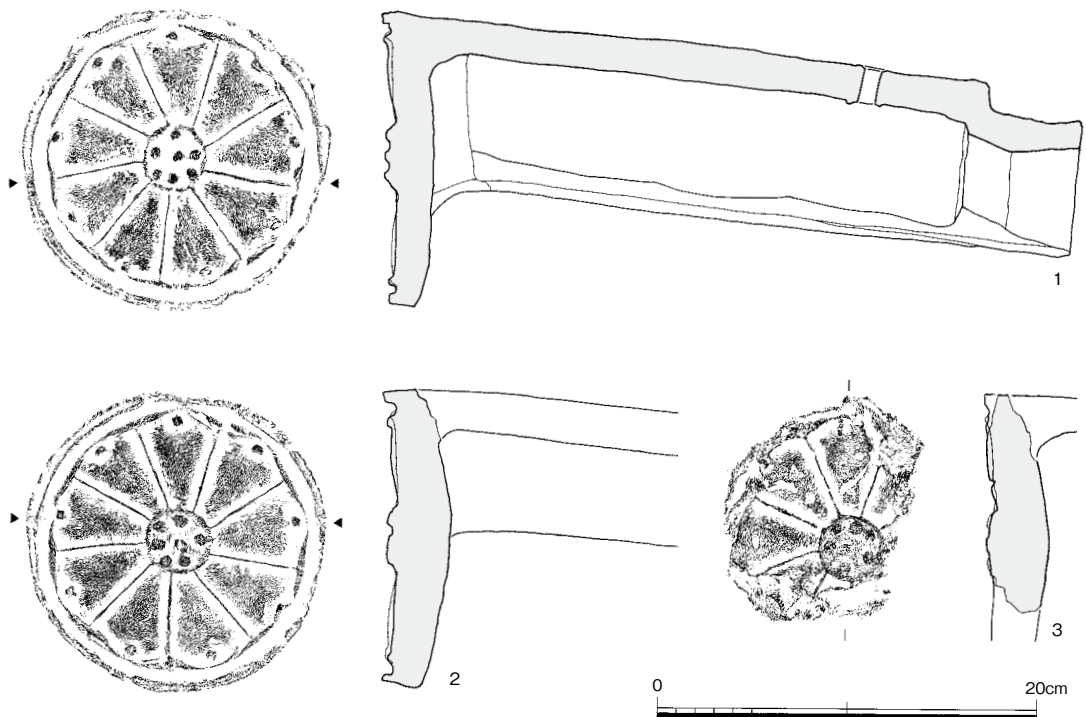


Fig. 152 その他の包含層 軒丸瓦1 (1:4)

TS47地山直上 Fig. 152-1・2は、3Bb。1は、丸瓦も含め完存している。丸瓦全長37.3cm、筒部厚さ1.8~2.0cm、玉縁長5.0cm、厚さ1.4~1.7cm。瓦当と丸瓦との接合方法は不明である。



瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面はナデ。外縁上には範端痕あり。内面接合粘土は瓦当と完全には密着せず、所々隙間を生じる。凸面段部から6cmのところ、径9cmの釘穴を穿つ。凸面から凹面への焼成前穿孔である。筒部凸面の調整はタテ方向のヘラケズリ後、瓦当付近と段部付近のみヨコナデ。凹面は大部分布目圧痕を残すが、一部粗くナデ消される。玉縁部凹面の調整はヨコ方向のヘラケズリ。側面は分割破面と分割截面を、瓦当接合前にヘラケズリするが、分割截面と破面の境はわずかに段差、もしくは線となって残る。凹面側縁は面取りを施す (Fig. 153-1)。2は、瓦当が完存する。接合方法片柄形a。内面接合粘土は剝離し痕跡のみ。裏面は中央にかけて高くふくらむ。調整は回転ナデの後、不定方向ナデ (Fig. 153-2)。側面はナデ。外縁上には明瞭に範端痕あり。瓦当面中房の蓮子に掌文あり。

**TP 48小礎石周辺** Fig. 152-3は、3B b。丸瓦と瓦当の接合部にあたる。接合方法は片柄形aか。内面接合粘土は剝離痕跡のみ残る。瓦当裏面は剝離するが、中央にかけてやや高くふくらむ。調整はナデ。瓦当側面は残りが悪く、調整は不明。外縁も残りが悪く、範端痕は確認できない。

**TP 49地山直上** Fig. 154-4は、6D。丸瓦との接合部にあたる。接合方法楔形aかb。支持ナデツケ、キザミ転写は認め

Fig. 153 その他の包含層 軒丸瓦細部

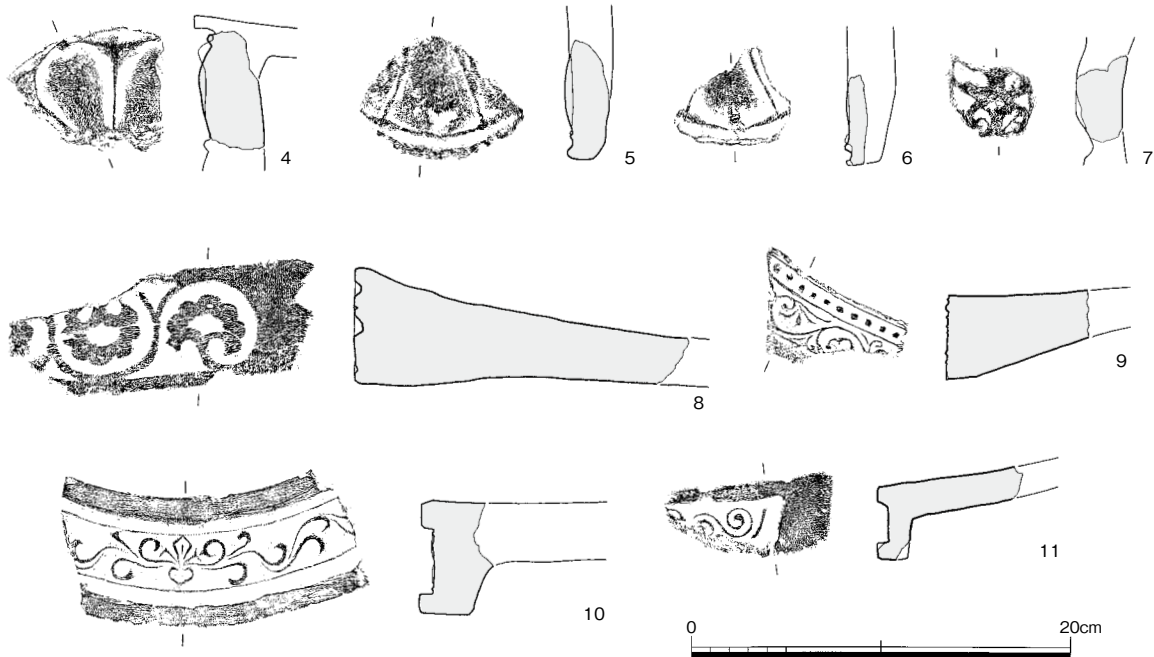


Fig. 154 その他の包含層 軒丸瓦2・軒平瓦 (1:4)

ない。内面接合粘土が一部残る。裏面の調整は不定方向ナデ。側面は欠損。

**TQ 50 バラス混じり褐色土** Fig.154 - 5は、3 Cか。焼成は軟質で、全体的に摩滅。瓦当下半部にあたる。裏面・側面の調整は不明。外縁は摩滅により、範端痕を確認できない。

Fig.154 - 10は、255 A。貼付段顎。凹面は布目圧痕をタテ方向にナデ消す。瓦当上縁は幅3～7mmほど面取りを施す。顎面はヨコナデ。顎裏面側縁は幅5mmほど面取りを施す。顎裏面はヨコナデ。

**KD 53 床土** Fig.154 - 6は、3 Bbか。裏面全面が剝離している。側面の調整はナデ。瓦当面にはかすかに掌文を認める。外縁は欠損しており、範端痕の有無は不明。

**TR 49 石田北溝** Fig.154 - 7は、33 A。裏面上端部は外反し、内面接合粘土の一部にあると推測される。調整は不定方向ナデ。

**TQ 47 瓦層** Fig.154 - 8は、206 D。直線顎。焼成は軟質で、全体的に摩滅。瓦当面をヨコナデ後に施文する。唐草文中央にはピン穴がある。文様輪郭にケガキ線はない。凹面は狭端へ向けてタテ方向のヘラケズリ後、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリ。凸面の調整は不明瞭。側面は狭端へ向けてタテ方向のヘラケズリ。凸面で斜めに剝離がみられ、粘土板合わせ目の可能性がある（S型）。

**TO 30 地山上暗褐色土** Fig.154 - 9は、240 Aa。直線顎。凹面は杵板痕（幅2.3cm）と布目圧痕を残すが、瓦当付近幅3cmほどはヨコナデを施して消している。側縁付近は斜め方向にナデ。凹面側縁は幅7mmほど面取りを施す。凸面は瓦当に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。瓦当付近のみナデか。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。

**TP 50 灰褐色土** Fig.154 - 11は、262 B。貼付段顎。接合面にわずかにカキメを認める。凹面側縁には縦棧が剝がれた痕跡あり。接合面にはカキメが転写される。凹面調整はタテナデ、瓦当付近のみヨコナデ、顎裏面はヨコナデ、凸面はタテナデ、瓦当付近のみヨコナデ、側面はタテナデで調整する。いずれの箇所にも明瞭な面取りはない。

**KB 47 石田トレンチ (KC 46・KJ 52 も含む)** Fig.155 - 12は、3 C。接合方法片柄形b。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらむ。調整は裏面、側面ともに摩滅により不明。瓦当縁端に範端痕をわ

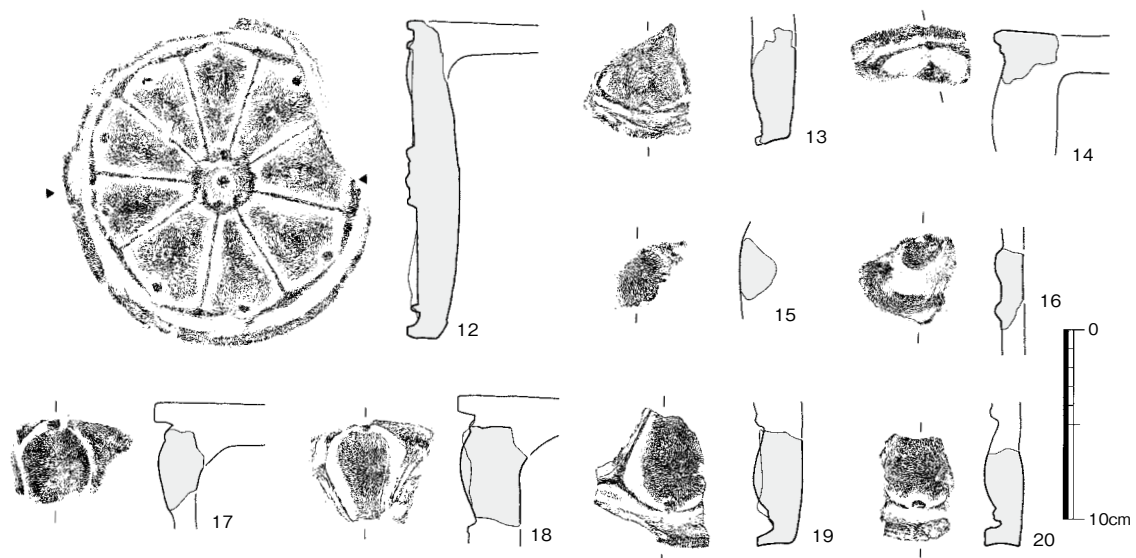


Fig. 155 その他の包含層 軒丸瓦3 (1:4)



ずかに認める。

13は、3Cか。全体的に摩滅。下半部にあたる。瓦当裏面・側面の調整は不定方向ナデ。側面は外反する。外縁は摩滅し、範端痕は認められない。

**Fig. 156** その他の包含層 軒丸瓦細部 14は、33A。丸瓦との接合部にあたり、丸瓦が一部残る。焼成は軟質で、全体的に摩滅。接合方法は不明。支持ナデツケ、キザミの有無も不明である。

15は、型式不明軒丸瓦。小片で、瓦当面の一部がわずかに残る。飛鳥時代軒丸瓦の蓮弁部にあたるか。

16は、型式不明巴文軒丸瓦。瓦当の中央部のみ残存。瓦当面には離れ砂が付着する。

**KB 47 ライン畦** Fig. 155 - 17は、6Cか。礫敷中から出土。焼成は軟質で、全体的に摩滅。丸瓦との接合部にあたり。接合方法片柄形dか。内面接合粘土が一部のこり、支持ナデツケ・キザミ転写ともに認められない。側面は欠損している。

18は、6D。「黄褐色土面穴」で取り上げている。丸瓦との接合部にあたり。接合方法は楔形aかb。支持ナデツケ・キザミ転写ともに認められない。内面接合粘土が一部残る。瓦当裏面は不定方向ナデで調整する。側面は欠損する。瓦当面には掌文がある。

**47 L トレンチ** Fig. 155 - 19・20は、6D。19は、瓦当下半部にあたる。裏面の調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデで、若干外反する。側面の一部が剝離し、粘土を範詰めする際に外縁の一部を貼り足した可能性がある (Fig. 156、瓦当が上)。20は、瓦当下半部にあたる。裏面の調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデで、若干外反する。外縁上には範端痕がわずかに認められる。

**茶褐色土** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、1点出土している。

**KB 48 石田北溝** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。

**TR 47 石田東溝** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。

**KB - E 47 石田トレンチ** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。

**AC 46 石田東拡張トレンチ** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。

**出土位置不明** 瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、2点ある。(中川)



## 参考文献

- 宇野隆夫 1984 「後半期の須恵器」『史林』第70巻第3号 京都大学文学部史学研究会
- 近江俊秀 1991 「大和型瓦器椀の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号 古代学協会
- 川越俊一 1983 「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 工藤圭章 1976 「古代の建築技法」『文化財講座日本の建築2 古代2・中世1』第一法規出版
- 佐原 真 1972 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
- 菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 菅原正明 1989 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 国立歴史民俗博物館
- 立石堅志 1989 「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究』5 日本中世土器研究会
- 立石堅志・森下恵介 1987 「大和北部における中近世土器の様相－奈良市内出土資料を中心として－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会
- 田辺昭三 1966 『陶器古窯址群』I 平安学園考古学クラブ
- 中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中井淳史 1994 「畿内土器様相の中世的特質」『中近世土器の基礎研究』10 日本中世土器研究会
- 奈良市教育委員会 1981 「古市城跡発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度
- 奈良市教育委員会 1983 「元興寺食堂推定地の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和57年度
- 西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 法隆寺昭和資財帳編集委員会 1992 『昭和資財帳 第15巻 法隆寺の至宝』小学館
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

Tab. 7 鉄滓計測表

PL.	地区	遺構名	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
32-1	TO 32	炭化物層	9.5	7.3	3.7	247.7	ガラス化
32-2	TO 32	炭化物層	6.3	4.3	2.6	126.9	内実質
32-3	TO 34	木炭層	4.8	3.6	2.7	34.9	
32-4	TO 35	木炭層	6.3	3.4	3.6	103.5	内実質
32-5	TO 35	木炭層	6.8	5.3	2.6	65.3	
32-6	TO 35	木炭層	4.8	3.0	1.9	28.1	
32-7	TO 35	炭化物層	4.0	1.8	1.5	8.3	
32-8	TO 35	炭化物層	2.7	2.5	1.5	5.9	
32-9	TO 35	炭化物層	3.3	1.8	1.7	12.5	
32-10	TO 35	炭化物層	5.0	3.8	2.1	36.5	炉底土付着
32-11	TO 35	炭化物層	5.8	4.8	1.4	27.9	
32-12	TO 35	炭化物層	6.0	3.9	3.2	100.9	内実質
32-13	TO 35	炭化物層	6.3	5.3	2.6	117.7	内実質
32-14	TO 35	炭化物層	9.2	7.8	1.5	120.4	楕形滓
32-15	TO 35	炭化物層	7.5	6.8	3.8	116.0	楕形滓、炉底土付着
32-16	TO 35	炭化物層	9.2	7.7	1.2	315.4	楕形滓、炉底土付着
32-17	TO 35	炭化物層	15.8	10.6	3.9	806.2	楕形滓、内実質
31-d	KA 46	バラス土	10.1	8.1	5.9	477.4	内実質
31-d	KB 45	バラス土	4.5	2.7	2.2	33.3	
31-d	TP 50	褐色土	5.7	4.4	2.7	64.7	

Tab. 8 銭貨計測表

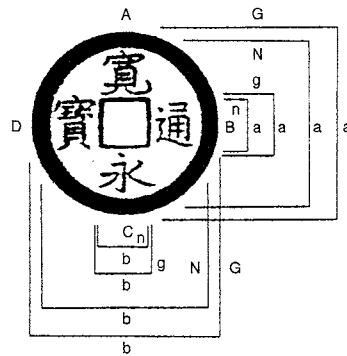
Fig.	PL.	銭種	外縁外径 平均 G (mm)	外縁内径 平均 N (mm)	内郭外径 平均 g (mm)	内郭内径 平均 n (mm)	外縁厚 平均 T (mm)	文字面厚 平均 t (mm)	重量 (g)
Fig. 80	33-b	寛永通宝	23.85	19.95	7.75	6.05	1.37	0.90	2.58
Fig. 127-2	33-b	寛永通宝	22.75	19.15	8.95	7.25	1.14	0.80	2.47
Fig. 139-2	33-b	寛永通宝	25.13	20.40	7.78	7.10	1.07	0.45	2.84

銭貨の各部測点については右のとおりである。

$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2}, \quad \text{外縁内径 } N = \frac{Na + Nb}{2},$$

$$\text{内郭外径 } g = \frac{ga + gb}{2}, \quad \text{内郭内径 } n = \frac{na + nb}{2},$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A + B + C + D}{4}, \quad \text{文字面厚 } t = \frac{a + b + c + d}{4}$$



Tab. 9 金属製品他遺物ラベル表

Fig.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
80	銭貨	K G 49 土坑	K G 49	土坑	691028
118-1	輪羽口	炭化物層	T O 35	炭化物層 ／木炭層	680831 ／ 680908
118-2	輪羽口	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
118-3	輪羽口	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
118-4	輪羽口	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
118-5	輪羽口	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
118-6	輪羽口	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
119-7	輪羽口	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
119-8	輪羽口	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
119-9	土製品	炭化物層	T O 35	炭化物層 ／木炭層	680831 ／ 680908
119-10	土製品	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
119-11	炉壁片	木炭層	T O 34	木炭層	680903
123	凝灰岩片	黄褐色土	K B 50	黄褐色土	691018
127-1	銅製品	暗褐色土	K E 53	暗褐色土	691003

Fig.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
127-2	銭貨	暗褐色土	K M 55	暗褐色土	691010
127-3	石製品	暗褐色土	K D 49	暗褐色土	691028
127-4	石製品	暗褐色土	K M 55	暗褐色土	691011
127-5	石製品	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009
127-6	石製品	暗褐色土	K E 53	暗褐色土	691003
139-1	銅製品	褐色土	T Q 50	褐色土	680826
139-2	銭貨	褐色土	T O 40	褐色土	680821
139-3	砥石	褐色土	T Q 52	褐色土	680826
139-4	石鍋	褐色土	T R 50	褐色土	680826
151-1	銅製品	その他の 包含層	K H 53	石田トレ	691003
151-2	火打石	その他の 包含層	K Z	Z	691031
151-3	石製品	その他の 包含層	K H 53	石田トレ	691003
151-4	土製品	その他の 包含層	実相院北 トレンチ	第3層	691016

Tab. 10-1 土器ラベル表-1

Fig.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
48	須恵器杯 蓋	K B 46整 地層下端	K B 46	整地層下 端	691031
73	黒色土器 椀	S E 7074	K A 61	井戸	691013
81-1	土師器皿	K C 46 土坑	K C 46	土坑	691013
81-2	土師器皿	K C 46 土坑	K C 46	土坑	691013
81-3	土師器皿	K C 46 土坑	K C 46	土坑	691013
84-1	土師器皿	K H 62 小穴	K H 62	小穴	691015
84-2	土師器皿	K H 62 小穴	K H 62	小穴	691015
86-1	須恵器甕	S D 7058	K G 53	東西溝	691003
86-2	瓦器皿	S D 7058	K G 53	東西溝	691003
86-3	土師器皿	K F 53 東西溝	K F 53	東西溝	691004
86-4	土師器皿	K E 49 東西溝	K E 49	東西溝	691023
86-5	土師器皿	K E 49 東西溝	K E 49	東西溝	691023
86-6	瓦器搗鉢	K F 49 東西溝	K F 49	東西溝	691022
86-7	土師器羽 釜	K E 49 東西溝	K E 49	東西溝	691023
86-8	瓦器火鉢	K E 49 東西溝	K E 49	東西溝	691023
90-1	土師器皿	K A 59 南北溝	K A 59	南北溝	691008
90-2	土師器皿	K M 53 南北溝	K M 53	南北溝	691011
90-3	須恵器壺	K M 53 南北溝	K M 53	南北溝	691011
90-4	土師器皿	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831

Fig.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
90-5	土師器皿	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-6	土師器皿	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-7	土師器皿	K A 59 南北溝	K A 59	南北溝	691008
90-8	土師器皿	K M 53 南北溝	K M 53	南北溝	691011
90-9	陶磁器	K M 53 南北溝	K M 53	南北溝	691011
90-10	土師器皿	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-11	土師器皿	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-12	土師器皿	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-13	土師器皿	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-14	瓦器搗鉢	K M 53 南北溝	K M 53	南北溝	691011
90-15	土師器羽 釜	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-16	瓦器搗鉢	K M 53 南北溝	K M 53	南北溝	691011
90-17	瓦器搗鉢	K M 53 南北溝	K M 53	南北溝	691011
90-18	土師器羽 釜	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-19	土師器羽 釜	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
90-20	土師器羽 釜	T O 35 南北溝	T O 35	南北溝	680831
102-1	須恵器杯 身	K C 45 瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691012
102-2	山茶碗か	K C 45 瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011
102-3	須恵器壺	K C 45 瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691012

Tab. 10-2 土器ラベル表-2

Fig.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
102-4	須恵器 こね鉢	K C 45 瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011
107-1	土師器皿	K C 45 瓦溜北凹み	K C 45	瓦溜まり 北凹み	691011
107-2	土師器皿	K C 45 瓦溜北凹み	K C 45	瓦溜まり 北凹み	691011
107-3	土師器皿	K C 45 瓦溜北凹み	K C 45	瓦溜まり 北凹み	691012
107-4	土師器皿	K C 45 瓦溜北凹み	K C 45	瓦溜まり 北凹み	691012
107-5	瓦器搦鉢	K C 45 瓦溜北凹み	K C 45	瓦溜まり 北凹み	691011
107-6	瓦器鍋	K C 45 瓦溜北凹み	K C 45	瓦溜まり 北凹み	691012
114-1	土師器皿	K L 55 凹み	K L 55	凹み	691011
114-2	土師器皿	K L 55 凹み	K L 55	凹み	691011
114-3	土師器皿	K L 55 凹み	K L 55	凹み	691011
114-4	土師器皿	K L 55 凹み	K L 55	凹み	691011
114-5	土師器皿	K L 55 凹み	K L 55	凹み	691011
114-6	土師器皿	K L 55 凹み	K L 55	凹み	691011
114-7	土師器皿	K L 55 凹み	K L 55	凹み	691011
114-8	陶器椀	K L 55 凹み	K L 55	凹み	691011
114-9	土師器皿	K C 46北 落ち込み	K C 46	北落ち込み	691012
114-10	白磁椀	K C 46北 落ち込み	K C 46	北落ち込み	691013
115-1	土師器皿	バラス土 層	K B 45	バラス下	691015
115-2	土師器皿	バラス土 層	K B 45	バラス下	691015
115-3	土師器皿	バラス土 層	K A 46	バラス土	691014
115-4	土師器皿	バラス土 層	K A 46	バラス土	691014
115-5	土師器皿	バラス土 層	K A 46	バラス土	691014
115-6	土師器皿	バラス土 層	K A 46	バラス土	691014
115-7	須恵器杯 身	バラス土 層	K A 46	バラス土	691014
115-8	須恵器鉢	バラス土 層	K A 46	バラス土	691014
120-1	土師器杯	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
120-2	土師器杯	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
120-3	須恵器甕	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831
120-4	土師器皿	木炭層	T O 34	木炭層	680831
124	黒色土器 椀	黄褐色土	K D 54	黄褐色土	691023
128-1	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-2	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831

Fig.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
128-3	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-4	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-5	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-6	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-7	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-8	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-9	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-10	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-11	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-12	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-13	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-14	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-15	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-16	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-17	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	E 3 ビット	680902
128-18	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28 ?	暗褐色土	680831
128-19	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-20	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-21	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-22	土師器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-23	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-24	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-25	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-26	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-27	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-28	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-29	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680830
128-30	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	小ビット	680902
128-31	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 28	西北ビット/ 東北ビット	680902
128-32	瓦器椀	T O 28 暗褐色土	T O 29	凹みの穴	680903
128-33	瓦器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
128-34	瓦器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831



Tab. 10-3 土器ラベル表-3

Fig.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
128-35	瓦器皿	T O 28 暗褐色土	T O 28	暗褐色土	680831
129-1	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691011
129-2	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-3	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691011
129-4	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-5	土師器皿	K A 5 5暗褐色	K A 55	暗褐色土	691013
129-6	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-7	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-8	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-9	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-10	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-11	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-12	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691013
129-13	瓦器椀	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691011
129-14	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-15	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
129-16	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691011
129-17	土師器皿	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691011
129-18	土師器 羽釜	K A 55 暗褐色土	K A 55	暗褐色土	691012
130-1	土師器皿	暗褐色土	K D 49	暗褐色土	691026
130-2	土師器皿	暗褐色土	K F 46	暗褐色土	691010
130-3	土師器皿	暗褐色土	K M 55	暗褐色土	691010
130-4	土師器皿	暗褐色土	K M 55	暗褐色土	691010
130-5	土師器皿	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009
130-6	土師器皿	暗褐色土	K M 55	暗褐色土	691010
130-7	土師器皿	暗褐色土	K M 55	暗褐色土	691010
130-8	土師器皿	暗褐色土	K M 55	暗褐色土	691010
130-9	土師器皿	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009
130-10	土師器皿	暗褐色土	K D 49	暗褐色土	691026
130-11	土師器皿	暗褐色土	K H 62	暗褐色土	691015
130-12	瓦器皿	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009
130-13	瓦器椀	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009

Fig.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
130-14	瓦器椀	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009
130-15	瓦器皿	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009
130-16	土師器 羽釜	暗褐色土	K L 55	暗褐色土	691010
130-17	土師器 羽釜	暗褐色土	K F 46	暗褐色土	691011
130-18	施釉陶器 か	暗褐色土	K F 46	暗褐色土	691014
130-19	須恵器壺	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009
130-20	須恵器鉢	暗褐色土	K B 46	暗褐色土	691009
130-21	須恵器	暗褐色土	K C 49	暗褐色土	691017
130-22	瓦質土器 甕	暗褐色土	K F 46	暗褐色土	691011
140-1	土師器杯	褐色土	T R 50	褐色土	680824
140-2	土師器皿	褐色土	T Q 52	褐色土	680826
140-3	土師器皿	褐色土	T O 48	褐色土	680820
140-4	土師器皿	褐色土	T O 49	褐色土	680830
140-5	土師器皿	褐色土	T O 46	褐色土	680818
140-6	土師器皿	褐色土	T R 54	褐色土	680830
140-7	土師器皿	褐色土	T R 54	褐色土	680830
140-8	土師器皿	褐色土	T O 37	褐色土	680822
140-9	土師器皿	褐色土	T O 50	褐色土	680902 ?
140-10	土師器皿	褐色土	T O 50	褐色土	680902
140-11	土師器皿	褐色土	T O 50	褐色土	680902
140-12	瓦器椀	褐色土	T O 40	褐色土/ 地上■土	680821/ 680826
140-13	瓦器椀	褐色土	T O 41	褐色土	680824
140-14	土師器瓶	褐色土	T R 48	褐色土	680823
140-15	土師器甕	褐色土	T O 39/ T R 50	褐色土	680820/ 680824
140-16	土師器 羽釜	褐色土	T O 35	褐色土	680822
140-17	土師器 羽釜	褐色土	T O 35	褐色土	680825
140-18	土師器 羽釜	褐色土	T O 35	褐色土	680822
140-19	須恵器鉢	褐色土	T O 35	褐色土	680821
149-1	須恵器杯 蓋	表土	K C 46	表土	691007
149-2	須恵器杯 蓋	表土	K C 46	表土	691007
149-3	施釉陶器	表土	K C 46	表土	691018

Tab. 11 - 1 軒丸瓦観察表 - 1

Fig.	Fig. (写真)	PL.	型式	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫	
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径 (mm)	量
50-1	51-1	39	3Bb	SD 7040	KA 46	斜行溝	691018	N 6 / 0	灰	堅緻	2	極少量
50-2	51-2	39	3C	SD 7040	TS 47	溝内	680903	N 4 / 0 ~ 2.5 Y 7 / 2	灰~灰黄	軟質	3	極少量
74-1	-	45	4A	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	良好	1	少量
74-2	-	45	6Db	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 6 / 0	灰	良好	3	少量
74-3	75-3	45	7Ab	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 6 / 0	灰	やや軟質	6	やや多め
74-4	-	45	7A	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	良好	2	やや多め
74-5	75-5	45	33A	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	良好	3	やや多め
74-7	-	45	7A	KA 61 土坑	KA 61	土坑	691009	N 6 / 0	灰	良好	4	やや多め
82	82	47	3C	SX 7065	KI 47	穴	691026	7.5 Y 5 / 1	灰	堅緻	5	やや多め
87	87	47	3Bb	KF 49 東西溝	KF 49	東西溝	691022	N 7 / 0	灰白	やや軟質	2	極少量
89	89	-	3Bb	KG 46 東西溝	KG 46	東西溝埋土	691011	N 6 / 0	灰	堅緻	2	極少量
95-1	-	47	6C	SX 7096	TQ 52	西南瓦溜まり	680826	N 4 / 0 ~ 3 / 0	灰~暗灰	堅緻	1	極少量
95-2	-	47	6D	SX 7096	TQ 53	瓦溜まり	680902	N 6 / 0 ~ 7.5 Y R 7 / 4	灰~にぶい 橙	堅緻	1	極少量
96	96	47	3Bb	KJ 46 新瓦溜	KJ 46	新しい瓦溜 まり	691015	N 4 / 0	灰	堅緻	2	少量
99	99	47	89V	KE 47 瓦溜	KE 47	瓦溜まり	691010	N 4 / 0	灰	堅緻	7	少量
101-1	-	49	7A	KE 46 瓦溜	KE 46	瓦溜まり	691011	5 Y 7 / 1	灰白	軟質	2	少量
103-1	-	49	3Bb	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	2	極少量
103-2	-	49	3Bb ?	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 4 / 0	灰	堅緻	2	やや多め
103-3	-	49	3C	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691012	7.5 Y 8 / 1	灰白	軟質	1	少量
103-4	-	49	3C	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	5 Y 7 / 1	灰白	やや軟質	1	極少量
103-5	-	49	4A	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	1	少量
103-6	-	-	4A	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 6 / 0	灰	やや軟質	1	極少量
103-7	-	-	4A	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量
103-8	-	49	4A	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 6 / 0	灰	堅緻	1	極少量
103-9	-	-	6C?	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	良好	16	少量
103-10	-	-	6C?	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691012	N 6 / 0	灰	良好	3	少量
103-11	-	-	6D	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	7.5 Y 5 / 1	灰	良好	3	少量
103-12	-	49	37Db	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691010	5 Y 6 / 1	灰	やや軟質	1	極少量
103-13	-	49	53A	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691012	2.5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	1	極少量
108-1	-	-	6D	TR 51 瓦溜	TR 51	瓦溜まり	680824	N 5 / 0	灰	良好	1	少量
108-2	109-2	50	37C	TR 51 瓦溜	TR 51	瓦溜まり	680823	N 5 / 0	灰	良好	1	少量
108-3	-	50	48A	TR 51 瓦溜	TR 51	瓦溜まり	680823	10 Y R 6 / 4	にぶい 橙	軟質	8	少量
108-4	-	-	91F	TR 51 瓦溜	TR 51	瓦溜まり	680823	2.5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	1	少量
112-1	-	50	72A	SX 7097	KM 54	大凹み	691012	N 3 / 0	暗灰	良好	2	極少量
116-1	-	50	3Bb	パラス土層	KA 46	パラス土	691014	7.5 Y 6 / 1	灰	良好	1	極少量
116-2	-	50	3Bb ?	パラス土層	KI 46	パラス土	691015	N 5 / 0	灰	堅緻	2	やや多め
116-3	-	50	33A	パラス土層	KB 49	パラス土	691017	2.5 Y 7 / 2	灰黄	軟質	1	極少量
116-4	-	50	89V	パラス土層	TQ 50	パラス層	680831	5 Y 6 / 2	灰オリーブ	良好	1	少量
121-1	-	51	4A	炭化物層	TO 35	炭化物層	680831	7.5 Y 7 / 1	灰白	良好	1	少量
121-2	-	-	6Db	木炭層	TO 33	木炭層	680904	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量
121-3	122-3	51	6D	炭化物層	TO 35	炭化物層	680831	N 5 / 0	灰	良好	3	少量
125-1	125-1	51	3Bb	黄褐色土	KI 46	黄褐色土	691017	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量
125-2	125-2	51	6Da	黄褐色土	KA 47	黄褐色土	680824	7.5 Y 6 / 1	灰	良好	5	少量
132-1	131-1	52	3Bb	暗褐色土	KE 46	暗褐土	691013	N 6 / 0	灰	やや軟質	3	少量
132-2	-	52	3Bb	暗褐色土	KH 48	暗褐土	691019	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量
132-3	-	52	3Bb	暗褐色土	KI 47	暗褐土	691019	7.5 Y 7 / 1	灰白	軟質	1	極少量
132-4	-	52	3Bb ?	暗褐色土	KH 48	暗褐土	691019	7.5 Y 7 / 1	灰白	堅緻	1	極少量
132-5	-	52	3Bb ?	暗褐色土	KF 47	暗褐土	691013	N 5 / 0	灰	良好	2	少量

Tab. 11 - 2 軒丸瓦観察表 - 2

Fig.	Fig. (写真)	PL	型式	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫	
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径 (mm)	量
132-6	-	-	3Bb?	暗褐色土	KH 48	暗褐色土	691019	N 5 / 0	灰	堅緻	2	極少量
132-7	-	-	3Bb?	暗褐色土	KA 58	暗褐色土	691006	5 Y 7 / 1	灰白	軟質	2	極少量
132-8	-	-	3Bb?	暗褐色土	KH 48	暗褐色土	691019	N 6 / 0	灰	堅緻	1	極少量
132-9	131-9	52	4A	暗褐色土	KI 47	暗褐色土	691019	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量
132-10	-	52	4A	暗褐色土	KG 46	暗褐色土	691011	N 6 / 0	灰	堅緻	2	少量
132-11	-	-	4A	暗褐色土	KF 45	暗褐色土	691014	N 5 / 0	灰	良好	2	少量
132-12	-	-	4A	暗褐色土	KH 48	暗褐色土	691019	N 6 / 0	灰	堅緻	1	極少量
132-13	-	52	4A	暗褐色土	KH 46	暗褐色土	691010	N 5 / 0	灰	良好	1	少量
132-14	-	-	4A	暗褐色土	KH 48	暗褐色土	691020	N 5 / 0	灰	堅緻	1	やや多め
132-15	-	-	4A	暗褐色土	TQ 50	暗褐色土	680831	7. 5 Y 7 / 1	灰白	軟質	2	少量
132-16	-	-	4A	暗褐色土	KH 48	暗褐色土	691019	5 Y 7 / 1	灰白	やや軟質	2	極少量
132-17	-	-	4D	暗褐色土	KF 47	暗褐色土	691013	7. 5 Y 7 / 1	灰白	やや軟質	6	極少量
132-18	-	-	6C	暗褐色土	TO 35	暗褐色土	680831	N 5 / 0	灰	良好	5	少量
132-19	133-19	-	6C?	暗褐色土	KF 46	暗褐色土	691011	2. 5 Y 6 / 1	黄灰	やや軟質	7	少量
132-20	-	-	6D	暗褐色土	KB 46	暗褐色土	691009	5 Y 6 / 1	灰	良好	1	極少量
132-21	-	-	6D	暗褐色土	KK 63	暗褐色土	691015	N 5 / 0	灰	堅緻	1	少量
132-22	133-22	52	33A	暗褐色土	KH 61	暗褐色土	691014	N 4 / 0	灰	堅緻	5	やや多め
132-23	-	-	33A	暗褐色土	KB 46	暗褐色土	691009	N 5 / 0 ~ 2. 5 Y 7 / 2	灰~灰黄	軟質	1	極少量
132-24	-	-	33A	暗褐色土	KB 49	暗褐色土	691020	N 5 / 0	灰	良好	2	やや多め
132-25	-	-	33A	暗褐色土	KB 46	暗褐色土	691009	5 Y 5 / 1	灰	良好	4	少量
135-26	-	-	37D b	暗褐色土	KM 52	暗褐色土	691005	5 Y 6 / 1	灰	堅緻	4	極少量
135-27	134-27	52	53A	暗褐色土	KF 53	暗褐色土	691003	2. 5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	1	極少量
135-28	-	-	89V	暗褐色土	KM 53	暗褐色土	691011	N 4 / 0	灰	堅緻	1	極少量
135-29	134-29	52	89V	暗褐色土	KM 52	暗褐色土	691005	5 Y 4 / 1	灰	堅緻	3	少量
135-30	-	-	89V	暗褐色土	KE 49	暗褐色土	691022	N 5 / 0	灰	堅緻	2	極少量
135-31	-	-	19F	暗褐色土	TO 50	暗褐色土	680902	N 4 / 0	灰	堅緻	1	少量
135-32	-	-	91F	暗褐色土	KF 46	暗褐色土	691011	N 4 / 0	灰	良好	1	少量
135-33	-	-	91Y	暗褐色土	KM 55	暗褐色土	691010	N 5 / 0	灰	良好	1	少量
135-34	134-34	-	91Y	暗褐色土	KM 52	暗褐色土	691005	N 4 / 0	灰	良好	2	少量
135-35	-	-	不明	暗褐色土	KH 48	暗褐色土	691020	N 4 / 0	灰	やや軟質	1	少量
135-36	-	-	不明	暗褐色土	KH 46	暗褐色土	691010	N 4 / 0	灰	良好	2	少量
135-37	-	-	不明	暗褐色土	KM 53	暗褐色土	691011	N 4 / 0	灰	堅緻	2	少量
142-1	-	55	3Bb	褐色土	TP 48	褐色土	680903	N 5 / 0	灰	堅緻	2	やや多め
142-2	-	-	3Bb?	褐色土	TP 50	褐色土	680826	7. 5 Y 6 / 1	灰	良好	1	極少量
142-3	-	-	3Bb?	褐色土	TO 41	褐色土	680821	N 6 / 0	灰	堅緻	2	少量
142-4	-	55	6C	褐色土	TO 49	褐色土	680830	7. 5 Y 6 / 1	灰	良好	3	少量
142-5	-	-	6C	褐色土	TQ 48	褐色土	680830	7. 5 Y 6 / 1	灰	良好	3	少量
142-6	141-6	55	6D b	褐色土	TP 52	褐色土	680826	N 5 / 0	灰	良好	5	少量
142-7	-	-	6D	褐色土	TP 50	褐色土	680826	5 Y 6 / 1	灰	良好	2	少量
142-8	-	-	6D	褐色土	TQ 50	褐色土	680831	N 6 / 0	灰	良好	3	少量
142-9	-	-	6D	褐色土	TQ 51	畦畔褐色土	680903	2. 5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	1	少量
142-10	-	-	6D	褐色土	KA 47	褐色土	680824	N 5 / 0	灰	良好	3	少量
142-11	-	-	6D	褐色土	TO 48	褐色土	680820	5 Y 6 / 1	灰	良好	2	極少量
142-12	-	-	7A	褐色土	TO 35	褐色土	680822	7. 5 Y 8 / 1	灰白	やや軟質	5	少量
142-13	-	55	7A	褐色土	TQ 50	褐色土	680826	5 Y R 7 / 8	橙	軟質	2	少量
142-14	-	-	7A	褐色土	TO 50	褐色土	680902	10 Y 5 / 1	灰	良好	4	やや多め
142-15	-	55	33A	褐色土	TO 50	褐色土	680902	7. 5 Y 8 / 1	灰白	やや軟質	3	少量
142-16	143-16	-	33A	褐色土	TR 47	褐色土	680821	2. 5 Y 7 / 2	灰黄	軟質	3	少量

Tab. 11-3 軒丸瓦観察表-3

Fig.	Fig. (写真)	PL.	型式	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫	
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径 (mm)	量
142-17	143-17	-	54 B a	褐色土	TR 50	褐色土	680824	5 Y R 8 / 3	淡橙	軟質	2	極少量
142-18	-	55	67 B	褐色土	TO 52	褐色土	680831	N 3 / 0	暗灰	堅緻	1	極少量
142-19	-	-	67 B	褐色土	TO 48	褐色土	680819	N 6 / 0	灰	堅緻	1	極少量
144-20	143-20	-	89 V	褐色土	TP 50	褐色土	680830	N 3 / 0	暗灰	暗灰	1	少量
144-21	-	55	89 V	褐色土	TO 50	褐色土	680903	N 3 / 0	暗灰	堅緻	3	極少量
144-22	145-22	-	89 V	褐色土	TO 51	褐色土	680902	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量
144-23	145-23	-	89 V	褐色土	TR 51	褐色土	680823	N 7 / 0	灰	堅緻	2	少量
144-24	-	-	89 V	褐色土	TO 50	褐色土	680903	N 4 / 0	灰	堅緻	1	少量
144-25	-	-	89 X	褐色土	TQ 49	褐色土	680831	N 3 / 0	暗灰	良好	2	少量
144-26	-	55	90 A	褐色土	TQ 50	褐色土	680901	N 5 / 0	灰	良好	1	極少量
144-27	-	-	96 I ?	褐色土	TO 50	褐色土	680902	N 3 / 0	暗灰	良好	2	少量
144-28	-	-	96 I ?	褐色土	TO 50	褐色土	680902	N 3 / 0	暗灰	堅緻	1	極少量
144-29	-	-	96 I か X	褐色土	TR 50	褐色土	680826	N 3 / 0	暗灰	良好	3	少量
144-30	145-30	55	97 D	褐色土	TO 39	褐色土	680903	N 3 / 0	暗灰	やや軟質	3	少量
144-31	-	-	不明	褐色土	KB 53	褐色土	680902	7.5 Y 6 / 1	灰	良好	2	極少量
144-32	-	-	不明	褐色土	TO 50	褐色土	680902	7.5 Y 7 / 1	灰白	軟質	1	少量
144-33	-	-	不明	褐色土	TQ 52	褐色土	680901	N 3 / 0	暗灰	堅緻	3	極少量
144-34	-	-	不明	褐色土	TO 50	褐色土	680830	N 3 / 0	暗灰	良好	1	極少量
144-35	-	-	不明	褐色土	TO 49	褐色土	680831	5 Y 7 / 1	灰白	良好	2	少量
144-36	-	-	不明	褐色土	TO 50	褐色土	680830	5 Y 6 / 1	灰	良好	1	少量
144-37	-	-	不明	褐色土	TP 50	褐色土	680826	N 3 / 0	暗灰	良好	2	極少量
150-1	-	-	6 C	表土	KA 46	表土	691007	7.5 Y 6 / 1	灰	堅緻	3	少量
150-2	-	-	91 か 92	表土	TP 50	表土	680825	N 4 / 0	灰	良好	1	極少量
150-3	-	56	97 D	表土	KJ 53	表土	691002	N 4 / 0	灰	良好	10	少量
152-1	153-1	56	3 B b	TS 47 地山直上	TS 47	地山直上	680903	5 Y 6 / 1	灰	堅緻	3	極少量
152-2	153-2	56	3 B b	TS 47 地山直上	TS 47	地山直上	680903	N 4 / 0	灰	堅緻	1	極少量
152-3	-	56	3 B b	TP 48 小礎石周辺	TP 48	小礎石周辺	680905	N 5 / 0	灰	良好	2	少量
154-4	-	-	6 D	TP 49 地山直上	TP 49	地山直上	680903	N 5 / 0	灰	良好	3	やや多め
154-5	-	-	3 C ?	TQ 50 パラス混じり褐色土	TQ 50	パラス混じり褐色土	680901	2.5 Y 8 / 2	灰白	軟質	1	極少量
154-6	-	-	3 B b ?	KD 53 床土	KD 53	床土	691004	2.5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	1	極少量
154-7	-	-	33 A	TR 49 石田北溝	TR 49	石田北溝	680830	10 Y 5 / 1	灰	良好	3	やや多め
155-12	-	56	3 C	KB 47 石田トレンチ	KC 46	石田トレンチ	680825	2.5 Y 7 / 2	灰黄	軟質	1	極少量
155-13	-	-	3 C ?	KB 47 石田トレンチ	KJ 52	石田トレ	691005	5 Y 7 / 1	灰白	やや軟質	2	極少量
155-14	-	-	33 A	KB 47 石田トレンチ	KB 47	石田トレンチ	680824	2.5 Y 7 / 3	浅黄	軟質	1	極少量
155-15	-	-	不明	KB 47 石田トレンチ	KJ 52	石田トレ	691005	N 6 / 0	灰	やや軟質	1	少量
155-16	-	-	不明	KB 47 石田トレンチ	KJ 52	石田トレ	691005	N 5 / 0	灰	やや軟質	2	少量
155-17	-	-	6 C ?	KB 47 ライン畦	KB 47	ライン畦畔 礫敷中	680906	7.5 Y 6 / 1	灰	軟質	1	少量
155-18	-	-	6 D	KB 47 ライン畦	KB 47	ライン畦黄 褐色土面穴	680906	N 5 / 0	灰	堅緻	3	やや多め
155-19	156-19	-	6 D	47 L トレンチ	-	47 L トレンチ	680824	N 5 / 0	灰	良好	1	少量
155-20	-	-	6 D	47 L トレンチ	-	47 ライン トレンチ	680826	10 Y 5 / 1	灰	堅緻	2	少量

Tab. 12 軒平瓦観察表

Fig.	Fig. (写真)	PL.	型式	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫	
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径 (mm)	量
50-3	-	39	206 A	S D 7040	K A 46	斜溝	691023	2.5 Y 6 / 2	灰黄	やや軟質	2	少量
50-4	51-4	40	206 C	S D 7040	K A 46	斜溝	691028	N 5 / 0	灰	堅緻	1	極少量
50-5	-	40	206 C	S D 7040	K C 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量
50-6	-	40	206 D	S D 7040	K C 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	軟質	3	やや多め
50-7	-	40	206か 207	S D 7040	T S 47	溝内	680903	N 3 / 0	暗灰	やや軟質	3	極少量
50-8	51-8	41	207 A	S D 7040	K A 46	斜行溝	691018	10 Y R 7 / 2	灰白	やや軟質	3	やや多め
50-9	-	41	210 A	S D 7040	K A 46	斜行溝	691024	7.5 Y 4 / 1	灰	やや軟質	3	少量
74-6	-	45	206 A	S E 7074	K A 61	井戸	691013	N 6 / 0	灰	堅緻	2	極少量
79	79	47	217 B b	K G 53土坑	K G 53	土坑	691003	N 5 / 0	灰	堅緻	1	極少量
91	-	-	210	K M 53南北溝	K M 53	南北溝	691011	10 Y R 7 / 4	にぶい黄橙	軟質	2	少量
93	93	47	292 A	T S 47地山斜溝	T S 47	地山斜溝	680905	N 4 / 0	灰	堅緻	2	やや多め
94	-	47	208 ?	K A 46斜行溝上	K A 46	斜行溝上	691018	N 6 / 0	灰	やや軟質	2	少量
101-2	-	49	206 A	K E 46瓦溜	K E 46	瓦溜	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	2	やや多め
103-14	104-14	49	206 A	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜	691012	N 4 / 0	灰	堅緻	2	少量
103-15	104-15	49	208 B	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜	691011	5 Y 6 / 1	灰	堅緻	1	極少量
103-16	-	-	208 ?	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜	691012	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量
103-17	-	-	210 ?	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜	691012	N 4 / 0	灰	堅緻	2	少量
103-18	-	-	211 A ?	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜	691012	N 4 / 0	灰	堅緻	2	少量
108-5	-	50	213 B	T R 51瓦溜	T R 51	瓦溜	680823	10 Y R 7 / 2	にぶい黄橙	やや軟質	7	少量
108-6	-	50	214 B	T R 51瓦溜	T R 51	瓦溜	680823	N 5 / 0	灰	良好	4	少量
108-7	-	50	246 A	T R 51瓦溜	T R 51	瓦溜	680823	N 6 / 0	灰	やや軟質	1	極少量
112-2	111-2	50	215 A	S X 7097	K L 55	大凹み	691012	N 8 / 0	灰白	やや軟質	3	少量
112-3	-	-	240 A b	S X 7097	K L 55	大凹み	691012	N 6 / 0	灰	やや軟質	3	極少量
121-4	-	51	213 B	炭化物層	T O 35	炭化物層	680831	5 Y 7 / 1	灰白	やや軟質	5	やや多め
125-3	-	51	206 A	黄褐色土	K A 49	黄褐土	691023	10 Y R 8 / 6	黄橙	軟質	4	少量
135-38	-	53	206 A	暗褐色土	K M 53	暗褐土	691006	2.5 Y 6 / 2	灰黄	やや軟質	1	極少量
135-39	-	53	206 A	暗褐色土	K J 46	暗褐土	691016	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量
135-40	136-40	53	206 B	暗褐色土	K H 48	暗褐土	691020	N 5 / 0 ~ 5 Y R 7 / 4	灰~にぶい 橙	良好	3	少量
135-41	136-41	53	207 A	暗褐色土	K H 46	暗褐土	691010	N 5 / 0	灰	良好	1	少量
135-42	-	53	208 ?	暗褐色土	K H 48	暗褐土	691019	N 6 / 0	灰	やや軟質	1	少量
135-43	-	53	209 A	暗褐色土	T O 31	暗褐土	680902	N 3 / 0	暗灰	良好	3	やや多め
135-44	-	53	305 A ?	暗褐色土	K F 46	暗褐土	691011	N 4 / 0 ~ 7.5 Y R 7 / 4	灰~にぶい 橙	軟質	1	少量
135-45	-	53	216 C	暗褐色土	K F 49	暗褐土	691022	N 5 / 0	灰	堅緻	1	少量
135-46	-	53	240 A b	暗褐色土	K A 54	暗褐土	691012	2.5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	2	少量
135-47	-	53	240 A	暗褐色土	K A 55	暗褐土	691012	N 7 / 0	灰白	堅緻	5	少量
135-48	136-48	-	284 C	暗褐色土	K M 52	暗褐土	691005	N 5 / 0	灰	良好	1	少量
146-38	-	-	206 ?	褐色土	T O 49	褐土	680831	2.5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	1	極少量
146-39	-	-	213 B	褐色土	T O 35	褐土	680822	7.5 Y 6 / 1	灰	軟質	5	少量
146-40	-	-	229 B	褐色土	T Q 50	褐土	680901	7.5 Y 8 / 1	灰白	堅緻	1	少量
146-41	-	-	242 A	褐色土	T O 41	褐土	680820	N 6 / 0	灰	やや軟質	1	少量
150-4	-	56	204 C	表土	T Q 50	表土	680825	N 5 / 0	灰	良好	1	極少量
154-8	-	56	206 D	T Q 47瓦層	T Q 47	瓦層	680902	2.5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	2	少量
154-9	-	56	240 A a	T O 30地山上 暗褐色土	T O 30	地山上 暗褐色土	680831	N 3 / 0	暗灰	堅緻	4	少量
154-10	-	56	255 A	T Q 50バラス混 じり褐色土	T Q 50	バラス混 り褐色土	680901	N 5 / 0	灰	堅緻	2	極少量
154-11	-	56	262 B	T P 50灰褐色土	T P 50	灰褐色土	680830	N 5 / 0	灰	良好	1	極少量



Tab. 13 丸瓦観察表

Fig.	Fig. (写真)	PL.	型式	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫		布目	玉縁長 (cm)	筒部長
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径 (mm)	量			
52-10	54-10-1.2	40-10	2 I B	SD 7040	KB 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	堅緻	3	少量	中	4.5	29.1
52-11	54-11	40-11	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	堅緻	3	少量	粗	6.4	30.5
52-12	-	40-12	2 I B	SD 7040	KB 46	斜溝	691026	7.5 Y 6 / 1	灰	やや軟質	3	少量	粗	6.3	-
52-13	-	41-13	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	5 Y 7 / 2	灰白	やや軟質	2	少量	粗	-	32.5
52-14	-	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 6 / 0	灰	良好	2	極少量	-	-	-
52-15	-	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 6 / 0	灰	堅緻	3	少量	密	-	-
53-16	-	41-16	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 6 / 0	灰	堅緻	5	少量	中	5.6	-
53-17	54-17	41-17	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	密	6.2	-
53-18	54-18	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	堅緻	5	少量	中	5.0	-
53-19	-	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	10 Y R 5 / 1	褐灰	やや軟質	2	極少量	中	4.4	-
53-20	-	-	2 I B	SD 7040	KB 46	斜溝	691026	N 7 / 0	灰白	軟質	2	極少量	-	4.8	-
53-21	-	-	2 I B	SD 7040	KB 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	粗	5.6	-
53-22	54-22	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	粗	5.7	-
53-23	-	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	5 Y 7 / 1	灰白	やや軟質	4	少量	-	-	-
53-24	-	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	やや軟質	2	極少量	-	-	-
53-25	-	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	やや軟質	2	極少量	中	-	-
53-26	-	-	2 I B	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	5 Y 4 / 1	灰	やや軟質	2	極少量	中	-	-
65-1	-	-	2 I B	第2整地土	TS 51	黄褐整地土中	680906	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	中	5.7	-
71-1	-	-	2 I B	基壇内の下面	TR 48	基壇内の下面	680903	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	中	5.5	-
76-8	-	46-8	1 II A	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	堅緻	3	やや多い	粗	-	41.2
76-9	-	-	2 I B	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 6 / 0	灰	堅緻	1	極少量	-	6.3	-
83	-	-	2 I B	SX 7065	KI 47	穴	691022	7.5 Y 6 / 1	灰	堅緻	2	極少量	粗	-	-
88	-	-	-	KE 49 東石溝	KE 49	東石溝	691023	N 4 / 1	灰	堅緻	4	少量	-	4.4	-
98-1	-	-	2 I B	KH 48 瓦溜	KH 48	瓦溜	691019	N 5 / 0	灰	堅緻	4	少量	粗	6.5	-
98-2	-	-	2 I B	KH 48 瓦溜	KH 48	瓦溜	691019	10 R 4 / 1	暗紫灰	堅緻	3	少量	粗	6.3	-
98-3	-	-	2 I B	KH 48 瓦溜	KH 48	瓦溜	691019	10 Y 7 / 1	灰白	良好	2	少量	中	-	-
100-1	-	48	-	KE 46 新瓦溜	KE 46	新瓦溜まり	691014	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	-	5.0	30.1
105-19	-	-	2 I B	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	3	やや多い	粗	5.3	-
105-20	-	-	2 I B	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	粗	5.7	-
105-21	-	-	2 I B	KC 45 瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	密	5.7	-
110	-	-	2 II A	TR 51 瓦溜	TR 51	瓦溜まり	680823	N 6 / 1	灰	良好	2	少量	-	4.8	-
126-4	-	-	2 I B	黄褐色土	TO 34	黄褐色土	680903	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	中	-	-
137-49	-	54-49	-	暗褐色土	KE 46	暗褐色土	691011	N 6 / 0	灰	堅緻	4	少量	-	5.9	-
137-50	-	54-50	-	暗褐色土	KH 48	暗褐色土	691020	N 4 / 0	灰	堅緻	4	少量	-	6.6	32.2
137-51	-	-	2 I B	暗褐色土	KI 47	暗褐色土	691019	N 5 / 0	灰	良好	2	少量	密	-	-
147-42	-	-	-	褐色土	TP 49	褐色土	680902	2.5 Y 7 / 2	灰黄	堅緻	3	極少量	-	5.3	-

※布目の分類は飛鳥時代の瓦に限る (Fig. 167)。

Tab. 14-1 平瓦観察表-1

Fig.	Fig. (写真)	PL.	型式	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫		布目	全長 (cm)
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径 (mm)	量		
55-27	-	42-27	1 I A 1類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	堅緻	5	少量	極粗	35.7
56-28	-	42-28	1 I A 1類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	7.5 Y 6 / 1	灰	堅緻	5	少量	極粗	37.7
57-29	64-29	42-29	1 I A 1類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	堅緻	5	少量	中	37.7
57-30	-	-	1 I A 1類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	7.5 Y 7 / 1	灰白	良好	2	少量	粗	-
57-31	-	-	1 I A 1類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	やや軟質	3	極少量	粗	-
57-32	-	-	1 I A 1類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 6 / 0	灰	良好	2	少量	極粗	-
57-33	-	-	1 I A 1類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	2.5 Y 7 / 2	灰黄	良好	2	少量	極粗	-
58-34	64-34	43-34	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	5	少量	中	37.2
59-35	-	43-35	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	5	少量	粗	-
59-36	-	43-36	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	粗	34.5
60-37	-	-	1 I A 1類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	良好	2	少量	極粗	-
60-38	-	-	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	5 Y 6 / 1	灰	良好	1	極少量	極粗	-
60-39	-	-	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	5	少量	密	-
60-40	-	-	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	2.5 Y 7 / 2	灰黄	良好	5	少量	極粗	-
60-41	-	-	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	5 Y 7 / 1	灰白	良好	3	少量	粗	-
60-42	-	-	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	粗	-
60-43	-	-	1 I A 2類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	7.5 Y 6 / 1	灰	良好	1	少量	粗	-
61-44	-	44-44	1 I A 3類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	10 TR 5 / 1	褐灰	やや軟質	3	やや多い	中	39.0
62-45	64-45	44-45	1 I B b	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	堅緻	3	やや多い	密	37.3
63-46	-	-	1 I B b	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 4 / 0	灰	堅緻	3	やや多い	中	-
63-47	-	-	1 I A 3類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	やや軟質	3	やや多い	中	-
63-48	-	-	1 I A 3類	SD 7040	KA 46	斜溝	691026	2.5 Y 7 / 1	灰白	やや軟質	3	少量	中	-
65-2	-	-	1 I A 2類	第2整地土	TS 51	黄褐整地土中	680906	N 5 / 0	灰	堅緻	1	極少量	-	-
65-3	-	-	1 I A 2類	第2整地土	TS 51	黄褐整地土中	680906	5 Y 7 / 1	灰白	良好	4	少量	粗	-
65-4	-	-	1 I A 2類	第2整地土	TS 51	黄褐整地土中	680906	7.5 Y 6 / 1	灰	良好	4	少量	粗	-
66-1	-	-	1 I A 2類	TS 51 地山面上	TS 51	地山面上	680906	N 4 / 0	灰	堅緻	5	少量	密	-
66-2	-	-	1 I A 2類	TS 51 地山面上	TS 51	地山面上	680906	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	粗	-
71-2	-	-	1 I A 2類	基壇内の 下面	TR 48	基壇内の 下面	680903	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	粗	-
71-3	-	-	1 I A 1類	基壇内の 下面	TR 48	基壇内の 下面	680903	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	極粗	-
76-10	-	-	-	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	粗	-
76-11	-	-	1 I A 1類	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 4 / 0	灰	堅緻	5	少量	粗	-
76-12	-	-	1 IV B	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	堅緻	6	やや多い	粗	-
76-13	-	-	1 IV	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	中	-
76-14	77-14	46-14	1 IV B	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	中	-
76-15	-	-	1 IV B	SE 7074	KA 61	井戸	691013	N 5 / 0	灰	堅緻	5	少量	中	-
76-16	-	-	-	SE 7074	KA 61	井戸	691013	2.5 Y 6 / 1	黄灰	やや軟質	1	極少量	-	-
76-17	-	-	-	SE 7074	KA 61	井戸	691013	7.5 Y R 7 / 4	にぶ い橙	堅緻	10	極少量	-	-
85	-	46	1 I B b	KG 49大穴	KG 49	大穴	691027	N 6 / 0	灰	堅緻	2	やや多い	中	-
92	92	48	1 IV B	TO 35南北 溝	TO 35	暗褐色 南北溝	680831	N 7 / 1	灰白	堅緻	10	少量	-	40.0
97-1	-	48	-	KI 62瓦溜	KI 62	瓦溜まり	691015	2.5 Y 4 / 1	黄灰	良好	2	少量	-	-
97-2	-	-	-	KI 62瓦溜	KI 62	瓦溜まり	691015	5 Y 7 / 1	灰白	堅緻	3	少量	-	-
98-4	-	-	1 I A 3類	KH 48瓦溜	KH 48	瓦溜	691019	5 Y 7 / 1	灰白	良好	3	少量	中	-
98-5	-	-	1 I A 1類	KH 48瓦溜	KH 48	瓦溜	691019	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	極粗	-
100-2	-	-	-	KE 46 新瓦溜	KE 46	新瓦溜	691014	7.5 Y 7 / 1	灰白	堅緻	3	少量	-	-
105-22	-	-	1 I A 2類	KC 45瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	1	極少量	密	-
105-23	-	-	1 I A 2類	KC 45瓦溜	KC 45	瓦溜まり	691011	5 Y 7 / 2	灰白	良好	2	少量	中	-

Tab. 14-2 平瓦観察表-2

Fig.	Fig. (写真)	PL.	型式	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫		布目	全長 (cm)
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径 (mm)	量		
105-24	-	-	1 I A 2類	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011	N 5 / 0	灰	堅緻	5	少量	粗	-
105-25	-	-	1 I A 3類	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011	N 4 / 0	灰	やや軟質	3	少量	粗	-
105-26	-	-	1 IV	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011	5 Y 5 / 1	灰	堅緻	2	少量	粗	-
105-27	-	-	1 IV	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011	7.5 Y 7 / 1	灰白	やや軟質	2	少量	粗	-
105-28	-	-	-	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011	N 4 / 0	灰	良好	2	少量	-	-
105-29	-	-	-	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011	5 Y 7 / 1	灰白	堅緻	3	少量	-	-
113-1	-	-	1 I A 1類	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	中	-
113-2	-	-	1 I A 2類	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	5 Y 6 / 2	灰オリーブ	やや軟質	2	少量	粗	-
113-3	-	-	1 I A 2類	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 5 / 0	灰	堅緻	3	少量	粗	-
113-4	-	-	1 I A 2類	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 4 / 0	灰	堅緻	2	少量	粗	-
113-5	-	-	1 I A 3類	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 5 / 0	灰	良好	3	少量	中	-
113-6	-	-	1 I A 3類	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 5 / 0	灰	良好	2	少量	粗	-
113-7	-	-	-	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 5 / 0	灰	良好	3	少量	-	-
113-8	-	-	1 I A 3類	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	-	-
113-9	-	-	-	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 5 / 0	灰	良好	2	少量	-	-
126-5	-	-	1 I A 1類	黄褐色土	T S 47	黄褐色土	680824	5 Y 7 / 2	灰黄	やや軟質	3	少量	極粗	-
126-6	-	-	1 I A 2類	黄褐色土	T S 47	黄褐色土	680824	N 5 / 0	灰	堅緻	2	少量	中	-
126-7	126-7 -1.2	51-7	1 I B b	黄褐色土	K A 45	黄褐色土	691017	N 5 / 0	灰色	堅緻	3	少量	中	36.3
126-8	-	-	-	黄褐色土	T O 34	黄褐色土	680904	7.5 Y 7 / 1	灰白	堅緻	1	極少量	-	-
137-52	-	-	-	暗褐色土	T O 33	暗褐色土	680902	N 4 / 0	灰	堅緻	1	極少量	-	35.3
137-53	-	-	-	暗褐色土	T O 35	暗褐色土	680831	7.5 Y 6 / 1	灰	良好	1	極少量	粗	-
147-43	-	-	-	褐色土	T O 50	褐色土	680902	N 4 / 0	灰	堅緻	3	少量	-	30.3
147-44	-	-	-	褐色土	T O 50	褐色土	680902	N 4 / 0	灰	堅緻	1	極少量	-	-
147-45	-	-	-	褐色土	K A 47	褐色土	680821	N 5 / 0	灰	堅緻	1	極少量	-	-
147-46	-	-	-	褐色土	T R 51	褐色土	680823	N 5 / 0	灰	堅緻	1	極少量	-	-

※布目の分類は飛鳥時代の瓦に限る (Fig. 170)。

Tab. 15 道具瓦・用途不明品観察表

Fig.	Fig. (写真)	PL.	種類	遺構名 (本報告書)	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫		長さ (cm)	幅
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径 (mm)	量		
63-49	-	44-49	不明	S D 7040	K C 46	斜溝	691026	5 Y 7 / 2	灰白	良好	1	少量	20.8	-
63-50	-	44-50	不明	S D 7040	K A 46	斜溝	691026	N 5 / 0	灰	良好	1	少量	9.8	4.6
78-18	-	-	面戸瓦	S E 7074	K A 61	井戸	691013	5 Y 6 / 2	灰オリーブ	やや軟質	2	やや多い	-	11.3
78-19	-	45-19	鴉尾	S E 7074	K A 61	井戸	691013	7.5 Y 6 / 1	灰	良好	1	極少量	-	8.2
106	-	49-30	鴉尾	K C 45瓦溜	K C 45	瓦溜まり	691011	5 Y 6 / 2	灰オリーブ	良好	1	極少量	16.7	16.7
113-10	-	-	不明	T Q 47瓦敷	T Q 47	瓦敷	680901	N 5 / 0	灰	良好	1	極少量	10.0	5.5
126-9	-	-	不明	黄褐色土	T O 34	黄褐色土	680903	N 8 / 0	灰白	良好	1	極少量	7.7	4.3
138-54	-	54-54	鴉尾	暗褐色土	K F 46	暗褐色土	691013	5 Y 8 / 1	灰白	良好	5	少量	5.9	9.3
138-55	-	54-55	鴉尾	暗褐色土	K F 46	暗褐色土	691013	5 Y 7 / 2	灰白	良好	5	少量	7.4	-
138-56	-	54-56	鴉尾	暗褐色土	K F 46	暗褐色土	691013	5 Y 8 / 1	灰白	良好	1	少量	8.1	-
138-57	-	54-57	鴉尾	暗褐色土	K F 46	暗褐色土	691013	5 Y 6 / 1	灰	良好	1	少量	9.7	-
138-58	-	54-58	磚	暗褐色土	K H 48	暗褐色土	691020	5 Y 7 / 2	灰白	良好	1	極少量	13.3	13.5
148-47	-	-	面戸瓦	褐色土	T P 50	褐色土	680830	N 4 / 0	灰	良好	1	極少量	9.5	-
148-48	-	-	面戸瓦	褐色土	T O 50	褐色土	680830	N 4 / 0	灰	良好	1	極少量	12.2	-
148-49	-	55-49	鴉尾	褐色土	T O 50	褐色土	680830	5 Y 7 / 2	灰白	良好	1	少量	13.9	21.6
148-50	-	55-50	鴉尾	褐色土	K C 39	褐色土	680821	N 4 / 0	灰	良好	2	少量	-	8.1